

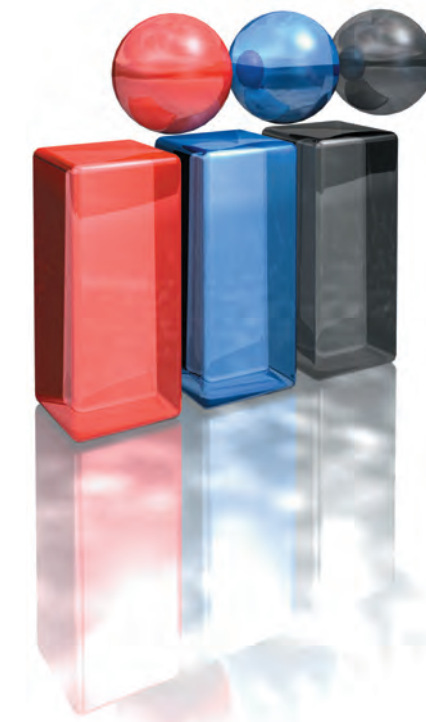
東京大学大学院情報学環・学際情報学府年報

Annual Report

第3号

(通巻35号)

Interfaculty Initiative in Information Studies
Graduate School of Interdisciplinary Information Studies
The University of Tokyo



2007



東京大学大学院情報学環・学際情報学府

東京大学大学院情報学環・学際情報学府年報

二〇〇七年度

第三号(通巻三十五号)

東京大学大学院情報学環・学際情報学府

東京大学大学院情報学環・学際情報学府年報

Annual Report

Interfaculty Initiative in Information Studies

Graduate School of Interdisciplinary Information Studies

The University of Tokyo

第 3 号 (通卷 35 号)

2007 年度

東京大学大学院情報学環・学際情報学府

I. 現状と課題.....	1
1 組織説明.....	1
1.1 概要.....	1
1.1.1 情報学環組織と学際情報学府組織.....	1
1.1.2 東京大学内の他研究科との関係.....	3
1.1.3 政府予算に基づく大型研究・教育プロジェクト.....	5
1.1.3.1 文部科学省 21 世紀 COE「次世代ユビキタス情報社会基盤の形成」.....	5
1.1.3.2 コンテンツ創造科学産学連携教育プログラム.....	6
1.1.3.3 文部科学省「セキュアユビキタスコンピューティングプラットフォーム」.....	6
1.2 理念と沿革.....	7
1.3 教職員数.....	9
1.4 財務.....	11
1.5 運営.....	14
1.5.1 情報学環教授会.....	14
1.5.2 学府委員会.....	14
1.5.2.1 社会情報学コース.....	14
1.5.2.2 文化・人間情報学コース.....	15
1.5.2.3 学際理数情報学コース.....	15
1.5.2.4 総合分析情報学コース.....	16
1.5.3 教務委員会.....	16
1.5.4 財務法務委員会.....	16
1.5.5 将来計画委員会.....	16
1.5.6 ハラスメント相談員.....	16
1.5.7 施設整備委員会.....	17
1.5.8 情報セキュリティ委員会.....	17
1.5.9 情報ネットワーク委員会.....	17
1.5.10 情報倫理審査会.....	19
1.5.11 業績評価委員会.....	19
1.5.12 企画広報委員会.....	19
1.5.13 出版編集委員会.....	19
1.5.14 図書委員会.....	20
1.5.15 国際活動委員会.....	20
1.5.16 国際連携推進室.....	20
1.5.17 産学連携委員会.....	20
1.5.18 社会情報研究資料センター運営委員会.....	20
1.5.19 WEB 発表会運営委員会.....	21
1.5.20 学生・留学生委員会.....	22
1.5.21 情報学環教育部委員会.....	23

1.6	事務組織	24
2	教育活動	24
2.1	概況	24
2.2	教育カリキュラム	25
2.3	カリキュラム支援体制	26
2.3.1	主指導教員・副指導教員の配置	26
2.3.2	修士・博士 研究計画書の作成	26
2.3.3	ウェブ発表	26
2.3.4	修士論文中間発表会	27
2.3.5	博士課程コロキウム	27
2.3.6	E-learning 授業(iii online)	27
2.3.6.1	iii online の目標	27
2.3.6.2	iii online の概要	28
2.3.6.3	iii online の評価	32
2.3.7	ソウル大学大学院との大学院国際共同演習授業	33
2.4	学際情報学府への進学	33
2.5	修士論文及び博士論文の執筆	34
2.6	学際情報学府からの就職・進学動向	36
2.7	学際情報学府以外の教育活動	37
2.7.1	教育部	37
2.7.2	コンテンツ創造科学産学連携教育プログラム	38
2.7.3	ベネッセ先端教育技術学講座(寄附講座)	44
3	研究活動	46
3.1	概況	46
3.1.1	文理の相互作用と連携	46
3.1.2	流動教員制度	46
3.2	大型研究プロジェクト	47
3.2.1	文部科学省 21 世紀 COE「次世代ユビキタス情報社会基盤の形成」	47
3.2.2	文部科学省 セキュア・ユビキタス・コンピューティング・プラットフォーム構築のための基盤アーキテクチャの研究開発および検証	50
3.2.3	NEDO「情報家電用マルチメディアセキュアチップ TRON-SMP の研究開発」	51
3.2.4	大型有形・無形文化財の高精度デジタル化ソフトウェアの開発	51
3.2.5	超高精細映像と生命的立体造形が反応する新伝統芸能空間の創出技術	53
3.2.6	その他の大型研究プロジェクト	53
3.3	社会情報研究資料センターの役割	55
3.3.1	新聞マイクロフィルムのデジタル化によるバックアップ作成	55
3.3.2	社会情報研究資料センター デジタルアーカイブの構築	56
3.3.3	COEユビキタスプロジェクトとの連携化	56

3.3.4	駒場地区別置新聞原紙資料の保存書庫の再配置.....	56
3.3.5	マイクロフィルム・新聞原紙等資料の再配置.....	57
4	社会との交流.....	58
4.1	国際的委員会.....	58
4.2	政府・自治体委員会.....	59
4.3	学協会活動.....	60
4.4	セミナー・研究会・公開講座.....	61
4.5	出版活動.....	66
4.5.1	『東京大学大学院情報学環紀要 情報学研究』.....	66
4.5.2	『東京大学大学院情報学環紀要 情報学研究・調査実研究編』.....	67
4.5.3	『英文紀要』.....	67
4.6	定期刊行物・ホームページ.....	67
4.6.1	定期刊行物.....	67
4.6.2	ホームページ.....	68
4.7	国際交流.....	68
II.	資料.....	71
1	沿革.....	71
2	学環の教員（定員）.....	72
3	学府の学生数.....	75
4	教育部.....	76
5	コンテンツ創造科学産学連携教育プログラム.....	77
6	予算.....	84
7	土地・建物面積.....	87
8	入試定数と受入数.....	87
9	年度別入試データ詳細.....	92
10	修了者数の推移.....	98
11	学生支援機構（旧育英会）奨学生数.....	100
12	日本学術振興会特別研究員数.....	100
13	リサーチアシスタント数.....	101
14	就職状況.....	102
15	ベネッセ先端教育技術学講座.....	105
16	客員講座等.....	105
17	研究員（客員）等.....	107
18	学会賞など受賞者リスト.....	108
19	論文数.....	109
20	特許出願・公開数.....	109
21	東京大学 21 世紀 COE「次世代ユビキタス情報社会基盤の形成」平成 18 年度の活動.....	110
23	国際団体役員・委員数.....	111
24	政府関係委員会委員数.....	112

25	地方公共団体関係委員会委員数.....	112
26	ジャーナル編集・会議運営.....	112
27	定期刊行物一覧.....	113
28	留学生数の推移.....	114
29	留学生国籍別一覧.....	115
III. 個人業績編.....		117
IV. 外部資金獲得状況.....		223

I. 現状と課題

1 組織説明

1.1 概要

1.1.1 情報学環組織と学際情報学府組織

東京大学大学院情報学環・学際情報学府は、従来の研究科とは異なる形態の大学院組織として、2000年4月に設置された。この大学院組織は、研究組織（教員が所属）である情報学環と教育組織（学生が所属）である学際情報学府という2つの対をなす機構によって構成されている。大学院の組織モデルとして、研究科が研究と教育の統合モデルであるのに対して、学環・学府は分離モデルだといえる。従来の研究科が専門深化と恒常性を基本的な特質とするのに対して、この大学院組織は、全学にわたる情報関連の諸領域をネットワーク的に連携させる横型の組織として設置され、情報学分野の総合的な教育研究を先端的かつダイナミックに推進するのに適した形態として考え出された。

その基本的特徴は、組織構成員の流動性と全学的連携、及び研究組織である情報学環と教育組織である学際情報学府の両立という点にある。すなわち、研究組織である「情報学環」は、固有の基幹教員と、学内既存の研究科・研究所等から3年ないし7年の期間をもって情報学環に教員枠及び身分を異動する多数の流動教員によって構成されている。ここでは、多数の分野横断的なプロジェクト研究を柱に据え、文系理系の区別を越えた情報分野の学融合を目指している。教育組織である「学際情報学府」における大学院学生に対する研究指導は、情報学環の基幹教員と流動教員が行うが、授業科目の担当は、これらの教員以外に他研究科・研究所等に所属する教員にも委嘱する。また、副指導教員制や副専攻制度の積極的な運用を図ることによって、情報関連の広範な学問分野を覆う幅広い学際教育を目指している。

研究組織である大学院情報学環は、学際情報学圏と社会情報学圏という2つの学圏から構成されている。それぞれの学圏は、次のようにいずれも5つの学域からなっている。

大学院 情報学環

■学際情報学圏

情報生命・思想学域

情報システム・言語学域

情報表現・造形学域

情報環境・認知学域

情報社会・制度学域

■社会情報学圏

ジャーナリズム・メディア学域

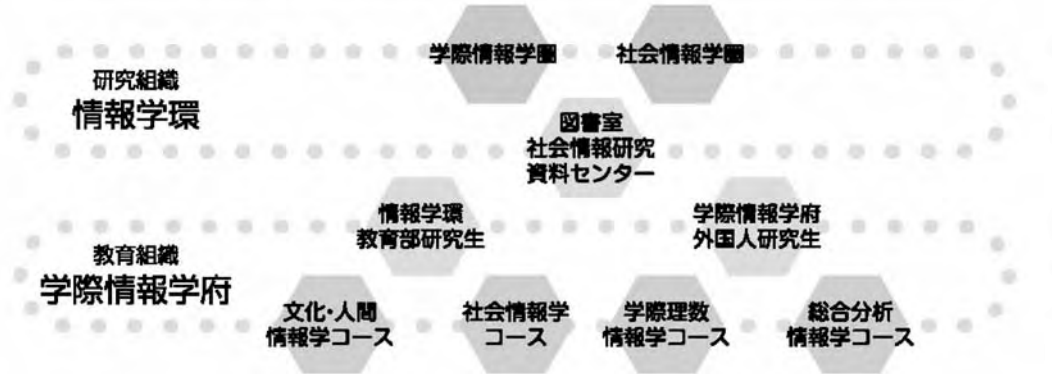
情報行動・機能学域

情報法・政策学域

情報経済・産業学域

情報文化・歴史学域

東京大学大学院 情報学環・学際情報学府



教育組織である大学院学際情報学府では、一方では情報現象についての文理を越境する幅広い視野を、他方では社会情報学からコンピュータ科学までの高度な専門的能力を、同時に身につけた人材を持続的に社会に提供していくために、それぞれの自律性と相互の連携をあわせもったカリキュラムを編成し、それを運営する以下のような4つのコースを設置している。このコース制は、教育効果を上げるために学生をコースに振り分けのものであって、教員がコースに帰属するものではない。教員は学環に帰属している。

また、学際情報学府は学際情報学の1専攻という形式をとってはいるが、この「専攻」は従来の研究科における専攻とは異なるものであり、そこに教員が帰属しているわけではない。

社会情報学コース

このコースでは、メディア、コミュニケーション、社会情報に関わる社会現象・文化現象を分析するための学識を養い、専攻分野における研究および応用の能力を培うことを目的とし、社会情報学の発展に貢献できる研究者を養成するとともに、社会人を受け入れて研究手法を身につけさせ、知識の高度化をはかる教育を行っている。

文化・人間情報学コース

このコースでは、情報学の視座から文化・人間科学の諸領野を体系的に再編し、生命現象や進化、身体知覚から現代文化、メディア、映像、テキスト、アーカイブ、リテラシー、学習環境までの21世紀的な諸課題に理論的かつ実践的に取り組んでいくことのできる深い学識と精緻な方法的能力をそなえた研究者や実践者を養成する教育を行っている。

学際理数情報学コース

このコースでは、21世紀の社会・産業・個人の情報環境の基盤となる専門的な理数情報学の知を深

めるとともに、あわせて他分野と協調して学際的に情報学のフロンティアを切り拓いていくための幅広い学識を身につけた研究者及び表現者を養成している。

分析情報学コース

本コースは、平成 18 年 4 月に設立された。センサーから大量のデジタル情報を取得し、それを必要な場所や機器へ通信し、保存・解析したうえで、有効に活用する分析情報学の学際的な専門教育を実施している

これらの 4 つのコースそれぞれで、一般の入試と並び、実践的な経験や目的を重視し、社会人を主要な対象とした特別選抜を実施している。

情報学環教育部

また、学部生を対象とした教育カリキュラムとして、情報学環教育部がある。教育部では、大学 2 年次以上の在学者及び大学卒業者の中から、将来、新聞、放送、出版などジャーナリズムの諸分野で活動することを志す者、あるいはマス・メディア、コミュニケーション及び社会情報現象、さらには学際的な情報学の学問的研究に関心を持っている者を毎年 50 名程度研究生として受け入れ、一定のカリキュラムのもとに、修業年限 2 年で基礎的な専門教育を実施し、修了に必要な単位を修得した者には修了証書を授与している。

1.1.2 東京大学内の他研究科との関係

さて、ここで、学内に存在し領域的に関連性のある他の研究科との関係及び違いについて、各部署のホームページの情報をもとにして述べておきたい。

■情報理工学研究科

情報理工学研究科は、東京大学の情報学構想のなかで情報学環・学際情報学府の設立と連動して、翌年の 2001 年 4 月に設立された研究科である。情報学環・学際情報学府が文理相互浸透、そして研究所を含めた全学協力の組織論で作られたのに対して、情報理工学研究科は東京大学における理工系の情報科学技術に関連した組織が理学系研究科と工学系研究科とに分散して存在していたのを改組、再編し、新研究科として設置されたものである。「これによって、新時代に向けた情報関連教育・研究の効果的統合と集約、及び機能的役割分担とスケールメリットを活かした新たな展開に対する柔軟性を実現」していこうとしている。コンピュータ科学、数理情報、システム情報、電子情報、知能機械情報といった専門的・先端的な英知を結集している。その規模は、情報学環・学際情報学府より数段大きく、文系を含まない理系の研究科である。学位は博士（情報理工学）、修士（情報理工学）。学生数は、2005 年 5 月現在で修士課程 389 名、博士課程 199 名、2007 年 5 月現在で 418 名、203 名となっている。

■新領域創成科学研究科

新領域創成科学研究科は、東京大学の既存部局の全学的協力のもとに 1998 年に新設された大学院（独立研究科）で、一期生の受入れが 1999 年 4 月に始まった。学部を持たない独立大学院である点で情報学環・学際情報学府と共通しているが、統合モデルの研究科である点で情報学環・学際情報学府と違っている。新領域創成科学研究科は、既存の個別学問分野から派生する未開拓の領域を研究・教育の対象とし、既存の様々な学問を融合することによって、新たな学問領域を創成するという使命を持って設立された。「学融合」を基本理念としている。組織としては、基盤科学研究系、先端生命科学研究系、環境学研究系の 3 研究系体制でスタートし、その後、2003 年度に情報生命科学専攻、2004 年度にメディカルゲノム専攻、そして 2005 年度に生涯スポーツ健康科学研究センターを新設した。現在では、3 研究系体制で、8 専攻、1 研究センターを有し、12 の専攻・コースで約 200 名の教員、1,300 名余の大学院生を擁する研究科となっている。

■公共政策大学院

公共政策大学院は、東京大学法学政治学研究科と経済学研究科によって 2004 年 4 月に設立された、公務員をはじめとする政策の形成、実施、評価の専門家を養成する大学院修士課程（専門職学位課程）である。「東京大学公共政策大学院」は通称で、「研究科以外の教育研究上の基本となる組織」として分離モデルをとり、法学政治学研究科と経済学研究科が連携して設立する教育組織である「公共政策学教育部」と研究組織である「公共政策学連携研究部」から成っている。特色としては、法学部、経済学部の教授陣によって、政策立案、実施、評価能力の基礎となるレベルの高い法律学、政治学、経済学についての教育が行われ、同時に実務家教員による授業を含め、内外の具体的なケースを素材とした事例研究による実践的教育の重視がされていることである。定員は 1 学年 100 名。学位は公共政策学修士（専門職）。

■工学系研究科

工学系研究科は歴史も古く、規模も大きい研究科であり、学部教育の工学部組織を持っている。そのポリシーは次のようにまとめられている。「工学の教育に携わる私たちは、科学技術の持つこのような多面性を理解し、その影響の及ぶ範囲に思いをいたし、全ての人間がより実りの多い生きがいのある営みを実現できるように努めます。科学技術の未来を支えるに足る工学の基礎とともに、技術の社会における位置や意味を教育し、幅広い視野と見識、国際感覚を身につけた高度な人材を養成します。研究面では、基礎的な研究を重視すると同時に、既成の工学の枠組みを取り払い、新しい地平を開拓する取り組みを積極的に推進します。」大変広範な工学の領域を対象とし、19 専攻、教職員約 1,100 名を擁する。学生数は学部学生が約 2,000 名、大学院修士課程が約 1,900 名、博士課程が約 1,000 名。

■人文社会学系研究科

人文社会学系研究科は伝統のある文学部を基礎とする大学院である。文学部には 4 学科、26 専修課程があり、人文社会学系研究科は 7 つの研究専攻から成る。旧社会情報研究所は情報学環との組織統

合以前、人文社会系研究科の社会文化専攻のなかで協力講座として「社会情報学専門分野」を運営していた。それが現在、学際研究情報学府の社会情報学コースとして引き継がれ、拡充されている。2005年度の学生数は学部学生が約 876 名、学位取得者は修士 146 名、博士が 71 名である。

■総合文化研究科

総合文化研究科は、教養学部を基礎として 1983 年に 4 専攻（比較文学比較文化、地域文化研究、国際関係論、相関社会科学）で発足した。その後の拡充・再編を経て、現在、言語情報科学、超域文化科学、地域文化研究、国際社会科学、広域科学の 5 専攻体制をとっている。広域科学専攻はさらに生命環境科学系、相関基礎科学系、広域システム科学系に分かれている。教養学部は国際的な視野の下に既存の学問体系を超えて学際的に新たなる知を探求する精神をモットーとし、総合文化研究科は文系と理系にまたがる教育・研究体制をもって、既存のディシプリンを大切にしながら分野横断的な試みを行う大学院という特色を持っている。現在、教養学部前期課程に 6,600 名を超える学生が在籍し、後期課程には約 400 名が、そして大学院総合文化研究科に修士課程・博士課程をあわせて約 1,400 名が在籍している。

1.1.3 政府予算に基づく大型研究・教育プロジェクト

情報学環の中には多様な研究・教育プロジェクトが展開されているが、競争的政府予算に基づく大型の研究プロジェクトとして、①文部科学省 21 世紀 COE「次世代ユビキタス情報社会基盤の形成」、②コンテンツ創造科学産学連携教育プログラム、③文部科学省「セキュアユビキタスコンピューティングプラットフォーム」、④NEDO「情報家電用マルチメディアセキュアチップ TRON-SMP の研究開発」の 4 つがあげられる。

1.1.3.1 文部科学省 21 世紀 COE「次世代ユビキタス情報社会基盤の形成」

東京大学大学院情報学環を核とした、文部科学省 21 世紀 COE「次世代ユビキタス情報社会基盤の形成」（平成 16 年度～20 年度）が採択された。本プログラムは、あらゆる分野や場面において、デジタル情報、特に状況認識技術によって得られたコンテキスト情報を活用した、効率的で効果的な情報サービスが実現される、ユビキタス情報社会基盤の確立と課題の解決に向け、情報学を核とした理論基盤研究や技術基盤研究、社会基盤研究にわたる幅広い新たな学際的な学問基盤を確立することを目的としている。

現在、本研究拠点は、東京大学大学院情報学環の教員を中心として、計算機科学から社会科学、人文科学の分野の研究者 19 人を中心として発足し、更に活発に研究を推進するために、更に特任教員や非常勤研究員、RA などの採用を続けている。また、ユビキタスコンピューティングの多様な基盤技術や応用技術をカバーするために、産官より本分野のオーソリティーの 4 名に非常勤の特任教授に就任いただいている。本拠点は、拠点リーダーのリーダーシップの基、主に 3 つの領域を統括しており、それらは、ユビキタス情報技術研究プロジェクト、ユビキタス情報社会国際研究プロジェクト、ユビキタス情報コンテンツ形成プロジェクトである。

ユビキタスコンピューティングの基盤技術として、組み込みシステム開発プラットフォームの研究やコンテキストウェアコンピューティングの基盤方式の研究を行っている。また、それら基盤技術を用いてユビキタス情報ベースの研究を行っている。美術作品のユビキタス情報ベース、モノと情報、場所と情報の連携を実現した東京大学キャンパス GIS コンテンツなどが実現されている。さらに、ユビキタス情報社会の国際的基盤の確立にむけての、社会的問題に関する研究として、情報社会学的分析、法学的観点や経済学的観点からの社会制度改革や政策提言などを行っている。

1.1.3.2 コンテンツ創造科学産学連携教育プログラム

コンテンツ創造科学産学連携教育プログラム（以下、コンテンツ創造科学と記す）は平成 16 年度文部科学省科学技術振興調整費（以下、振興調整費と記す）における新興分野人材養成プログラムで採択されたものであり、平成 16 年度から 5 年間の計画として実施されている。なお、平成 16 年度の振興調整費においては、548 件の申請のなかから、137 件がヒアリングを受け、最終的に 60 件が採択されており、採択率は約 11% である。特に、当該課題が採択されたプログラム（新興分野人材養成）においては、76 件の申請のなかから、34 件がヒアリングを受け、最終的に 18 件が採択されており、採択率は約 24% となっている。

コンテンツ創造科学が主眼とするのは、わが国におけるデジタルコンテンツ分野を率いる人材の養成であり、特に①プロデューサー、②技術開発者、③指導的教育者という 3 種の人材の養成を目標としている。

これらの人材を養成するために、本学において以前からデジタルコンテンツ分野の研究を推進していた研究者が大学院情報学環を中心として集結し、さらに産業界からコンテンツ産業の第一線で活躍する実務者を指導者として招聘することで人材養成を進めている。

このプログラムにおける被養成者は主として東京大学に所属する修士課程の学生を中心として選抜しているが、学部学生・博士課程学生・社会人であっても履修に十分な学力を有する場合には、選考の対象としている。また、修了年限は 2 年間であり、副教育プログラムという全学的な位置づけとなっている。

1.1.3.3 文部科学省「セキュアユビキタスコンピューティングプラットフォーム」

ユビキタスコンピューティング環境をセキュアにする基盤技術として、高性能かつ容量の大きい耐タンパ実装されたセキュアチップ（eTRON/NG : Next Generation）と、それを利用することでソフトウェアやコンテンツをセキュアに扱うセキュア組込み OS（SE-TKernel: Security Enhanced T-Kernel）を研究する。更に本技術を、医療や食品などの情報セキュリティが求められるユビキタス応用に適用し、有効性を検証する。この研究を 3 つのサブテーマに分けて実施している。ひとつが、高性能セキュアチップに関する研究であり、静止画、音声、電子カルテ等、多くのユビキタス応用に必要とされるより大きなデータの処理を安全に実行するために、十分な計算能力や記憶容量、I/O 性能、暗号計算モジュールをもち、耐タンパ実装されたハードウェア LSI を構築する。そして、セキュア組込み OS に関する研究では、セキュアなユビキタスコンピューティング環境を構成する軽量ユー

ザ端末や、公共空間に埋め込まれて使う小型ストレージやセンサー・アクチュエーター用の小型サーバ機器を構築するための、セキュアな組込み RTOS を研究開発している。さらに、セキュアなユビキタス応用の研究では、安全かつ個人プライバシー保護を配慮した強固なユビキタス情報サービスを実現することを目的としている。

1.2 理念と沿革

* 情報学環・学際情報学府設立の経緯

情報学環・学際情報学府設立の背景には、次のような認識があった。近年にみられる情報技術の急速な発展と利用の拡大によって、「情報」が現代社会において果たす意味は、決定的に重要なものとなってきた。技術的体系だけでなく、人間の行動や意識、社会のさまざまなシステム、文化や芸術、産業や政治・国際関係など、人間社会のあらゆる側面が、「情報」の様式変化のインパクトによって、根本的な変革を促されつつある。21 世紀には、この情報様式のあり方が、地球上の生命や人間、社会の動向を大きく規定する基盤となることは確実だ。こうした状況を背景に、「情報」に関する、より総合的でより高度な教育研究の社会的意義が高まり、それに応えうるような教育研究体制の整備が、喫緊に求められていた。

情報にかかわる教育研究は、今日、きわめて多様な学問領域で行われており、しかも、各個別領域に固有な対象や方法とも深く結びつきながら発展してきている。こうした実態を有効に生かしながら、相互間の有機的連携を促し、学際的な教育研究をすすめることが、情報学の総合的な発展のためには不可欠だと考えられた。また、情報学は、急速な発展途上にある学問分野であることから、一方では研究面で、先端的な学融合に就中に取り組みうる緊密な共同体制を設ける必要があると同時に、他方では教育面で、カリキュラム編成や研究指導体制の幅広さと研究内容の進展や時代の要請の変化に即応できる組織的柔軟性を確保する必要があった。こうした特性をもっている情報学の教育研究上の目的を効率的かつ実効的に達成するために、平成 12 年 4 月から、学校教育法第 66 条に定める「研究科以外の教育研究上の基本となる組織」として、東京大学大学院に、「情報学環」及び「学際情報学府」が設置されたのである。

「情報学環」と「学際情報学府」が両者一体となって構成されるこの大学院組織は、専門深化と恒常性を基本的な特質とする従来の研究科とは違って、全学にわたる情報関連の諸領域をネットワーク的に連携させる横型の組織として設置され、情報学分野の総合的な教育研究を先端的かつダイナミックに推進するにふさわしい形態をとった。

前述の通り、その基本的特徴は、組織構成員の流動性と全学的連携、及び研究組織である情報学環と教育組織である学際情報学府の両立という点にあり、その組織構造は次のように作られた。研究組織である「情報学環」は、基幹教員と流動教員によって構成された。基幹教員とは情報学環が固有のもつ教育枠で採用される教員であり、流動教員とは既存の研究科・研究所等から 3 年ないし 7 年の期間をもって情報学環に定員及び人が移され、それによって情報学環教員となる教員のことである。ここでは、多数の分野横断的なプロジェクト研究を柱に据え、文系理系の区別を越えた情報分野の学融合が目指された。

教育組織である「学際情報学府」における大学院学生に対する研究指導は、情報学環の基幹教員及び教育にも従事する流動教員が行なう。学際情報学府における授業科目の担当は、これらの教員が行うほか、他研究科・研究所等に所属する教員にも兼担当教員として委嘱する。

* 社会情報研究所の合流、新組織設立に至る経緯

このようにして設立された情報学環・学際情報学府は、2004年4月1日、東京大学社会情報研究所と組織統合し、新たな一步を踏み出した。社会情報研究所は国立大学附置研究所であり、その歴史をたどれば約75年間にわたる伝統をもつ研究機関であった。

1929年10月1日、東京帝国大学文学部に新聞に関する学術研究施設として新聞研究室が設置された。新聞研究室は、帝国大学の法学部、文学部、経済学部からそれぞれ1名の指導教授が横断的に参加し、1名の指導補助、および3名の研究員が置かれるという、規模は小さいが、今日の情報学環のさきがけをなすような仕方で東京帝国大学を横断的につなぐ学際的な研究組織であった。またその運営は、渋沢栄一や阪谷芳郎、本山彦一、徳富蘇峰、杉村廣太郎といった、当時の財界、新聞界の名士たちが協力して募られた寄附金によってまかなわれ、今日の産学連携のさきがけをなす形態をとっていた。設立時の新聞研究室の指導教授としては、法学部から南原繁教授が、文学部から戸田貞三教授が、経済学部から河合栄治郎教授がというように、戦前期日本の法学、社会学、経済学をまさしく代表する教授3名が参画し、指導補助として実質的な研究組織の中核を担った小野秀雄（初代新聞研究所長）を支えていた。

このような前史を経て、戦後の1949年に新聞研究所が正式に東京大学附置研究所として発足した。その根拠をなす国立学校設置法（49年5月31日公布）には、「新聞及び時事についての出版、放送又は映画に関する研究、並びにこれらの事業に従事し、又は従事しようとする者の指導及び養成」と規定されていた。すなわち、新聞研究所は設立の当初から、狭義の新聞に限らず、雑誌、放送、映画などを含むマス・メディア全般を研究対象とする学際的な研究組織として出発していたわけである。また、「新聞」という言葉そのものも、今日のように狭義の新聞紙だけを指していたわけではなく、ニュースや報道媒体全般をも含みこんだ概念であるという理解がその当時にはあった。

やがて、新聞研究所は20世紀後半の放送をはじめとするマス・コミュニケーションの発展を受けて組織の拡充と研究部門の再編を重ねていった。1957年度からは、基礎部門：マス・コミュニケーション理論、歴史部門：マス・コミュニケーション史、特殊部門1：コミュニケーション過程、特殊部門2：マス・コミュニケーション・メディア、特殊部門3：世論及び宣伝という5研究部門の構成となり、63年度からはこれに放送部門が、さらに74年度からは情報社会部門が、80年度からは社会情報システム部門が加わった。このような部門構成から明らかなように、東京大学新聞研究所は、マス・コミュニケーション研究を基本に据えながら、トータルな社会的コミュニケーション研究をも視野に収めつつ、日本の国立大学では唯一の現代社会の最も中枢的な研究課題たる情報の社会的側面に関する学際的、総合的な研究として発展し、高い評価を得た。

そして、このような実績を基盤にして、1992年4月1日、「社会情報の総合的研究」を目指して新聞研究所から社会情報研究所への改組が行われた。改組後の社会情報研究所は、情報メディア、情報

行動、情報・社会という 3 大部門を置き、旧新聞資料センターを改称した情報メディア研究資料センターを附置するという体制をとって、1992 年から 95 年まで続いた文部省科学研究費重点領域研究「情報化社会と人間」をはじめ、情報化社会に対する学際的な取り組みを本格的かつ先端的に進めた。1996 年には外部評価を実施し、高い評価を得た。そのときの産業界パネルの委員は小池唯夫（毎日新聞社長）、川口幹夫（NHK 会長）、関本忠夫（日本電気会長）、大塚信一（岩波書店社長）、福川伸次（電通総研所長）の方々であった。

高度情報社会の深まりのなかで、東京大学における情報をめぐる教育研究体制の再編が議論になるたびに社会情報研究所は、文系の研究所として、その流れに身を置いてきた。そして、情報学環・学際情報学府の設立構想の際には積極的に関わり、人的リソースの提供において文系部局としては最大の貢献を果たした。社会情報研究所は情報学環・学際情報学府の設立後も密接な関係をもち、学環・学府を支援してきた。そして、国立大学法人化を前にした、国立大学附置研究所の見直し方針のなかで、社会情報研究所は情報学環・学際情報学府との合併を選択し、大学附置研究所から大学院組織へと全面的に移行したのである。それは、文系のなかでの学際的研究から、文理相互浸透のなかでの学際的教育研究へのシフトであり、情報現象を研究対象として組織としてはある意味で必然的な流れであり、新たなスプリングボードであったといえよう。

1.3 教職員数

給与の財源が運営費交付金となっている教職員（常勤教職員）の採用枠は 70 人及び特別教育研究経費による教員は 1 名、計 71 人となっている。内訳は図 1-3-1 のとおり、教授等の常勤教員 56 人、常勤職員 15 人となっている。このほか、大学院情報学環は、外部資金に基づく特任教員や研究補助等の非常勤職員から構成される。

また、大学院情報学環の組織の一つとなっている基幹教員と流動教員の内訳について見ると、図 1-3-1 のとおりとなっている。基幹教員の定員数は 35 名、流動教員の定員数は 21 名とほぼ同数であり、両方の教員で情報学環の研究教育組織が等しく支えられていることがわかる。

図 1-3-1 教職員採用枠（全 71 人）の内訳
（平成 18 年 4 月 1 日現在）

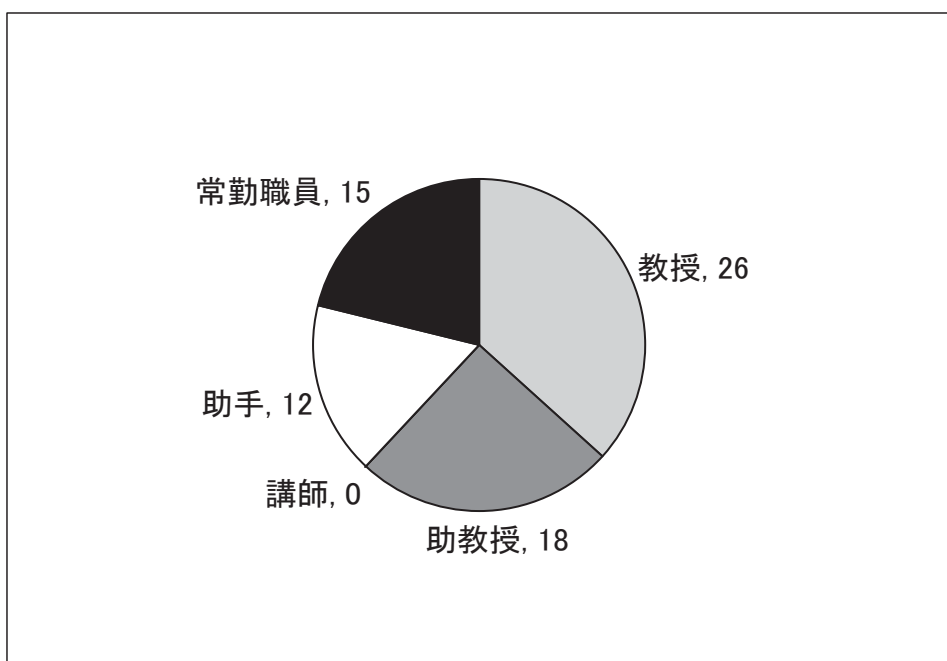
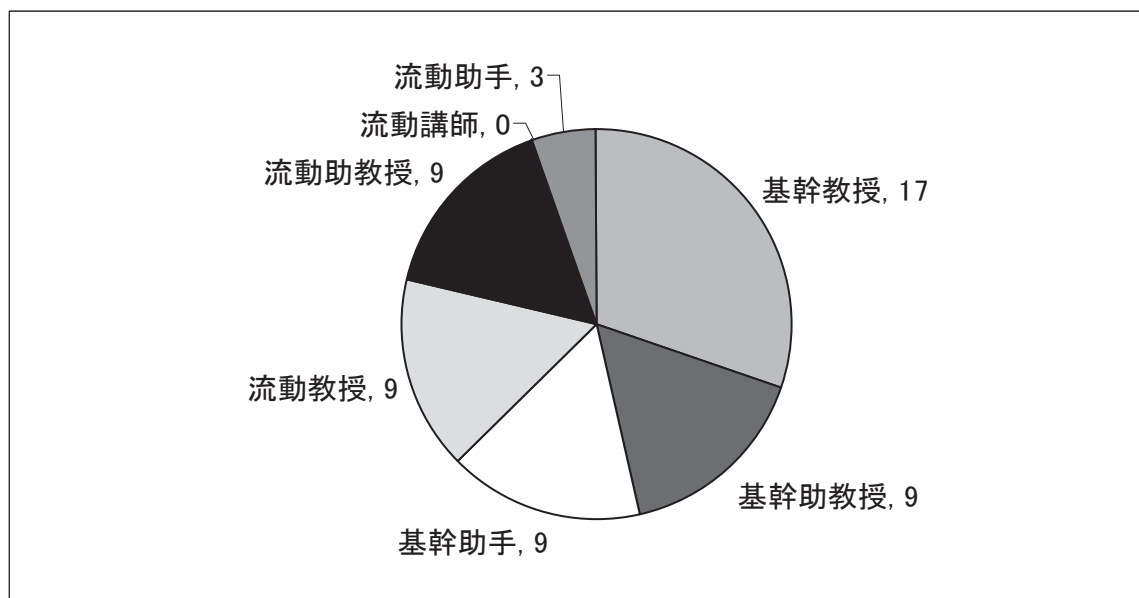


図 1-3-2 常勤教員採用枠（56 人）の内訳



1.4 財務

平成 18 年度予算に基づき、大学院情報学環の財務構造を説明する。なお、対象は、部局の研究教育に直接関係する運営費交付金と外部資金（科学研究費補助金等）とし、常勤教職員の人件費及び部局の管理が直接に及ばない授業料及び入学検定料については特に言及しない。

さて、具体的な数字を見る前に、学環財務の特徴である流動教員に関する資金の取り扱いについて説明する。資金計上の段階では、流動教員に係る資金及び基幹教員に係る資金のいずれの取り扱いに差がない。すなわち、運営費交付金及び外部資金のいずれも、一旦、大学院情報学環の予算として計上される。しかしながら、執行の段階に入ると、流動教員に係る資金は流動元部局に移る。そして、大学院情報学環に残るのは基幹教員に係る資金と社会情報資料センターなどの大学院情報学環固有の事務に関するものだけとなる。このため、教員の研究教育資金に付随する間接経費については、流動教員分は流動元で執行され、大学院情報学環に残り執行されるのは基幹教員分だけとなる。

それでは、数字に基づき、大学院情報学環の財務構造を概観する。平成 18 年度の収入総額は 1,239 百万円で、比率としては、運営費交付金¹が 2 割弱に対して外部資金が 8 割以上を占めている。

次に、運営費交付金の使途内訳を見ると²、表 1.4.1 のとおりとなる。他部局にない特徴としてあげられるのが、流動元部局に移される資金（約 6 千万円）が全体の三分の一を占めることである。したがって、運営費交付金のうち、大学院情報学環の裁量が及ぶのは、残り三分の二の約 1 億 5 千万円となる。そして、約 1 億 5 千万円のうちの半分（全体の三分の一）が、消耗品等一般経費や非常勤職員人件費という事務管理の経費となる。残りの半分（全体の約三分の一、約 8 千万円）が、直接の研究教育活動に充てられることになる。このうち、約 1 千 2 百万円の社会情報資料センター経費と約 1 千百万円の図書費は、同センター及び図書室を維持するために必要な雑誌等の購入に充てられ、固定的経費の性格を帯びている。

¹ 本項では、運営費交付金のうちコンテンツコア分(58,218 千円)については外数として扱っており、収入総額等には含んでいない。

² 本段落では、部局長裁量経費（約 1 5 百万円）については、外数として扱い、割合の算出の際には分母及び分子のいずれにも含まれない。

経費区分	(単位:千円)
光熱水料	8,420
通信運搬費	3,126
建物保守料/業務委託料	9,099
非常勤職員人件費(事務)	4,457
非常勤職員人件費(教育教育)	24030
旅費交通費	1,954
事務/教育研究一般用経費	41,630
教員研究費	21,063
図書費	9,763
出版印刷費	6,374
社会情報資料センター経費	11,275
予備費(シンポジウム経費)	6,478
小計	147,669
流動教員分	64,114
総計	211,783
部局長裁量経費	15,267

表 1.4.1 平成18年度実績(運営費交付金)

外部資金の収入内訳は、表 1.4.2 のとおりである。ここに計上しているのは、外部資金関係間接経費(学環分)を除いては、直接、研究教育に充当される資金の金額となっている。外部資金のうち、大学本部及び流動元部局の間接経費となる金額については計上していない。なお、外部資金についても、流動教員の外部資金に係る間接経費は流動元の部局に移され、大学院情報学環では計上されない点は同じである。

区分	金額
寄附講座*	40,000
寄附金*	35,269
科学研究費補助金	159,505
受託研究費	369,400
共同研究費*	10,985
科学振興調整費*	99,998
COE 拠点形成	177,180
間接経費（学環分）	19,415
外部資金合計	911,752
*:一部に間接経費および実質的な間接経費を含む	(単位：千円)

表 1.4.2 外部資金の収入内訳

大学運営費交付金が毎年度削減される一方で、学際的な情報学に対する研究及び教育ニーズが引き続き高いことを踏まえると、外部資金の積極的な獲得は極めて重要である。定常的な研究・教育のための資金であっても例外とは言えず、特に新たな資金を必要とする場合には外部資金の確保は不可欠となっている。また、外部資金は基本的に時限的という性格を有していることを踏まえると、現在進行中の研究等のプロジェクトで確実に成果をあげるにとどまらず、時代を先取りした研究及び教育テーマを設定していけるように、資金的なリソース配分についても常に見直しを行い、フィードフォワード的な対応を取っていくことが課題となる。

1.5 運営

1.5.1 情報学環教授会

大学院情報学環教授会が研究組織としての情報学環の意思決定機関である。教員が帰属するのは情報学環であり、情報学環教授会は基幹教員と流動教員によって構成され、両者の間に権利と義務において相違はない。教授会は月に1度開催され、重要事項を審議し決定する。人事に関しては人事教授会が開催される。

部局長たる情報学環長は教授会における選挙によって選任され、総長によって任命される。被選挙権は教授にあり、選挙権は講師以上にあるが、基幹教員と流動教員は同等の権利を持つ。学環長の任期は旧情報学環と旧社会情報研究所の統合後の最初の学環長は2年、その後の、つまり2006年4月からの学環長は3年となっている。再任はない。

学環長が副学環長2名を指名する。学環長が主宰する総務委員会が、教授会と教授会の間で諸案件や方針について協議し、教授会にかけるとの準備をする。また、総務委員会が決定し、教授会に報告すると定められた事項もある。総務委員会は学環長、副学環長、両学圏長、重要委員会の委員長、3コース長、学環長補佐などによって構成され、ほぼ週に1度開催される。これが実質的な執行部である。

1.5.2 学府委員会

教育組織としての大学院学際情報学府の決定機関は、学府委員会である。そこで教務関係、入試関係、学生の身分の異動などの重要事項が審議され決定される。学府委員会の構成メンバーは学府の教育に関わる教員であり、情報学環の教員のほか兼担教員がこれに加わる。学府のもとに学際情報学専攻の専攻長が置かれており、学環長が指名する。専攻長は教務委員会と入試実施委員会を組織する。

学府は社会情報学コース、文化・人間情報学コース、学際理数情報学コース、分析情報学コースに分かれて入試を行い、合格した学生はそれぞれのコースの所属となるが、それぞれのコースの運営に責任を持つ、コース会議および運営委員会が置かれている。各コース長が責任者を務め、適宜開催される。

1.5.2.1 社会情報学コース

社会情報学コース運営委員会の主な業務は、他のコース運営委員会と協力しつつ、入試実施委員会の指示下で修士課程入学試験および博士課程入学試験を実施することである。その際、修士課程入試問題のスケジュール作成、問題作成者の決定も大きな任務の一つである。また、入学試験同様、他のコース運営委員会と協力しながら、教務委員会の指示下で、修士課程学生の「修士論文中間報告会」、博士課程学生の「博士課程コロキウム」の実施に携わっている。

2006年度において社会情報学コースでは、修士課程、博士課程ともに、ほぼ前年の選考方式を引き継ぐ形で実施した

今後の課題として、(1)とくに修士課程入学試験において、他コースとの共通性を高めつつ、より適切な人材を選抜する入試方法のあり方を検討すること、(2)修士課程在学生在が効率的に社会情報学を学習し、質の高い修士論文を執筆できるよう、コースワーク・カリキュラムおよび論文指導を充実させ

ること、(3)博士課程在学生在在学期間に博士論文を執筆できるよう論文執筆指導に関わる授業・演習を充実させ、段階的に無理なく論文提出できる教務スケジュールを構築すること、等が考えられる。

1.5.2.2 文化・人間情報学コース

文化・人間情報学コースは、社会科学系の社会情報学コースと自然科学系の学際理数情報学コースをつなぐ中間の位置にあり、文理の融合を進めながら、新しい学際的な情報学の創造に正面から取り組んでいる。このコースを担当している教員には、基礎情報学、進化学、生態心理学、科学技術コミュニケーション、知覚情報論、記号学、映像学、カルチュラル・スタディーズ、歴史情報学、アーカイブ論、メディア・リテラシー、メディア表現、教授・学習設計、計量社会分析、教育システムなどの諸領域の専門家が揃い、新しい融合的な知の地平を拓きながら授業や学生の指導、いくつかの教育上のプロジェクトの実施に当たっている。このコースの教育は、基本的に、①生命・身体・環境、②文化・表象・映像、③メディア表現・学習・リテラシー、④アーカイブ・歴史情報という、より理論的なものから実践的なものまでの4つの大きな柱を軸にしている。文化・人間情報学コースは、これらの4本の太い幹の周囲に多様で野心的な枝葉を伸ばしながら、情報学という新しい学問の森で、文化・人間科学の諸領野を体系的に再編し、それこそ生命現象や進化、身体知覚から現代文化、メディア、映像、テキスト、アーカイブ、リテラシー、学習環境までの幅広い21世紀的諸課題に理論的かつ実践的に取り組もうとしているのである。そして、そのための深い学識と精緻な方法的能力を備えた研究者や実践者を養成し、未来の世界に送り出そうとしている。そのために、とりわけこのコースの選択必修科目である文化・人間情報学基礎(4単位)と文化人間情報学研究法(2単位)では、上記の4つの柱に応じた基礎力増強のトレーニングとフィールドワーク型のグループ実習などが実施されている。

1.5.2.3 学際理数情報学コース

学際理数情報学コースには、教員24名(学環基幹2名、流動7名、兼任(課程担当14名、授業担当1名)が所属しており、毎年修士(定員20名)と博士(定員9名)の学生を受け入れて教育している。

コースは、学際理数情報学コース運営委員会(コース会議)のもとに、コース長、副コース長、教務担当、入試担当がおかれ、他のコースと協力しながら運営されている。

このコースの特徴は、学環の基幹教員のみならず、関連部局(情報理工学系研究科、工学系研究科、総合文化研究科、生産技術研究所、情報基盤センターなど)からの多くの流動教員、兼任教員、さらには授業担当・併任・客員教員の協力によって運営されていることである。これによって、多様な背景と目的を持つ学生の教育が可能になっているが、一方で関係教員の負担が課題となっている。

今後の課題としては、(1)多様な背景を持つ学生を、「学際的に協調できる理数系情報学の専門家」として育成するための、入学試験選抜方法の検討、教育カリキュラムの検討、(2)幅広い部局からの教員の協力により成り立っているコース運営方法の改善、などが挙げられよう。

1.5.2.4 総合分析情報学コース

総合分析情報学コースは、平成 17 年度に概算要求を行った結果、平成 18 年 4 月に設立された最も新しいコースである。本コースでは、主にコンピュータサイエンスやコンピュータネットワークの基礎知識を基に、センサーや観測衛星から大量のデジタル情報を取得し、それを必要な場所や機器へ通信し、それを保存・解析したうえで、更に実社会において有効に活用する分析情報学の学際的な専門教育を実施している。分析情報学が有効に適用できる分野は多岐にわたり、農学や水産学、環境学、資源学、社会学、考古学といった学問分野をはじめ、災害支援や遭難救助、社会安全保障、国土や社会基盤の管理保全といった国レベルの施策、更には情報セキュリティーポリシーの策定やインターネット等のサイバー空間の管理といった分野へも及ぶ。こうした現実社会に深く関わる技術課題とともにそれを支える社会制度までも興味を持ち、膨大な情報を活用して確固たる決断を下すことが可能な人材並びに、分析情報学及び計算機科学の研究者を育成することを目標としている。

1.5.3 教務委員会

教務委員会は、大学院学際情報学府の教育運営の中核をなしている。大学院学際情報学府では、情報学環に属している基幹・流動の教員に加え、学内兼任教員、授業担当教員、客員及び非常勤講師などから成る教員スタッフが学生指導に当たっている。その数は、平成 18 年度現在で、基幹教員 21（教授 9、助教授 12）、流動教員 18（教授 9、助教授 9）、兼担・課程担当教員 23（教授 11、助教授 10、講師 2）、兼担・授業担当教員 7（教授 5、助教授 2）、客員教員 2（教授 1、助教授 1）、非常勤講師 9、総計 80 名となっており、修士課程 1 学年約 90 名、博士課程 1 学年約 40 名、学府全体で約 300 人の大学院生を教育するにも十分な教師陣を備えている。教務委員会では、これらの多数の教員に協力をしていただきながら、カリキュラムの運営と改善、授業時間割の編成と講師の手配などの基本的な業務の他に、後述するような大学院生たちの教育研究促進のための諸々のプログラムを実施している。

1.5.4 財務法務委員会

情報学環の予算案の検討、予算の適切な執行等を行うほか、他の委員会の所掌に属さない一般的な事項に関する規程案の検討などを行い、総務委員会等における情報学環の管理運営を補佐している。（学環の財務状況については、1.4 を参照）

1.5.5 将来計画委員会

将来計画委員会は、2004 年度に、大学院情報学環の長期的な戦略を検討する委員会として設置された。2006 年度は、学際的な研究・教育の発展に伴い、大学院情報学環・学府の組織をどのように発展させていくかに関して、外部資金や他部局など周辺環境の現状把握など、基礎的なレベルから議論を行った。また、コンテンツ・プログラムの位置づけなどについても検討をおこなった。

1.5.6 ハラスメント相談員

ハラスメント相談員は、ハラスメントを受けている人からの相談を受け付ける窓口である。対象は学生に限らず、教職員すべてが含まれる。今まではセクシャル・ハラスメントが主だったが、近年は

アカデミック・ハラスメントも問題視されるようになっており、学環のハラスメント相談員も臨機応変に対応することになっている。セクハラもアカハラもグレーゾーンが広いので、原理原則だけで解決できるものではなく、当事者や関係者たちの証言を広く聞き取り、公平な判断を下すことが要求される。活動内容については守秘義務が伴うので詳細には報告できないが、比較的軽微で当事者同士の間で解決が図られるものから、ハラスメント相談所や学生相談所との連携プレーが必要で長期にわたるものまで、内容も程度もさまざまである。事後の対処だけでなく、予防活動も重要で、新入生ガイダンスや教授会などで、全学のハラスメント相談所員からレクチャーを受けている。

1.5.7 施設整備委員会

施設整備委員会の最大のミッションは現在の情報学環がおかれている最低必要面積も確保されていないという認識のもと、なんとか教育研究に必要な施設を確保することにある。本年度は総合分析情報学コースの新設による学生・教員の定員も増加したためさらに必要面積が増えその確保に努力した。本年度からは、護国寺にある東大病院分院跡地に学環プロジェクト共同ルームの利用を開始した。21世紀 COE 用の教育研究プロジェクトスペースとして、第二本部棟の3階のフロアの約半分を確保しその利用を開始している。しかしながらこれでもまだ最低必要面積に達しておらず引き続き努力するつもりである。

1.5.8 情報セキュリティ委員会

2006年3月に東京大学情報セキュリティ委員会が、東京大学保有情報資産のセキュリティを確保することを目的として「東京大学情報セキュリティ・ポリシーの基本方針」とともに定めた「東京大学情報セキュリティ・ポリシーの対策基準」は、部局情報セキュリティ責任者（部局長もしくは部局長を補佐する役職に相当する職務の者）を委員長とする部局情報セキュリティ委員会の設置を求めている。これらの全学方針に基づいて2006年9月に各部局に依頼のあった情報セキュリティ調査への対応を機に、吉見学環長が部局情報セキュリティ責任者となり、情報学環情報セキュリティ委員会が以下の通り組織され、10月から事実上活動を開始して部局調査のとりまとめを行うとともに、11月の教授会で承認され正式に発足した。

2006年度

委員長 吉見

委員 原田（至） 澤田 越塚 福田事務長

（助手）有賀 原田（隆）（11月～） 大東（11月～）

1.5.9 情報ネットワーク委員会

2000年の情報学環発足以来、所属教職員ならびに学際情報学府学生に対して、部局内 LAN、学内 LAN である UTnet、さらにはインターネットへの接続環境を提供し、また部局としての電子メール・サーバ、WWW サーバ等を運営することなどを中心とする、情報ネットワークに関わるサービス提供

と管理が要請されてきた。しかし、これを専門に担当する委員会は当初は存在せず、部局ウェブページのコンテンツ管理等も含め、「HP・ネットワーク担当」の数名の助教授および助手が任に当たっていた。2002年6月になって、情報学環の広報及び情報システム等に関する事項の審議のため、「広報・情報委員会」が設置された。さらに、2004年4月の社会情報研究所との組織合併に際して機能分化が図られ、部局ウェブページのコンテンツ管理に当たる「企画広報委員会ホームページ担当」とともに本委員会が設置された。本委員会は、2002年11月に設置された情報倫理審査会が行う調査・審査等をも除き、インフラ等、部局の情報ネットワークに関して残る部分を全般的に担当している。

2005年4月に定めた本委員会の課題と目標は以下のとおりである。情報学環・学際情報学府の情報ネットワーク全般に関する情報を集約し、提供するとともに、関係各所との責任分担を明確にし、直轄部分については適切な対処を迅速にかつ正当に行えるよう、規則整備を含め、ガバナンスの体制を確立し、運用する。その際、利用者の利益および意見の尊重と、内外におけるアカウントビリティの確保に努める。

2005年度に委員会活動が本格化し、情報ネットワーク運営管理体制の明確化・強化、基幹ネットワークの更新・整備、サーバ室の環境改善、基幹サーバの更新などを行ったことを受け、2006年度は日常的管理・運営活動に加えて、特に以下の課題に取り組んだ。

・必要諸規則の整備

従来まったく欠けていた、学環・学府の情報ネットワークに関するガバナンスの根拠となるべき諸規則の整備に取り組んだ結果、

* 情報学環情報ネットワーク委員会設置に関する内規（の改正）

* 情報学環情報ネットワークシステムの運用に関する内規

* 情報学環基幹サーバ室の運営管理に関する内規

が2006年12月の教授会で承認され、成立した。

・ iii-PKI(Public Key Infrastructure)構築

教員・学生の所在が分散している情報学環・学際情報学府では、ネットワーク経由で安全に連絡をとったり情報共有したりできる環境の整備が課題となっていた。その基礎として、公開鍵認証基盤（PKI）を構築し、個人認証や電子メールの署名・暗号化に用いることを目指した実験や調査を2005年度から行ってきたところ、2006年夏に東京大学情報基盤センターPKIプロジェクトと協力体制ができ、11月には同プロジェクトのUT-CA（認証局）の一翼を担う部局RA（登録局）が事務部総務係に発足して電子証明書の発行体制が整った。さらに、電子証明書を格納する物理的媒体として、同プロジェクトのICカードに加えてMacOS対応等に優れたUSBトークンを独自に導入するとともに、それらと連動してコンピュータ内に保存するファイルを容易に暗号化して保護するソフトも試験導入し、安全かつ分かりやすい電子証明書利用環境の整備に努めた。

2007年度には、情報ネットワークの基盤整備、運営管理改善を継続するほか、PKIの利活用を広げるとともに、セキュリティ対策の向上に努める予定である。

2006 年度

委員長 原田 (至)

委員 石崎 越塚 澤田 中尾 山内

(助手) 有賀 大東 (11 月～) 原田 (隆) (11 月～)

1.5.10 情報倫理審査会

情報倫理審査会は、東京大学の情報倫理委員会が定める情報倫理規則にもとづき、主査と委員 3 名において、情報倫理の遵守のための審査をおこなっている。2003 年度の新情報学環の発足以来、構成員への連絡通知のための ML をつうじてネットワーク利用者への注意喚起などをおこなってきた。重大な情報倫理案件は現在までは発生せず、現在までの活動内容は、情報学環各種 ML への投稿基準の審査にとどまっている。

1.5.11 業績評価委員会

業績評価委員会は、情報学環・学府の研究・教育活動に対して行われる、学内外の様々な評価に関連する業務を遂行することが任務である。

2006 年度は、2007～8 年度に全学で行われる法人評価のための資料および情報の収集を行った。法人評価は、その後の運営費交付金にも影響を与える、重要な評価であり、入念な準備が必要とされる。

1.5.12 企画広報委員会

本委員会は、情報学環・学際情報学府の活動や行事（入試説明会、シンポジウム、ワークショップ、教員研修会など）を企画・運営すること、および両組織の情報を、ニューズレター、ホームページ、メール等で、学内外に案内するなどの広報活動を行うために設置されている。社情研との合併から数年がたち、ほぼ定常的に活動ができるようになってきたため、現在はよりインフォーマルな連携や情報共有のためのサポート、教員・学生の萌芽的な活動を支援することも進みはじめている。

1.5.13 出版編集委員会

出版編集委員会は、大学院情報学環の研究上の 3 つの主要な定期刊行物、『東京大学大学院情報学環紀要 情報学研究』（年 2 回刊行）、社会調査・実験系の『情報学研究 調査研究編』、オンラインでの英語論文サイト” iii Online Research Journal” の編集と出版の業務を担当している。これらの学術刊行物は、もともと旧社会情報研究所において新聞研究所時代から長い間刊行されてきたものであるが、平成 16 年の社会情報研究所と情報学環の合併に伴い、内容や構成、装丁などを刷新し、継続的に刊行しているものである。それぞれの刊行物の目的と内容、刊行形態については、情報学環の出版事業についての項目で後述する。出版編集委員会は、それぞれの号の紀要について企画立案し、教員論文や巻頭エッセイ、フィールドノートやブックレビューについての依頼をするほか、院生査読論

文についての査読委員への依頼や査読結果のまとめを行っている。

1.5.14 図書委員会

学環図書室は、文学部新聞研究室（昭和 4.10.1ー）および新聞研究所（昭和 24.5.31ー）時代に収集された、言論統制やジャーナリズムに関する豊富な蔵書を引き継ぎ、社会情報研究所（平成 4.4.10ー）と改められ、平成 15 年度に情報学環・学際情報学府と統合しスタートした。

研究対象が、コミュニケーション一般、ニューメディアやネットワーク、さらに情報に関する社会現象・文化現象全般に拡大するに伴い、図書室の収書範囲も隣接諸分野に大きく広がっている。

なお、学環図書室は図書・雑誌形態の資料を主に収集しており、新聞の原紙、縮刷版に関しては、社会情報研究資料センターが収集、提供を分担している。

（主な主題分野）

新聞、テレビ、ラジオ、映画、言論出版、マス・コミュニケーション、ジャーナリズム、広告宣伝、災害情報、社会情報学、社会心理学、通信技術、インターネットなど。

（蔵書冊数）約 118,809 冊（平成 19 年 3 月末現在）

1.5.15 国際活動委員会

情報学環への外国人研究員等の受け入れを審議し許可することが委員会の役目である。最近の受け入れ総数を見ると、平成 14 年度 8、平成 15 年度 7、平成 16 年度 9 名、平成 17 年度 13 名、平成 18 年度 15 名となっている（ただし、15 年度までは旧情報学環と社会情報研究所の合計）。情報学環の研究の更なる展開に必要な分野で受け入れ研究員をさらに増加させることがこれからの課題であろう。

1.5.16 国際連携推進室

アジア地域を中心とする複数の大学や研究機関との研究・教育交流を促進するために、国際活動委員会内部に「国際連携推進室」を新たに設置し、体系的かつ組織的な国際連携をめざすべく具体的な計画の策定に入った。

1.5.17 産学連携委員会

産学連携委員会は、情報学環・学際情報学府における研究・教育活動を、産業界との連携を通して社会還元をすることを目的として設置されている。2006 年度の産学連携委員会の活動は、職務発明特許やそれに類する著作権等の知財に関する規定の策定に関して、東京大学産学連携委員会を通して参加をしている。また、東京大学産学連携協議会に参加し産業界との交流を行うことも行っている。今後、学環・学府において、産業界と連携するケースが増えると思われるが、そのために必要な内部の制度づくりや、連携する上で生じた様々な課題に対して対応していききたい。

1.5.18 社会情報研究資料センター運営委員会

社会情報研究資料センターは、新聞資料を中心に、各種メディア情報資料を研究のために収集、整

理し、それらの資料を学内外の研究者に提供することを目的としている。現在、本センターの所蔵資料は製本済原紙約 20,000 冊、縮刷版約 8,000 冊、マイクロフィルム約 45,000 リールに達している。

本センターの沿革は、1964 年 1 月に当時の新聞研究所に開室された「プレスセンター」が 1967 年 6 月、新聞研究所附属施設「新聞資料センター」として正式に発足し、1992 年 4 月に新聞研究所が社会情報研究所に改組されるにあたって「情報メディア研究資料センター」と改称された。その後、2004 年 4 月、大学院情報学環・学際情報学府と社会情報研究所の統合にともなって、「社会情報研究資料センター」と改称した。センター運営委員会は、この社会情報研究資料センターの運営にあっている。本センターの 2006 度における月別利用者数は、下記の通りである。

表 1-5-1 社会情報研究資料センター月別利用者数 (2006 年度)

(開室日 数)	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月	1 月	2 月	3 月	合計
	20	20	22	21	21	20	21	20	18	19	19	21	
学内	139	144	200	196	112	84	164	210	186	164	69	85	1,753
学外	34	47	67	83	76	87	65	36	59	67	45	64	730
不明	8	2	5	7	2		1	2	3				30
合計	181	193	272	286	190	171	230	248	248	231	114	149	2,513

1.5.19 WEB 発表会運営委員会

WEB 発表会運営委員会では、学際情報学府修士課程学生の修士論文研究進捗を促し、かつ、1 年目終了時点での進捗状況を確認する目的で毎年度 3 月末から翌年度の 4 月にまたがる形で WEB 発表会を開催している。

WEB 発表会は具体的には報告者各自が研究計画・中間報告をウェブページとして提出（アップロード）し、相互に閲覧するオンライン発表会と、実際に口頭で発表するオフライン発表会に分けられる。オンライン発表会の際には相互評価のために投票結果に基づきアイデア賞、進捗賞、プレゼンテーション賞についてそれぞれ金賞、銀賞、銅賞が与えられる。またオフライン発表会の際に参加者は、他者の報告を評価する側に回って、研究について相互に論評することが義務づけられている。

本年度は 2007 年 1 月 23 日に説明会を行い、1 月 30 日に参加登録を締め切った。実際のオフライン発表会は 3 月 23 日をウェブページ提出期限とし、3 月 26 日からオンライン上の閲覧を開始した。オンライン発表会に対する投票は 3 月 30 日が締切であった。当初、オンライン発表会の日程は 4 月 9 日までであったが、新年度に入学する修士 1 年生の参考に供するために、4 月 13 日まで閲覧期間を延長した。

オフライン発表会は新入生進学ガイダンスの翌日、4 月 6 日に工学部 2 号館 92B および 93B 教室で行われた。報告者総数は 82 名、報告者以外の来場者は 61 名であった。

1.5.20 学生・留学生委員会

学生・留学生委員会では、大学院生全般を対象としたサービスに関して、学際情報学府に在籍する大学院生（留学生を含む）の福利厚生に関する以下の業務を担当してきた。

- (1) 大学院生の勉強・研究用スペースの整備、維持
- (2) 大学院生用備品の購入、管理
- (3) 大学院生と教職員スタッフとのコミュニケーションの維持
- (4) 大学院生向け情報の提供
- (5) 大学院生奨学金および研究支援経費関係

これらのうち、(1)については、本郷キャンパス情報学環本部棟4階に加えて、工学部2号館9階に大学院生室を設け、共用の机を配置して提供している。また、駒場キャンパスにおいても、共通研究室において院生の共用机を提供している。ロッカーは年度初めに希望者を募り、本郷および駒場キャンパスで貸与している。

(2)については適宜学生の希望を募り、必要と認められた場合には、共通予算で備品購入をおこなっている。特に今年度は、工学部2号館9階の備品を整備した。

(3)については、年に2～3回、院生向けの連絡会を開催し、情報の相互流通をはかるとともに、年度はじめの新入生歓迎会、留学生懇親会、留学生旅行、年度末の謝恩会を開催している（新入生歓迎会は在校生が、謝恩会は当該年度の修了生が企画実施）。

(4)については、教務関係の情報は上記(3)のルートのほか、適宜掲示板、学務係メールニュースでの情報配信をおこなっている。また、大学院生向けの奨学金・就職・住宅などの情報を、学務係横のスペースで閲覧できるようにしている。

(5)については、各種奨学金の付与に関して希望者を募り、適宜順位付けをして申請している。

留学生を対象としたサービスの現状に関しては、留学生専用の窓口となる部署はないが、学生・留学生委員会、事務部学務係、チューター制度等が機能しており、部局としての留学生の受入体制はほぼ整っていると思われる。2004年度以降、「留学生懇談会」を学環として開催しており、留学生、日本人学生、教職員が交流を図る場をもっている。

次に課題についてであるが、大学院生全般を対象としたサービスに関しては、学際情報学府全体としてスペースが不足していることから、大学院生用のスペースも十分ではない。勉強用の机やロッカーも、大学院生ひとりひとりに充当できていないのが現状である。しかし、工学部2号館9階に院生室を設け、また、情報学環・福武ホール完成後にはかなり改善される。

留学生を対象としたサービスの課題に関しては、今後、留学生数は増加することが予想されるため、対応組織を整備し、留学生全般を対象としたサポート体制、例えば入学時の留学生向けオリエンテーションの開催などを整備していくことが課題となる。特に冬学期から入学してくる留学生に対するガイダンスを加える必要がある。また、他部局には留学生係および留学生担当の専任講師を設置しているところも多い。学府も、これまでの学生・留学生委員会、事務部、チューター制度等のサポートを強化することと同時に、担当部局を設置することも考えていかななくてはならないと思われる。

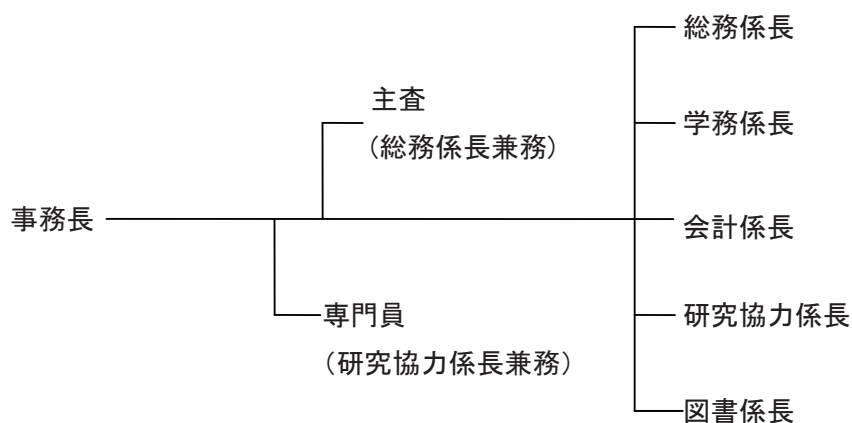
1.5.21 情報学環教育部委員会

大学院情報学環教育部は、平成 16 年 4 月 1 日の社会情報研究所と大学院情報学環の組織統合により、社会情報研究所教育部を大学院情報学環に引き継いだ制度である。教育部の制度は、社会情報研究所の前身である新聞研究所設置（昭和 24 年 5 月）まで遡り、50 年余にわたる歴史をもっている。

設立当初の教育部は、マス・メディアに従事しようとする者の指導養成を目的としていたが、その後の組織改変等にもとない、教育対象の拡大およびカリキュラム内容の拡充を逐次行ってきた。さらに、社会情報研究所教育部から大学院情報学環教育部への移行により、従来の伝統を引き継ぐと同時に、情報全般にかかわる教育研究組織である大学院情報学環・学際情報学府の特色を踏まえ、学際的な情報学に関心を持つ者も研究生として受け入れることとし、それに対応して平成 18 年度には大幅なカリキュラムの拡充・改訂を実施した。

1.6 事務組織

図 1-6-1 事務部組織図(平成18年4月1日現在)



事務長	専門員	主査	係長	主任	係員	計
1	1	1	3	3	6	15

2 教育活動

2.1 概況

学際情報学府の教育は、情報学についての文理相互浸透の学際的カリキュラムとネットワーク型の教員編成による教育指導体制に最大の特色がある。学際情報学という分野が、すでに体系化された学問の修得と継承というよりも、従来の学問体系の組み換えと新しい学問の創生というところに目標を据え、そのような教育を実施しようと考えているからである。

学際性の学問論とネットワーク型の組織を引き継ぎつつ、2004年4月の組織統合にあたって、3コース制が導入された。これは、修士課程学生定員70名という規模に適合するためと、ディシプリンの基礎をもった学際性への教育効果のためと、2つの理由から導入された構成であった。現在は、2006年4月に総合分析情報学コースが設立され、4コースとなっている。

このコース制は設立当初からの学際性の目標と矛盾するものではない。むしろ高水準の学際性を備えた人材を育成するために必要な措置であった。入り口で基礎学力のある優秀な学生を採用するためにコースごとの入試を行い、出口で学力の品質管理をするためにコースごとの修了試験を行う。しか

し、入試における面接でも、修了試験の口述試験でも、学際的な教員構成での審査体勢がとられているし、また入学後の学生はミニマムな選択必修科目のほかは全コースに開かれている多数の自由選択科目群から自分の研究計画と関心に合った科目を選んで、自分の学習メニューを組み上げることが可能となっている。

コースはあくまで学府学生が帰属するより小さな枠組みであり、研究科の専攻のようにそこに決して教員が帰属しているわけではない。教員はあくまで学環に帰属しているのであって、コースとの関わりはどのコースの学生を主として指導するかという点である。コース制は、学生が自らの学問的なアイデンティティを構築しつつ、同時に学際性へと越境していくための、バランスのよい舞台を提供しようとしているのである。

2.2 教育カリキュラム

学際情報学府の授業科目群は、(1) コース共通必修科目、(2) コース別選択必修科目、(3) コース共通選択科目の3つの科目群から構成されている。

第1のコース共通必修科目は、それぞれの学生の指導教員による個別研究指導のほか、学際情報学府の大学院生が、専門分野の視点や立場の違いを越えて、今日の情報学の様々なアプローチについての基礎知識を身につけてもらう「学際情報学概論」が主軸である。この科目には、情報学環のほぼすべての基幹・流動教員が関与し、学生は e-learning システムでの受講も可能な仕組みになっている。同時に、学際情報学府院生には、修士1年ではWeb発表会における修士1年間の研究の成果発表が、修士2年では博士論文中間発表会での発表が、また博士課程では毎年の博士課程コロキウムでの発表が、大学院での必修カリキュラムの一部として課せられている。

第2のコース別選択必修科目は、修士課程の大学院カリキュラムとして設けられている科目群で、それぞれのコースにおいて専門的な研究能力のトレーニングをしていくためのものである。この科目群は、「基礎」の4単位と「研究法」の2単位の6単位から成り、「基礎」は主として、各専門分野の基礎的方法論についてのトレーニング、「研究法」は、そのようにして習得した専門的方法論を生かした実習（調査、制作、実験、政策立案など）が分野に応じたやり方で実施されている。それぞれのコースの院生にとって、一般的に最もエネルギーを割かなくてはならない科目群であり、コースごとの特徴が最も明瞭に示されるカリキュラム編成になっている。

第3の共通選択科目群は、学府を担当しているそれぞれの教員が開講する大学院授業科目であり、形式としては一般的な大学院のゼミ科目と変わらない。但し、学際情報学府の共通選択科目の大きな特徴は、いずれも「情報」や「メディア」を中心的な対象としながらも、情報科学からジャーナリズム論までの幅広い専門家が集まっていることによる横断性にある。すなわち、ここでの共通選択科目には、自己組織情報、アジア情報政策、異文化コミュニケーション、学習環境デザイン、情報行動、映像文化、メディア表現、情報記号、情報倫理、自然言語処理、情報法、ジャーナリズム、ヒューマンインタフェース、数理言語、ユビキタスコンピューティング、知覚情報、ネットワーク経済、歴史情報、シミュレーションシステム、情報造形、視覚情報処理、医療福祉情報、身体情報認知、情報データベースなど、きわめて多様な分野が含まれている。これらの科目は、学際情報学府のカリキュラ

ム編成においては、①情報・言語・行動系科目、②社会・制度系科目、③メディア・文化系科目、④表現・リテラシー系科目、⑤数理・システム系科目の5つの領域に分けられている。

2.3 カリキュラム支援体制

大学院学際情報学府では、上記のカリキュラムを大学院教育の基軸に据えながら、以下のような教育上の支援体制を組織し、運営している。

2.3.1 主指導教員・副指導教員の配置

学際情報学府では、指導教員の個別研究指導に加え、副指導教員による側面からの研究指導という複眼的な指導体制を整えている。情報に関する研究は、専門的であると同時に学際的な性格をもつため、既存の単一の学問分野の知識だけでは適切に対応できないことが多い。学際情報学府では、既存分野の専門的な知識や方法を十分に身につけつつ、それらを複眼的に結びつけて新しい情報研究に挑む若手研究者を効果的に育てるために、従来の指導教員による指導だけでなく、副指導教員を加えた指導体制を採用している。この体制は、これまでもそれぞれの院生の視野を広くし、より柔軟な学問的展開を可能にする点で、有益な効果を挙げてきた。

2.3.2 修士・博士 研究計画書の作成

学際情報学府の大学院生は、修士1年及び博士2年の段階で、自分の研究計画書を作成して学府に提出する。このうち修士1年の段階での研究計画書は、修士論文に向けての対象設定、おおよその研究視角を示す概要的なものであり、提出された計画書は、修士1年生全員がお互いの研究テーマについての認識を共有するための冊子にまとめられる。博士2年での研究計画書は、その学生が博士論文を執筆していくための第一歩となる。

2.3.3 ウェブ発表

ウェブ発表は、学際情報学府修士1年生が、その年度の末から翌年度初めにかけて、それまでの約1年間に進めてきた学習や研究の成果をまとめ、約1年後に提出する修士論文の構想や進捗状況について発表するものである。この発表は、学際情報学府に所属する教員と学生に対して行われるもので、各自が研究の内容・計画をウェブページにまとめて学府サーバに掲載するオンライン発表会と、それを踏まえてポスター発表形式で行うオフライン発表会から成る。

オンライン発表会は年度末から約2週間続くが、発表者は1週間の間に自分以外の発表を閲覧し、アイディアの面白さ・斬新さ、進捗度合い、プレゼンテーションの良さ等の観点から良いと思うものに投票する相互評価を行い、各項目の上位の発表は公表される。

オフライン発表会は新年度に入ってから1日を数セッションに分けて行われ、教員や在学生の他、発表者も自分の発表のないセッションでは聞き役に回り、コメントシートを提出する。

発表者は、このような中間総括と相互評価のプロセスを経ることで、修士論文に向けた残り1年間の研究をより一層充実させるための手がかりを得ることとなる。また、学際情報学府の新入生もオン

ライン発表を閲覧し、オフライン発表会の聞き役となることで、学府における研究の内容や修士論文に向けたプロセスについて具体的なイメージをつかむことができる。

2.3.4 修士論文中間発表会

学際情報学府では、多くの修士2年の学生が修士論文執筆に本格的に取りかかる7月上旬に修士論文中間発表会を開催している。この発表会では、その年度に修士論文を提出するすべての学生が自分の研究の進捗状況を発表しなければならないことになっており、指導教員や福指導教員だけでなく、関連分野の教員や他の学府の大学院生が発表会に参加する。教務委員会は、それぞれの教員のスケジュールを調整して、70名に及ぶ発表者の全体の進行表を作成し、中間発表会全体を組織する。この発表会には、学府の院生は誰でも参加することができるので、修士1年の院生たちにとっては、先輩たちがどのような研究を進めているのかについて広く知る貴重な機会となっている。

2.3.5 博士課程コロキウム

学際情報学府では、博士課程に在籍している学生を対象に、毎年11月上旬に博士課程コロキウムを開催している。このコロキウムでは、博士課程3年までに在籍しているすべての学生が、博士論文執筆に向けての研究の進捗状況を発表しなければならない。教務委員会は、それぞれの教員のスケジュールを調整して、70名に及ぶ発表者の全体の進行表を作成し、博士課程コロキウム全体を組織する。このコロキウムには、学府の院生は誰でも参加することができるので、博士課程の学生たちにとっては、他の学生たちがどのような研究を進めているのかについて広く知る貴重な機会となっている。

2.3.6 E-learning 授業 (iii online)

2.3.6.1 iii online の目標

iii online は2002年4月に始まった学際情報学府のeラーニングサイトである。iii online は、学部・研究科レベルでは東京大学初のeラーニングサービスである。

iii online は3つの目標をかかげてスタートした。社会人大学院生の学習機会の確保・大学院の情報公開・学習過程の透明化と改善である。そのうちの2つの目標については、次のとおりである。

1) 社会人大学院生の学習機会の確保

eラーニングを始めた最大の理由が、社会人大学院生の学習機会の確保である。

学際情報学府は独立大学院であるために、多種多様な学生が集まっている。2003年度までは、実践情報学コースという社会人学生をターゲットとしたコースが設けられており（現在は、社会人特別選抜枠に変更）、マスコミ関係者やシステムエンジニアなど、学生の2割から3割が社会人という状況であった。

学際情報学府に入学する社会人は、銀行や製造業につとめている一般的な社会人に比べ、比較的時間に自由がきく代わりに、忙しくなる時期とそうでない時期が交互にやってくる。たとえば、広告代理店に勤めている場合、コマースの撮影などで1ヶ月間は仕事が超過密スケジュールで入るが、企画段階ではそれほど時間に制約がないという状態である。

このような状況では、講義に毎回出席することは難しくなる。iii online が始まる前は、出席しなければ自動的に欠席になり、全く講義の情報が手に入らない状態であった。2回、3回と欠席が続けば、当然講義の理解に影響が現れてくるので、教育水準の確保上、大きな問題となっていた。

通常社会人向けの大学院では授業を夜間に開講することによって、この問題を解決している。しかし、フルタイムの学生は昼間に授業が開講されることを望んでおり、学際情報学府で授業を夜間に持ってくることは、非現実的だった。

そこで、教務委員会で話にでたのが、授業を撮影してオンデマンド配信するという現在の iii online のプランである。

2) 大学院の情報公開

情報学環では様々な研究プロジェクトを通じて大学と社会の連携を実現してきている。メディア表現・学びとリテラシーに関する MELL プロジェクト、日本科学未来館との連携、大井町の地域活性化などがその代表的な事例である。これらのプロジェクトでは、アプローチや領域は違っても、大学の知を公開するだけではなく、社会の中で再定義し大学と社会の新しい関係を築きあげていくという側面を共通して持っている。

iii online は、学習サービスの提供であるとともに、こうした社会連携型研究プロジェクトの一種でもある。iii online が大学院生向けの閉じた学習サービスではなく、可能な限り一般公開するという方針になったのは、情報学環が持っているこのような大学と社会に対する基本的なスタンスが反映しているからである。

2.3.6.2 iii online の概要

さて、この3つの目標をもとに設計された iii online の概要を説明しよう。iii online のシステムはメディア教育開発センターのチームが開発したものであり、後に eXcampus というオープンソース(誰でも無料で自由に改変して使える)ソフトウェアになったものである。(http://www.excampus.org) iii online は、大きくゲスト向けのサービスと、学生向けのサービスに分けることができる。

ゲスト向けサービス



図 2-3-1 : iii online ゲスト向けの画面

ゲスト向けの画面は、青色をベースにデザインされており、この画面では登録なしで授業を閲覧することができるようになっている。

ビデオのアイコンを押すと、およそ 15 分×6 つにカットされた授業の映像を見ることができる。ストリーミングは Real 形式 300kbps エンコーディングで行っている。Real 形式を選んだのは、利用者として Windows ユーザー、Mac ユーザー、Linux ユーザーが混在しているからであり、エンコーディングレートは、ブロードバンドで十分スピードがでない場合でも対応できるという観点から設定してある。

15分にカットしたのは、90分の映像を一気に見るのは大変だからである。利用者アンケートからも、朝 30 分、会社の休憩時間に 30 分、夜帰ってから 30 分見ると行ったような分割視聴が日常的に行われていることが明らかになっている。

ビデオは、パワーポイント連動型ではなく、カメラで撮影したものをそのまま流している。理由はパワーポイントを使う授業スタイルを教員に押しつけるのは良くないと判断したからである。OHP を使う人もいれば、ホワイトボードの方がインタラクティブにできるという教員もいる。そういう多様な授業スタイルを認めなければ、e ラーニングを導入すると、かえって授業がやりにくくなるということになりかねない。日常的に e ラーニングを展開する場合には、「e ラーニングだから」といった制約条件を減らすことが重要である。

データのアイコンを押すと、授業の資料を見ることができる。資料はすべて PDF ファイル形式にしてある。これも前述の通りユーザー側が多様な環境にいるためである。

アンケート調査では、実際に利用するときには、この PDF ファイルを印刷し、それをノートとして

使いながら授業を聞いている。

配信年	講義名	授業者
2002	自然言語処理論	辻井 潤一
	コミュニケーション・システム	原島 博
	メディア表現論	水越伸
	情報政策論	浜田純一
	学際情報学概論	各教官
2003	情報リテラシー論	山内 祐平
	情報記号論	石田 英敬
	情報進化論	佐倉 統
	シミュレーション・システム	荒川 忠一
2004	学際情報学概論	各教官
	文化・人間情報学基礎	水越伸・山内祐平
	医療福祉情報学	山本 隆一
	社会情報システム	松浦幹太
2005	学際情報学概論	各教官
	ネットワーク経済論 II	田中秀幸
	学際理数情報学概論 VI	鈴木高宏

表 2-3-1 : iii online で閲覧可能な授業の一覧

ゲスト向けサービスでは、著作権処理ができていないもの、学生の発表など授業に影響がでると考えられるもの、教員が公開しない方がよいと判断したものをのぞいてすべての授業映像を見ることができる。



図 2-3-2 : iii online 学生向けの画面

iii online の学生向けサービスは、赤色をベースとしてデザインされている。登録したユーザーIDとパスワードを入れることによって、このサービスを利用することができる。

学生向けサービスは、ゲスト向けサービスのすべての機能に加え、学生向けだけに公開される授業や資料の情報と掲示板サービスを利用することができる。

掲示板は、授業によってさまざまな方法で利用されているが、図 2 に示したのは、2004 年夏学期に行われた文化・人間情報学基礎という演習形式の授業で利用された例である。この授業は、コミュニケーションと教育領域の古典的研究者 6 名に関する文献購読の授業であり、1 週目に担当のグループが発表を行い、それを受けて、残りのグループがオンライン上でディスカッションをしながら、その研究者に関する疑問を掘り下げていき、その成果を 2 週目に発表するというサイクルで構成されている。

学生は基本的に e ラーニングと通常の授業を好きに組み合わせて利用することができる。仕事の都合でほとんど全回 e ラーニングで受講する学生もいれば、2、3 回だけ e ラーニングで受講する学生もいる。

2.3.6.3 iii online の評価

利用動向を確認するために、2002 年夏学期授業終了後に、iii online に利用者登録した全学生（大学院生） 130 名に対してアンケート調査を実施した。有効回答数は 62（有効回答率 47.7%）であった。このうち社会人学生の回答者は 16 名（有効回答数に占める割合 25.8%）である。

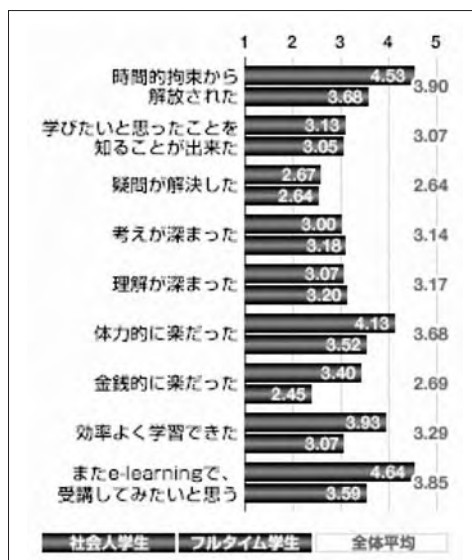


図 2-3-3 : iii online のメリット

iii online のメリットは「時間的拘束からの解放」、「体力的に楽であること」、そして「効率のよい学習」である。社会人学生にとくにこの傾向が強くみられたことが特徴的である。特に e-learning で受講してみたいという総合評価項目では、5 段階スケールで 4.64 という好成績をマークしている。

この調査から、iii online が当所の目的としていた「社会人大学院生の学習機会」という目標はほぼ達成できているものと考えられる。

iii online は 2002 年 4 月に運用を開始したが、ほぼ 1 年たった 2 月 20 日現在で、稼働実績を集計したものが以下の表である。

ヒット数	107 万ヒット
利用者数	のべ 46347 人
映像配信時間	5474 時間
学外からのアクセス率	93.5%

表 2-3-2 : 2002 年度の稼働実績

サーバのアクセスログと、同時期におこなった外部からの利用者へのアンケート調査を照らし合わせると、興味深いことが明らかになってきた。授業によって人気・不人気があるのだが、各授業に数百人の外部利用者がついており、数としては、1) 40代の社会人男性 2) 30代子育て中の主婦 3) 受験を考えている大学院生予備軍 がベスト3になった。このことから、iii online は、新しいオンラインコミュニティを開拓することに成功したといえるだろう。大学院の情報公開としては一定の成果を確認することができた。

2.3.7 ソウル大学大学院との大学院国際共同演習授業

学際情報学府では、大学院授業の一環として、ソウル大学との間でインターネット回線とビデオ会議システムを用いた日韓国際協同演習授業—East Asia Media Study を実施している。これは、これまでの東京大学社会情報研究所とソウル大学言論情報研究所との長年の学術交流を基礎に、双方の会場をビデオ会議システムでつなぎ、両大学の教員、大学院生が、毎週、越境的に議論を重ねる授業をしていこうという試みで、8週間から11週間にわたり継続的に授業を行ってきている。また、授業のうちの1回は、毎年開催されるソウル大—東大合同シンポジウムに接続する形で、ソウル大学でゼミ生が一堂に会し、合同授業が行われている。

授業の進め方としては、両大学をビデオ会議でつなぎ、毎回、それぞれの大学から講師が報告をし、院生が参加した討論で進行させている。原則として英語の教材を使うが、講義は英語、日本語、韓国語で行われる。担当講師や大学院生たちの発表を通じて、日本と韓国から見た東アジアのメディアと文化、政治、社会の変化に対する認識を共有、討論している。

初年度の平成17年度は、情報学環本館6階実験室を使い、東アジアの構造変動の中で行われる日本、韓国のメディアと文化政治の変化に対して理論的、実証的に探求することを目的として、双方の大学の教員の講義を中心に授業を行った。東アジアの人々がどのように閉鎖的な民族主義から抜け出し、自己中心的な理解を越えて人間らしい社会共同体を目指して連帯できるのかということ、メディアと文化政治の歴史のおよび共時的観点から学び、探求した。

平成18年度は、工学部2号館9階の教室を使用し、ビデオ会議システムの性能も向上して各回支障なく授業運営をすることができた。また、授業専用のBBSを設けることによって、事前情報や知識の共有、学生同士のオンライン上の交流もスムーズに行き、授業の運営の円滑化は格段に進んだ。

同年度の授業では、前半は、ソウル大側と東大側の教員の講義を中心とし、各講義後にディスカッションを行なった。授業の後半では、ソウル大大学院生と東大大学院生の混合グループを編成し、各グループがオンライン上でディスカッションしながら、共同研究計画書をつくり、発表する時間に充てた。各グループのテーマは、「公共圏」「大衆文化」「文化政治の歴史認識」「社会と技術」であった。授業には、英語、日本語、韓国語が使われ、活発な討議の中から日本と韓国から見た東アジアのメディアと文化、政治、社会の変化に対する認識を共有することができたと言えよう。

2.4 学際情報学府への進学

2000年度に設立されて以来、2003年度まで、大学院学際情報学府は毎年、修士課程約50人、博

士課程約 20 人の大学院生を受け入れてきた。2004 年度の社会情報研究所との合併により、それまで人文社会系研究科社会情報学専門分野の定員であった修士課程 14 人、博士課程 7 人が統合され、2006 年度からは総合分析情報学コースが新設されたため、学際情報学府の入学定員はさらに拡大し、現在では修士課程定員が 85 人、博士課程定員が 36 人となっている（詳しくは巻末資料参照）。

その結果、学際情報学府に在籍する大学院生数は、2000 年度の修士 52 人（修士）から出発して、01 年度が 102 人（修士）、02 年度が 139 人（修士 113 人、博士 26 人）、03 年度が 169 人（修士 128 人、博士 41 人）、04 年度が 205 人（修士 136 人、博士 69 人）、05 年度が 234 人（修士 151 人、博士 83 人）、06 年度が 279 人（修士 166 人、博士 113 人）と増加し続けてきた。現在、東京大学のなかで大学院情報学環・学際情報学府は、大学院生数においては教育学研究科、経済学研究科などとほぼ同じ規模の組織となっている。

また、本学際情報学府の大学院生の構成についてみると、(1) 東京大学以外の他大学出身者の割合が高いこと、(2) 実践的キャリアを持つ人々や第一線で活動している社会人の割合が高いこと、(3) 外国人学生の割合が相対的に高いこと、(4) 入学者の男女比も、約 6 : 4（全体の 40%程度が女性）と均衡がとれていることなど、きわめてハイブリッドな特徴がみられる。これらの特徴は、本学府が学生の構成という面からみても東京大学のなかできわめて新しい可能性をもった大学院組織であることを示している。

本学府への志願者についてみると、社会情報研究所との合併後の最近 2 年間では、修士課程の受入予定人員 70 人に対し、2005 年度入学試験が志願者 178 人（2.54 倍）、06 年度入学試験が 225 人（2.65 倍）と、ほぼ 3 倍の競争率になる志願者が応募している。しかも合併後では、本大学院への志願者が増加傾向にあり、今日、大学院重点化のなかで大学院生数の枠が急速に広がったために大学院入試への競争倍率が低下してきている全般的な傾向からすれば、顕著に異なる人気の高さを保っている。

2.5 修士論文及び博士論文の執筆

学際情報学府の修了者数は、修士修了者では、2001 年度が 38 人、02 年度が 40 人、03 年度が 51 人、04 年度が 57 人、05 年度が 62 人と徐々に増え、06 年度は 59 人となり、毎年約 60 人程度の修士修了者を輩出している。

また、博士課程の修了者についてみるならば、学際情報学府では、設立されたのが 2000 年度なので、最初の入学者が博士 3 年に達する 2004 年度に初めて 4 人の博士号取得者を輩出することになった。05 年度は 1 名だったが、06 年度は 7 人の博士号取得者を輩出するに至っている。

大学院学際情報学府では、新しい学生が修士課程に入学した段階から、入学ガイダンスでの丁寧な指導、M2 の先輩たちによる Web 発表会への参加、主指導・副指導教員体制、修士課程研究計画書の提出、基礎演習および研究法授業、Web 発表会の実施、修士論文中間発表会というように、修士論文完成に至る個々の段階で学生の研究をサポートしていく体制が完備している。また、博士課程進学後も、博士課程研究計画書や博士課程コロキウムの実施、主指導・副指導による指導というように日本の大学院教育としては珍しいほどに修士論文、博士論文の執筆をサポートする体制を整えている。このような体制のなかで、これまで多様な分野の専門的な修士論文、博士論文が書かれてき

ており、その一例は、別表のようなリストに示される。

(別表)

06年度修士論文タイトル

- 衣服の収集と選択の構造 – 3名の女性の事例的分析 –
- 物・環境に特定の行為を記述する – ヒトはどのようにマッチを着火するのか? –
- 環境問題の中の「将来世代」 – For Future Generations と思っているのは誰? –
- 悪影響論に隠されたオンラインゲームプレイヤーの実像
- オンラインコミュニティにおける非言語情報を用いた「気づき」の促進
- 研究者主導臨床研究におけるリマインダ導入に関する研究
- 人材情報の「可視化」実現アプローチに関する考察
- テレビにおけるリアリティの変容に関する歴史的分析 – テレビ・ドキュメンタリーの〈理念〉と〈技巧〉 –
- 長崎原爆被災をめぐる記憶の政治学 – 〈語り部〉運動のエスノグラフィーを手がかりに –
- 新聞の脱構築と再構成 – 神奈川、鹿児島、滋賀の事例を中心に –
- ジャーナリズムとしての写真週刊誌 – 1980年代における写真週刊誌の社会学的分析 –
- 女性ファッション誌にみる恋愛に関する言説と表象の歴史的分析
- コンテンツ政策における市場と非市場
- Intangibles and Economic Value Creation(無形資産と経済価値の創造)
- 戦間期の「ニューヨーク・タイムス」における風刺漫画の変遷 – 「敵国」に対するネガティブ・イメージの形成 –
- “Sex And The City”と東京の「働く女」たち – 海外ドラマオーディエンスの文化社会的エスノグラフィー
- ブラジル大統領選挙における寡占メディア「グローボ」の役割
- 1960年代における〈能力〉の成立 – 戦後日本における大学・知・社会 –
- 出版流通のメディアエーション – 近代日本の購書構造 –
- 世論と表象のポリティクス – 戦後デモクラシーにおける世論の制度史
- 地方における多様な情報メディアの役割について – 熊本市の主婦にとってのフリーペーパーと新聞の関係から –
- 岩波文庫の読書空間 – 「教養」と文庫本のメディア史的考察 –
- 自治体経営における官と民の情報共有
- 紙上の討議 – 「論壇」の知識社会学
- 携帯電話産業における政策環境とビジネスモデルに関する日中比較
- 中国都市テレビ局の「新型」方言ニュースに関する研究 – 脱政治化と〈政治的なるもの〉の間
- ヒップホップ・カルチャーにおける女性たちの抵抗 – 侮蔑語を手がかりとして –
- 発達システム論 – Gilbert Gottlieb の実験と理論的展開から –

- 墓と記憶 ー掃苔文化から見る墓の文化史ー
- 到達運動におけるマイクロスリップの定量的研究
- モバイルコンテンツのための映像表現の研究
- テレビの風刺力 ーサラリーマンNEOの視聴者分析から見るメディア論的考ー
- 研究室所蔵書籍を介したコミュニティ参入支援システムの開発と評価
- 「バックラッシュ」の機能分析 ー〈ジェンダーフリー問題〉の構築をもとにー
- 人工光を用いた実空間における新しい表現手法ー光をあやつり・たわむれるー
- 「素人の乱」のエスノグラフィー ーフリーターの意識と運動の可能性ー
- Webを用いた科学コミュニケーションの手法の研究
- 大学一般教養における「情報学」の研究 ー情報の意味作用を中心としてー
- 『女学世界』と読者の歴史文化的研究 ー読者欄の投書分析にみるコミュニケーションと雑誌受容ー
- 帰国子女の言語習得に関する要因についての考察 ー漢字学習に関しての生態学的視点からの一試論ー
- 幼児の物語行為を支援する学習システムの開発
- 好かれる「科学」とは何か? ー「脳科学者・茂木健一郎」の評価分析を手がかりにー
- 生命記号論における記号双対性とシステム概念
- 認知プロセスを考慮した情報コンテンツデザインの研究
- 学習を目標としたワークショップのデザイン過程に関する研究
- ハイブリッド流 ー多文化共生社会に向けたエスニック・メディアの再考と提言ー
- 合体型人工生命の行動生成に関する研究
- 輪郭形状の階層的多角形近似による高速クラス絞り込み
- 実物体のひずみ計測に基づくユーザインターフェースの研究
- 映像の中に機械制御情報を埋め込む空間分割型可視光通信の研究
- アスペクト指向技術とSNMPによるコンポーネント稼動状態測定フレームワーク
- 図書館のレファレンスサービス業務分析に基づく対話型情報探索支援システムの設計
- 音響の積極的聴取をうながす参加型インタラクティブアートに関する研究
- 確率モデルを用いた前景抽出とその三次元形状復元への応用
- コンピュータグラフィックスにおける泡表現に関する研究
- 非同期な処理の時系列の記述に適した言語の構築
- 筋骨格構造をもったスーパー・ダイナミック・ロボットの開発
- 消極的インタラクションロボットの提案
- 類似文字検索方法に関する研究とその作文支援への応用

2.6 学際情報学府からの就職・進学動向

修士課程修了者のうち、博士課程進学者は全修了者の35～40%程度である。したがって、修士課程

を修了した者の6割以上が就職することになる。一般に、理系では修士修了後に就職をするケースが多く、文系では博士課程に進学するケースが多いが、文理相互浸透の大学院組織である学際情報学府は、ちょうどその中間的な割合を示しているといえる。修士修了者の就職先は別表の通りであり（別表 修士修了者の進路状況）、シンクタンク、マスコミ、情報通信およびコンピュータ関連企業、出版社など知識集約型の企業への就職が多数を占めているところが特徴的である。

2.7 学際情報学府以外の教育活動

大学院情報学環では、大学院教育組織である学際情報学府と密接に連携しながら、コンテンツ創造、教育部及びベネッセ寄附講座でも教育活動を行っている。

2.7.1 教育部

教育部では、大学2年次以上の在学者及び大学卒業者の中から、将来、新聞、放送、出版などジャーナリズムの諸分野で活動することを志す者、あるいはマス・メディア、コミュニケーション及び社会情報現象、さらには学際的な情報学の学問的研究に関心を持っている者を毎年50名程度研究生として受け入れ、一定のカリキュラムのもとに、修業年限3年で基礎的な専門教育を実施し、修了に必要な単位を修得した者には修了証書を授与している。

この種の専門教育は、他大学では、独立の学部・学科を設けている例が少なくない。しかし、本学では、上述の希望をもつ学生諸君は、それぞれの所属する学部・学科で、各自の専攻する学問分野の専門知識を修得するとともに、これと並行して情報に関する基礎的素養を身につけることが望ましいとの考えから、本学環に課外授業のかたちで教育部研究生制度が設けられている。そのため、研究生に対する講義は、各学部や大学院の講義時間とできるだけ重ならないようにするため、夕刻から夜間にかけて開講される（15:15-16:55、17:05-18:45、18:55-20:35の3限）。

主な授業科目には、社会情報学基礎Ⅰ～Ⅸ、文化・人間情報学基礎Ⅰ～Ⅸ、学際理数情報学基礎A～Ⅰ、実践メディア産業論Ⅰ～Ⅸ、実践情報社会論Ⅰ～Ⅲ、特別演習Ⅰ～Ⅲ、特別講義Ⅰ～Ⅲ、自主学习、などがあり、原則として全ての科目が毎年開講されることとなっている。

教育部に在籍した研究生の進路は、相当数がジャーナリズム関係の職業を選んでいるほか、一般の会社官庁関係に就職する者も多く、また大学院進学により教育研究職を目指す者も少なくない。

参考として平成18年度開講科目を以下に示す。

(夏学期)

	4限 15:15～16:55	5限 17:05～18:45	6限 18:55～20:35
月		学際理数情報学基礎A	文化・人間学基礎Ⅲ (情報教育論)
火			
水	文化・人間学基礎Ⅰ (メディア文化論)	文化・人間学基礎Ⅱ (生命科学と情報)	実践メディア産業論Ⅰ (新聞論)
木			実践メディア産業論Ⅲ (広告論)
金			実践メディア産業論Ⅱ (放送論)

(冬学期)

	4限 15:15～16:55	5限 17:05～18:45	6限 18:55～20:35
月	社会情報学基礎Ⅲ (世論研究概論)	実践情報社会論 (ゲームコンテンツ論)	
火	社会情報学基礎Ⅱ (情報経済論)	特別演習Ⅰ	
水	学際理数情報学基礎B		
木	社会情報学基礎Ⅰ (情報コミュニケーション 論)		
金			

なお、2001年から2006年までの教育部志願者数、受験者数、合格者数については巻末参考資料を参照していただきたい。

2.7.2 コンテンツ創造科学産学連携教育プログラム

コンテンツ創造科学の目的

欧米諸国ではコンテンツは文化資源としてだけでなく経済資源としても重視され、20世紀初頭から国家戦略としてこの分野の人材育成が実施されていた。21世紀に入り、アジア諸国でも成長分野としてのコンテンツ産業振興を国家目標と掲げるなどして人材育成に注力している例も数多い。これらの国が高等教育機関から専門学校まで幅広い人材を育成しているのに対し、わが国では専門学校に

おけるクリエイター育成がほとんどであった。その結果、比較的国際競争力を持っていたわが国のアニメーションとゲームも、人材育成に力を入れている他の国々に激しく追い上げられている。このような世界状況の中で、先端デジタル技術の知識を有し、国際競争力を持つ創造的コンテンツを制作し流通させる修士レベルの人材育成はわが国にとって急務である。

特に、デジタルコンテンツ分野においては、近年の情報技術の革新と連動して、作品制作における技術の比重が以前に比べて格段に高くなってきている。このため、製作者・監督者の両者において、通常のコンテンツ制作における知識のみならず技術に通暁することが強く求められてきている。また、同時に、新たな表現技術の研究開発を担う技術者の側においても、作品制作の現場における諸事情に通暁し、技術開発と作品制作の間の架け橋となることが求められている。これらの状況を総合的に評価した結果、人材養成の対象としては大きく①プロデューサー、②技術開発者の2者を掲げてはいるが、その間に広がる広範なスペクトルを包含する人材層を養成することを想定している。その結果として得られる、従来にない種類の人材は、日本のコンテンツ産業の水準の牽引と国際競争力の強化に大きく寄与するものと考えている。

特に、人材養成の推進により、高次の知識を有する専門家を体系的に産業界に供給することを可能とし、従来は希薄であったコンテンツ産業界と高等教育機関、さらには学会との連携の強化が実現される。同時に、これらの人材育成を行う際の教育プログラムの規範を提供できる。来日してアニメーションやゲームについて学ぶことを希望する者が多いため、海外から優れた人材が集結する国際的拠点の形成に発展しうるだろう。

養成の対象となる人材

本教育プログラムでは、3種の人材の養成を目的としている。各々の人材養成において想定する到達レベルは以下のようになっている。

- プロデューサー**： 先端技術と国際的なコンテンツビジネスの高度な専門知識を有し、実社会で研究成果を活用できる人材。
- 指導的教育者**： デジタルコンテンツ創造に関する高度な人材育成プログラムを構築できる教育者
- 技術開発者**： 表現手法に詳しく、エンターテインメント技術の研究開発をクリエイターと共に行える技術開発者。

人材養成における手法の独自性に関して

「わが国に欠落している人材の養成：プロデューサー」

国際競争力があるわが国のコンテンツが国際市場から評価に見合った経済的報償を得る機会を逃していることが少なくないのは、国際的なビジネス・スキームを組めないためである。本プログラムでは、国際的ビジネスの知見と、先端的な技術に関する知見をもったプロデューサーを養成することで、日本のコンテンツ産業の国際競争力を強化する。

「わが国に欠落している人材の養成：指導的教育者」

わが国にはクリエイター養成機関が多数存在するが、教育者そのものを育成する機関が存在しないため、教育も経験による属人的なものになっているのが実状である。そのため、本分野では教育者が絶対的に不足している。本プログラムでは、コンテンツ創造の人材育成で指導的な立場に立つ教育者を育成することで、日本における教育水準を向上させる。

「わが国に欠落している人材の養成：技術開発者」

国際競争力をもっていたわが国のアニメーションやゲームが守勢にあるのも、制作技術の開発の立ち後れに原因がある。コンテンツ産業の知見を有した先端的エンターテインメント技術を研究開発できる技術開発者の育成が急務である。

「自然科学と人文・社会科学との融合」

東京大学では早くからデジタルコンテンツ創造に関する教育プログラムの実現に向けて検討を重ね、産業界の協力を得て「コンテンツビジネス概論」、「メディアビジネス概論」（共に浜野保樹）、「ゲームデザイン&エンジニア論」（馬場章）などの講義を実施し、『表現のビジネス：コンテンツ制作論』（浜野保樹著）、『CG入門』（河口洋一郎著）、『記憶のゆくたて：デジタル・アーカイブの文化経済』（武邑光裕著）などの教科書を作成した。また、コンテンツ創造の競争力を向上させるためには、自然科学と人文・社会科学との融合が不可欠であることを考慮すると、人材養成機関には先端的研究の裏づけが必須である。東京大学では、コンテンツ創造に活用できる映像処理技術やバーチャルリアリティー技術やアーカイブ技術など、多くの技術開発を行い、技術者養成で実績がある。

「高等教育機関と産業界との連携」

スタジオジブリには「東小金井村塾」、プロダクション I G には押井守氏による「押井塾」などがあり、自主的な人材育成が既に実施されている。その成果が『千と千尋の神隠し』や『攻殻機動隊』の国際的成功につながっている。コンテンツ分野では、実践現場における知識が重要であるため、このような試みで既に成果をあげている専門家と連携し、広範に教育を行うことで、より実践的な人材育成が行える。また、コンテンツ産業は東京に集中するため、産業界の協力を得て継続的に先端的人材育成を行うためには東京に立地している必要がある。

「人材養成のモデル」

国際的な成功を収めたコンテンツ業界の経験知と、東京大学の技術者教育の経験を科学的に融合させ、体系的に整理した本プログラムのカリキュラムは、コンテンツ人材の育成モデルとなる。

「非ハリウッド型人材育成」

コンテンツ人材養成はハリウッドの手法を流用することが多いが、ハリウッド・モデルは表現の多様性を阻害する方向に向かうことが多い。本プロジェクトでは表現の多様性を担保するわが国のコンテンツ産業が培ってきた技法やモデルに準拠しつつ、国際的に通用する実務知識を有する人材育成を行う。

国内外の類似事例との対比

● 国内

わが国におけるこの分野の人材育成は、専門学校によるクリエイター育成が中心である。プロデューサー養成としては教育特区構想の一環としてデジタルハリウッドが、株式会社の専門職大学院としてあげられるが、Webなどの小規模作品制作のプロデューサーとディレクターの育成が主眼である。大学としてデジタルコンテンツの関連学科を持つのは、東京工芸大学芸術学部アニメーション学科や大阪電気通信大学情報工学部デジタルゲーム学科などであるが、やはりクリエイター養成が目的である。

関連大学院として、東京大学情報学環と東京大学新領域創成科学研究科メディア環境学分野が内容的に最も近く、両者ともにプロデューサー養成を目的の一つとしている。これらの知見が活かされ、産業界との連携において拡張したものが本教育プログラムである。

その他、本学におけるメディアコンテンツに関する学部教育として、平成18年度冬学期より学部横断型教育プログラムが開始された。また、東京藝術大学、九州大学、立命館大学、慶応義塾大学、早稲田大学においても、本分野に力を入れてきている。

● 国外

海外では Film School と呼ばれる映画大学でデジタルコンテンツの教育が行われている事例が多く、先進諸国では、フェミス（仏）、BFI（英）、SFI（スウェーデン）、北京映画学院（中国）、北京广播学院动画学院（中国）、国立芸術学院映画演劇学科（台湾）といった国立の映画大学が存在する。米国でも政府の連邦政府資金が入った大学院大学AFIが存在する。先進諸国で国立の映画学校をもたないのはわが国のみである。

しかし、これらはクリエイター養成機関であって、デジタルコンテンツのプロデューサー育成を行っているのは、米国のエンターテインメントに関するMBAコースである。これらと技術に関する研究開発を併せ持つ機関は、南カリフォルニア大学（USC）だけである。既にUSC映画・テレビ学部長とも包括的な情報交換を定期的に行うことで合意しているが、USCはあくまでもハリウッド・

モデルを前提としたものであり、本教育プログラムは日本型モデルを志向している点で大きく異なる。

コンテンツ教育の実施

本教育プログラムでは、東京大学の修士課程在籍者あるいはそれと同等以上の学力水準を持つ者を対象として、毎年40名程度を目標に選抜試験を実施している。平成18年度は82名の応募者のうち33名を履修生として認定、平成16年度、17年度に認定した履修生とあわせて97名に対し授業を実施した。

我々は、マネージメント能力と工学的知見を兼ね備えた人材の養成を目指している。そのため、コンテンツ分野間でのバランスを保持した履修を促すために、カリキュラムを構成する科目群は、習得すべき知識・スキルに基づき4つの科目群に分けられている。さらに、被養成者自らが描くキャリアプランに合わせた柔軟な履修選択ができるよう、講義の選択に一定の幅を設けた。科目群とその履修における制約は以下の通りである。

- (1) デジタルコンテンツ創造科学講義は、デジタルコンテンツ創造のための基礎理論や基礎知識に関する授業を主として講義形式で行うものであり、3科目（6単位）以上を履修する。
- (2) エンタテインメントテクノロジー研究は、デジタルコンテンツ創造のための科学的先端技術に関する授業を講義あるいは演習形式で行うもので、2科目（4単位）以上を履修する。
- (3) デジタルコンテンツ創造科学特論は、コンテンツタイプごとに作品批評や製作現場における実践的な問題に関する授業を講義あるいは演習形式で行うもので、2科目（4単位）以上を履修する。
- (4) デジタルコンテンツ創造科学演習は、産業界におけるインターンシップあるいは学内で製作・マーケティングシミュレーションや研究指導（論文作成）を行うもので1科目（6単位）を履修する。

「デジタルコンテンツ創造科学講義」、「エンタテインメントテクノロジー研究」では、コンテンツ製作におけるマネージメントや技術に関する知識を習得し、「デジタルコンテンツ創造科学特論」では表現様式ごとに固有な知識やスキルを習得することを目的としている。そして、「デジタルコンテンツ創造科学演習」では、上記の授業で習得した知識・スキルをインターンシップや製作・マーケティングシミュレーションなどの実践的演習を通して内在化することを目的としている。なお、本教育プログラムでは、大学院情報学環の他、大学院新領域創造科学研究科、大学院情報理工学系研究科、大学院人文社会系研究科、工学系研究科、国際・産学共同研究センター、先端科学技術研究センターに所属する教員、ならびに、産業界から国際的な業績をあげている専門家の協力を得て被養成者の選考、授業の実施およびカリキュラム開発を実施している。また、企業からはインターンシップの受入を通じた協力も得ている。

参考として平成18年度開講科目を以下に示す。

科目区分	科目名・タイトル名	学期	曜日・時限	単位	修了要件
デジタル コンテンツ 創造科学 講義	コンテンツ制作理論	夏	水・4	2	3科目 (6単位)以 上
	コンテンツ制作技術論	夏	月・5	2	
	コンテンツ法務	冬	木・6	2	
	コンテンツ財務	夏	水・6	2	
	コンテンツ文化史	冬	水・6	2	
エンタテイ ンメントテク ノロジー研 究	コンピュータグラフィックス	夏	木・2	2	2科目 (4単位)以 上
	コンテンツデザイン	夏	木・1	2	
	デジタル映像処理	夏	木・3	2	
	コンテンツ知覚心理	夏	木・3	2	
	制作展プロデュース	通年(隔週)	火・6	2	
	インターフェースデザイン	夏	水・5	2	
	先端科学技術と芸術表現	冬	水・2	2	
デジタル コンテンツ 創造科学 演習	インターンシップ	通年	随時	6	1科目 (6単位)
	製作・マーケティングシミュレーション: ゲームプロデュースゼミ	通年	火・6・7	6	
	製作・マーケティングシミュレーション: アニメ・映像企画ゼミ	通年	火・5	6	
	製作・マーケティングシミュレーション: 検索技術と情報ビジネスゼミ	通年	集中	6	
	論文作成	通年	随時	6	
	デジタル コンテンツ 創造科学 特論	作品研究	通年(隔週)	夏・木・5/冬・水・5	
アニメーション制作の理論と実践	通年(隔週)	夏・木・5/冬・水・5	2		
ゲームプロデューサー論(a)	夏	月・6	2		
ゲームプロデューサー論(b)	冬	月・6	2		
映画産業論	冬	土・4	2		
デジタルメディア	冬	木・5	2		
修了要件単位数(修了に必要な総単位数)					20単位

修了者の認定

修了認定は、各科目群の必要単位数を満たし、かつ、その合計が20単位以上の被養成者を対象に行われる。平成19年3月3日に行なわれた修了判定会議では、被養成者の取得単位数および履修状況などから総合的に判断した結果、平成18年度修了者として26名が認定された。なお、平成17年度修了者12名とあわせると、38名の修了者がゲーム開発企業、アニメーション制作企業、放送

局、広告代理店などのコンテンツ業界に就職、あるいは本学に引き続き在籍し、技術開発者あるいは教育的指導者となるべく研究活動に従事している。

2.7.3 ベネッセ先端教育技術学講座（寄附講座）

ベネッセ先端教育技術学講座（3.2.2を参照）では、教育活動として以下の2点に力を入れている。

・学際情報学府の教育活動との有機的連携

Beatで行われている研究プロジェクトに対する学際情報学府の大学院生の参加を奨励し、研究プロジェクトがそのままプロジェクト学習の基盤になるような工夫をしている。(Monogatari, おやこ de サイエンスなど、全プロジェクトに大学院生が関与している。)その中で特に研究プロジェクトに関心を持った学生については、研究プロジェクトの中で修士研究を行うなどの配慮をすることにより、先端教育技術に関する教育活動の拠点になっている。

・公開講座による社会還元的教育活動

一般社会に対して、先端教育技術に関する知見やノウハウの教育活動を行うため、月1回のペースで公開研究会 beat セミナーを開催している。昨年度開催された公開研究会は、以下の通りである。

第1回：デジタル教材の系譜・学びを支えるテクノロジー

ミミ号の航海と合衆国マルチメディア教材の系譜

2005年4月2日開催

第2回：デジタル教材の系譜・学びを支えるテクノロジー

「人と森林」「マルチメディア人体」

2005年5月7日開催

第3回：デジタル教材の系譜・学びを支えるテクノロジー

インタラクティブ学習環境「Logo」

2005年6月11日開催

第4回：デジタル教材の系譜・学びを支えるテクノロジー

魅せます、CSCLのすべて：1日でわかる協調学習

2005年7月9日開催

第5回：デジタル教材の系譜・学びを支えるテクノロジー

シミュレーション

2005年8月6日開催

第6回：BEAT 特別セミナー

「教育における知的所有権・その現在と未来」

2005年9月3日開催

第7回：BEAT 特別セミナー

「ヨーロッパ・モバイル放送の現状と教育利用の展望」

2005年10月1日開催

第8回：「CAI/WBT」

2005年11月12日開催

第9回：「Aクラス人材を育成せよ：企業eラーニングの現在」

2005年12月3日開催

第10回：「使える英語を身につけたい！：語学学習を支援するデジタル教材のこれから」

2006年1月7日開催

第11回：「新しい評価技術とデジタル教材での活用」

2006年2月11日

第12回：BEAT 特別セミナー

2005年度 研究成果報告会

2006年3月25日

2005年度はのべ1000名を超える参加者が公開研究会に参加している。この中には、学生・大学教員に加え、教材開発を行っている社会人も数多く含まれており、デジタル時代の学習コンテンツ・システムに関する最新の知見を伝える機能を果たしている。

3. 研究活動

3.1 概況

研究組織としての情報学環は、異領域の出会いの場である。同じ学問領域の研究者が集まり、その集積性によってその学問領域の体系化を図り、またそれまで解決できなかった問題に突破口を開こうとする目標の立て方とやり方が存在する。しかし、情報学環は違う目標をもっており、違うアプローチを採っている。情報学環は学際情報学という新しい学問を創出するという目標をもっており、異なった学問領域の研究者に出会いの場を提供し、異種交配と相互越境というやり方によって、それを達成しようとしている。そのような研究組織は規模においてそれほど大きいものである必要はないが、しかし特有の研究組織論が必要とされる。

3.1.1 文理の相互作用と連携

伝統的に日本の大学においては、学問研究は文系と理系に大きく分けられてきたし、現在もそれが生きている。新しい分野、とりわけ学際情報学にとっては、その分けを乗り越えて、文理連携、文理越境、文理相互浸透が必要であり、それなくして発展の展望はない。情報学環は最初からそのような文理連携の研究組織論に基づいて設立されたものである。しかも、その文理の比重がどちらかに大きく偏ることなく、バランスを取っているのが大きな特色である。

現在、情報学環では大小合わせてさまざまな文理連携型の研究プロジェクトが実施されている。なかでも最大のものが 21 世紀 COE「次世代ユビキタス社会基盤の形成」(研究リーダー: 坂村健教授、副学環長) である。その予算規模は科学研究費補助金や寄附講座などを含めた学環の研究資金全体の 4 分の 1 を占めており、運営費交付金分の金額をさえ上回っている。その研究内容は、文理連携の下に次世代ネットワーク社会を大胆に構想している。その創造性が高く評価されて採択されたものと考えられる。情報学環のスタッフ体勢は、こうした文理連携の大型研究プロジェクトを自前でカバーしていくことができるのである。

そして、文理連携の 21 世紀 COE は、組織の財政上、情報学環ならではの効用とメリットを発揮することになった。国立大学に対する現在の財政政策の仕組みでは、文系の資金獲得には限界があり、困難が伴う。理系が必要とするような大きな額ではないにも関わらず、文系が運営費交付金や競争的資金を新たに得るのは容易なことではない。しかし、文理連携の研究計画のもとに 21 世紀 COE という競争的資金が獲得できたことによって、結果的に文系の研究分野へ資金が流れ、これまで経済的な理由からできなかった研究活動を展開できるようになったのである。これは、文理連携で情報学を構築していくという組織論が、財務上も有益な影響を生み出していることを物語っている。こうした研究資金状況の改善によって、文系は文系の側から文理連携の企てを積極的に展開していくことが可能になったのである。内部相互補助のやり方だと言えよう。

3.1.2 流動教員制度

情報学環独特の仕組みとして、流動教員制度がある。これは設立当初、学内の情報関連教員を糾合し、ネットワーク組織型に新しい大学院を創設するため、学内関連部局の協力を得て作り出された

ものである。これにより、情報学環に所属する教員には、基幹教員と流動教員の2種類が存在する。基幹教員は、情報学環に固有のポスト、すなわち基幹教員枠（部局の「採用可能数」として割り当てられているポスト）で採用されている教員である。その教員室のスペースも学環によって手当てされている。それに対して、流動教員は、流動元の部局から情報学環へ時限で振替られている流動教員枠を使って、流動元の部局よりやはり時限で配置換えになって情報学環に所属している教員である。その教員スペースは現状では情報学環として手当てすることができず、流動元部局のスペースをそのまま使用している。

この流動教員制度により、情報学環の研究組織は研究者の循環と入れ替わりの仕組みを内蔵しており、もって研究活動に常にイノベーションの条件を保障しようとしているのである。流動教員の立場からすれば、情報学環に流動教員として参加することによって、元部局とは異なった学際的な教育研究環境に入ることが可能であり、また研究所が元部局の教員にとっては大学院教育に通常の義務と権利で加わる機会が得られることとなる。こうした条件が研究者同士に新たな刺激を生み出すとともに、従来の枠を脱する糧となると見込まれている。こうした組織論による利得は、現在、大小さまざまな研究プロジェクトの活動に見て取ることができる。

3.2 大型研究プロジェクト

3.2.1 文部科学省 21 世紀 COE 「次世代ユビキタス情報社会基盤の形成」

現在、状況認識技術（Context-awareness）を中核とする新しい情報分野（ユビキタスコンピューティング）の研究が世界的な大きな潮流となっている。ユビキタスコンピューティングは、世界に先駆けて本拠点リーダー（坂村）が 1984 年に開始したトロンプロジェクトの技術目標に掲げたコンセプトである。こうした経緯もあり、我が国は本分野において世界を先導しうる技術水準を有する。しかし、学術分野・産業分野双方で世界的に活発な研究開発がなされており、本分野の重要性は現在の世界的な共通認識となっている。そのため、本分野の研究の推進は、激しい国際競争の中で遅れをとらないためにも必須のものである。ユビキタスコンピューティングの適用分野は多岐にわたり、既に農学、医学、薬学、地理学、生物学等の諸学問分野をはじめ、災害支援や社会安全の実現、国土産業社会インフラ等の国家レベルの施策への適用も期待されており、本分野の研究レベルや技術競争力の低下は、我が国の将来の国力低下に直結する。したがって、ユビキタスコンピューティング分野の研究教育を積極的に推進することは緊急度と重要度が極めて高い。そこで、東京大学大学院情報学環が核となり、東京大学はユビキタスコンピューティング技術やそれを様々な分野に適用する研究や、当該分野の人材育成を行う教育のための拠点として、文部科学省 21 世紀 COE プロジェクトを平成 16～20 年度の 5 年計画で開始した。本拠点における研究は、基礎技術研究、応用技術研究、社会適用研究の 3 つの分野からなる。

(1) 基礎技術研究

ユビキタスコンピューティングにおける状況認識技術の核となる、超小型 RFID やセンサーネットワーク、リアルタイムシステム、組込みシステムなどの基盤情報技術の研究を実施する。更に、こう

した要素技術を組み合わせることで社会レベルの巨大システムを構築するためのトータルアーキテクチャの研究にも取り組む。

(2) 応用技術研究

ユビキタスコンピューティングの状況認識技術を、他の様々な分野に適用する応用研究を実施する。例えば、農学分野に適用する食品トレーサビリティ研究、医薬分野に適用する医薬品のトレーサビリティや医薬品の適正利用支援システム研究、交通分野に適用したユビキタス場所情報システム研究などの応用研究に対して、各種分野の研究者と連携して取り組む。

(3) 社会適用研究

ユビキタスコンピューティング技術を社会基盤として適用する際の社会的課題についての研究も行う。例えば、ユビキタスコンピューティング技術によって提供されるコンテンツの構成方法に関する課題、セキュリティやプライバシーの問題、法制度などの問題を検討し、最終的には政策提言を行うことを目指す。

ユビキタス情報技術研究プロジェクトは、常勤教員 9 名、特任教員 7 名、特任研究員 1 名、RA1 名によって構成され、主にユビキタスコンピューティングの基盤技術の研究分野である。ユビキタス情報社会国際研究プロジェクトは、常勤教員 7 名、特任教員 4 名、特任研究員 1 名、RA3 名により構成され、主にユビキタスコンピューティング技術を社会に適用するときの社会的な課題、あるべきユビキタス情報社会のあり方の研究分野である。ユビキタス情報コンテンツ形成プロジェクトは、常勤教員 4 名、特任教員 1 名、RA5 名によって構成され、コンテクストアウェアな情報配信を、社会規模で実施するために必要なコンテンツ記述技術の研究分野である。更に本拠点は、世界におけるユビキタスコンピューティング分野の研究教育のハブとしての役割を果たすべく、世界中の様々な大学や企業との共同研究や共同実験の実施、関連する政府機関等との密接な連携を行いプロジェクトを推進している。

■総括班

坂村 健・教授（拠点リーダー）
吉見 俊哉・教授（拠点リーダー補佐）
石崎 雅人・助教授（総括調整）
越塚 登・助教授（総括調整）

■プロジェクト A:ユビキタス情報コンテンツ形成プロジェクト

馬場 章・教授（統括）
橋本 良明・教授
石田 英敬・教授

西野 嘉章・教授（総合研究博物館）
添野 勉・特任教員
大島 十二愛・RA
研谷 紀夫・RA
倉持 基・RA
松田 好史・RA
山下 大輔・RA

■プロジェクト B:ユビキタス情報技術研究プロジェクト

坂村 健・教授（統括）
原島 博・教授
辻井 潤一・教授
河口 洋一郎・教授
中川 裕志・教授（情報基盤センター）
清水謙多郎・教授（大学院農学生命科学研究科）
石崎 雅人・助教授
越塚 登・助教授
中尾 彰宏・助教授
大石 久和・特任教授（国土技術研究センター 理事長）
篠塚 勝正・特任教授（沖電気工業社長）
井村 亮・特任教授（日立製作所 情報・通信グループ. ミューソリューション事業部長）
小川 克彦・特任教授（NTT サイバーソリューション研究所所長）
小林 真輔・特任准教授
Wesley Dean Charles Hay・特任講師
富田 啓一・特任研究員（非常勤）
神尾 真人・RA

■プロジェクト C:ユビキタス情報社会国際研究プロジェクト

吉見 俊哉・教授（統括）
西垣 通・教授
濱田 純一・教授
須藤 修・教授
佐倉 統・教授
水越 伸・助教授
林 香里・助教授
竹之内 禎・特任講師

山本 拓司・特任教員
D. ビュースト・特任教員
玄 武岩・特任教員（非常勤）
西 兼志・特任研究員
阿部 卓也・RA
高畑 一路・RA
中路 武士・RA

平成 18 年度は、ユビキタスコンピューティングの基盤技術として、組み込みシステム開発プラットフォームの研究やコンテキストウェアコンピューティングの基盤方式の研究を行った。また、それら基盤技術を用いてユビキタス情報ベースの研究を行った。銀座などの実際のフィールドに対して、ユビキタス・ナビゲーションシステムを開発した。そして、ユビキタス情報ベースのコンテンツである、「文化資源統合デジタルアーカイブ」の構築を推進した。ユビキタスコンピューティングの技術に裏付けられた人類の「知」の共有化を目指し、テキストや動画像、音声、三次元データなどを統合的に扱うことの可能なデジタルアーカイブの構築を推進した。さらに、ユビキタス情報社会の国際的基盤の確立にむけての、社会的問題に関する研究として、情報社会学的分析、法学的観点や経済学的観点からの社会制度改革や政策提言などをシンポジウム等を通じて行った。また、COEシンポジウムを平成 18 年度 3 回開催し、研究教育の方向性の確認や問題提起を盛んに行った。

3.2.2 文部科学省 セキュア・ユビキタス・コンピューティング・プラットフォーム構築のための基盤アーキテクチャの研究開発および検証

本研究では、ユビキタスコンピューティング環境をセキュアにする基盤技術の提案を目的としている。基盤技術として（1）大容量、高速演算及び通信能力を有し、多様なデータを堅牢制御及び管理する、耐タンパ型高性能セキュリティチップ、（2）軽量ユーザ端末等を構築するための、セキュリティ機能を強化した基盤ソフトウェアを開発するを行っている。

（1）に関しては、平成 18 年度においては機能の異なるセキュリティチップを 2 種類開発した。ひとつは、ストリーミング機能を実現する高速通信モードを含むセキュリティチップ eTRON/32 UT01、もうひとつは電子署名検証機能を搭載したセキュリティチップ eTRON/32 UT02 である。双方とも、32 ビット CPU ならびに暗号処理を行う専用コプロセッサによって構成される。UT01、UT02 に関して実装評価し、その結果を平成 19 年度に開発予定のセキュアチップにフィードバックする。

（2）に関しては、セキュアチップと連動する組み込み向けのリアルタイム OS の開発を進めている。平成 18 年度はセキュリティチップのデバイスマネージャ機能を実装し、リアルタイム OS 上における評価を実施した。ユーザから見た場合にデバイスの接続形態によらず利用できることを示すことができた。

さらに、本セキュアプラットフォームの応用として、電子お薬手帳システムの開発を進めた。セキ

セキュアチップにユーザの個人の薬歴やアレルギー歴などを記録し、それらの情報と薬の情報を照らし合わせることで個人個人に合わせた飲み合わせ情報の提示が可能となる。18年度は薬の飲み合わせ情報をルールベースで検出する方式の検討、セキュリティチップ内のデータ構造の検討などを進めた。平成19年度に実装を行う予定である。

3.2.3 NEDO「情報家電用マルチメディアセキュアチップ TRON-SMP の研究開発」

デジタル家電が普及し、広帯域網の整備やデジタル放送の開始にもかかわらず、デジタルコンテンツビジネスは大きく開花していない。原因の一つには、コンテンツ保護や課金処理の技術が十分でなく、著作権侵害の危機が迫っていることがある。著作権保護を強固に行いつつコンテンツ配信を可能にする新しい方式としてマルチメディアセキュアチップ TRON-SMP の研究開発を行っている。TRON-SMP は、暗号の復号処理や課金を行うセキュアな H/W チップ技術を元にマルチメディアストリーミング処理機能を追加した H/W チップである。Internet Commerce 等における電子マネーや電子チケットのデータの処理のためのネットワーク対応型チップであること、オープンなセキュアチッププラットフォームであることに加え、マルチメディアストリーミング処理と課金処理を同時に安全に行える耐タンパ型セキュアチップ TRON-SMP を実現する。TRON-SMP は、暗号化されたデジタルコンテンツにたいして復号処理と課金処理を分割することなく処理することを可能とする。これにより、課金漏れやデータのコピーによる著作権侵害などを防ぐことができる。TRON-SMP の特長としては、(1)「鍵」のポータビリティを利用したコンテンツの利用範囲制限、(2) 耐タンパチップによる高いセキュリティレベルの実現、(3) 特定の画像処理方式に依存しないアーキテクチャ、(4) 課金と視聴をアトミックな処理として実現、(5) 特許フリーでオープンな課金方式、が挙げられる。鍵の利用範囲に関しては、TRON-SMP をコンテンツ利用時の鍵として用いることによって明示的にコンテンツが利用できる範囲を制限することができる。コンテンツを無制限に利用させるのではなく、TRON-SMP が機器に接続されている場合のみ、コンテンツ利用を制限することで不正利用をなくすることができる。また、耐タンパチップにて実装することにより、クラッキングや解析により不正にデータを盗まれることはない。さらに、ソフトウェア上でストリーミング処理するのではなく、ハードウェア上で行うため、高いレベルのセキュリティを実現することができる。

本研究開発は、東京大学大学院情報学環、株式会社ルネサステクノロジ、パーソナルメディア株式会社の3社による共同研究である。それぞれ、東京大学がコンテンツ配信サーバならびに視聴端末の開発、ルネサステクノロジがマルチメディアセキュアチップ TRON-SMP の開発、パーソナルメディアが視聴端末のソフトウェアプラットフォームの開発を行っている。東京大学においては、平成17年度は、マルチメディアチップの検討とコンテンツ配信方式の検討を行い、方式を決定した。

3.2.4 大型有形・無形文化財の高精度デジタル化ソフトウェアの開発

東京大学池内研究室が開発してきた大仏等の大型物体の3次元デジタル化技術および、京都大学松山研究室が開発してきた人間の動作を立体映像として記録する3次元ビデオ技術を基に、能・日本舞

踊などの無形文化財および、寺院・遺跡などの大型有形文化財を対象とした高精度デジタル化ソフトウェアの開発を実施する。

東京大学では、大型有形文化財の高精度デジタル化ソフトウェアの開発を担当している。平成18年度の研究開発の成果概要を以下に示す。

(1) 大規模色彩データ計測システムの開発

有形文化財においては、その本来の色彩データを計測することは特に重要である。そこで、従来のRGBによる色彩計測の高精度化として、スペクトルカメラを利用するシステムを開発した。各点で計測されたスペクトルデータを4つの基底で表現することで、RGBの色空間よりは豊富な情報を含む色彩データの計測を可能とした。

(2) 大規模色彩データからの光源（物体）色推定手法の開発

上記の手法は高精度の色彩データを取得する一般的な手法として用いられる。しかし、屋外において太陽光線や予期せぬ光源の影響などで時間によって見かけ上物体の色が異なる。そこで、屋外における大型有形文化財の色彩データの取得のために、同一地点からの時間をおいた複数枚の画像を利用することによって、こうした光源（物体）色を推定する方法を開発した。

(3) 大規模形状データと色彩データの統合ソフトウェアの開発

色彩データは、昨年度までに開発した3次元幾何形状モデルと統合することで初めて意味をもつ。本年度は、こうした色彩データと幾何形状データをより精密に統合するようなソフトウェアを開発した。これにより、文化財の本来の色彩データ付き3次元幾何形状モデルを生成することができるようになった。

(4) 大規模色彩データの効率的蓄積ソフトウェアの開発

高精度色彩データ付き3次元幾何形状モデルでも誤差が残る場合がある。イメージベースレンダリングの手法を用いると忠実な色彩再現が可能となるが、イメージを取得した環境（光源、時間等）でなければ不可能である。そこで、両者を融合し、モデルベースレンダリングで作った結果と実際のイメージとの誤差をもデータベース化する。この誤差はほとんど0であるので、圧縮をすれば大きな効果が得られる。

(5) 光学特性を考慮した大規模3次元データ表示システムの開発

大型有形文化財の3次元表示を考えた場合、単独ではなく、現実とその文化財が存在する環境の中で自然に見える表示方法も必要となる。なぜなら、環境の異なる2枚のデータを合成すると違和感のある映像ができてしまうからである。特に自然な影があるかどうかが一番のポイントとなる。ここでは、明日香村を舞台に、失われた建築物の修復3次元CGモデルを、現在の場所に違和感なく再現して表示するシステム（バーチャル明日香村）について報告する。

(6) 特殊材質物体の形状取得アルゴリズムの開発

今まで開発してきた幾何形状取得システムでは、ガラス等の透明物体に適用できない。そこで、こうした物体でもその形状を計測できるようなシステムを開発した。それには、偏光という現象を利用し、2枚の偏光を介した画像より物体表面の各点において法線方向を推定することにより形状を取得するシステムである。

(7) 大規模形状データ解析ソフトウェアの開発

今まで得られた大型有形文化財の幾何データを取得する目的は、単に現状記録だけではない。こうしたデータを利用することで、新たな知見をも得られる可能性がある。本年度は、特にバイヨン寺院のデータから多数の尊顔データを抽出し、その類似度から分類を行うシステムを開発した。

(8) 大規模形状データへの付加情報タグ付け並びに検索ソフトウェアの開発

色彩データ付き 3次元幾何データは、確かにそれだけで有用な記録となるが、文化財の保護・修復の観点から見ると、独立に多くの活動が行われているのも事実である。古くからの調査や、現在の地道な作業をすべてこうした 3次元幾何データの上にデータベース化できれば、文化遺産の GIS ともいえるべき、時系列に沿った文化財の状況が記録できる。また、従来 2次元画像が中心であった記録に新たな道が開かれる。そこで、3次元形状データに、付加情報を容易にタグ付けできるデータベースシステムおよびそのためのユーザインタフェースを開発した。

3.2.5 超高精細映像と生命的立体造形が反応する新伝統芸能空間の創出技術

本研究は、能や歌舞伎などの日本古来の伝統芸能や、襖、神社や仏閣などに代表される日本特有の伝統的建築が織り成す美の空間に、最先端の CG 技術・造形技術・制御技術を組み合わせることにより、新しい日本の伝統芸能空間：「超高精細映像と生命的立体造形が反応する新伝統芸能空間」を生み出す事を目指している。

初年度においては、まず、超高精細映像による自然的・生物的 CG コンテンツの表現アルゴリズムの開発、特に、流体、および、構造色の物理シミュレーションによる表現アルゴリズムの開発に取り組んだ。一般的に、物理シミュレーションは計算コストが高いためリアルタイム CG には向かないが、並列プロセッサを用いることで流体ダイナミクスをリアルタイムで計算可能なアルゴリズムを開発し、学会において発表した。これらの成果を、山本寛斎の協力のもと東京ドームにおける KANSAI SUPER SHOW「太陽の船」において、600 インチの巨大スクリーン 4 台それぞれに、それぞれ 5 台（合計 20 台）の高精細プロジェクターを使って投影し、5 万 4 千人の観客に対して発表した。

また、生き物のように反応する伝統芸能空間の創出装置の開発について、CG に連動して 3 次元的にスクリーンの形状を変化させる事が出来る”Gemotion Screen”を開発し、国立新美術館開館記念のオープニングとして文化庁メディア芸術祭 10 周年記念企画において発表した。この際、直動型のエアシリンダを採用する事により、従来のデバイスでは実現不可能であった、大規模なスクリーンにおける高速かつ高密度な立体表現が可能とした。同様に、日本古来の息吹を秘めつつ、最先端テクノロジーを駆使した空間創出のための舞台装置として、最先端の描画手法に基づいた超高精細最 CG と伝統的な襖を融合させた 3 次元立体視レンチキュラーの実用化技術を開発し、新伝統芸能空間創出のための舞台装置として開発した。

3.2.6 その他の大型研究プロジェクト

上述のように情報学環として組織的に遂行するもののほか、各教員が中心となって行う研究プロジェクトでも、以下の例（事業規模 1 千万円以上）に示すとおり、大型研究プロジェクトを積極的に展

開している。(すべての外部資金による研究の状況は、IV. 外部資金獲得状況を参照のこと)

<科学研究費補助金(金額は直接経費分)、学環教員が研究代表者となっているもの>

須藤 修 2006-2010 特定領域研究 「知識社会経済システムの共創的發展とそのガバナンスに関する研究」(須藤修、田中秀幸、後藤玲子) 67,500 千円

馬場 章*1 2004-2009 特定領域研究 「わが国における火山罹災地の複合的資料による歴史的
文化・自然景観の復元研究―北関東を中心に―」(馬場章、吉田正高) 24,300 千円*2

*1 2006 年度より研究代表者

*2 2006-2009 年度総額

開 一夫 2006-2008 基盤研究(A) 「ヒトとロボットの原初的コミュニケーションに関する
発達認知神経科学的研究」(開一夫、今井倫太、板倉昭二) 37,900 千円

山内 祐平 2006-2008 基盤研究(B) 「把持状態を利用したウェアラブル展示教材の開発」(山
内祐平、奈良高明、堀田龍也) 15,700 千円

吉見 俊哉 2004-2007 「20 世紀後半の東アジアの都市大衆文化における「アメリカ」の受容と反
発：日本、韓国、台湾、フィリピンを中心に」(吉見俊哉、姜尚中、水越伸、伊藤守、小倉利丸、岩渕
功一、田仲康博、多田治、毛利嘉孝、姜明求(ソウル国立大学教授)、陳光興(台湾精華大学教授))
14,200 千円

河口 洋一郎 2005-2007 基盤研究(A) 「生き物のように凹凸反応する情感的な屏風画像装置シ
ステムの創出」(河口洋一郎、橋本康弘、堀聖司) 34,900 千円

石田 英敬 2005-2007 基盤研究(B) 「テレビ・コンテンツ分析の情報記号論的研究とハイパ
ーメディア型事典の作成」(石田英敬、吉見俊哉、水越伸、増澤洋一、水島久光) 14,900 千円

本郷 和人 2006-2009 基盤研究(B) 「歴史史料と中世都市の情報学的研究」 15,600 千円

澤田 康文 2004-2006 基盤研究(B) 「薬物動態・動力学理論に基づくテーラーメイド・処方設
計システムの開発」 12,300 千円

大島 まり 2005-2006 基盤研究(B) 「血流と血管壁の達成を考慮した脳動脈瘤動態シミュレ
ータの開発とモデル実験による評価」 14,900 千円

深代 千之 2004-2006 基盤研究(B) 「身体運動中の筋張力筋線維動態推定システムの開発によるトレーニング処方作成効果判定」 13,200 千円

山本 隆一 2005-2006 厚生労働科学研究費 「公開鍵基盤技術を活用した診療情報共有における個人情報保護と情報セキュリティに関する研究」 19,000 千円

<その他外部資金関係>

池内 克史 2006 科学技術振興機構 戦略的創造研究推進事業(CREST) 「油絵描画ロボットに関する研究」 28,210 千円

馬場 章 2006 科学技術振興機構 戦略的創造研究推進事業(CREST) 「オンラインゲームの教育目的利用のための研究」 16,900 千円

馬場 章 2006 特定非営利活動法人映像産業振興機構 「コンテンツ人材育成総合プログラム」に関する調査・研究」 10,000 千円

3.3 社会情報研究資料センターの役割

大学院情報学環附属社会情報研究資料センターは、1964年1月、当時の新聞研究所に開室された「プレスセンター」が1967年6月、新聞研究所附属施設「新聞資料センター」として正式に発足し、1992年4月に新聞研究所が社会情報研究所に改組されるにあたって「情報メディア研究資料センター」と改称されたものである。2004年4月、大学院情報学環・学際情報学府と社会情報研究所の統合に伴い、「社会情報研究資料センター」と改称し、今日に至っている。

本センターは、新聞資料を中心とした各種メディア情報資料を収集・整理し、学内外の研究者の利用に供することで、社会情報学に関する研究の発展に寄与している。現在、本センターの収蔵資料は製本済原紙約20,000冊、縮刷版約8,000冊、マイクロフィルム約45,000リールに達している。これらの新聞資料は情報学環書庫のほか、駒場キャンパス内の旧宇宙航空研究所跡地などに別置されている。センターの閲覧室には、利用者のためにマイクロリーダーとCD-ROM検索用のパソコンを備えている。また、本センターの定期刊行物として「社会情報研究資料センターニュース」を刊行している。

3.3.1 新聞マイクロフィルムのデジタル化によるバックアップ作成

前述のように、本センターは約45,000リールの貴重なマイクロを収蔵しており、これらについて段階的にバックアップ用の画像デジタルデータを作成していきたいと考えている。データの公開には、著作権等の検討しなくてはならないいくつかの問題があるが、震災等の事故に備えて、バックアップ

のためにデジタルデータを作成しておくことは不可欠の作業である。しかしながら、5万リール近いマイクロフィルムのデジタル化には、膨大な作業と高価な装置が必要である。当面は、この装置を所有している部局や機関の協力を得ながら、デジタル化のプロジェクトを進めたい。

3.3.2 社会情報研究資料センター デジタルアーカイブの構築

社会情報研究資料センターでは、センターや情報学環図書室に収蔵されている資料を中心に、旧新聞研究所資料のデジタル・アーカイブ化のためのさまざまなプロジェクトを進めている。

すでに構築されているアーカイブとしては、ジャーナリストの「森恭三アーカイブ」「小野秀雄コレクションかわら版・新聞錦絵（ニュースの誕生）アーカイブ」などがあり、いずれもすでにインターネットで公開して一般の利用に供せられている。これらに加えて現在、「第一次大戦期プロパガンダ・ポスター・アーカイブ」「内閣情報部宣伝資料アーカイブ」「近代日本号外資料アーカイブ」「満州・中国大陸新聞アーカイブ」などの旧新聞研究所の貴重資料を基礎としたアーカイブ構築の作業が進んでいる。

最終的には、旧新聞研究所が所蔵してきたほとんどの貴重資料を網羅するような形でのデジタル・アーカイブを構築し、またその英語や韓国語、中国語のバージョンを作成していくことで、広く世界のメディア研究や歴史研究、地域研究などの利用に供していくことにしたい。また、読売新聞データベースを購入し、所内ネットワークで利用できるようにする計画も進めている。

3.3.3 COEユビキタスプロジェクトとの連携化

本センターの中期的な将来計画として、既述のようにセンターにおける資料のデジタル化を進めるとともに、進行中のCOEユビキタスプロジェクトとの連携を図る。すなわち、本センターのデジタル・アーカイブ化された資料群が、最終的には東京大学のあらゆる場所、さらには世界の各地からアクセス可能になるように基盤整備を進める。

また、そのような仕組み作りのプロセスを通じ、東京大学内あるいは日本各地で同様のメディア資料のデジタル・アーカイブ化を進めている機関との連携を強化し、東アジアのメディア資料に関する限り、本センターが世界の研究資料ネットワークのハブとして機能するようにしていくつもりである。また、こうした幅広い連携の手始めとして、横浜にある日本新聞博物館（ニュースパーク）等との何らかの連携体制を模索したい。

3.3.4 駒場地区別置新聞原紙資料の保存書庫の再配置

現在、大学院情報学環はスペースがきわめて狭小なため、本センターの主要な収蔵資料であるマイクロフィルムや新聞原紙に関し、必ずしも十分な保存・保管体制が整備できないでいる。特に、駒場地区の旧宇宙航空研究所跡地に別置している以下の新聞原紙資料に関しては、きわめて劣悪な保存環境に置いたままの状態にある。

駒場地区別置資料：大阪朝日新聞	99 冊
信濃毎日新聞	122 冊
新潟日報	96 冊
沖縄タイムス	72 冊
New York Times	742 冊
Washington Post	234 冊
合計	1365 冊

したがって、これらの資料の保存環境の改善は、本センターの重要な課題の 1 つであり、早急に対応する必要がある。本センターでは、これらの原紙製本資料を、目白台東大病院分館の保存施設の改修後、目白台保存施設に移動し、本センターの分館的な施設を整備していきたいと考えている。

3.3.5 マイクロフィルム・新聞原紙等資料の再配置

本センターの貴重資料の保存環境の改善とより積極的な公開・閲覧環境の整備のために、以下のような資料の再配置を行った。すなわち、前年度に本センター書庫新館 1 階及び 2 階部分に空調設備を導入してマイクロ保存書庫としたが、今年度は、本館 1 階のセンター資料室と 7 階貴重資料室にあるマイクロフィルムのすべてを、マイクロ保存書庫に移動した。同時に、書庫内の資料の再配置を行った。以上のような資料の再配置によってできたスペースを、情報学環が所蔵するさまざまなデジタルデータやマイクロフィルムの閲覧および展示のスペースとして整備する予定である。

4 社会との交流

情報学環教員は、以下に述べるとおり、国際的委員会や政府委員会委員、産学協同等を通じて社会との交流を進めながら、社会への貢献を積極的に行っている。

4.1 国際的委員会

情報学環教員は、IEEE 等の国際学会が開催する会議の運営委員等を通じて、国際的な研究の推進に貢献をしている。

(国際学会委員会委員：一部のみ抜粋)

池内 克史 IAPR(International Affiliation of Pattern Recognition) (国際パターン認識連合), 議長 (Chair), Technical Committee 8 (技術第 8 部門).

池内 克史 Computer Vision, Graphics, Image Processing, Area Editor (領域編集長).

池内 克史 IEEE Intelligent Vehicle Symposium 2006, General Chair.

池内 克史 2006 IEEE International Conference on Robotics and Automation(ICRA), Program Co-Chair.

池内 克史 IEEE International Conference on Multisensor Fusion and Integration for Intelligent Systems(MFI), Organizing Co-Chair.

池内 克史 3rd IEEE International Workshop on Object Tracking and Classification Beyond the Visible Spectrum, Program Committee.

須藤 修 Associate Editor of Environmental Economics and Policy Studies (the official journal of the Society for Environmental Economics and Policy Studies), Springer-Verlag.

越塚 登 IEEE Joint Conference on E-Commerce Technology (CEC), Program Committee.

越塚 登 The 2nd International Workshop on RFID and Ubiquitous Sensor Networks (USN 2006), Program Committee.

佐藤 洋一 IEEE and ACM International Symposium on Mixed and Augmented Reality (ISMAR2007), Program Committee Member.

佐藤 洋一 International Conference on Artificial Reality and Telexistence, Program Committee Member.

佐藤 洋一 International Conference on Visual Information Engineering (VIE2006), Program Committee Member.

中尾 彰 IEEE International Conference on Distributed Computing Systems (ICDCS) /International Workshop on Trust and Reputation Management in Massively Distributed Computing Systems (TRAM), Program Committee Member.

中尾 彰 IEEE GlobeCom, TPC Member.

4.2 政府・自治体委員会

情報学環教員は、政府・自治体委員会の委員等としても活躍し、情報通信などにかかわる政策立案等に参画することで、社会に貢献している(政府委員会委員数 58 人、地方自治体委員会委員数 19 人)。

(政府・自治体委員会委員：一部のみ抜粋)

<政府>

池内 克史	文部科学省・専門調査員
大島 まり	文部科学省・宇宙開発委員会・委員
大島 まり	文部科学省・科学技術・学術審議会・臨時委員
大島 まり	日本学術会議・連携会員
坂村 健	総務省 ユビキタス空間基盤協議会・会長
坂村 健	日本学術会議 ユビキタス空間情報社会基盤分科会・会長
坂村 健	内閣府 イノベーション 25 戦略会議・委員
須藤 修	内閣官房「IT 新改革戦略評価専門委員会」委員
須藤 修	内閣官房「電子政府評価委員会」座長
須藤 修	内閣府「国民生活審議会」委員
須藤 修	内閣府「総合科学技術会議」情報通信分野推進戦略プロジェクトチーム委員
須藤 修	総務省「電子自治体のシステム構築のあり方に関する検討会」委員長
須藤 修	総務省「地方の活性化とユビキタスネットワーク社会に関する懇談会」委員
須藤 修	厚生労働省「最適化計画策定評価委員会」委員
須藤 修	経済産業省「次世代型電子認証基盤の整備に関する有識者委員会」委員長
須藤 修	文部科学省「科学技術・学術審議会」専門委員
須藤 修	文部科学省「先導的 IT スペシャリスト育成推進プログラム」委員
馬場 章	経済産業省・ゲーム産業戦略研究会・委員長
橋元 良明	内閣府 「情報化社会と青少年に関する調査委員会」・委員長
濱田 純一	総務省・電波監理審議会委員
原島 博	総務省・独立行政法人評価委員会委員
原島 博	文部科学省・科学技術・学術審議会・専門委員
吉見 俊哉	内閣府・都市再生本部戦略チーム委員
吉見 俊哉	日本学術会議・連携会員
鈴木 高宏	特許庁・弁理士試験委員
山口 いつ子	日本学術会議・連携会員 (第一部、法学委員会)

<自治体>

坂村 健	東京都都市整備局・東京都 IC タグ実証実験実行委員会委員
坂村 健	東京都・IT 技術等活用研究会・委員
坂村 健	奈良県・自律移動支援プロジェクト小委員会・委員長
須藤 修	福島県・IT 推進アドバイザー

須藤 修	岐阜県・IT顧問
須藤 修	高知県「電子自治体推進協議会」・顧問
佐倉 統	岐阜県・IT顧問
深代 千之	グランドワークやまのて・副会長

4.3 学協会活動

情報学環教員は、国内外の関係学会の活動に積極的に参加しており、会長や副会長など、学会の要職等を通じて学協会活動に貢献している。

(学協会役職：一部のみ抜粋)

池内 克史	IEEE・Fellow
池内 克史	IEEE Computer Society・Distinguished Lecturer
池内 克史	IEEE Robotics and Automation Society・Administrative Committee
石田 英敬	日本記号学会・理事
坂村 健	日本建築学会・ユビキタス・コンピューティング社会の建築・都市特別研究委員会・委員長
澤田 康文	日本医薬品情報学会・編集委員会委員長
澤田 康文	日本薬物動態学会 評議員
澤田 康文	日本医薬品情報学会 幹事
須藤 修	日本社会情報学会 (JASI)・副会長
須藤 修	日本社会情報学会 (JASI)・総務委員会委員長
須藤 修	情報文化学会・副会長
須藤 修	進化経済学会・理事
須藤 修	国際CIO学会・副会長
須藤 修	日本国際政治学会・評議員
西垣 通	日本社会情報学会・理事
馬場 章	日本デジタルゲーム学会 (DiGRA JAPAN)・会長
馬場 章	日本シミュレーション&ゲーミング学会 (JASAG)・理事
橋元 良明	日本社会言語科学学会・監事
橋元 良明	日本マス・コミュニケーション学会・理事
橋元 良明	日本社会情報学会・学会賞選考委員
山口 泰	日本設計工学会・評議員
鈴木 高宏	日本ロボット学会・理事
田中 秀幸	日本社会情報学会 (JASI)・評議員
田中 秀幸	社会・経済システム学会・理事
深代 千之	国際バイオメカニクス学会・理事
深代 千之	日本体育学会東京支部・理事長

水越 伸	日本マス・コミュニケーション学会・理事
山内 祐平	日本教育工学会・編集担当理事
竹之内 禎	情報メディア学会・理事
辻本 篤	情報文化学会・評議員
七邊 信重	日本デジタルゲーム学会 (DiGRA2007)・事務局長・組織委員

4.4 セミナー・研究会・公開講座

情報学環・学際情報学府の研究・教育活動の成果を公表するとともに、その環を広げるために、下記に示すようなさまざまな公開の催しを実施した。

入試説明会はたんなる入試事項の説明にとどまらないかたちで、過去の学環・学府シンポジウムの成果を引き継ぎつつ、学環・学府の全体像を示す機会となっている。概要説明から、院生紹介、主要プロジェクト紹介、鼎談などとともに、本年度も研究室や研究プロジェクトを紹介する熱帯雨林的な知識交換、共有の場、「学環・学府まんだら」なども開催された。

この他、別表で一覧されているとおり、COEシンポジウムをはじめ、内外の関係者を集めた先端的な研究成果の披露の機会があった。

学環の特徴でもあるさまざまなプロジェクトは、公開研究会、シンポジウムなどを通して学際情報学の研究情報を発信している。下記がその一覧（現在稼働しているもの）である。いずれも学際的なチャレンジをしている営みだといえる（学環ホームページ上に公開されたプロジェクトのみで、全てを網羅していないことを申し添えておく）。

■共同研究プロジェクト一覧

フィジックスペースビジョンプロジェクト	代表：池内克史
PlanetLab Japan	代表：中尾彰宏
大井町プロジェクト	代表：馬場章
ゲーム研究プロジェクト	代表：馬場章・新清士
人間行動観察学習ロボットプロジェクト	代表：池内克史
iii online プロジェクト	代表：山内祐平
戦争とメディア	代表：吉見俊哉
戦後東アジアとアメリカニズム	代表：吉見俊哉
新しい百科全書	代表：石田英敬・吉見俊哉
文化遺産のデジタル化プロジェクト	代表：池内克史
モード・プロジェクト	代表：水越伸
情報学の基盤形成プロジェクト「FINE」	代表：西垣通
メディア研究のつどい	代表：林香里

■別表

学環・学府で開催されたイベント一覧である。なお、ここに挙げたのは学環ホームページ上に公開されたイベントのみで、個別研究室開催の研究会をはじめ学環・学府で催された全ては網羅していないことを申し添えておく。

【シンポジウム】	
2006. 5. 30	<p>東京大学 21 世紀 COE 「次世代ユビキタス情報社会基盤の形成」 第八回シンポジウム ユビキタス・ネットワークとイノベーション</p> <p>小宮山 宏（東京大学総長） 吉川弘之（(独)産業技術総合研究所長、東京大学元総長） 坂村 健（東京大学大学院情報学環副学環長・教授） 須藤 修（東京大学大学院情報学環教授） 篠塚勝正（沖電気工業代表取締役社長、東京大学大学院情報学環 21 世紀 COE 特任教授） 関口和一（日本経済新聞社編集委員・論説委員）</p>
2006. 6. 24	<p>第一次世界大戦期プロパガンダ・ポスター コレクション デジタル・アーカイブ公開記念シンポジウム</p> <p>吉見俊哉（東京大学大学院情報学環） 基調講演 森 啓（女子美術大学大学院） 小泉智佐子（東京大学大学院情報学環） 竹内次男（京都工芸繊維大学美術工芸資料館） 川畑直道（デザイナー） 田島奈都子（姫路市立美術館） 貴志俊彦（島根県立大学） 若桑みどり（川村学園女子大学、千葉大学） 佐藤卓己（京都大学大学院） 生井英考（共立女子大学） 北原恵（甲南大学） 柏木博（武蔵野美術大学）</p>
2006. 6. 28	<p>情報学環 COE 国際シンポジウム「ユビキタス情報社会における都市デザインとコミュニティ」</p> <p>吉見俊哉 マティアス・エチェノバ 木村和穂 田中浩也 Instructor, Keio SFC 本江正茂 Masashige MOTOE, Prof., Tohoku Univ. 中嶋謙互 Kengo NAKAJIMA, CEO Community Engine 渡辺誠 Makoto WATANABE, CEO Architects Office</p>

	<p>小林正美 Masami KOBAYASHI, Prof., Univ. of Meiji ヨランダ・ダニエルス Yolande Daniels, Studio SUMO, Ass Prof., Columbia University カーラ・レイタオ Carla Leitao, a Um Studio, Ass Prof., Columbia University スーパースダカ Supersudaca: Pablo Corvalan, Prof., Universidad de Talca - Valle Central, Chile / Felix Madrazo, OMA - Rotterdam / Manuel de Rivero, Prof., Universidad Catolica del Peru 五十嵐太郎 Taro IGARASHI, Ass Prof., Tohoku University トルステン・ブルーム Torsten Blume, Prof., Bauhaouse-Dessau Foundation 水越伸 Shin MIZUKOSHI, Ass Prof., iii Tokyo University イエフダ・サフラン Yehuda Safran , Prof. Columbia University</p>
2006. 11. 7	<p>東京大学大学院情報学環・学際情報学府学際情報学専攻 第 10 回シンポジウム 実空間と仮想空間の融合～ユビキタスコンピューティング技術とネットワーク 検索技術の融合～</p> <p>坂村 健（東京大学大学院情報学環・教授、東京大学 21 世紀 COE 大町 雄一（NTT レゾナント・取締役） 小川 克彦（東京大学大学院情報学環 特任教授 NTT サイバーソリューション研 究所・所長） 越塚 登（東京大学大学院情報学環・助教授）</p>
2006. 12. 8	<p>情報学環開催シンポジウム オーバーレイネットワーク・シンポジウム 及び ワ ークショップー オーバーレイが拓く新時代ネットワーク像 -</p> <p>大阪大学総長 宮原秀夫 総務省 技術総括審議官 松本正夫 総務省 総合通信基盤局 電気通信事業部 電気通信技術システム課長 渡辺克也） 大阪大学 総長 宮原秀夫） European Commission, Fabrizio Sestini) 情報通信研究機構 新世代ネットワーク研究センター 中内清秀) ENST, Prof. Daniel Kofman) HP Labs, RickMcGeer) Princeton Univ., Prof. Jennifer Rexford) 東京大学 助教授 中尾彰宏) 情報通信研究機構 プログラムディレクター 青山友紀)</p>
【セミナー・講演会】	
2006. 4. 10	<p>21 世紀 COE プログラム「次世代ユビキタス情報社会基盤の形成」東京大学大学 院情報学環 エンサイクロペディア・プロジェクト 公開講演会 セリア・ルリー Celia Lury 教授（ロンドン大学ゴールドスミス校 社会学部</p>

	Visual Culture & Media Technology 研究)
2006. 5. 10	2006 年度第 1 回メディア研究のつどい「流動化進む米メディア最新事情」 早稲田大学客員教授 藤田博司
2006. 6. 14	2006 年度第 2 回メディア研究のつどい「ドキュメンタリー制作という社会認識- 歴史・方法・実践」 法政大学社会学部助教授 丹羽美之
2006. 6. 15	東京大学大学院情報学環・学際情報学府ラウンドテーブルセッション「都市とラ ンドマークの記憶 - ニューヨークと東京 -」Landmarks as Urban Memory: New York - Tokyo バーバラリー・ダイヤモンド＝スピルヴォーゲル (ニューヨーク市歴史的 建造物保護センター所長) 蓑原敬 (都市プランナー、蓑原計画事務所所長、元建設省課長) 西村幸夫 (東京大学大学院工学系研究科教授) アレックス・カー (作家、日本研究家) 司会:吉見俊哉 (東京大学大学院情報学環長)
2006. 9. 16	「アメリカのメモ」 「アメリカの雑記」 「アメリカだより」 「アメリカへの 手引き」 「アメリカの印象」 (計 5 本、約 1 時間 30 分)
2006. 9. 27	情報学環後援 「山田洋次監督と語る大学生の集い」 山田洋次 (映画監督)

【プロジェクト関連】	
「BEAT」ベネッセ先端教育技術学講座	
〔公開研究会〕	
2006. 5. 20	第 1 回：『かわいい子にはケータイを持たせよ?!』 キャリア各社の子ども向け ケータイサービスへの取り組み
2006. 6. 24	第 2 回：Web2.0 で創る『みんながちょっとずつ頭がよくなる世界
2006. 8. 5	第 3 回：ゲーム・ルネッサンス： いつか来た道、これからの道
2006. 9. 2	第 4 回：学校の枠を超えた交流学习： 伝え合うことで“異文化”を学ぶ子どもた ち

2006. 10. 7	第 5 回：イマドキ・キッズの遊び場、学び場 どのようなチルドレンズミュージアムを創るか？
2006. 11. 11	第 6 回：BEAT 特別セミナー 学習科学と ICT は学びのあり方を変えるか 一高等教育の変革を事例として一
2006. 12. 9	第 7 回：健康と ICT?Web2.0 で健康に?!?
2007. 1. 13	第 8 回：子どもとネットコミュニティ
2007. 3. 27	第 9 回：BEAT 特別セミナー モバイル・ユビキタス技術と学習環境 : BEAT3 年間の研究を総括する
コンテンツ創造科学産学連携教育プログラム	
〔ワークショップ〕	
2006. 7. 4-9	第 5 回東京大学大学院学際情報学府 コンテンツ創造科学産学連携教育プログラム 制作展 「iii exhibiton 5」 ～新しい表現方法の探究
2006. 10. 21	第 1 回メディアコンテンツサイエンスカフェの開催
2006. 11. 17	第 2 回メディアコンテンツサイエンスカフェの開催
2006. 12. 8-13	東京大学大学院学際情報学府・東京大学大学院情報学環 コンテンツ創造科学産学連携教育プログラム 第 6 回制作展

4.5 出版活動

大学院情報学環では、2004年の情報学環と社会情報研究所の合併の後、旧社会情報研究所で出されていた定期刊行物と情報学環・学際情報学府の定期刊行物を統合し、新たな包括的な出版体制を樹立させつつある。その中軸となるのは、(1) 研究紀要『東京大学大学院情報学環紀要 情報学研究』(年2回刊行)、(2) 調査実験紀要『東京大学大学院情報学環紀要 情報学研究・調査研究編』(年1回刊)、(3) オンラインでの英語論文サイト”iii Online Research Journal”、(4) 学環年報『東京大学大学院情報学環年報』、(5) ニュースレター『学環 学府』(ニュースレター)の5つの定期刊行物である。これらはいずれも、統合後の情報学環にとって基幹的な出版活動であり、相互に役割を分担しながら有機的に結びついている。

4.5.1 『東京大学大学院情報学環紀要 情報学研究』

研究紀要『東京大学大学院情報学環紀要 情報学研究』は、社会情報研究所が、2004年4月に同大学院情報学環と合併したことを受けて、『東京大学社会情報研究所紀要』から改称したものである。同紀要は、1952年に『新聞研究所紀要』として創刊されて以来、日本の新聞学、マス・コミュニケーション研究の中核を担う研究誌として半世紀以上にわたり継続的に刊行され、国内外の専門研究者、学生に多くの影響を及ぼしてきた。社会情報研究所では、情報学環との統合に際し、このような歴史と定評のある研究誌としての紀要の学問的な伝統と蓄積を、新しい大学院組織の拡大した研究教育基盤のうえでさらに発展させたいと考えた。これまで『東京大学新聞研究所紀要』、またそれを継承した『東京大学社会情報研究所紀要』は、新聞学や世論研究、マス・コミュニケーション論の研究誌から発展し、ジャーナリズムやメディア史、新聞やテレビのようなマス・メディアの制度と受容、社会的コミュニケーションの諸過程とメディア文化、災害や地域情報化などの政策課題、高度情報化や新しいメディア接触と情報行動などを理論的、実証的に扱う多くの論考を掲載してきた。情報学環との統合に伴い、本誌は名称を『東京大学大学院情報学環紀要 情報学研究』と改称し、これまでの伝統を維持しつつも、理工学系において発展してきた情報学の基礎理論や応用分野の研究と融合した新しい研究成果が共に公刊されていく場になろうとしている。そのために本紀要は、巻頭エッセイの「思考の幹」、情報学環教員の研究論文を集めた「智慧の環」、学際情報学府博士課程院生の査読付論文を集めた「学びの府」など様々なセクションから複層的に構成されている。情報学環では、大学院情報学環において育まれる研究の創造的成果の主要な発表媒体として、また新たな学問的視座や調査研究の発表の場として、本紀要を継続的に発展させていく予定である。

4.5.2 『東京大学大学院情報学環紀要 情報学研究・調査実研究編』

『東京大学大学院情報学環紀要 情報学研究・調査実研究編』は、前記の『東京大学社会情報研究所紀要』が発展していくなかで、新聞研究所から社会情報研究所への改組が行われた 1992 年から発刊されてきた『東京大学社会情報研究所調査研究紀要』を継承するものである。社会情報研究所時代、『社会情報研究所調査研究紀要』は、同研究所における様々な社会調査、情報行動や災害情報、インターネットなどに関わる多くの調査の成果が発表されていく主要な媒体であった。こられの社会調査は、関係する研究者や学会、自治体などで高く評価されているものが多く、そのデータの価値が高く評価されていた。このような社会情報研究所時代の伝統を生かしつつ、情報学環との合併後は、これまで主要な柱をなしてきた情報行動や災害情報の調査の成果に加え、情報工学や情報科学との融合分野での実験の成果や文理相互浸透分野でのフィールドワーク、情報教育の分野での実験、デジタル・アーカイブに関する諸実践、デザイン表現論などの調査や実験、実践の成果が多分野にわたって発表される媒体に発展させていこうとしている。

4.5.3 『英文紀要』

『東京大学大学院情報学環英文紀要』（以下、「英文紀要」と省略）は、前記の『東京大学社会情報研究所紀要』が発展していくなかで、研究の国際化、グローバル化に対応して独立したものであった。「英文紀要」は、基本的には研究者の個人研究論文とともに、社会情報研究所で開催された国際的なシンポジウムなどの記録を収録していた。

このような社会情報研究所時代の伝統を生かしつつ、情報学環との合併後は、情報、メディア、コミュニケーションをめぐるより廣井学問分野の知見が掲載できるように体裁をあらためた。現在は「英文紀要」をオンライン・ジャーナル「iii online research papers」へ移行する活動を進めている。

4.6 定期刊行物・ホームページ

4.6.1 定期刊行物

情報学環・学際情報学府では、日々の活動を学内外の方々に知ってもらうために、ニューズレター『学環学府』を年 4 回発行している。内容は、教員へのインタビュー、研究室の活動報告、イベント予定、研究成果、受賞報告、展示会、各教員の書籍刊行情報など。2002 年冬号から始まり、2006 年度末までに通算 16 回発行した。デザイン性を高めた紙面は、情報学環・学際情報学府の特徴をよく表現しており、各方面から好評を得ている。ちなみに、2006 年度のカバー・デザインは、情報学環所蔵の錦絵・かわら版のデジタル画像を現代風にアレンジするという、意匠を凝らしたものだ。『学環学府』は、情報学環教職員や学生だけでなく、学内他部局や本部役員をはじめ、学環にゆかりのある学外教員、そのほか広報用として入試説明会、ホームカミングデーなどで随時配布している。

4.6.2 ホームページ

情報学環・学際情報学府では、主に教育・研究における活動を広く国内外に周知するために、ホームページを開設し非常に理解しやすい構造で情報を発信している。情報は、総合案内、教員・研究員、研究、教育、入学案内、刊行物・アーカイブ、附属研究施設、内部向け情報、などの項目に分け掲載されている。(URL アドレスは <http://www.iii.u-tokyo.ac.jp/>)

まず、「総合案内」項目では、学環長からのメッセージとして、様々な学問分野を統合し〈学び〉の〈環〉を構造的に組み込んだ学際的な大学院組織である情報学環のミッションを紹介し、また組織や沿革などの情報を案内している。

「教員・研究員」項目では、所属する教員の専門分野、メッセージ、各個人のホームページへのリンク、メールアドレスなどが記載されている。

「研究」項目では、各教員がリードする研究プロジェクトの概要と詳細な情報へのリンクと、また情報学環の教員が主催するシンポジウムへのリンク、および、旧社会情報研究所部門研究へのリンクが掲載され、研究内容・成果に関する情報が入手できるようになっている。

「教育」項目では、学際情報学府における4つの教育コースである、社会情報学コース、文化・人間情報学コース、学際理数情報学コース、総合分析情報学コースの紹介に加えて、情報学環教育部の紹介、授業一覧と時間割、また、オンライン遠隔教育の一環として **iii-online** という新しい試み、そして、過去の修士論文・博士論文のリストを掲載している。**iii-online** では、企画された **e-learning** のシリーズ講義をこのホームページから聴講することができる。

「入学案内」では、修士課程、博士課程、教育部学生、外国人研究生のそれぞれについての入学・入試情報が掲載されている。

「刊行物・アーカイブ」では、情報学環で発行しているニューズレター、年報・紀要、研究叢書、デジタル・アーカイブへのリンクを提供している。刊行物のデジタル・アーカイブや、ニューズレター『学環学府』のPDFファイルをダウンロードすることもできるようになっている。

この他、「附属研究施設」や「内部向けの情報」の項目もありそれぞれの内容を記載している。

また、これらの項目に含まれる各最新情報をショートカットでアクセスするためや、あるいは、情報学環関連のイベント情報、ニュース、などを紹介する **News & Events** のリンク、そして、入試などの重要情報へのショートカットを提供する **Hot Topics** のリンクなどをトップページに備え、迅速に利用者が最新情報へアクセスできることを可能にしている。

このように、「情報」を軸に連環している「百学連携」の情報学環にふさわしい情報の発信をめざすために、インターネットという普遍的な情報通信メディアを通じた種々の研究教育活動の紹介は、我々がもっとも力を入れて推進している広報活動の一つである。

4.7 国際交流

平成18年度も、学環の教員や研究プロジェクトを中心として、国際シンポジウムを積極的に開催した。4月10日には、21世紀COEプログラム「次世代ユビキタス情報社会基盤の形成」東京大学大学院情報学環 エンサイクロペディア・プロジェクトの一環として、ロンドン大学ゴールドスミス校社会

学部のシリア・ルリー (Celia Lury) 教授を招き、公開講演会を開催した。情報学環COEプログラムでは、6月28日にも、「ユビキタス情報社会における都市デザインとコミュニティ」と題した国際シンポを行った。そのほか、2008年3月29日から31日にかけては、トヨタ財団後援、情報学環主催で「中・韓・日ジャーナリストとの対話：いま、東北アジアの言論空間を考える」を一条ホールで開催し、中国、韓国ならびに日本の若手ジャーナリストと日本のメディア研究者や大学院生たちとの対話の場をつくった。また、10月12日には、恒例のソウル大学校言論情報研究所・社会科学大学言論情報学科との共催で、「ニューメディア時代の個人、社会、国家と文化」をテーマとする国際シンポジウムをソウル大学希鑑ホールで開催した。翌13日には、学際情報学府ならびにソウル大学校の学生の間で国際学生合同ゼミを開催した。また、平成18年度冬学期には、同学科とのビデオ会議システムによる国際共同演習を開講し、両大学の教員によるオムニバス形式の講義を行ない、教員・学生双方の交流の第一歩を固めた。

このような東京における国際シンポジウムや研究交流活動に加えて、学環の教員それぞれは、積極的に海外で行われる学会やシンポジウムに参加し、海外での研究調査活動をくりひろげている。今後とも、組織としても、また教員個人としても、多様な国々の多様な研究機関やその他の社会における交流を深めることが課題である。

II. 資料

1 沿革

(旧社会情報研究所)

1929年 東京帝国大学文学部新聞研究室

1949年 東京大学新聞研究所

1992年 東京大学社会情報研究所に改組

東京大学大学院情報学環・学際情報学府と組織統合

(大学院情報学環)

2000年 東京大学大学院情報学環・学際情報学府

2004年 東京大学社会情報研究所と組織統合

文化・人間情報学コース、社会情報学コース、学際理数情報学コース設置

2006年 総合分析情報学コース設置

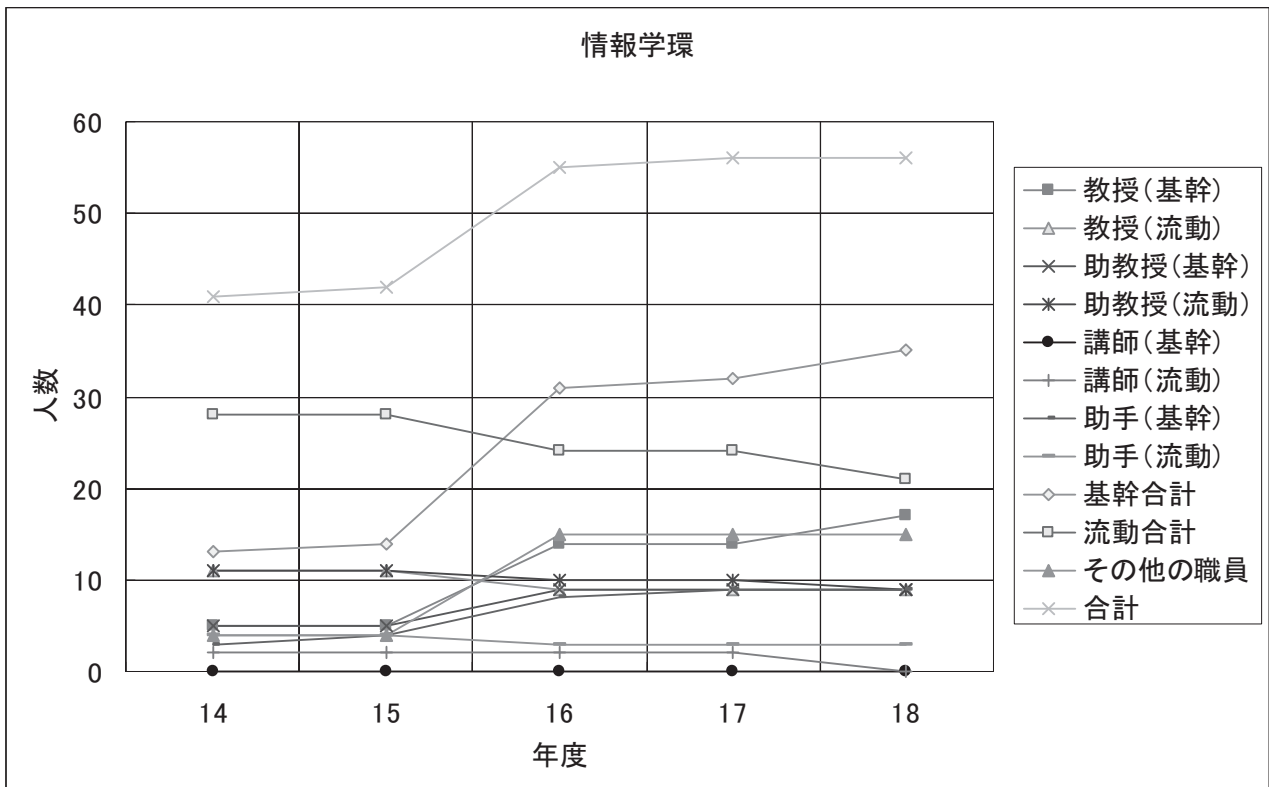
2 学環の教員（定員）

・情報学環(平成16年4月 社会情報研究所と合併)

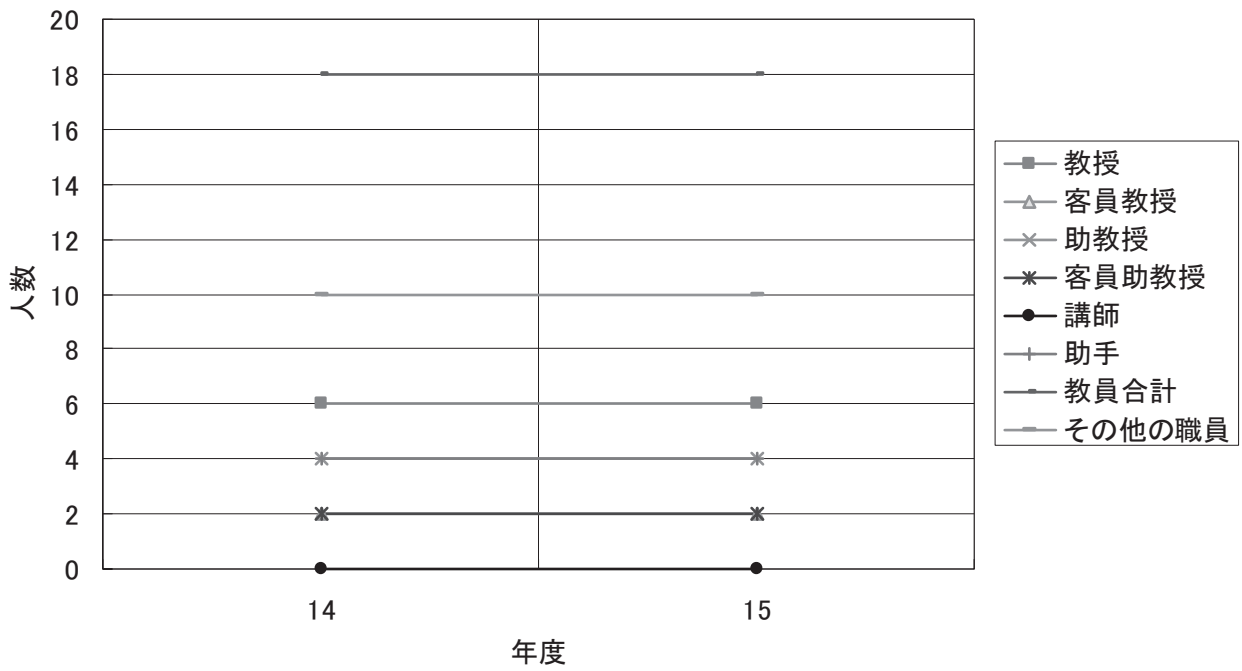
年度	教授		助教授		講師		助手		計		その他の職員	
	基幹	流動	基幹	流動	基幹	流動	基幹	流動	基幹	流動		
14	5	11	5	11	0	2	3	4	13	28	41	4
15	5	11	5	11	0	2	4	4	14	28	42	4
16	14	9	9	10	0	2	8	3	31	24	55	15
17	14	9	9	10	0	2	9	3	32	24	56	15
18	17	9	9	9	0	0	9	3	35	21	56	15

・社会情報研究所

年度	教授	客員教授	助教授	客員助教授	講師	助手	計	その他の職員
14	6	2	4	2	0	4	18	10
15	6	2	4	2	0	4	18	10



社会情報研究所

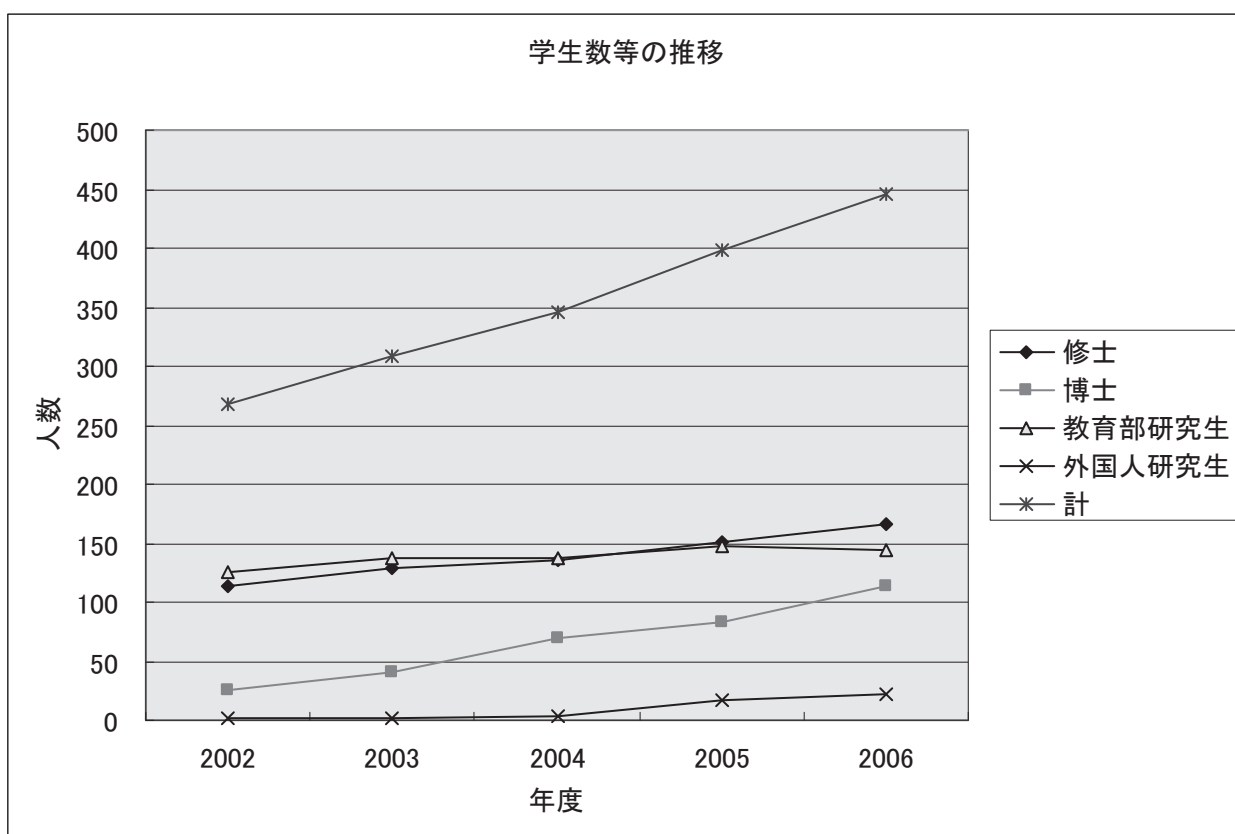


客員教員の状況

年度	職	氏名	担当授業	本務先
平成 14	客員教授	鈴木 秀美	ジャーナリズムと法制度	広島大学法学部
	客員教授	市村 元		TBS解説室理事
	客員助教授	遠藤 薫		東京工業大学大学院社会理工学研究科
	客員助教授	中村 功		松山大学人文学部
平成 15	客員教授	鈴木 正敏		(株)日本総合研究所
	客員教授	藤田 博司		上智大学文学部
	客員助教授	毛利 嘉孝		九州大学大学院比較社会文化研究院
	客員助教授	港 千尋		多摩美術大学美術学部
平成 16	客員教授	伊藤 守	社会情報学特別講義 I	早稲田大学教育学部
	客員教授	村上 由見子	文化・人間情報学特別講義 I	著述業
	客員助教授	東 浩紀	社会情報学特別講義 II	国際大学グローバル・コミュニケーション・センター
	客員助教授	永井 由美子	学際理数情報学特別講義 I (病 気のため取止め)	多摩美術大学美術学部
平成 17	客員教授	フリアン クルマス	社会情報学特論 II	ドイツー日本研究所
	客員助教授	深尾 葉子	文化・人間情報学特論 V	大阪外国語大学外国語学部
	客員助教授	宇治橋 祐之		NHKエディケーショナル
平成 18	客員教授	佐藤 哲	文化・人間情報学特論 VIII	長野大学産業社会学部
	客員助教授	魏 晶玄	文化・人間情報学特論 IX	ソウル(社)コンテンツ経営研究所

3 学府の学生数

	2002	2003	2004	2005	2006
修士	113	128	136	151	166
博士	26	41	69	83	113
教育部研究生	126	137	137	148	144
外国人研究生	2	2	4	17	22
計	267	308	346	399	445



4 教育部

教育部入学試験

平成 14(2002)年度から平成 18(2006)年度入学志願者数・受験者数・合格者数

年度	受入 予定 人員	日本人 ／外国 人	志願者			受験者			合格者		
			本学	他大 学	計	本学	他大 学	計	本学	他大 学	計
平 成 14(2002) 年度	約 50	日本人	57	27	84	50	25	75	41	9	50
		外国人	3	6	9	3	5	8	0	2	2
		計	60	33	93	53	30	83	41	11	52
平 成 15(2003) 年度	約 50	日本人	65	22	87	59	21	80	47	10	57
		外国人	0	1	1	0	1	1	0	1	1
		計	65	23	88	59	22	81	47	11	58
平 成 16(2004) 年度	約 50	日本人	90	41	131	81	40	121	44	13	57
		外国人	1	1	2	1	1	2	0	1	1
		計	91	42	133	82	41	123	44	14	58
平 成 17(2005) 年度	約 50	日本人	90	47	137	79	46	125	43	12	55
		外国人	1	3	4	1	3	4	0	1	1
		計	91	50	141	80	49	129	43	13	56
平 成 18(2006) 年度	約 50	日本人	81	32	113	78	30	108	48	7	55
		外国人	0	1	1	0	1	1	0	0	0
		計	81	33	114	78	31	109	48	7	55
合計		日本人	383	169	552	347	162	509	223	51	274
		外国人	5	12	17	5	11	16	0	5	5
		計	388	181	569	352	173	525	223	56	279

5 コンテンツ創造科学産学連携教育プログラム

■カリキュラム概要

1) デジタルコンテンツ創造科学講義Ⅰ：コンテンツ制作理論

担当：濱野保樹

コンテンツ制作のワークフローとロジスティックスについて、理論的側面、実践的側面の両者に関して検討し、ケーススタディを通してプロジェクト立案と遂行に必要な知識を学ぶ。

2) デジタルコンテンツ創造科学講義Ⅱ：コンテンツ制作技術論

担当：七丈直弘

基本的な映像製作技術（CGモデリング等）について概観した後、先端的な科学技術の映像製作への適用によって生ずる課題、およびそれが及ぼす技術面、製作面への影響について具体例を基に論じる。

3) デジタルコンテンツ創造科学講義Ⅲ：グローバルストラテジー論

担当：未定

コンテンツ産業における国際市場、国際マーケティング、貿易制度、国際共同製作、文化摩擦、各政府の文化政策、人材育成などについて、わが国との相違を中心に論じる。

4) デジタルコンテンツ創造科学講義Ⅳ：コンテンツ法務

担当：八代英輝

日本と海外の契約概念の違いを踏まえた、国際取引にも適用できる著作権法、契約法及び関連法規の基礎知識について、国内及び米国のケース研究、判例研究を基に論じる。

5) デジタルコンテンツ創造科学講義Ⅴ：コンテンツ財務

担当：逸見圭朗

コンテンツ分野において重要性を増す、金融およびファイナンス形式に関する基礎知識、コンテンツファイナンスの現状と動向、およびコンテンツへの投資における判断基準について具体例を基に論じる。

6) デジタルコンテンツ創造科学講義Ⅵ：コンテンツ文化史

担当：吉田正高

戦後日本のコンテンツから、時系列編年で多様なジャンルのコンテンツの歴史を概観し、その黎明期の源泉や背景にある時代性を基に各々の関連性について考察する。またそれら過去の作品と現代のコンテンツ作品との比較、関連性について具体例を基に論じる。

7) エンタテインメントテクノロジー研究Ⅰ：バーチャルリアリティ

担当：舘 暲

バーチャルリアリティ技術の数理的側面、技術的側面、社会的側面にする基礎的議論から、具体的な応用事例（バーチャルリアリティシアター、デジタルアーカイブ、コミュニケーション）までを論じる。また、それら技術の、エンターテインメントへの応用について考察する。

8) エンタテインメントテクノロジー研究Ⅱa：コンピュータグラフィックス

担当：西田友是、高橋成雄

コンテンツ産業の基盤技術の観点から3次元CGの基礎（座標変換、データ構造、陰影計算、材質表現、アニメーションの基礎）について論じる。

9) エンタテインメントテクノロジー研究Ⅱb：コンピュータグラフィックス

担当：西田友是

コンピュータグラフィックスを構成する諸要素（モデリング技術、レンダリング技術、高速化技術）を論じ、先端研究に触れる。また、それら諸技術のエンターテインメントへの応用について論じる。

10) エンタテインメントテクノロジー研究Ⅲ：コンテンツデザイン

担当：広瀬通孝、谷川智洋、岩井俊雄

情報技術による仮想世界が現実世界と重層的な関係を持つための技術である複合現実感（MR）について、バーチャルリアリティ（VR）技術の成立、その技術的な必然性などについて解説した後、リアルとバーチャルの融合技術についてウェアラブルコンピュータ、ライフログ、デジタルパブリックアートといった具体例とともに論じる。

11) エンタテインメントテクノロジー研究Ⅳ：デジタル映像処理

担当：池内克史、五十嵐健夫

画像処理の基礎、幾何学的理論に基づく処理法、光学・物理学に基づく処理理論、統合法・認識理論などを基に、工学的に人間の視覚機構と見かけの働きが同じようなアルゴリズムを開発するコンピュータビジョンに関して実際の応用例とともに概説する。また、使いやすいインタフェースをデザインするための方法論、研究についても実例を基に論じる。

12) エンタテインメントテクノロジー研究Ⅴ：アーカイブ技術

担当：馬場 章

デジタルコンテンツの展示・保存を担うアーカイブ技術の基礎的技術について学び、実際のデジタルアーカイブの事例をみながら、そのエンターテインメントへの応用について論じる。

13) エンタテインメントテクノロジー研究Ⅵ：コンテンツ知覚心理

担当：佐藤隆夫

コンテンツの企画、製作の際に必要な視聴覚の基本的なメカニズム、およびそれを解明するための

実験手法について論じる。また、視聴覚における心理的なリアリティー、視聴覚に関わる錯視などの興味深い現象や視聴覚、特に視覚的な安全性についても論じる。

14) エンタテインメントテクノロジー研究Ⅶ：制作展示プロデュース

担当：荒川忠一

各自の専門性、志向性を基に作品を制作し、完成した作品を展示した作品展を開催する。それらの一連のプロセスを通して、さまざまな表現手法を議論しながら学ぶとともに、作品展の開催に向けた企画のプロデュース、マネージメント、プロモーションについても学ぶ。

15) エンタテインメントテクノロジー研究Ⅷ：インターフェイスデザイン

担当：苗村 健

人間の感覚系に関する様々な知見と、それに基づくヒューマンインタフェースの実装・デザインについて技術的な観点から論じる。また、現在の技術的背景のもとで、今後どのようなインタフェースが必要となり、また何が必要とされるのかについて議論し、考察を行う。

16) エンタテインメントテクノロジー研究Ⅸ：先端科学技術と芸術表現論

担当：河口洋一郎

デジタルコンテンツの基礎となるCG技術に関し、先端科学技術と芸術表現の相互触発作用という観点から展望し、わが国のメディア芸術・CGアートの現状について論じる。

17) デジタルコンテンツ創造科学演習Ⅰ：インターンシップ

担当：馬場 章、藤原正仁

これまでの授業で修得した基礎理論や知識を踏まえ、コンテンツ産業の現場の経験知や実務を学び、新たなデジタルコンテンツ創造に結びつけることができる能力を体得することを目的とし、企業でのインターンシップ実地研修を行う。また、派遣前の準備として「インターンシップ事前研修」、派遣後に研修の振り返りと経験の共有等を目的とした「インターンシップ事後研修」を学内で実施する。

18) デジタルコンテンツ創造科学演習Ⅱa：製作・マーケティングシミュレーション

ゲームプロデュースゼミ

担当：馬場 章、遠藤雅伸

ゲームの本質的な面白さの具現化を目的とし、ゲームプロデューサーのプリプロダクションへの関わり方をシミュレートし、ボードゲームによってゲームのプロトタイプ開発を行う。既存のボードゲームの分析、評価に基づく必勝法(ストラテジー)の構築を通してそのゲームの面白さの本質について考察し、これを踏まえたゲームのプロトタイプ制作を各自のスキルに合わせて行うことで、ゲームプロデューサーとしての実践力の修得を目標とする。

19) デジタルコンテンツ創造科学演習Ⅱb：製作・マーケティングシミュレーション

アニメ・映像企画ゼミ

担当：七丈直弘、吉田正高、八巻 馨、辻本幸七、各教官

アニメーションや映像を主体としたコンテンツの製作に関連する各工程（プリプロダクション、プロダクション、公開、配給、リクープ）の構造と実務、および企画立案の基礎から販売方法や配信媒体に合わせた企画の立て方など、実践的な知識を用いて自ら企画立案を試みる。さらに、自らの企画を用いた短編映像作品の制作、それを用いたマーケティングやプロモーションの企画作業を体験することで、この分野でビジネスを推進する上で必要となる実践力の修得を目標とする。

20) デジタルコンテンツ創造科学演習Ⅱc：製作・マーケティングシミュレーション

検索技術と情報ビジネス

担当：相澤清晴、山田和明、各教官

インターネットポータルビジネスの実際のコンテンツを中心として、ウェブ検索技術や新しいコンテンツ創造の場として注目されるブログサービスなど最先端の検索技術とサービス、それらを活用した情報ビジネスの現状と未来について学ぶ。また、Developer Network のビジネス活用企画に関する演習を実施し、最新技術とサービスを融合し、新しいビジネスモデルを構築できるインターネットビジネスの今後を担う実践力の修得を目標とする。

21) デジタルコンテンツ創造科学演習Ⅲ：論文作成

担当：荒川忠一、苗村 健、青木輝勝

教育プログラムで修得した知識、経験を踏まえ、新たなデジタルコンテンツを生み出すための科学技術や、コンテンツに関するマーケティングや商品流通の実態と今後の展望など、デジタルコンテンツの発展につながる内容をテーマに、論文執筆を行う。

22) デジタルコンテンツ創造科学特論Ⅰ：作品研究

担当：潰野保樹、各教官

さまざまなコンテンツ作品を毎回選び、その製作に携わった実務者による作品製作の意図および過程（関わり方、戦略、成果評価など）における重要事項の解説およびディスカッションを通じて、コンテンツが成立するために必要となる様々な知識を総合的に修得する。

23) デジタルコンテンツ創造科学特論Ⅱ：アニメーション制作の理論と実践

担当：浜野保樹、鈴木敏夫、押井 守、石川光久、各教官

日本のアニメーション製作の第一線で活躍している実務者による、製作形態、国際戦略、アニメーション関連のビジネスモデルなどの、現状と今後の課題に関する解説およびディスカッションを通じてアニメーション製作に必要とされる実践的な知識を修得する。

24) デジタルコンテンツ創造科学特論Ⅲa：ゲームプロデューサー論 a

担当：馬場 章、岩谷 徹、遠藤雅伸、各教官

ゲームの開発工程からゲームプランニング、ゲームデザイン、プロジェクトマネジメント、そしてゲームテクノロジー、R&D（研究開発）といった、企画と制作の過程を中心に、新しいゲームをいかに企画し、いかなる技術を用いてどのように制作するのかという問題について、ゲームプロデューサーの視点から論じる。

25) デジタルコンテンツ創造科学特論Ⅲb：ゲームプロデューサー論 b

担当：馬場 章、松原健二、小沼謙太郎、各教官

ゲームの製作工程から特にファイナンス、リーガル、マーケティング、プロモーション、リーテイルなどのビジネス的な内容を中心に、ゲーム開発におけるそれらの役割と実際を、国際的なゲーム情報の流通という視点とゲームプロデューサーの視点から論じる。

26) デジタルコンテンツ創造科学特論Ⅳ：映画産業論

担当：公野 勉

映画業界における製作・買付・配給・興行までにおよぶ産業構造を解説し、その国内外の市場実態を踏まえたコンテンツ戦略の在り方について論じる。また各論として映画製作におけるディベロップメント・撮影・ポストプロダクションの実際についても解説を行う。

27) デジタルコンテンツ創造科学特論Ⅴ：デジタルメディア

担当：青木輝勝

近年、様々な分野でコンテンツの重要性に対する意識が高まっている背景を踏まえ、映画やアニメーション、ゲームといった現在の主流分野以外のより広義なコンテンツ（TV コンテンツ、出版コンテンツ、ケータイコンテンツ等）に焦点を当て、これらの現状と今後の動向について論じる。

科目・開講時期一覧

科目番号	科目名	担当教員	単位数	開講時期	備考
A001	デジタルコンテンツ創造科学講義Ⅰ： コンテンツ制作理論	浜野保樹	2	夏学期	※1
A002	デジタルコンテンツ創造科学講義Ⅱ： コンテンツ制作技術論	七丈直弘	2	夏学期	※1
A003	デジタルコンテンツ創造科学講義Ⅲ： グローバルストラテジー論	(未定)	2	(未定)	※1 ※6
A004	デジタルコンテンツ創造科学講義Ⅳ：	八代英輝	2	冬学期	※1

	コンテンツ法務				
A005	デジタルコンテンツ創造科学講義Ⅴ： コンテンツ財務	逸見圭朗	2	夏学期	※1
A006	デジタルコンテンツ創造科学講義Ⅵ： コンテンツ文化史	吉田正高	2	冬学期	※1
B001	エンタテインメントテクノロジー研究Ⅰ： バーチャルリアリティ	舘 暲	2	夏学期	※2 ※6
B002a	エンタテインメントテクノロジー研究Ⅱa： コンピュータグラフィックス	西田友是 高橋成雄	2	夏学期	※2
B002b	エンタテインメントテクノロジー研究Ⅱb： コンピュータグラフィックス	西田友是	2	夏学期	※2 ※6
B003	エンタテインメントテクノロジー研究Ⅲ： コンテンツデザイン	廣瀬通孝 谷川智洋 岩井俊雄	2	夏学期	※2
B004	エンタテインメントテクノロジー研究Ⅳ： デジタル映像処理	池内克史 五十嵐健夫	2	夏学期	※2
B005	エンタテインメントテクノロジー研究Ⅴ： アーカイブ技術	馬場 章	2	冬学期	※2
B006	エンタテインメントテクノロジー研究Ⅵ： コンテンツ知覚心理	佐藤隆夫	2	夏学期	※2
B007	エンタテインメントテクノロジー研究Ⅶ： 制作展示プロデュース	荒川忠一	2	通年開講	※2
B008	エンタテインメントテクノロジー研究Ⅷ： インタフェースデザイン	苗村 健	2	夏学期	※2
B009	エンタテインメントテクノロジー研究Ⅸ： 先端科学技術と芸術表現論	河口洋一郎	2	冬学期	※2
C001	デジタルコンテンツ創造科学演習Ⅰ： インターンシップ	馬場 章 藤原正仁	6	通年開講	※3
C002a	デジタルコンテンツ創造科学演習Ⅱa： 製作・マーケティングシミュレーション ゲームプロデュースゼミ	馬場 章 遠藤雅伸	6	通年開講	※3
C002b	デジタルコンテンツ創造科学演習Ⅱb： 製作・マーケティングシミュレーション アニメ・映像企画ゼミ	七丈直弘 吉田正高 八巻 磐 辻本幸七	6	通年開講	※3
C002c	デジタルコンテンツ創造科学演習Ⅱc：	相澤清晴	6	通年開講	※3

	製作・マーケティングシミュレーション 検索技術と情報ビジネスゼミ	山田和明 各教員			
C003	デジタルコンテンツ創造科学演習Ⅲ： 論文作成	荒川忠一 苗村 健 青木輝勝	6	通年開講	※3
D001	デジタルコンテンツ創造科学特論Ⅰ： 作品研究	浜野保樹 梶浦斉史 小倉正樹 各教員	2	通年開講	※4
D002	デジタルコンテンツ創造科学特論Ⅱ： アニメーション制作の理論と実践	浜野保樹 鈴木敏夫 押井 守 石川光久 各教員	2	通年開講	※4
D003a	デジタルコンテンツ創造科学特論Ⅲa： ゲームプロデューサー論	馬場 章 岩谷 徹 遠藤雅伸 各教員	2	夏学期	※4 ※5
D003b	デジタルコンテンツ創造科学特論Ⅲb： ゲームプロデューサー論	馬場 章 松原健二 小沼謙太郎 各教員	2	冬学期	※4 ※5
D004	デジタルコンテンツ創造科学特論Ⅳ： 映画産業論	公野 勉	2	冬学期	※4
D005	デジタルコンテンツ創造科学特論Ⅴ： デジタルメディア	青木輝勝	2	冬学期	※4

備考

- ※1 科目番号 A001～A006 の中から 3 科目以上を選択の上、履修する
- ※2 科目番号 B001～B009 の中から 2 科目以上を選択の上、履修する
- ※3 科目番号 C001～C003 の中からいずれか 1 科目を選択の上、履修する
- ※4 科目番号 D001～D005 の中から 2 科目以上を選択の上、履修する
- ※5 科目番号 D003a、D003b を併修した場合の認定単位は 2 科目合計で 2 単位とする
- ※6 平成 18 年度開講せず

6 予算

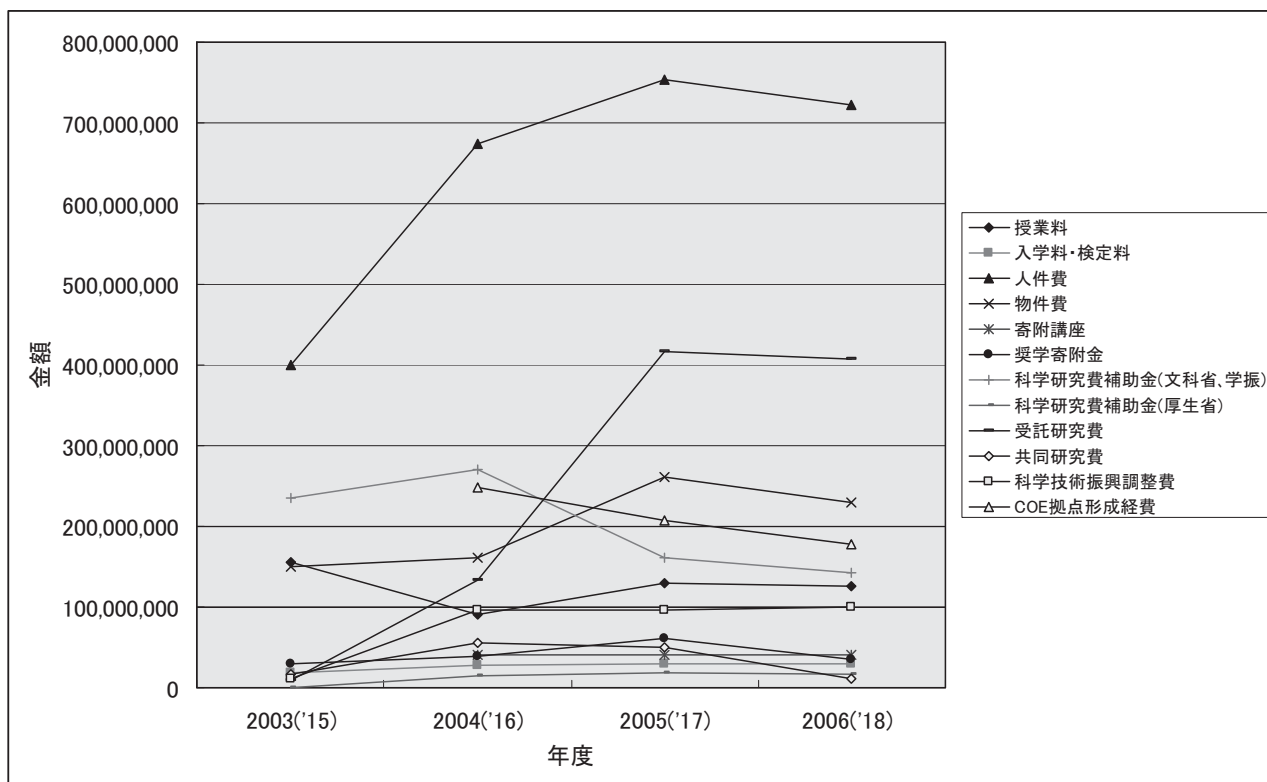
・情報学環

	2003('15)		2004('16)		2005('17)		2006('18)	
	件数	金額	件数	金額	件数	金額	件数	金額
授業料	—	156,240,000	—	90,136,400	—	130,079,250	—	126,550,530
入学料・検定料	—	19,344,000	—	28,393,000	—	30,056,800	—	30,227,200
人件費	—	400,697,242	—	674,461,271	—	754,176,257	—	722,514,839
物件費	—	150,090,000	—	160,385,580	—	261,876,000	—	228,921,285
寄附講座			1	40,000,000	1	40,000,000	1	40,000,000
奨学寄附金	27	29,860,000	38	38,110,800	38	60,357,398	34	35,269,141
科学研究費補助金 (文科省、学振)	25	235,800,000	27	270,780,000	32	161,200,000	36	142,525,000
科学研究費補助金 (厚生省)	—	—	5	14,500,000	5	18,000,000	5	17,000,000
受託研究費	6	8,365,000	17	132,979,479	22	417,571,620	16	407,165,816
共同研究費	8	16,720,000	16	54,677,750	13	49,205,030	7	10,985,000
科学技術振興調整 費	1	11,018,000	2	96,572,000	1	97,204,000	1	99,998,000
COE 拠点形成経 費			1	248,000,000	1	188,000,000	1	177,180,000

・社会情報研究所

	2003('15)							
	件数	金額						
授業料	—	4,161,200						
入学料・検定料	—	4,842,000						
人件費	—	188,609,768						
物件費	—	98,583,000						
寄附講座	—	—						
奨学寄附金	4	1,400,000						
科学研究費補助金	12	38,000,169						
受託研究費	1	4,800,000						
共同研究費	—	—						
科学技術振興調整費	—	—						

(注) 2003 年度の予算額について、社会情報研究所と大学院情報学環で重複して計上されているものがあるために、単純に合計することはできない。



7 土地・建物面積

・建物

建物名	建築年度	面積（延㎡）
学環本館	S.27	472
	S.29	26
	S.33	360
	S.58	4,171
	計	5,029
暫定アネックス	H.13	1,013
工学部 2 号館	*H18	*500
目白台西 1 号館	*H18	*492
目白台西 2 号館	*H18	*545
第 2 本部棟	*H18	*548

*=使用年度・使用㎡数

・学外スペース

文京区本郷(フローラル)	117.71 ㎡
文京区本郷(MAビル)	82.73 ㎡

8 入試定数と受入数

	修士		博士	
	入学定員	受入予定人員	入学定員	受入予定人員
平成 14(2002)	37	48	16	20
平成 15(2003)	37	48	16	20
平成 16(2004)	70	70	30	30
平成 17(2005)	70	70	30	30
平成 18(2006)	85	90	36	38

2005 年度修士入学試験詳細

志願者

本学	31
他大学	147

合格者

本学	23
他大学	52

入学者

本学	18
他大学	52

志願者

日本人	160
外国人	18

合格者

日本人	69
外国人	6

入学者

日本人	64
外国人	6

志願者

男	120
女	58

合格者

男	47
女	28

入学者

男	43
女	27

志願者

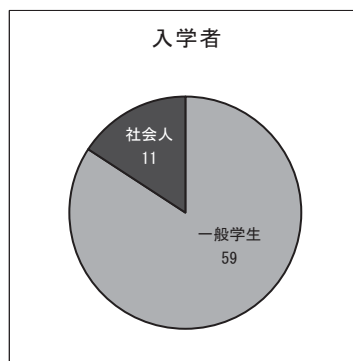
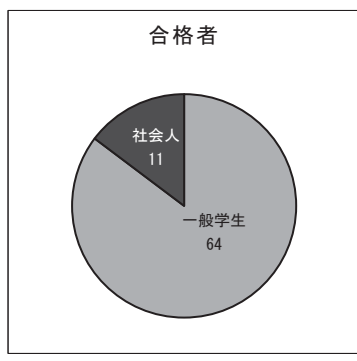
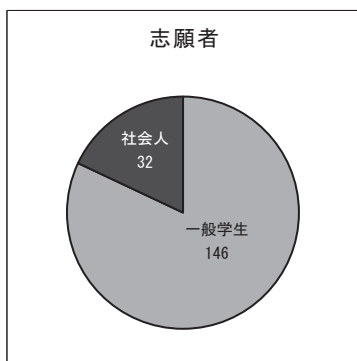
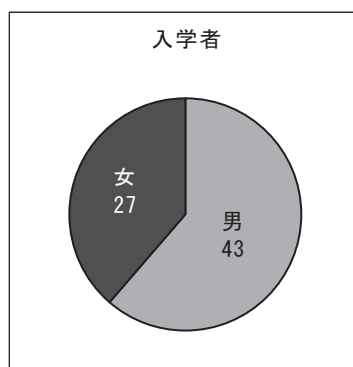
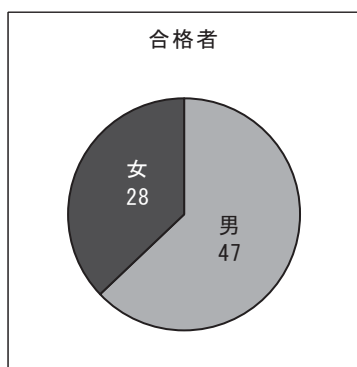
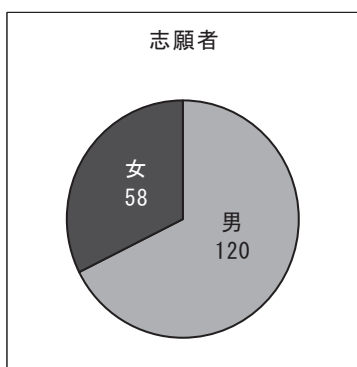
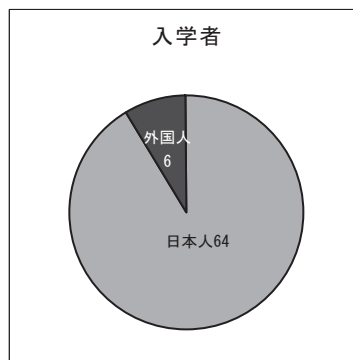
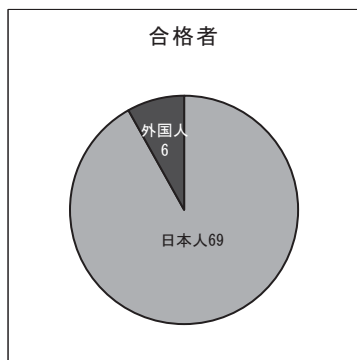
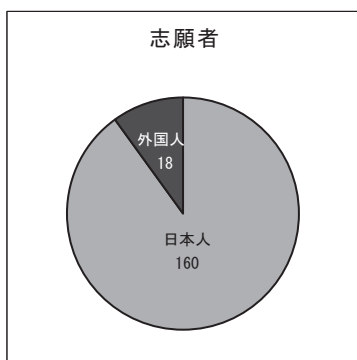
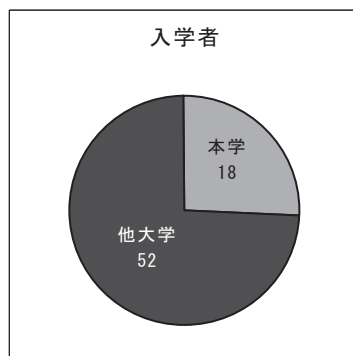
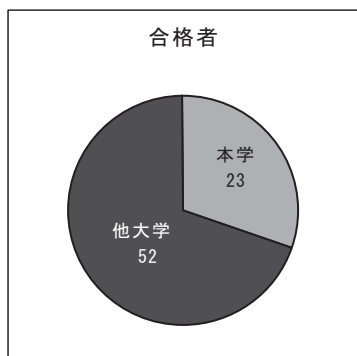
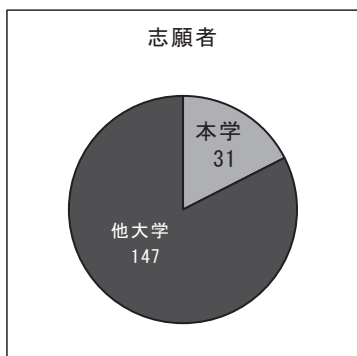
一般学生	146
社会人	32

合格者

一般学生	64
社会人	11

入学者

一般学生	59
社会人	11



2005 年度博士入学試験詳細

志願者

本学	39
他大学	16

合格者

本学	23
他大学	2

入学者

本学	23
他大学	2

志願者

日本人	48
外国人	7

合格者

日本人	22
外国人	3

入学者

日本人	22
外国人	3

志願者

男	35
女	20

合格者

男	18
女	7

入学者

男	18
女	7

志願者

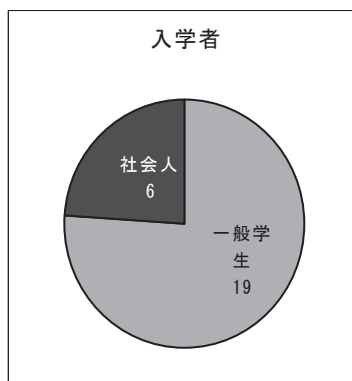
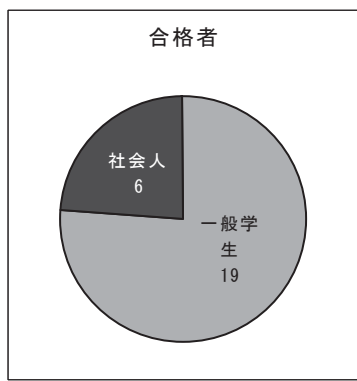
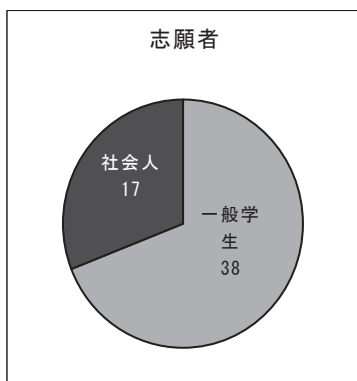
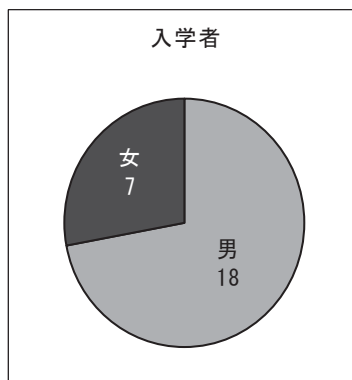
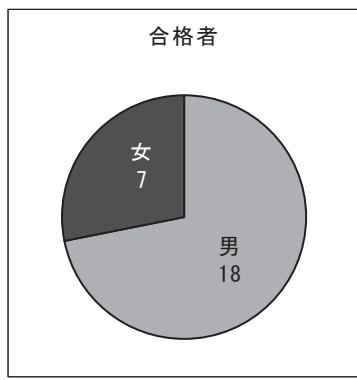
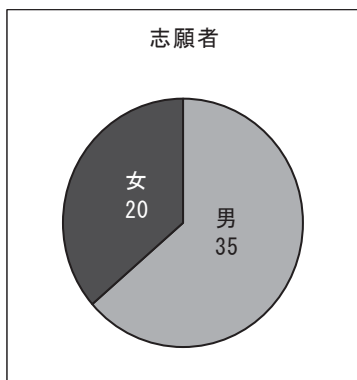
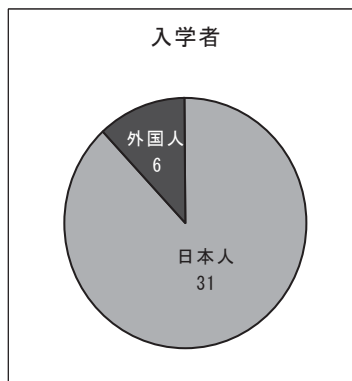
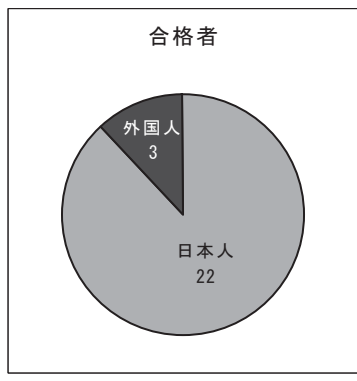
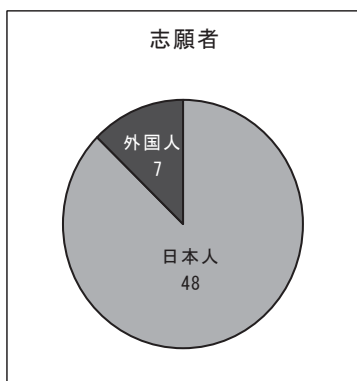
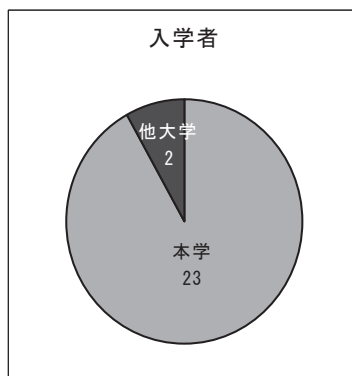
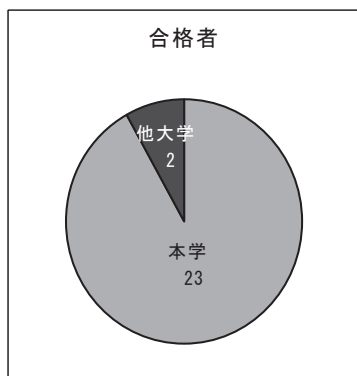
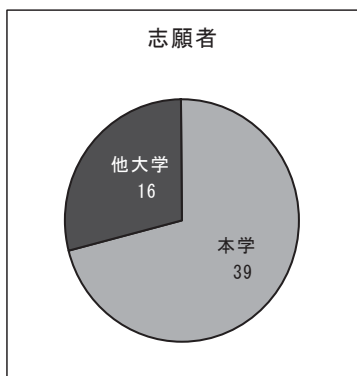
一般学生	38
社会人	17

合格者

一般学生	19
社会人	6

入学者

一般学生	19
社会人	6



9 年度別入試データ詳細

修士

	2002	2003	2004	2005	2006
志願者	219	134	157	178	225
合格者	52	58	53	75	85
入学者	50	56	47	70	80

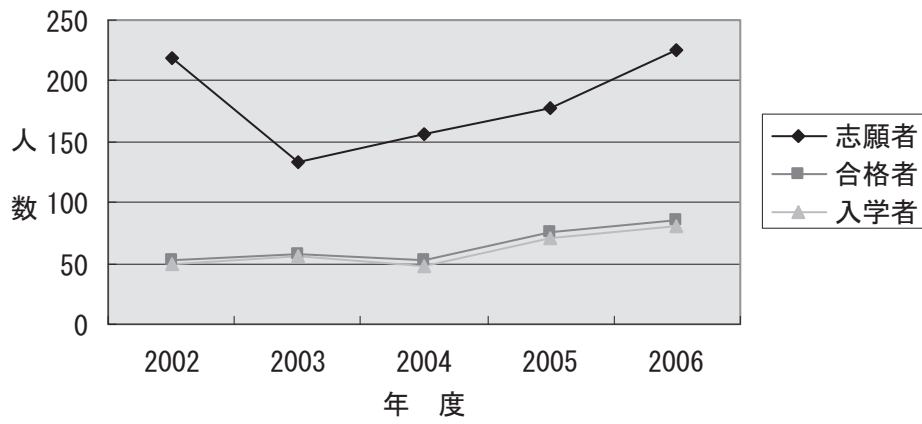
博士

	2002	2003	2004	2005	2006
志願者	43	29	34	55	62
合格者	26	15	21	25	37
入学者	26	15	21	25	37

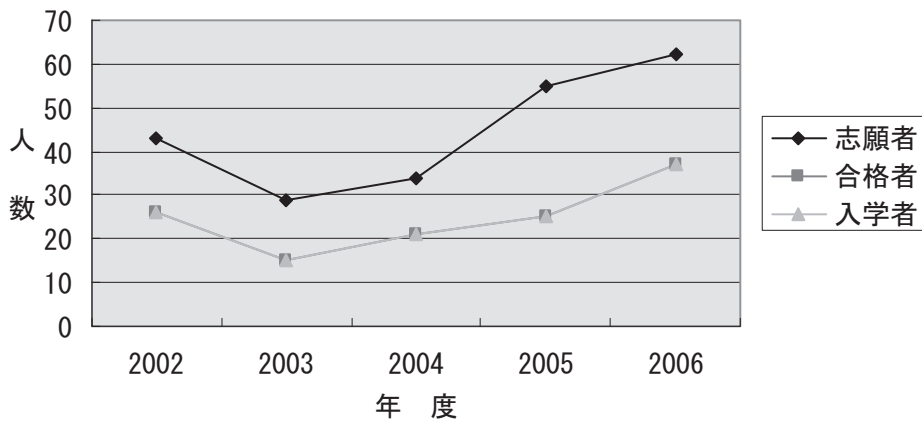
志願倍率

	2002	2003	2004	2005	2006
修士	5.92	3.62	4.24	2.54	2.65
博士	2.69	1.81	2.13	1.83	1.72

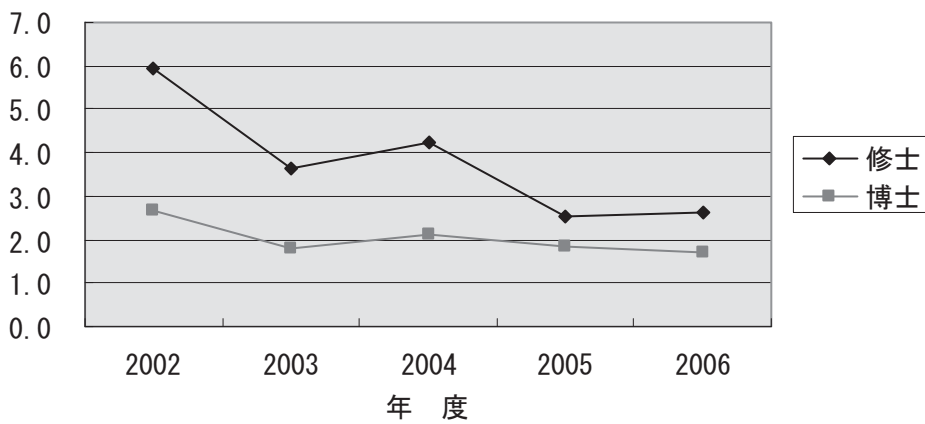
志願者・合格者・入学者の推移（修士課程）



志願者・合格者・入学者の推移（博士課程）



志願倍率



2006 年度修士入学試験詳細

志願者

本学	35
他大学	190

合格者

本学	19
他大学	66

入学者

本学	14
他大学	66

志願者

日本人	186
外国人	39

合格者

日本人	72
外国人	13

入学者

日本人	67
外国人	13

志願者

男	148
女	77

合格者

男	48
女	37

入学者

男	45
女	35

志願者

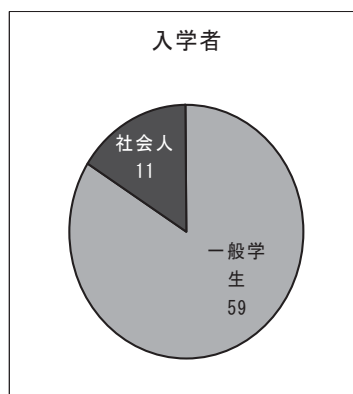
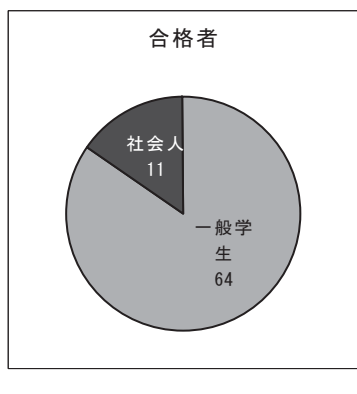
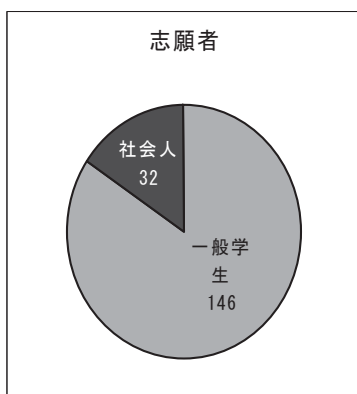
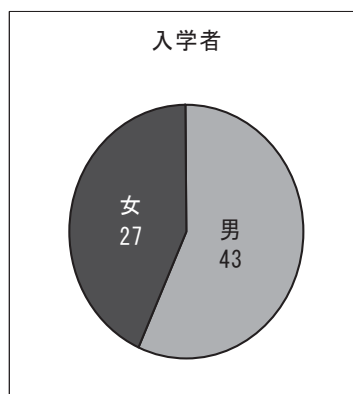
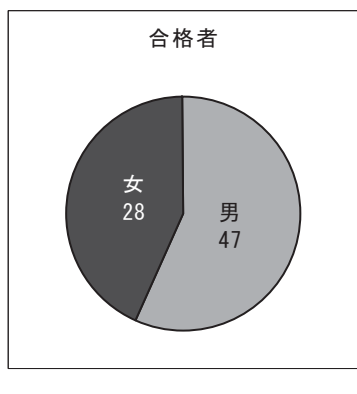
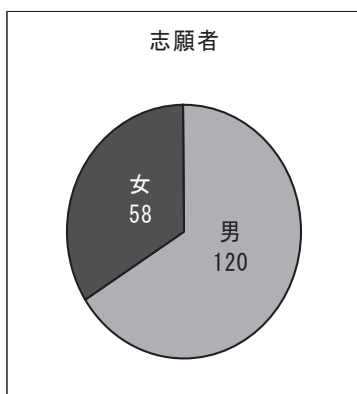
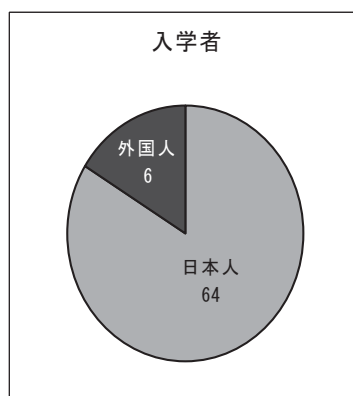
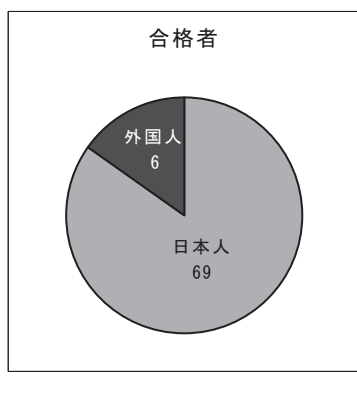
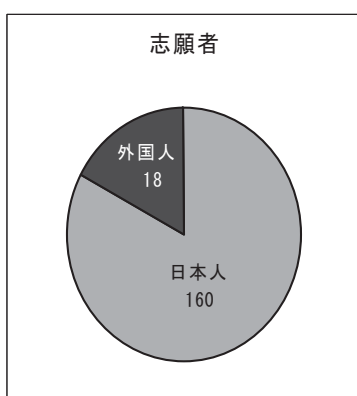
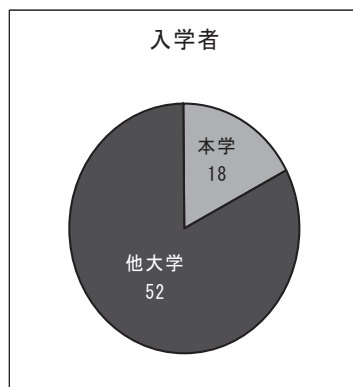
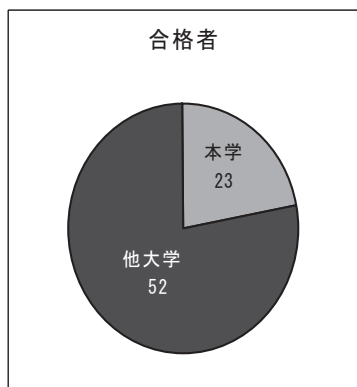
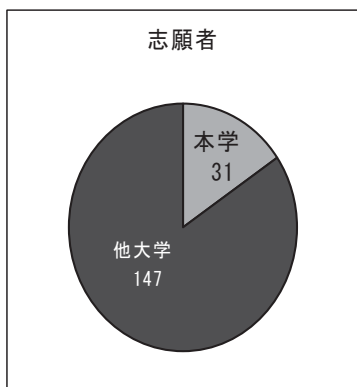
一般学生	190
社会人	35

合格者

一般学生	72
社会人	13

入学者

一般学生	67
社会人	13



2006 年度博士入学試験詳細

志願者

本学	38
他大学	24

合格者

本学	33
他大学	4

入学者

本学	33
他大学	4

志願者

日本人	51
外国人	11

合格者

日本人	31
外国人	6

入学者

日本人	31
外国人	6

志願者

男	36
女	26

合格者

男	24
女	13

入学者

男	24
女	13

志願者

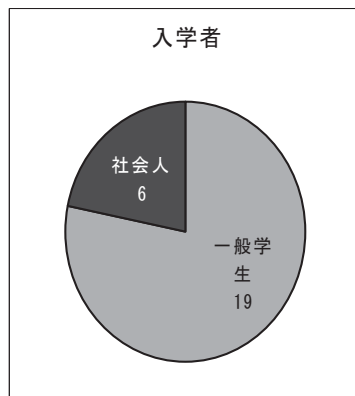
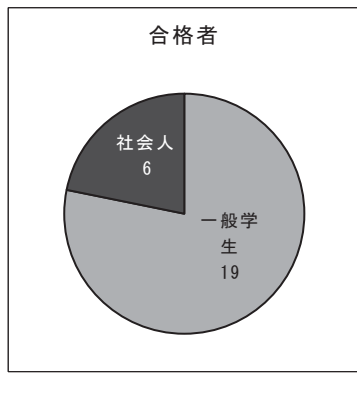
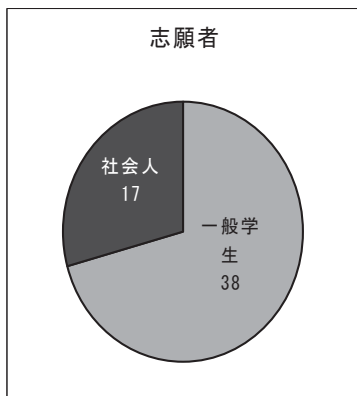
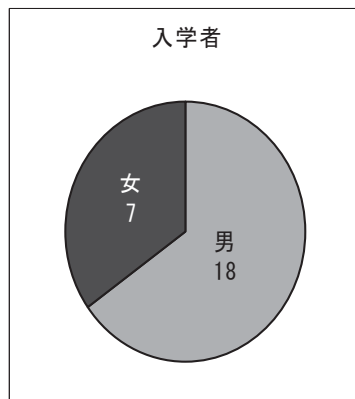
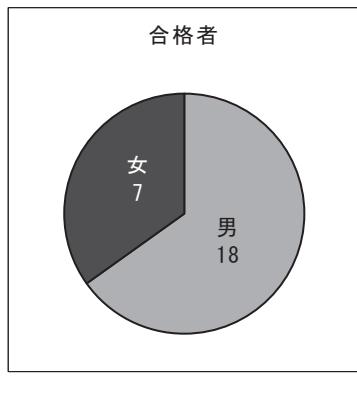
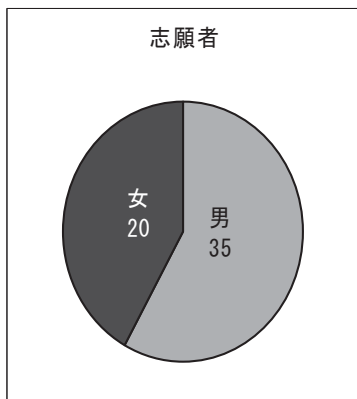
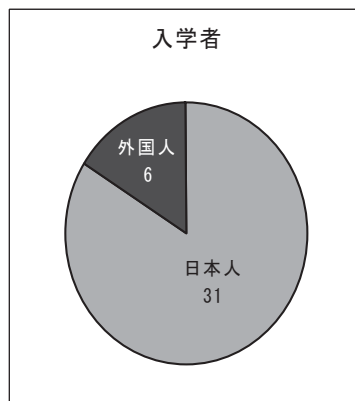
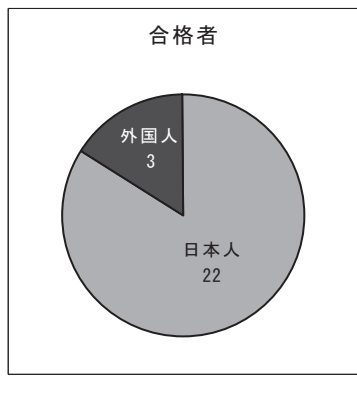
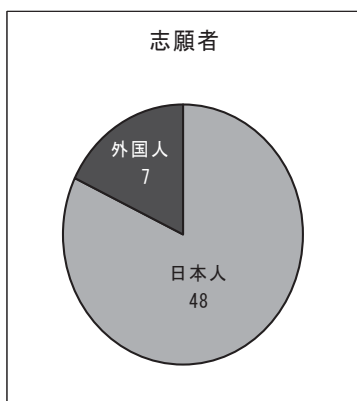
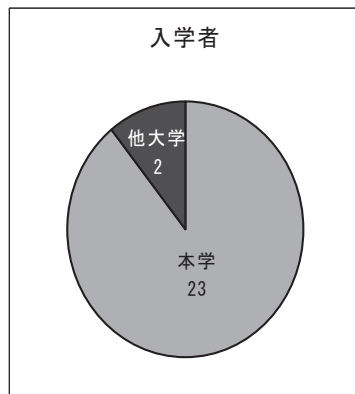
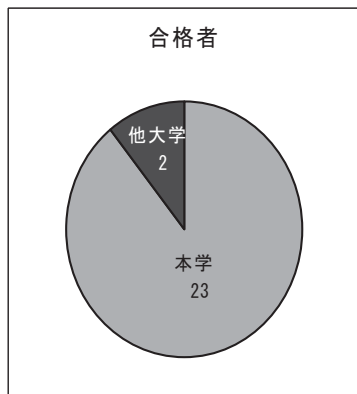
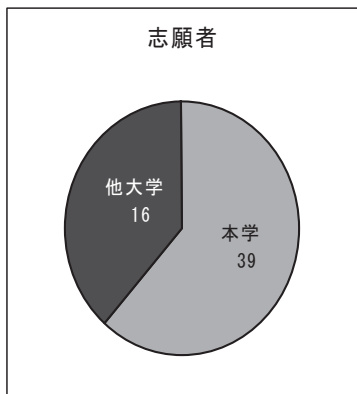
一般学生	44
社会人	18

合格者

一般学生	29
社会人	8

入学者

一般学生	29
社会人	8

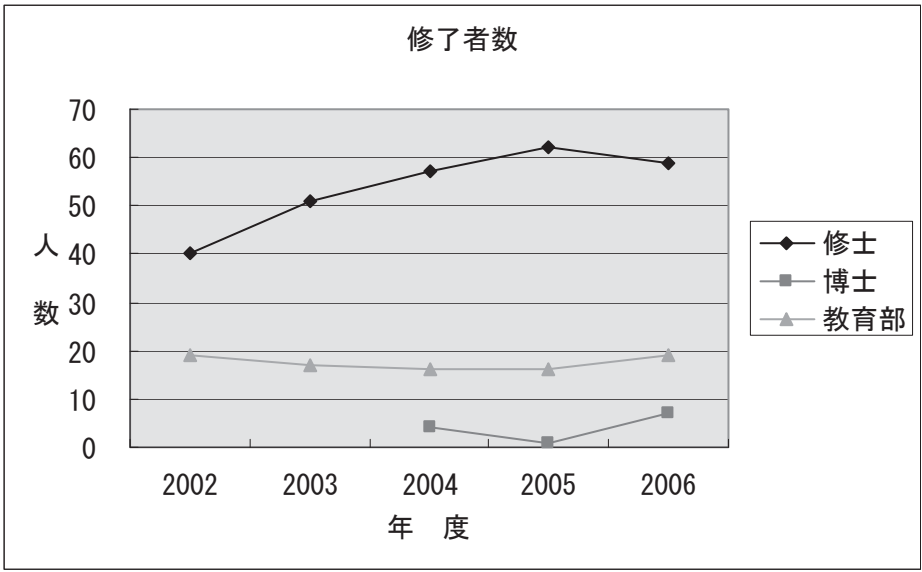


10 修了者数の推移

平成 14(2002)年度から平成 18(2006)年度修了者数

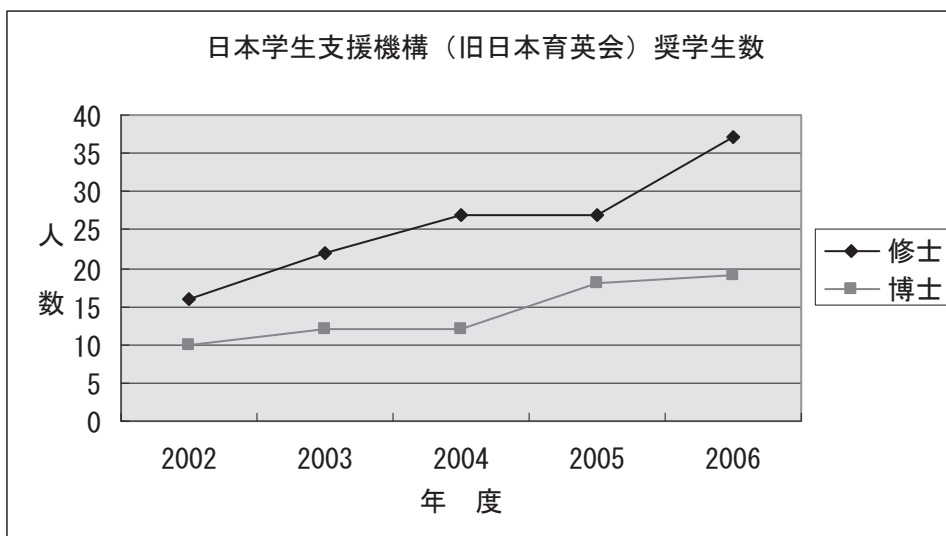
年度		修了者		
		本学	他大学	計
平成 14(2002)年度	日本人	12	7	19
	外国人	0	0	0
	計	12	7	19
平成 15(2003)年度	日本人	7	9	16
	外国人	0	1	1
	計	7	10	17
平成 16(2004)年度	日本人	9	6	15
	外国人	0	1	1
	計	9	7	16
平成 17(2005)年度	日本人	5	11	16
	外国人	0	0	0
	計	5	11	16
平成 18(2006)年度	日本人	8	10	18
	外国人	0	1	1
	計	8	11	19
合計		41	43	84
		0	3	3
		41	46	87

	2002	2003	2004	2005	2006
修士	40	51	57	62	59
博士			4	1	7
教育部	19	17	16	16	19



11 学生支援機構（旧育英会）奨学生数

	第一種		第二種		合計	
	修士	博士	修士	博士	修士	博士
2002 年度	12	10	4	0	16	10
2003 年度	14	9	8	3	22	12
2004 年度	18	12	9	0	27	12
2005 年度	16	17	11	1	27	18
2006 年度	21	18	16	1	37	19



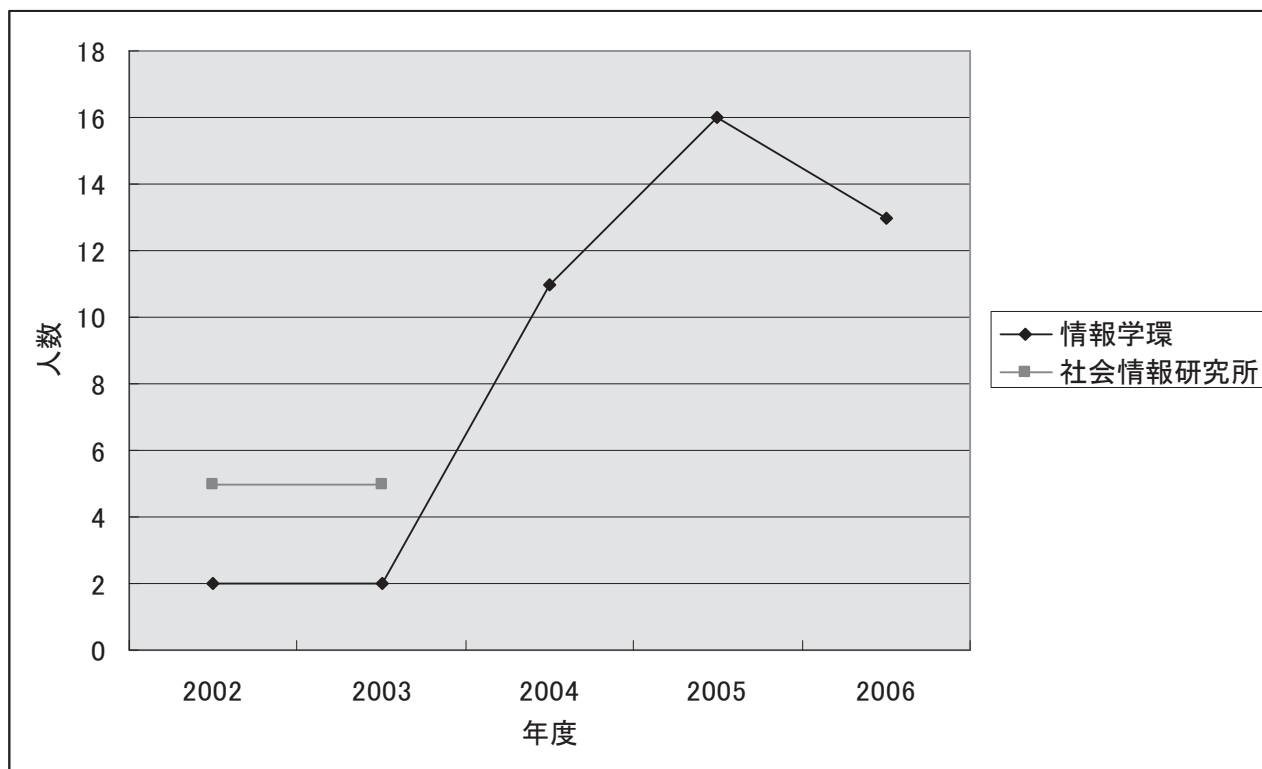
12 日本学術振興会特別研究員数

学際情報学府

	DC 1	DC 2	合計
2002 年度	1	0	1
2003 年度	0	0	0
2004 年度	1	0	1
2005 年度	1	0	1
2006 年度	4	2	6

13 リサーチアシスタント数

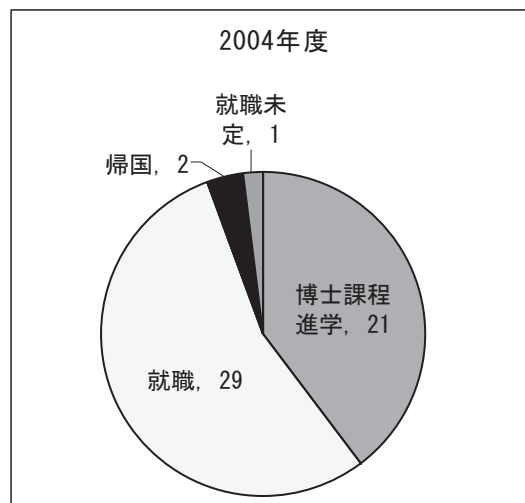
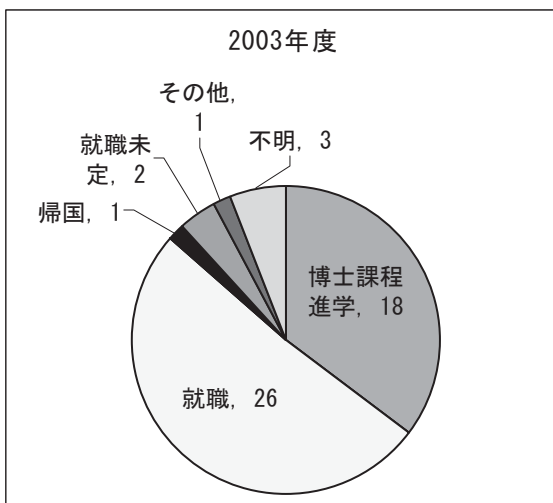
	情報学環	社会情報研究所
2002	2	5
2003	2	5
2004	11	
2005	16	
2006	13	

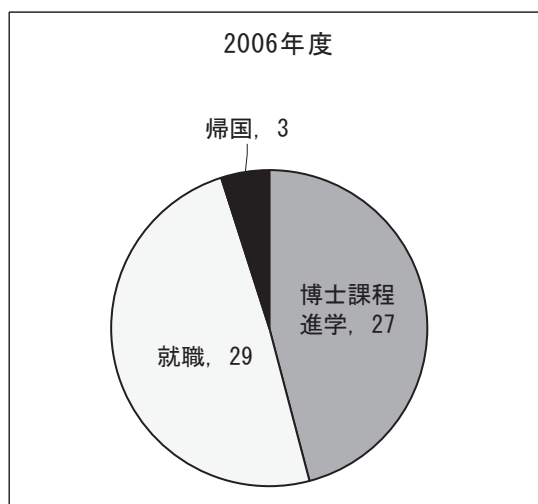
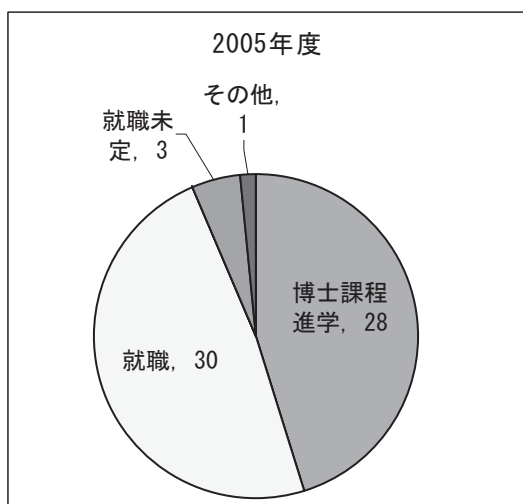


14 就職状況

学際情報学府修士課程修了者 進路状況資料 (2003年度～2006年度)

区 分		2003年度			2004年度			2005年 度	2006年 度
		学際情報学 コース	実践情報学 コース	計	学際情報学 コース	実践情報学 コース	計		
博士課程 進学	学際情報学府	8	9	17	14	6	20	27	25
	学内他研究科	1		1	1		1	1	
	学外								2
海外留学									
就職		10	16	26	12	17	29	30	29
大学院研 究生	学際情報学府								
	学内他研究科								
帰国(外国人留学生)		1		1	1	1	2		3
就職未定			2	2	1		1	3	
その他		1		1				1	
不明		2	1	3					
合計		23	28	51	29	24	53	62	59





〈就職先一覧〉

2003 年度		2004 年度		2005 年度		2006 年度	
(株)野村総合研究所	2	(株)ホストンコンサルティング	2	(株)三菱総合研究所	2	(株)電通	2
(株)電通	3	グループ		(株)ワークスアプリーケー	1	(株)リクルート	2
(株)ディー・エヌ・エー	1	(株)任天堂	2	シヨonz		倉敷市立短期大学	1
(株)エヌ・ティ・ティ・ドコモ	1	(株)日本総合研究所	1	(株)ビービット	1	(株)フロム・ソフトウェア	1
(株)アクティブ・ワーク	1	(株)イースタンスポー	1	(株)takibi	1	(株)コスモ・スペース	1
(株)青土社	1	ツ	1	東日本旅客鉄道(株)	1	日本アイ・ビー・エム・	1
(株)モバイルビジネスソリューシ	1	(株)ソニー	1	(株)スタジオジブリ	1	サービス(株)	
ョン		NTT 研究所	1	ソニー・エリクソン・モ	1	日本アイ・ビー・エム・	1
ヤマハ(株)	1	(株)東京リーガルマイ		バイルコミュニケーション		システムズ・エンジニ	
三菱電機(株)	1	ンド	1	ヨン(株)		アリング(株)	
東日本電信電話(株)	1	YRP ユビキタスネットワーキ		(株)日立製作所	1	モルガン・スタンレー	1
任天堂(株)	1	ング研究所	1	楽天(株)	1	証券(株)	
日本電信電話(株)	1	(株)ジェアール東日本情		ベネッセコーポレーシ	1	沖電気工業(株)	1
日産自動車(株)	1	報システム	1	ヨン(株)		凸版印刷(株)	1
ナレッジプラットフォーム(株)	1	(株)日立製作所	1	(株)竹中工務店	1	(株)インフォバーン	1
チームラボ(株)	1	(株)博報堂	1	日本テレビ放送網(株)	1	(株)ブラップジャパン	1
ソニー(株)	1	(株)エヌ・ティ・ティ・ドコモ	1	アクセンチュア(株)	1	(株)ヒューマンルネッサ	1
キャノン(株)	1	(株)三井物産	1	学校法人駿河台学園	1	ンス研究所	
朝日新聞社	1	個人デザイン事務所	1	(株)アイ・ティ・フロンティ	1	(株)野村総合研究所	1
Singapore Press Holdings	1	日本経済新聞社	1	ア		セイコーインスツル(株)	1
McKinsey&Company	1	(株)サイバーエージェ		社団法人共同通信社	1	(株)日本総合研究所	1
Bain&Company	1	ント	1	ソフトバンク クリエイ	1	日本電信電話(株)	1
Japan,Inc		(株)電通	1	ティブ(株)		ゴールドマン・サック	1
Leo Barnett(米国)	1	衆議院議員事務所	1	日経ホーム出版社	1	ス証券(株)	
自営業(介護福祉業)	1	(株)日本テレビ放送網	1	淑徳与野高等学校	1	名古屋鉄道(株)	1
		(株)ベネッセコーポレ		(株)東芝	1	NTT コミュニケーショ	1
		ーション	1	三井物産(株)	1	ンズ(株)	
		(株)スクウェア	1	野村アセットマネジメ	1	日本生命保険相互会	1
		(株)ソニー・コンピュータエンタ		ント(株)		社	
		テイメント		読売新聞東京本社	1	(株)アイ・エム・ジェイ	1
		(株)セプテーニ	1	(株)博報堂 DY メディア	1	(株)ACCESS	1
		福山大学	1	パートナーズ		BOSCH(株)	1
		(株)NTT データ	1	(株)電通	1	フリープランナー・ライ	1
		(株)NEC ソフト	1	自由業	2	ター	
		シティバンク、エヌ・エ	1	特定非営利活動法人	1	NPO 法人日本臨床研	1
		イ		役員		究支援ユニット	
				その他(就職先不明)	1	日本放送協会	1

15 ベネッセ先端教育技術学講座

ウェブサイトアドレス <http://beatiii.jp/>

■スタッフ一覧

客員助教授 堀田龍也（メディア教育開発センター・助教授）

フェロー 中原淳（東京大学 大学総合教育研究センター 講師）

フェロー 山内祐平（東京大学大学院 情報学環 助教授）

コーディネータ 秋山大志（(株) ベネッセコーポレーション教育研究開発本部 Benesse 教育研究開発センター）

コーディネータ 中野真衣（(株) ベネッセコーポレーション教育研究開発本部 Benesse 教育研究開発センター）

コーディネータ 和気竜也（(株) ベネッセコーポレーション教育研究開発本部 Benesse 教育研究開発センター）

16 客員講座等

■平成14年

客員教授 鈴木 秀美

客員教授 市村 元

客員助教授 遠藤 薫

客員助教授 中村 功

■平成15年

客員教授 鈴木 正敏

客員教授 藤田 博司

客員助教授 毛利 嘉孝

客員助教授 港 千尋

■平成16年

客員教授 伊藤 守

客員教授 村上 由見子

客員助教授 東 浩紀

客員助教授 永井 由美子

■平成17年

客員教授 フロリアン クルマス

客員助教授 深尾 葉子
客員助教授 宇治橋 祐之
客員助教授 堀田 龍也

■平成18年

客員教授 佐藤 哲
客員助教授 魏 晶玄

17 研究員（客員）等

情報学環

事項／年度	14	15	16	17	18
受託研究員	1	0	0	2	2
中国政府派遣研究員	3	0	0	1	1
客員研究員	3	3	3	1	3
外国人研究員	3	1	2	4	7
内地研究員	0	0	1	0	0
外国人研修員	0	0	7	9	8
交流研究員	0	1	2	4	4
私学研修員	0	0	0	0	1

社会情報研究所

事項／年度	14	15	
受託研究員	0	0	
中国政府派遣研究員	0	0	
客員研究員	0	0	
外国人研究員	4	3	
内地研究員	0	0	
外国人研修員	1	3	
交流研究員	0	0	
私学研究員	0	0	

18 学会賞など受賞者リスト

総件数：11 件

- 1 坂村健 日本学士院賞(Japan Academy Prize) 「高リアルタイム性能を有するコンピュータ体系の研究」 2006 年 7 月
- 2 坂村健 財団法人 NEC C&C 財団 C&C 賞(C&C Prize) 2006 年 4 月
- 3 池内克史 社団法人情報処理学会 平成 17 年度フェロー選定 「コンピュータビジョン分野の技術発展に対する貢献」 2006 年
- 4 池内克史 社団法人情報処理学会 平成 17 年度論文賞 「Illumination Color and Intrinsic Surface Properties--Physics-based Color Analyses from a Single Image」 2006 年
- 5 木下晴之,大島まり,金田祥平,藤井輝夫 可視化情報学会 奨励賞 「高速共焦点スキャナを用いたマイクロ PIV システムの開発とその応用」 2006 年
- 6 Mark Ashdown, Imari Sato, Takahiro Okabe, Yoichi Sato IEEE International Workshop on Projector-Camera Systems Best Paper Award 「Robust Content-Dependent Photometric Projector-Camera Compensation」 2006 年 6 月
- 7 岡部孝弘,佐藤いまり,佐藤洋一 電子情報通信学会 平成 17 年度論文賞 「影に基づく光源推定の周波数解析と Haar ウェーブレットを用いた適応的手法の提案」 2006 年 5 月
- 8 Mark Ashdown,佐藤いまり,岡部孝弘,佐藤洋一 画像の認識・理解シンポジウム (MIRU 2006) 優秀論文賞 「人間の視覚特性を考慮した投影画像の光学的補正」 2006 年 7 月
- 9 関谷直也 吉田秀雄記念事業財団 吉田秀雄賞 常勤研究者の部 第 1 席 「『環境広告と社会心理』に関する総合的研究—環境広告の変遷、表現手法、社会心理との関係性についての実証的研究—」 2006 年 11 月
- 10 小林真輔 情報処理学会 組込みシステムシンポジウム 2006 論文奨励賞 「様々な通信プロトコルに動的対応可能な RFID リーダライタの試作」 2006 年 10 月
- 11 原田隆宏 情報処理学会 グラフィックスと CAD 研究会, 優秀研究発表賞受賞 「GPU を用いたリアルタイム剛体シミュレーション」 2007 年

19 論文数

年度	件数	文理融合	学環・学府内協力
1999年度以前	323	1	0
2000年度	645	48	14
2001年度	654	49	18
2002年度	916	98	53
2003年度	949	107	54
2004年度	904	122	83
2005年度	846	232	91
2006年度	982	149	24
年度不明	34	0	0

注：業績 DB 入力データに基づく各年度の論文数(著書，分担著書，雑誌論文，国際会議論文，その他の論文，講演発表)

20 特許出願・公開数

年度	出願件数	公開
2000年度	6	0
2001年度	8	2
2002年度	5	5
2003年度	5	4
2004年度	1	2
2005年度	1	3
2006年度	1	0
2000-2006年度合計	27	14

21 東京大学 21 世紀 COE「次世代ユビキタス情報社会基盤の形成」平成 18 年度の活動

■ COE シンポジウム

1. 第九回 ユビキタス／ネットワークとイノベーション Strategies for Creative Destruction

【開催概要】

日時：平成 18 年 5 月 30 日（火）14:00～17:00

場所：東京大学大講堂(安田講堂)

主催：東京大学 21 世紀 COE「次世代ユビキタス情報社会基盤の形成」

参加者：約 600 名

【成果内容】

ユビキタス・ネットワーク社会基盤の構築は、大きな社会変動をもたらす可能性があり、これまでの社会システムの創造的破壊もありえるだろう。センサーネット、ロボティクス等と連動し、経済システム、医療・福祉システム、交通システム、教育システム、行政システムなどの社会インフラとして定着すれば、より効率的で質の高い社会システムを構築できる。そこでこのシンポジウムではイノベーション・コアとしてのユビキタス・ネットワークの可能性と今後の課題を検討した。

2. 第十回 実空間と仮想空間の融合～ユビキタスコンピューティング技術とネットワーク検索技術の融合～、Blurring the Difference between Real and Virtual World- Integration of Ubiquitous Computing Technology and Network Search Technologies -

【開催概要】

日時：平成 18 年 11 月 7 日（水）14:00～17:30

場所：東京大学大講堂（安田講堂）

主催：東京大学大学院情報学環・学際情報学府学際情報学専攻，NTT サイバーソリューション研究所

参加者：約 600 名

【成果内容】

身の回りのあらゆるモノや場所に埋め込んだマイクロデバイスを用いて、実世界の様々な状況情報を自動認識し、それを高度な情報サービスや環境制御に役立てるようなユビキタスコンピューティング技術と、インターネットを中心とした通信基盤上に構築されたデジタルメディア上に存在する膨大なコンテンツ情報の全文検索等の技術、それぞれの最先端の状況を概観した上で、これらを統合することで、実世界と仮想世界を融合する新しい情報インフラの可能性についての議論を行った。

3. 第十一回シンポジウム「公共交通のユニバーサルデザイン」

【開催概要】

日時：2006年12月2日(土) 13:00-17:00

場所：東京国際フォーラム

主催：東京大学大学院情報学環・T-Engine フォーラム・トロン協会・TRON イネーブルウェア研究会

後援：総務省／文部科学省／厚生労働省／農林水産省／経済産業省／国土交通省／東京都

参加者：約 350 名

【成果内容】

あらゆる場所や物に情報をくくりつけ、それらを有機的に結びつけることにより、安全で快適な社会を実現するためのユビキタス社会の技術基盤の研究開発が進められている。ユビキタス社会基盤では、ユニバーサルデザインの考え方に立ち、特定の人たちのため特殊な設備ではなく、広く多様な人に役立つ汎用技術基盤として確立していくことが欠かせない。この考え方により、さまざまな障害を持った方、高齢者、子供、外国の方などを含めたすべての人を助けるための新しいサービスを提供することを目指している。本シンポジウムでは、ユニバーサルデザインに基づいて実現されるユビキタス社会基盤に関して、特に公共交通機関をテーマにして論じた。複数の交通機関関係者に登壇いただき、現在のバリアフリー化の取り組みや今後の取り組みについての議論を行った。

23 国際団体役員・委員数

区分	学術的な団体の役員・委員*1	その他の団体役員・委員等*2
人数	11	5

注：2006年度のみ

*1 「学会・会議等役職」のうち「国際性有」かつ「学会役員委員」であるもの

*2 「団体役員・委員」のうち国際的なもの

24 政府関係委員会委員数

区分	委員等人数
政府全体	58
内閣府	9
総務省	13
経済産業省	7
文部科学省	15
厚生労働省	1
国土交通省	5
文化庁	1
特許庁	1
日本学術会議	4
その他	2

注：2006年度のみ

25 地方公共団体関係委員会委員数

区分	委員等人数
地方公共団体関係全体	19
都道府県	14
市区町村	5

注：2006年度のみ

26 ジャーナル編集・会議運営

区分	学会誌等編集査読*1	学術大会等運営*2
人数	16	40
うち国際的なもの	13	25

注：国内外の学会活動(学会誌編集委員, 会議運営委員など) 注：2006年度のみ

*1 「学会・会議等役職」のうち「ジャーナル編集査読」であるもの

*2 「学会・会議等役職」のうち「大会組織運営」であるもの

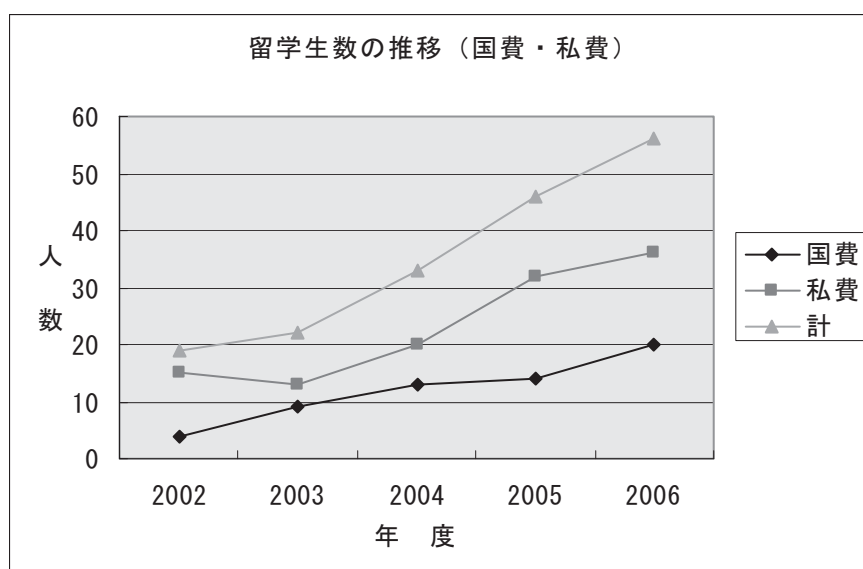
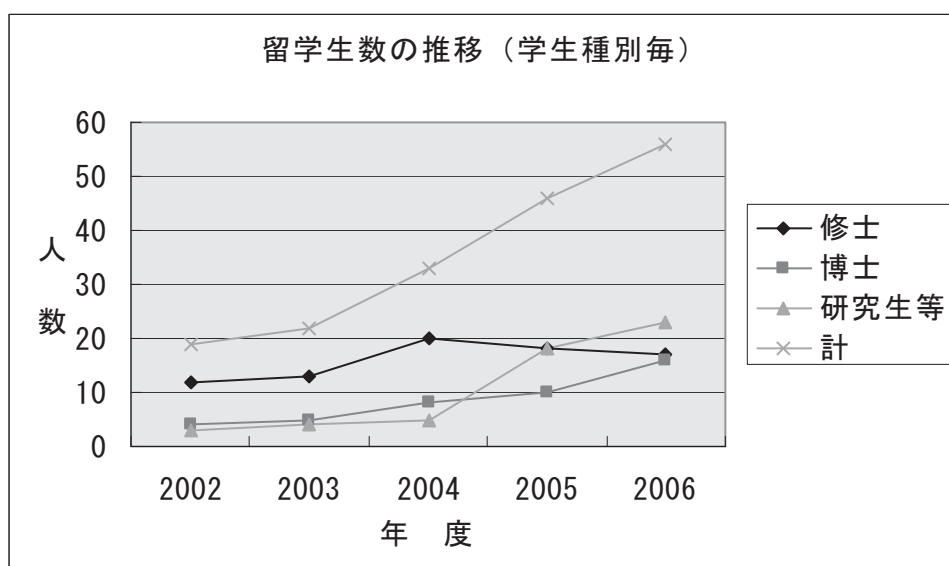
27 定期刊行物一覧

- ・『情報学研究 調査研究編』 No.24 (2007年3月)
- ・『東京大学大学院情報学環紀要 情報学研究』 2006年度中は発行なし
- ・ニューズレター『学環学府』 No.13 200.4～No.16 2007.2

28 留学生数の推移

各年度5月1日現在

年度	修士		博士		外国人研究生		教育部 研究生	合計		総計
	国費	私費	国費	私費	国費	私費	私費	国費	私費	
2002	1	11	1	3	2	0	1	4	15	19
2003	6	7	1	4	2	0	2	9	13	22
2004	9	11	1	7	3	1	1	13	20	33
2005	5	13	3	7	6	11	1	14	32	46
2006	5	12	7	9	8	14	1	20	36	56



29 留学生国籍別一覧

国又は地域	国費	私費	計
アジア			
インド		1	1
インドネシア	1		1
バングラデシュ	1		1
スリランカ		1	1
韓国	8	9	17
中国	2	15	17
台湾		7	7
小計	12	33	45
アフリカ			
コンゴ民主共和国		1	1
小計	0	1	1
オセアニア			
オーストラリア	3	0	3
小計	3	0	3
北米			
アメリカ合衆国	0	1	1
小計	0	1	1
ヨーロッパ			
英国	1		1
フランス		1	1
スイス	1		1
ルーマニア	1		1
ブルガリア	1		1
ロシア	1		1
小計	5	1	6
合計	20	36	56

(2006年5月1日現在)

Ⅲ. 個人業績編

平成19(2007)年3月31日時点で情報学環に在籍していた教員各人の研究テーマおよび2006年度の研究業績を、各自が確認したデータベースの入力内容に基づき、収録しています。研究業績の分類は、データベースによって自動的に分類されたものです。各人の配列は、当時の肩書きに基づいた以下のカテゴリーの順、また同一カテゴリー内では氏名の50音順となっています。

1. 教授
2. 助教授
3. 講師
4. 助手
5. 科学技術振興特任助教授
6. 科学技術振興特任教員(助手)
7. 科学技術振興特任研究員
8. 研究拠点形成特任教員(助手)

池内克史・教授

研究テーマ(主たるもの)

文化遺産のデジタル化

世界各地の貴重な文化遺産をレーザ測定システムによって数ミリ精度で計測し、デジタルデータの形で保存するプロジェクトを進めています。これまでに鎌倉高德院の国宝阿弥陀仏像(鎌倉大仏)、奈良東大寺の国宝廬舎那仏坐像(奈良大仏)、タイ・スコタイのアチャナ仏、カンボジア・アンコールトムのパイヨン寺院などをデジタル化してきました。これらのデータは、VR(バーチャルリアリティ)のコンテンツ作成、文化遺産の破損、欠損時には修復のために、また製作当時の状態への仮想的復元といった応用など、幅広い分野での利用が期待されています。

人間行動観察学習ロボット

幼児の学習の大部分は、親の行動を見て真似ることから始まります。我々の研究室では、人間の行動を主に視覚によって観察し、これを理解して同じ行動を再現するロボットプログラムの自動生成を研究テーマとしており、主に「全身運動の獲得」と「手作業の獲得」の2つの課題について研究を進めています。

4次元仮想化都市

都市などの広域にわたる実空間の三次元モデル化を効率的に行うため、実験車両に搭載したカメラやレンジセンサおよび電子地図を利用して、要素技術となる画像・距離画像の処理手法を研究しています。また、実空間の動きを仮想空間に重畳する研究や、車両や車種を自動的に認識・判別する研究を行っています。

研究業績(2006年度)

論文等

シャミラモホッタラ, 影沢政隆, 池内克史:「確率的手法を用いた車両の検出とクラス確認」, 電子情報通信学会論文誌D, 2006年.【査読有】

中岡慎一郎, 中澤篤志, 金広文男, 金子健二, 森澤光晴, 比留川博久, 池内克史:「脚タスクモデルを用いた2足歩行ヒューマノイドロボットによる人の舞踊動作の再現」, 日本ロボット学会誌, 2006年.【査読有】

阪野貴彦, 池内克史:「画像トラッキングによる移動型レンジセンサからの形状補正」, 電子情報通信学会論文誌D, 2006年.【査読有】

宮崎大輔, 池内克史:「Shape Estimation of Transparent Objects by Using Polarization Analyses」, 情報処理学会論文誌, 2006年.【査読有】

佐藤いまり, 池内克史:「Illumination Recovery and Appearance Sampling for Photorealistic Rendering」, 情報処理学会論文誌:コンピュータビジョンとイメージメディア, 2006年.【査読有】

三上武志, タンダウー, 小野晋太郎, 川崎洋, 大沢裕, 池内克史:「EPI解析を利用したひずみのない複数ビデオカメラ画像の統合」, 電子情報通信学会論文誌D, 2006年.【査読有】

Thanda Oo, Hiroshi Kawasaki, Yutaka Ohsawa, Katsushi Ikeuchi: "Separation of Reflection and Transparency Based on Spatiotemporal Analysis for Outdoor Scene", 情報処理学会論文誌:コンピュータビジョンとイメージメディア, 2006年.【査読有】

佐藤いまり, 岡部孝弘, 佐藤洋一, 池内克史:「任意光源環境における画像生成のための物体の見えの標本化」, 情報処理学会論文誌:コンピュータビジョンとイメージメディア, 2006 年.【査読有】

Hiroshi Kawasaki, Katsushi Ikeuchi, Masao Sakauchi: "Super-resolution Omnidirectional Camera Images Using Spatio-temporal Analysis", 電子情報通信学会論文誌 D-II, 2006 年.【査読有】

Shunsuke Kudoh, Taku Komura, Katsushi Ikeuchi: "全身によるバランス保持動作のモデル化と生成", Systems and Computers in Japan, 2006 年.【査読有】

宮崎大輔, 池内克史:「偏光解析による透明物体の形状計測」, Information and Media Technologies (IMT), 2006 年.【査読有】

宮崎大輔, 柴田卓司, 池内克史:「間接構造を持つ柔軟変形モデルを用いた人体運動の推定」, 「画像の認識・理解シンポジウム(MIRU2006)」, 2006 年.【査読有】

池内克史, 大石岳史:「天平時代・奈良東大寺のデジタル復元」, 測量, 2006 年.

池内克史:「巻頭文」, 生産研究, 2006 年.

池内克史:「先進モビリティと情報処理」, 生産研究, 2006 年.

小野晋太郎, 池内克史:「移動体センサから得られる画像・幾何データの時空間解析とその応用」, 情報処理学会 コンピュータビジョンとイメージメディア研究報告(CVIM), 2006 年.

川上玲, 高松淳, 池内克史:「黒体放射の仮定を用いた光源制約による色恒常性」, 情報処理学会 コンピュータビジョンとイメージメディア研究報告(CVIM), 2006 年.

阪野貴彦, 池内克史:「移動型レンジセンサによる形状取得とその復元」, 情報処理学会 コンピュータビジョンとイメージメディア研究報告(CVIM), 2006 年.

岡本泰英, 高松淳, 影沢政隆, 岡田健, 池内克史:「3次元モデルを利用した文化財に関する情報の編集・表示システム」, 日本文化財科学会 第23回大会, 2006 年.

鎌倉真音, 大石岳史, 高松淳, 池内克史:「3次元モデルを用いたカンボジアバイヨン寺院尊顔の解析考察～尊顔の分類とその制作背景～」, 日本文化財科学会 第23回大会, 2006 年.

白鳥貴亮, 中澤篤志, 池内克史:「音楽情景を考慮した舞踊動作生成手法」, 「画像の認識・理解シンポジウム(MIRU2006)」, 2006 年.【査読有】

鎌倉真音, 大石岳史, 高松淳, 池内克史:「3次元モデル解析によるカンボジアバイヨン寺院尊顔制作背景に関する考察」, 「画像の認識・理解シンポジウム(MIRU2006)」, 2006 年.【査読有】

阪野貴彦, 池内克史:「移動型レンジセンサによる歪み補正 ICP アルゴリズム」, 「画像の認識・理解シンポジウム(MIRU2006)」, 2006 年.【査読有】

小川原 光一, 李 暁路, 池内 克史:「関節構造を持つ柔軟変形モデルを用いた人体運動の推定」, 「画像の認識・理解シンポジウム(MIRU2006)」, 2006 年.【査読有】

肥後智昭, 宮崎大輔, 池内克史:「二色性反射モデルに基づくリアルタイム鏡面反射成分除去」, 情報処理学会 コンピュータビジョンとイメージメディア研究報告(CVIM), 2006 年.

高松淳, 佐賀直哉, 池内克史:「符号付距離場を用いた SAI 法の高速化・頑健化と形態解析への応用」, 情報処理学会 コンピュータビジョンとイメージメディア研究報告(CVIM), 2006 年.

鎌倉真音, 宮崎大輔, 肥後智昭, 岡本泰英, 川上玲, 白鳥貴亮, 猪狩壮文, 小野晋太郎, 佐藤啓宏, 大屋美那, 田中正之, 池内克史, 青柳正規:「ロダン彫刻「カレーの市民」3 次元デジタルアーカイブ」, 日本バーチャルリアリティ学会 (VRSJ) 第 11 回, 2006 年.

小野晋太郎, 三上武史, 小川原光一, 影澤政隆, 川崎洋, 池内克史:「動画像の時空間解析に基づく都市空間のモデル化とその応用」, 日本バーチャルリアリティ学会 第 29 回サイバースペースと仮想都市研究会, 2006 年.

池内克史, 中澤篤志, 工藤俊亮, 中岡慎一郎, 白鳥貴亮:「観察学習パラダイムに基づく二足歩行ヒューマノイドロボットによる舞踊動作の再現」, バイオメカニクス研究, 2006 年.

シャミラ モホツラ, 影沢政隆, 池内克史:「確率的手法を用いた車両の検出とクラス認識 一部類似物体の見分け方の一手法」, 画像ラボ(日本工業出版), 2006 年.

小野晋太郎, 松井健, 池内克史:「梯子式レーザ計測システムによる大規模文化遺産の三次元モデリング」, 3 次元映像シンポジウム, 2006 年.

宮崎大輔, 柴田卓司, 池内克史:「ウェーブレットテクスチャ:ドベシウェーブレットと反射モデルと円偏光板 BRDF 圧縮」, 3 次元映像シンポジウム, 2006 年.

高松淳, 小野晋太郎, 影澤政隆, 池内克史:「イタリア・ソルマヴェスヴィアーナにおける 3 次元形状デジタル化技術の利活用」, 3 次元映像シンポジウム, 2006 年.

岡本泰英, 大石岳史, 池内克史:「大規模 3 次元モデル上の情報の編集・表示システム」, 3 次元映像シンポジウム, 2006 年.

池内克史:「デジタルバイオンプロジェクト」, 3 次元映像シンポジウム, 2006 年.

Lihong Tong, Shintaro Ono, Masataka Kagesawa, Katsushi Ikeuchi: "3D Modeling and Refinement of Residential Maps Using Range Scanners", 第 5 回 ITS シンポジウム, 2006 年.【査読有】

太田大介, 小野晋太郎, 池内克史:「複数台車載カメラの統合による交差点の視覚的な復元」, 第 5 回 ITS シンポジウム, 2006 年.【査読有】

猪狩壮文, 肥後智昭, 宮崎大輔, 小野晋太郎, 池内克史:「スペクトルカメラによる3次元都市空間の光学解析について」, 第 5 回 ITS シンポジウム, 2006 年.【査読有】

池内克史, 高松淳, 工藤俊亮, 小川原光一:「人間行動観察学習ロボットにおける視覚技術」, O plus E(新技術コミュニケーションズ), 2007 年.

宮崎大輔, 池内克史:「CV における偏光を用いた研究」, 情報処理学会 コンピュータビジョンとイメージメディア研究報告(CVIM), 2007 年.

真川純, 高松淳, 池内克史:「局所的位置合わせと Free-form Deformation を用いた三次元形状解析」, 情報処理学会 コンピュータビジョンとイメージメディア研究報告(CVIM), 2007 年.

角田哲也, 大石岳史, 池内克史:「バーチャル飛鳥京: 複合現実感技術による遺跡の復元」, 日本情報考古学会第 23 回大会, 2007 年.

池内克史:「芸術ロボット:アーティストとしてのロボット –「描く」と「踊る」を科学する–」, CREST21Art シンポジウム『描く』を科学する–プロセスで読み解く, 2007 年.

国際会議等

Shunsuke Kudoh, Taku Komura, Katsushi Ikeuchi: "Stepping Motion for a Human-like Character to Maintain Balance against Large Perturbations", 2006 IEEE International Conference on Robotics and Automation(ICRA2003), 2006. 【査読有】

Takaaki Shiratori, Atsushi Nakazawa, Katsushi Ikeuchi: "Synthesizing Dance Performance Using Musical and Motion Features", 2006 IEEE International Conference on Robotics and Automation(ICRA2003), 2006. 【査読有】

Shintaro Ono, Koichi Ogawara, Masataka Kagesawa, Hiroshi Kawasaki, Kasaaki Onuki, Juichi Abeki, Ken Honda, Katsushi Ikeuchi: "A Photo-Realistic Driving Simulation with Free Viewpoint by Real-time Image Processing", Driving Simulation Conference-Asia/Pacific 2006, 2006. 【査読有】

Shunsuke Kudoh, Koichi Ogawara, Miti Ruchanurucks, Katsushi Ikeuchi: "Painting Robot with Multi-Fingered Hands and Stereo Vision", IEEE Conference on Multisensor Fusion and Integration for Intelligent Systems(MFI2003), 2006. 【査読有】

Takaaki Shiratori, Atsushi Nakazawa, Katsushi Ikeuchi: "Dancing-to-Music Character Animation", Eurographics2006, 2006. 【査読有】

Miti Ruchanurucks, Koichi Ogawara, Katsushi Ikeuchi: "Neural Network Based Foreground Segmentation with an Application to Multi-Sensor 3D Modeling", IEEE Conference on Multisensor Fusion and Integration for Intelligent Systems(MFI2003), 2006. 【査読有】

Daisuke Miyazaki, Mawo Kamakura, Tomoaki Higo, Yasuhide Okamode, Rei Kawakami, Takaaki Shiratori, Akifumi Ikari, Shintaro Ono, Yoshihiro Sato, Mina Oya, Masayuki Tanaka, Katsushi Ikeuchi, Nasanori Aoyagi: "3D Digital Archive of the Burghers of Calais", 12th International Conference on Virtual Systems and Multimedia (VSMM2006), 2006. 【査読有】

Koichi Ogawara, Shintaro Ono, Masataka Kagesawa, Hiroshi Kawasaki, Katsushi Ikeuchi: "Real-image based driving view Synthesizing system for innovative traffic experiment Space", 2006 IEEE/RSJ International Conference on Intelligent Robots and Systems, 2006. 【査読有】

Shirmila Mohottala, Masataka Kagesawa, Katsushi Ikeuchi: "Vehicle Classification in Traffic Surveillance", 13th ITS World Congress, 2006. 【査読有】

Katsushi Ikeuchi: "ソンマ・ヴェスヴィアーナならびにその周辺の 3次元解析", 「火山噴火罹災地の文化・自然環境復元」シンポジウム, 2007.

口頭発表等

Katsushi Ikeuchi: 「–情報科学と文化遺産– 「動」と「静」の解析」, 第 33 回生研公開講座 イブニングセミナー, 2006.

Katsushi Ikeuchi: 「Digital Bayon Project」, 15th Technical committee meeting International Co-ordinating Committee for Safeguarding and Development of the Historic Site of Angkor, 2006.

Katsushi Ikeuchi: 「かけがえなきものを守る画像処理」, 第 12 回画像センシングシンポジウム (SSII2006), 2006.

Katsushi Ikeuchi: 「CAIL ラボ特別セミナー (Informal Talk)」, CAIL ラボ特別セミナー (Informal Talk), 2006. 【招待講演】

Katsushi Ikeuchi: 「ロボティクス特別セミナー」, ロボティクス特別セミナー, 2006.

Katsushi Ikeuchi: “Making humanoid robot to dance Asizubandai-san odori”, International Workshop on Current Trends in Computer Vision, 2006.

Katsushi Ikeuchi: 「仮想化都市の作成と応用」, 科学技術展望懇談会, 2006.

Katsushi Ikeuchi: 「Digital Bayon Project」, Asian DHX (Digital Heritage Exchange) Forum 2006, 2006.

Katsushi Ikeuchi: 「4D virtual city」, Korea-Japan Joint Workshop on Next Generation of Robotics, 2006.

Katsushi Ikeuchi: 「ロボットと芸術」, 第 105 回平成 18 年秋季 東京大学公開講座ロボット新世紀, 2006.

Katsushi Ikeuchi: 「ITS for livable society」, 名古屋工業大学創立 100 周年記念国際フォーラム 分科会「ITS が目指す都市の未来づくり」, 2006.

Katsushi Ikeuchi: 「東大 ITS センターにおける取り組み」, 高知 ITS セミナー, 2006.

Katsushi Ikeuchi: 「すみやすい社会を形作る高度交通システム」, 社会人のための ITS 専門講座 2006, 2006.

Katsushi Ikeuchi: 「e-Heritage Initiative」, マイクロソフト産学連携研究機構 第 2 回シンポジウム, 2006.

Katsushi Ikeuchi: 「「踊り」を科学する」, MANSAI©解体新書その拾, 2007.

Katsushi Ikeuchi: 「デジタルミュージアム構想 -e-Heritage の構想・展示・利活用-」, 電子情報通信学会 PRMU 研究会, 2007.

Katsushi Ikeuchi: 「情報科学と文化遺産 「静」「動」の解析」, 公安審査委員会, 2007.

Katsushi Ikeuchi: 「4D virtual cities for safety and Security」, スウェーデン・日本オートモーティブフォーラム, 2007.

一般向け記事・報道等

池内克史: 「国立西洋美術館が IT 化構想“ウエル.com 美術館”を発表」, ASCII 24, 2006.

池内克史: 「手の中に「考える人」・・・西洋美術館 ユビキタス化」, YOMIURI ONLINE, 2006.

池内克史: 「近づくだけで作品ガイド」, 神戸新聞, 2006.

池内克史: 「近づくだけで作品ガイド 西洋美術館が最先端技術で」, 山陽新聞, 2006.

池内克史: 「近づくだけで作品ガイド 西洋美術館が最先端技術で」, 徳島新聞, 2006.

池内克史: 「近づくだけで作品ガイド」, 福島民友新聞, 2006.

池内克史:「携帯端末に作品ガイド・国立西洋美術館」, NIKKEI NET, 2006.

池内克史:「近づくだけで作品ガイド 西洋美術館が最先端技術で」, 中國新聞, 2006.

池内克史:「近づくだけで作品ガイド/西洋美術館が最先端技術で」, さきがけ on The Web, 2006.

池内克史:「近づくだけで作品ガイド 西洋美術館が最先端技術で」, 北海道新聞, 2006.

池内克史:「近づくだけで作品ガイド」, 静岡新聞, 2006.

池内克史:「近づくだけで作品ガイド 西洋美術館が最先端技術で」, 京都新聞, 2006.

池内克史:「近づくだけで作品ガイド 西洋美術館が最先端技術で」, 東奥日報, 2006.

池内克史:「近づくだけで作品ガイド/西洋美術館が最先端技術で」, 四国新聞 SHIKOKU NEWS, 2006.

池内克史:「近づくだけで作品ガイド 西洋美術館が最先端技術で」, 岩手日報, 2006.

池内克史:「近づくだけで作品ガイド 西洋美術館が最先端技術で」, 河北新報ニュース, 2006.

池内克史:「近づくだけで作品ガイド 西洋美術館が最先端技術で」, YAHOO! JAPAN NEWS, 2006.

池内克史:「携帯端末で美術館の作品解説」, NHK ニュース, 2006.

池内克史:「近づくだけで作品ガイド 西洋美術館が最先端技術で」, 山陰中央新報, 2006.

池内克史:「[絵]携帯端末に作品ガイド・国立西洋美術館」, Smart Woman, 2006.

池内克史:「手の中に「考える人」 携帯端末で動画ガイド」, 読売新聞(高岡)(夕刊), 2006.

池内克史:「手の中に「考える人」 携帯端末で動画ガイド」, 読売新聞(東京)(夕刊)(18面), 2006.

池内克史:「携帯端末に美術作品」, 日刊工業新聞(東京), 2006.

池内克史:「携帯端末に美術作品」, 日刊工業新聞(大阪), 2006.

池内克史:「西洋美術館、ユビキタス化・・・携帯端末で動画ガイド」, YOMIURI ONLINE, 2006.

池内克史:「『熱気』球の欄にて掲載」, 東京新聞(朝刊)(29面), 2006.

池内克史:「『窓』の欄にて掲載」, 日本経済新聞(東京)(朝刊)(43面), 2006.

池内克史:「近づくと作品紹介 国立西洋美術館「世界初」の導入 ユビキタス技術を活用」, 神戸新聞(神戸), 2006.

池内克史:「ユビキタス駆使 指先に作品情報」, 愛媛新聞(松山), 2006.

池内克史:「近づくだけで作品案内 東京・上野 西洋美術館 最先端技術を駆使」, 山形新聞(山形), 2006.

池内克史:「近づくだけで作品解説 西洋美術館がユビキタス導入」, 山口新聞(下関), 2006.

池内克史:「近づくだけで作品ガイド 西洋美術館が最先端技術」, 上毛新聞(前橋), 2006.

池内克史:「近づくだけで作品ガイド」, 静岡新聞(静岡), 2006.

池内克史:「携帯式端末で解説映像 東京・西洋美術館 世界初、月末試験運用へ」, 南日本新聞(鹿児島)(夕刊), 2006.

池内克史:「『十字街』の欄にて掲載」, 熊本日日新聞(熊本), 2006.

池内克史:「作品に近づけば自動で解説映像」, 徳島新聞(徳島)(夕刊), 2006.

池内克史:「東京の国立西洋美術館 展示品に近づくと携帯端末にガイド」, 奈良新聞(奈良), 2006.

池内克史:「Museum claims to offer 1st digital docents」, THE DAILY YOMIURI, 2006.

池内克史:「展示品に近づくだけ 専用携帯端末に作品の解説映像」, 秋田魁新聞(夕刊), 2006.

池内克史:「近づくと解説映像」, 中国新聞(広島), 2006.

池内克史:「近づくだけで作品ガイド 世界で初の最先端技術」, 四国新聞(高松), 2006.

池内克史:「携帯端末で動画ガイド」, 岡山日日新聞, 2006.

池内克史:「近づくだけで作品ガイド」, 北日本新聞, 2006.

池内克史:「近づくだけで作品ガイド 最先端技術を駆使」, 交通新聞, 2006.

池内克史:「『なるほどビジネス Photo』の欄にて掲載 携帯端末で美術品と“対話”」, 日本経済新聞(東京)(夕刊)(3面), 2006.

池内克史:「携帯端末で芸術ガイド」, 産経新聞(東京)(朝刊)(27面), 2006.

池内克史:「映像で作品ガイド 国立西洋美術館が試験導入」, FujiSankei Business i(東京), 2006.

池内克史:「『文化』の欄にて掲載 「ウエル.com 美術館」の可能性 国立西洋美術館」, 東京新聞(東京)(夕刊), 中日新聞(名古屋)(夕刊), 北陸中日新聞(金沢)(夕刊), 日刊県民新聞(福井、2006.5.20), 2006.

池内克史:「A high-tech helper to make art more accessible」, THE DAILY YOMIURI, 2006.

池内克史:「Report 新しい鑑賞法? 保存法? デジタル時代のこれからの美術作品鑑賞法」, gallery (Vol.254), 2006.

池内克史:「デジタル化で美術館を身近に」, NHK テレビ「おはよう日本」, 2006.

池内克史:「『新日曜美術館』「アートシーン」」, NHK テレビ『新日曜美術館』, 2006.

池内克史:「どうやってロボットは絵を描くのか?」, 美術出版社『美術手帖』, 2006.

池内克史:「市制施行 100 周年プレ記念事業<こむこむワンダーランド第 2 弾> 最先端のヒューマノイドロボット「HRP-2」」, こむこむ館(福島市教育委員会), 2006.

池内克史:「e-net みんなのデジタル ロボットで「踊り」を再現 遺跡や芸術をデータ保存」, 東京新聞(夕刊), 2006.

池内克史:「「INSIGHT & FOSIGHT」 Preserving Culture with 3D Digital Conversation」, NHK World TV, 2006.

池内克史:「REPORTS 生研記者会見報告 「2月8日臨時記者会見 アンコール遺跡・バイヨン寺院のデジタル化に精工」」, 東京大学生産技術研究所 『生研ニュース』No.100, 2006.

池内克史:「飛鳥京にタイムスリップ 東大チーム、CG で再現」, 産経新聞, 2006.

池内克史:「ゴールのぞき タイムスリップ バーチャル飛鳥京始まる」, 朝日新聞, 2006.

池内克史:「展望台から「CG 飛鳥京」」, 読賣新聞, 2006.

池内克史:「奈良・明日香村 CG で飛鳥の都を再現」, 朝日放送, 2006.

池内克史:「ワールドビジネスサテライト 「マイクロソフト新計画」」, テレビ東京, 2006.

池内克史:「ティーンズに聞く News の窓 「介助」超え「ヒト」に迫る ロボット大国・日本」, 毎日新聞(日刊) 4面, 2006.

池内克史:「MANSAI◎解体新書その拾 「観察」～「物学(ものまね)」というリアリズム～」, 世田谷パブリックシアター, 2006.

池内克史:「最先端の光は何を写すのか?」, 株式会社学習研究社 『大人の科学』 Vol.14, 2006.

池内克史:「池内研「バーチャル飛鳥京」の世界」, 学環学府 2007年・冬 No.16, 2006.

池内克史:「「3次元映像シンポジウム」開催」, 学環学府 2007年・冬 No.16, 2006.

池内克史:「西洋美術館、ユビキタス化…携帯端末で動画ガイド」, YOMIURI ONLINE, 2006.

石田英敬・教授

研究テーマ(主たるもの)

記号論・情報記号論の研究

記号論を情報学研究に活用する研究

言語態の研究

社会や文化の単位としての言語活動の研究

現代文学、現代思想の研究

近代ヨーロッパ文学および現代思想の研究

研究業績(2006 年度)

著書等

ISHIDA, Hidetaka: "Penseurs japonais: dialogues du commencement", Yann Kassile 編, 醇 Pditions de l'醇 Pclat, 2006 年.

ミシェル・フーコー:「フーコー・コレクション 1 狂気・理性」, 小林康夫/石田英敬/松浦寿輝 編, 筑摩書房, 2006 年.

ミシェル・フーコー:「フーコー・コレクション 2 文学・侵犯」, 小林康夫/石田英敬/松浦寿輝 編, 筑摩書房, 2006 年.

ミシェル・フーコー:「フーコー・コレクション 3 言説・表象」, 小林康夫/石田英敬/松浦寿輝 編, 筑摩書房, 2006 年.

ミシェル・フーコー:「フーコー・コレクション 4 権力・監禁」, 小林康夫/石田英敬/松浦寿輝 編, 筑摩書房, 2006 年.

石田英敬, 中山智香子, 西谷修, 港千尋:「アルジャジーラとメディアの壁」, 石田英敬, 中山智香子, 西谷修, 港千尋 編, 岩波書店, 2006 年.

石田英敬:「ユビキタスでつくる情報社会基盤」, 坂村健 編, 東京大学出版会, 2006 年.

ミシェル・フーコー:「フーコー・コレクション 5 性・真理」, 小林康夫/石田英敬/松浦寿輝 編, 筑摩書房, 2006 年.

ミシェル・フーコー:「フーコー・コレクション 6 生政治・統治」, 小林康夫/石田英敬/松浦寿輝 編, 筑摩書房, 2006 年.

石田英敬:「フーコー・ガイドブック」, 小林康夫/石田英敬/松浦寿輝 編, 筑摩書房, 2006 年.

石田英敬(編著):「知のデジタル・シフト」, 弘文堂, 2006 年.

論文等

ISHIDA, Hidetaka: "La traduction et le moment symboliste: à propos d'une étrangeté formatrice de la poésie moderne au Japon", Language Information Text, Vol.13, pp.43-53, 2006 年. 【査読有】

口頭発表等

石田英敬:「「テレビ記号論とは何か」」, 日本記号学会全国大会, 2006. 【招待講演】

ISHIDA, Hidetaka: "“Savoir et Culture face à la société de l'information”", Colloque CERIME "Le Sommet mondial sur « la société de l'information » et après ?", 2006. 【招待講演】

ISHIDA, Hidetaka: "« L'arbre de connaissance pour l'analyse de la télévision »", INAthèque, Bibliothèque Nationale de France, 2006. 【招待講演】

石田英敬: "« La télévision entre l'oubli et la mémoire : La commémoration de Hiroshima à la télévision japonaise »", Colloque « Défis historiques et travail de la mémoire », 2006. 【招待講演】

石田英敬:「意味のエコロジーとは何か」, 南京大学 EALAI, 2007. 【招待講演】

一般向け記事・報道等

石田英敬:「テレビ国家(1):権力のメディア的変容について」, 『世界』, Vol.753, 2006年6月号, pp.49-57, 2006年.

石田英敬:「テレビ国家(2): 公共空間の変容について」, 『世界』, Vol.754, 2006年7月号, pp.138-146, 2006年.

石田英敬:「テレビ国家(3): 政治の変容について」, 『世界』, Vol.756, 2006年9月号, pp.41-49, 2006年.

石田英敬:「テレビ国家(4): 内面化されるネオリベラリズム」, 『世界』, Vol.757, 2006年10月号, pp.104-112, 2006年.

石田英敬:「テレビ国家(5): ポスト・デモクラシーの条件」, 『世界』, Vol.758, 2006年11月号, pp.153-161, 2006年.

石田英敬:「「小泉劇場 2.0」: テレビ国家で進行するドラマ政治」, 『論座』, 2006年12月号, pp.79-89, 2006年.

石田英敬:「モバイルメディアとクリティカルスペース」, 『Mobile Society Review 未来心理』, Vol.009, pp.32-41, 2007年.

石田英敬:「ベルナル・スティグレル「象徴的貧困というポピュリズムの土壌」」, 『世界』, インタビュー, 2006年.

石田英敬:「ベルナル・スティグレル『象徴的貧困 1.ハイパーインダストリアル時代』」, 『論座』, 書評, 2006年.

石田英敬、星浩、金平茂紀:「座談会 小泉劇場を考える: メディアはアジェンダ・セッティング力を失ったのか?」, 『新・情報生活』, 座談会, 2006年.

石田英敬:「テレビ国家が増幅する「アブナイ社会」のイメージ」, 『City&life』, インタビュー, 2006年.

石田英敬:「今週のインタビュー「テレビ国家」化する社会に警鐘を鳴らす東京大学大学院教授石田英敬(いしだ・ひでたか)さん」, 『社会新報』, インタビュー, 2006年.

石田英敬:「高度情報化社会が抱える「象徴的貧困」という問題」, 季刊 Anywhere No. 08, autumn 2006, インタビュー, 2006年.

石田英敬:「学者が斬る: 情報過多という『貧困』からの脱却」, 週刊『エコノミスト』, コラム, 2006年.

石田英敬:「サンデーモーニング」, TBS, 2006.

石田英敬:「ニュースにだまされるな」, 朝日ニュースター, 2006年9月, 2006.

石田英敬:「ニュースにだまされるな」, 朝日ニュースター, 2006年12月, 2006.

石田英敬:「ニュースにだまされるな」, 朝日ニュースター, 2007年3月, 2007.

永ノ尾信悟・教授

研究テーマ(主たるもの)

古代インドにおける儀礼の変容

ポスト・ヴェーダ期においてヒンドゥー教、仏教を取り込んだタントラ化の現象の中で、儀礼の変容がどのような特質を示すのかを考察する。

研究業績(2006 年度)

大島まり・教授

研究テーマ(主たるもの)

医用画像に基づく血管循環系のマルチスケール・マルチフィジックス解析

本研究は血管病変の発症、進行に関わる流体力学的な要因を数値解析により解明することを目的としている。実際の生体内を再現したモデルや境界条件を採用するために、ここでは CT や MRI などの医用画像から抽出した血管形状モデルを用い、末梢血管網など循環系全体の影響を考慮した境界条件を導出・適用した大規模血流解析システムを構築している。さらに血流および血管壁内での物質輸送・透過モデルを取り入れ、悪玉コレステロールなどの病変に関わる物質の血管壁内への蓄積についても予測を行っている。

血流と血管壁の相互作用を考慮した連成解析と in vitro モデルを用いた可視化計測

本研究では脳動脈瘤の発生・成長のメカニズムの解明を目的とし、血流によって変形する血管壁の力学応答メカニズムを考慮した数値解析を行うとともに、in vitro モデル実験による結果と比較することで評価を行っている。医用画像から再構築した脳動脈瘤モデルを対象として、数値解析では血管壁を超弾性体とした流体構造連成解析を行い、実験では速度 3 成分のデータを得られるステレオ PIV という計測手法を用い、内部の流動構造と血管壁の挙動、およびそれらの相互作用を評価している。

共焦点 Micro PIV による微小流路内混相流の可視化計測

微小血管を流れる赤血球やマイクロ分析チップのような微小流体デバイスの内部の混相流を可視化計測するツールとして、共焦点マイクロ PIV システムを開発している。本手法は、流れの中にトレーサ粒子と呼ばれる微小な蛍光ビーズを混濁させ、共焦点スキャナ・特殊な蛍光顕微鏡・高感度高速度カメラを用いて流れを撮影し、得られた画像を PIV 解析処理を用いて速度分布を求める。共焦点マイクロ PIV を用いることで、マイクロサイズの微小領域における 3 次元的な流れの様子を定量的に知ることができる。

研究業績(2006 年度)

論文等

M. Oshima, R. Torii: "Numerical Evaluation of Elastic Models in Blood Flow-Arterial Wall Interaction", International Journal of Computational Fluid Dynamics, Vol.20, No.3-4, pp.223-228, 2006 年。【査読有】

大島まり:「医用画像を用いた大規模血流解析」, 日本フルードパワーシステム学会論文集, フルードパワーシステム9月号 特集「医工連携とフルードパワー」, Vol.37, No.5, pp.298-301, 2006年.【査読有】

大島まり:「血液循環系の計算バイオメカニクス」, スーパーコンピューティングニュース 特集:スーパーコンピューターの拓く世界 ~異分野の研究に触れる~, Vol.8, No.1, pp.55-62, 2006年.【査読有】

坂東佳憲,大島まり,大石正道,佐賀徹雄,小林敏雄:「実血管形状脳動脈瘤モデル内のステレオ PIV 計測」, 日本機械学会論文集 B 編, Vol.72, No.722, pp.2386-2393, 2006年.【査読有】

大島まり:「血管病変に関する計算バイオメカニクス」, 脈管学, 脈管研究のための基盤テクノロジーの進歩-医薬工連携-特集号, Vol.46, No.6, pp.777-786, 2006年.【査読有】

R. Torii, M. Oshima, T. Kobayashi, K. Takagi, T. E. Tezduyar: "Influence of Wall Elasticity in Patient-Specific Hemodynamic Simulations", Computers & Fluids, Vol.36, No.1, pp.160-168, 2007年.【査読有】

F.-C. Li, M. Oishi, Y. Kawaguchi, N. Oshima, M. Oshima: "Experimental Study on Symmetry Breaking in a Swirling Free-surface Cylinder Flow Influenced by Viscoelasticity", Experimental Thermal and Fluid Science, Vol.31, No.3, pp.237-248, 2007年.【査読有】

H.Kinoshita,S.Kaneda,T.Fujii,M.Oshima: "Three-Dimensional Measurement and Visualization of Internal Flow of a Moving Droplet using Confocal Micro-PIV", Lab on a Chip, Vol.7, No.3, pp.338-346, 2007年.【査読有】

大島まり:「脳血管障害における計算バイオメカニクスと可視化計測」, 生産研究「特集 生研公開」, 58巻, 5号, pp.61-70, 2006年.

A. Hossain, N. Oshima, M. Oshima: 「Numerical Study on the Propagation of Premixed Flame in Microgravity with External Heat Source」, 生産研究, 59巻, 1号, pp.59-62, 2007年.

国際会議等

H. Kinoshita, M. Oshima, S. Kaneda, T. Fujii: "Validation of Confocal Micro-PIV Technique by Poiseuille Flow Measurement", 2006 International Conference on Microtechnologies in Medicine and Biology, pp.78-80, 2006.【査読有】

F.-C.Li, M.Oishi, Y.Kawaguchi, N.Oshima, M.Oshima: "Experimental Study of Swirling Flow of a Viscoelastic Fluid with Deformed Free Surface", 2006 ASME 2nd Joint-U.S.-European Fluids Engineering Summer Meeting, 2006.【査読有】

R. Torii, M. Oshima, T. Kobayashi, K. Takagi, T.E. Tezduyar: "Fluid-Structure Interaction Modeling of Aneurysmal Conditions with High and Normal Blood Pressures", 7th World Congress on Computational Mechanics, No.1660, 2006.【査読有】

M. Oshima, S. Tokuda, T. Unemura, S. Sugiyama: "Numerical Simulation of Blood Flow in the Circle of Willis with Outflow Boundary Conditions using a One-Dimensional Model", 5th World Congress of Biomechanics, No.7417, 2006.【査読有】

H.Fukunari, M.Oshima, R.Torii, H.Watanabe, T.Hisada: "Fluid-Structure Interaction Finite Element Analysis of Middle Cerebral Artery Aneurysm", 5th World Congress of Biomechanics, No.6187, 2006.【査読有】

M. Oishi, H. Kinoshita, M. Oshima, T. Fujii, T. Kobayashi: "Multicolor Confocal Micro PIV Measurement of Solid-fluid Interaction in Microflow", 4th Japan-Korea Joint Seminar on Particle Image Velocimetry, 2006.【査読有】

- Y. Bando, M. Oshima, M. Oishi, T. Kobayashi: "Flow Structure in an in vitro Model of Cerebral Aneurysm at Pulsatile Flow", 4th Japan-Korea Joint Seminar on Particle Image Velocimetry, 2006. 【査読有】
- M. Oishi, H. Kinoshita, M. Oshima, K. Kobayashi: "Multicolor Confocal Micro PIV System for Multiphase Flow Measurement", 12th International Symposium on Flow Visualization, No.223, 2006. 【査読有】
- Y. Bando, M. Oshima, M. Oishi: "Stereoscopic PIV Measurement of Pulsatile Flow in an in Vitro Model of Cerebral Aneurysm", 12th International Symposium on Flow Visualization, No.287, 2006. 【査読有】
- M. Muto, M. Oshima, N. Oshima, M. Kubota: "Expression Method for the Diffusion of the Spray Particles from Scattering Light Distribution", 12th International Symposium on Flow Visualization, No.222, 2006. 【査読有】
- M. Oshima, R. Torii, T.Kobayashi: "Experimental and Computational Visualization of Blood Flows in Macro and Micro Scales", 12th International Symposium on Flow Visualization【招待講演】, No.288, 2006.
- M. Muto, M. Oshima, N. Oshima, M. Kubota: "The Behaviour of Spray Particles Generated by Slit Nozzle in the Turbulent Flow", FISITA2006, World Automotive Congress, No.F2006P357, 2006. 【査読有】
- H. Kinoshita, M. Oshima, S. Kaneda, T. Fujii: "Three-dimensional Measurement of Circulation Flow in a Droplet Moving in a Microchannel", The 10th International Conference on Miniaturized Systems for Chemistry and Life Sciences, Vol.1, pp.65-67, 2006. 【査読有】
- D. Jang, M. Oshima: "Numerical Analysis of Blood Flow in an Arteriole using Immersed Boundary Lattice Boltzmann Method", APS(59th Annual Meeting of the Division of Fluid Dynamics), pp.104, 2006. 【査読有】
- Y. Bando, M. Oshima, M. Oishi: "Flow Structure in an in vitro Model of Cerebral Aneurysm at Pulsatile Flow", The 3rd International Symposium on Biomedical Systems Innovation, 2006. 【査読有】
- H. Fukunari, M. Oshima: "Development of Integrated Simulation Software for Cardiovascular System", The 3rd International Symposium on Biomedical Systems Innovation【招待講演】, 2006.

口頭発表等

- 大石正道, 坂東佳憲, 飯田隆一, 中沢亨, 大島まり: 「PC-Grid を用いた時系列 PIV 並列処理の最適化」, 計算工学講演会第11回講演会, 2006.
- 大島まり: 「脳血管障害における計算バイオメカニクスと可視化計測」, 生研公開・研究公開講演会, 2006.
- 武藤昌也, 大島まり, 大島伸行: 「PTV において同一画像から複数の種類の粒子を認識する方法に関する研究」, 第 34 回可視化情報シンポジウム, 2006.
- 坂東佳憲, 大島まり, 大石正道: 「拍動流入条件下における脳動脈瘤モデル内流れのステレオ PIV 計測」, 第 34 回可視化情報シンポジウム, 2006.
- 大島まり: 「器官・組織・細胞マルチスケール・マルチフィジックスシミュレーション」, 文部科学省次世代 IT 基盤構築のための研究開発プログラム 第1回「革新的シミュレーションソフトウェアの研究開発」シンポジウム, 2006.
- 大島まり: 「マイクロバイオ流」, 日本機械学会 No.06-51 講習会「実験流体力学」-マイクロ流れ実験の基礎と応用-, 2006.

大島まり:「データベース ～シミュレーションと統計分析～」, 東北大学 REDEEM プロジェクト「医療工学技術者創成のための再教育システム」集中講義, 2006.【招待講演】

大島まり:「計算バイオメカニクスの最近の動向と将来の展望」, 社団法人企業研究会, 第19期 CAMM フォーラム(コンピュータによる材料開発・物質設計を考える会)本例会, 2006.

徳田茂史,杉山聡,畝村毅,大島まり:「血流シミュレーションにおける末梢血管網を考慮した流出境界条件のモデリング」, 日本機械学会 2006 年度年次大会, 2006.

新井淳,伊藤寿,大島伸行,大島まり,久保田正人:「乱流中へのスリットインジェクタによる間欠噴霧の LES 解析」, 日本機械学会 2006 年度年次大会, 2006.

武藤昌也,新井淳,大島伸行,大島まり:「噴霧可視化画像を用いた液滴粒子の拡散評価」, 日本機械学会 2006 年度年次大会, 2006.

大島まり:「脳血管障害の計算バイオメカニクス」, 2006 年度精密工学会秋季大会シンポジウム「生体系計測とモデリングの最前線」, 2006.

木下晴之,大島まり,金田祥平,藤井輝夫:「高速3次元共焦点イメージングを用いた3次元マイクロ PIV」, 可視化情報全国講演会, 2006.

大島まり:「脳動脈瘤のモデリングとシミュレーション～最近の動向と今後の展開～」, 第 65 回社団法人日本脳神経外科学会総会・ランチョンセミナー「脳血管疾患の基礎と臨床」, 2006.【招待講演】

大島まり:「データベース(1),(2) ～シミュレーションと統計分析～」, 東北大学 REDEEM プロジェクト「医療工学技術者創成のための再教育システム」出張講義, 2006.【招待講演】

大島まり, 山口隆美, 谷下一夫:「器官・組織・細胞マルチスケール・マルチフィジックスシミュレーション」, 文部科学省次世代 IT 基盤構築のための研究開発「革新的シミュレーションソフトウェアの研究開発」ワークショップ(第5回) —生命現象シミュレーション —, 2006.

福成洋,大島まり,鷺尾巧,渡邊浩志,久田俊明:「脳動脈瘤における内部血流に対する血管壁特性の影響」, 日本機械学会第 19 回計算力学講演会, 2006.

張東植, 大島まり:「Immersed Boundary 格子ボルツマン法による微小循環系内の血流の数値解析」, 日本機械学会第 19 回計算力学講演会, 2006.

飯田隆一,山本創太,小島伸彦,山本貴富喜,酒井康行,大島まり:「流体の力学的作用による血管損傷の定量的検討 ～in vitro 血管損傷評価システムの開発～」, 日本機械学会第 17 回バイオフロンティア講演会, 2006.

関井雄一郎,徳田茂史,大島まり:「血管壁における物質透過を考慮した血流モデルの検討」, 日本機械学会第 17 回バイオフロンティア講演会, 2006.

張東植, 大島まり:「微小循環系の血流シミュレーションにおける赤血球の取り扱いに関する計算手法の影響の検討」, 第 20 回数値流体力学シンポジウム, 2006.

飯田隆一,山本創太,小島伸彦,山本貴富喜,酒井康行,大島まり:「血流に伴う力学的作用による血管内壁の損傷の実験的検討」, 第19回バイオエンジニアリング講演会, 2007.

平松絢子,宮地英生,大島まり:「研究者と科学技術インタープリターの連携による出張授業モデル開発—高校生を対象とした「デジカメでわかる CT スキャンのしくみ」の事例—」, 日本科学教育学会 平成 18 年度 第 5 回研究会研究報告, 2007.

一般向け記事・報道等

大島まり:「NHK ためしてガッテン 突然死！くも膜下出血徹底予防術」, NHK, 2006.

大島まり他:「シミュレーションソフト 東大が20本公開 来月初め」, 日刊工業新聞(Business&Technology面), 2006.

大島まり:「脳血管障害における計算バイオメカニクスと可視化計測～2006「生研公開」～」, 「医療安全推進者ネットワーク」ホームページ”ほっと情報・ほっと商品”コーナー, 2006.

大島まり:「ノーベル賞受賞者を囲むフォーラム「21世紀の創造」科学フォーラム東京「21世紀の人類の課題と科学の可能性」」, 読売新聞, pp.10-11, 2006.

大島まり:「くも膜下出血◆突然死を防ぐ！くも膜下出血徹底予防術(『突然死！くも膜下出血徹底予防術』2006.04.12放送より)」, 雑学読本NHKためしてガッテン10, NHK科学・環境番組部編集, NHK出版発行, 2006.

大島まり:「理系白書シンポジウム IN 横浜～未来を拓く科学技術教育「なぜ」からスタート心に潜む興味導く」, 毎日新聞, pp.14-15, 2006.

大島まり他:「市民・科学者 率直な対話重要-東大生産研がPURシンポ- 日米専門家 一層の普及求める」, 科学新聞, P. 2, 2006.

河口洋一郎・教授

研究テーマ(主たるもの)

CGによるメカニック造形研究

生き物のように反応するメカニク的な立体造形技術ならびに新伝統芸能を演出するメカニク的な造形研究

ジェモーション(Gemotion)によるインタラクション研究

伝統芸能との融合によるパフォーマンスアーツとして、人にインタラクティブに反応する情感的なCG映像空間の創出研究

グロースモデル(Growth Model)による超高画質3D映像研究

飛び出る立体視の高精細映像や、スーパーハイビジョン(8K4K)による超高画質のCG映像生成研究

研究業績(2006年度)

著書等

河口洋一郎、他:「デジタル遊園地」, 長崎県美術館, 2006年.

河口洋一郎、他:「宇宙の生命と非生命」, エッシャー展カタログ, 2006年.

論文等

YoichiroKawaguchi: "The Art of Gemotion in Space", IV06, 2006 年.【査読有】

原田隆宏、田中正幸、越塚誠一、河口洋一郎:「GPUを用いたリアルタイム剛体シミュレーション」, 情報処理学会研究報告, 2006 年.【査読有】

原田隆宏、田中正幸、越塚誠一、河口洋一郎:「グラフィックスハードウェアを用いた個別要素法の高速度化」, 日本計算工学会論文集, 2006 年.【査読有】

MarikoFujita,KiyoshiKotani,YoichiroKawaguchi: "Artistic Concept for Negative-Style Interaction Robot", International Conference for Artificial Reality and Telexistence, 2006 年.【査読有】

Takahiro Harada, Seiichi Koshizuka, Yoichiro Kawaguchi: "Smoothed Particle Hydrodynamics in Complex Shapes", Graphics Interface, 2006 年.【査読有】

Takahiro Harada, Seiichi Koshizuka, Yoichiro Kawaguchi: "Distinct Element Method Simulation on GPUs", Eurographics Symposium on Parallel Graphics and Visualization, 2006 年.【査読有】

Takahiro Harada, Seiichi Koshizuka, Yoichiro Kawaguchi: "Smoothed Particle Hydrodynamics on GPUs", Computer Graphics International, 2006 年.【査読有】

Takahiro Harada, Masayuki Tanaka, Seiichi Koshizuka, Yoichiro Kawaguchi: "Real-Time Rigid Body Simulation on GPUs", Symposium on Interactive 3D Graphics and Games Poster Session, 2006 年.【査読有】

原田 隆宏, 田中 正幸, 越塚 誠一, 河口 洋一郎:「GPUを用いたリアルタイム剛体シミュレーション」, 情報処理学会研究報告グラフィックスとCAD, 2006 年.【査読有】

原田隆宏, 越塚誠一, 河口洋一郎:「GPUを用いたSPHシミュレーション」, 日本計算工学講演会, 2006 年.【査読有】

原田隆宏, 田中正幸, 越塚誠一, 河口洋一郎:「グラフィックスハードウェアを用いた個別要素法の高速度化」, JSCES, 2006 年.【査読有】

原田隆宏, 田中正幸, 越塚誠一, 河口洋一郎:「GPUを用いた Smoothed Particle Hydrodynamics の高速度化」, JSCES, 2006 年.【査読有】

原田隆宏, 越塚誠一, 河口洋一郎:「粒子ベースシミュレーションの並列化」, 情報処理学会論文誌, 2006 年.【査読有】

国際会議等

YutakaYokokawa,YoichiroKawaguchi: "A self-Organied Growth Model with a resouce transport system", ASIAGRAPH, pp.pp1-6, 2006.【査読有】

ShunsukeOhno,YoichiroKawaguchi: "Simulation Techniques of Generation of Behavior for Unitable Artifical Life", ASIAGRAPH, pp.pp7-12, 2006.【査読有】

RyoShimada,YoichiroKawaguchi: "BRDF Estimation System for Structural colors", ASIAGRAPH, pp.pp13-18, 2006.【査読有】

JunNagata,YoichiroKawaguchi: "Shading Methods for Fish with Structural Colors", ASIAGRAPH, pp.pp19-24, 2006.【査読有】

JunYano,YoichiroKawaguchi: "Creation of Wings Considering Butterfly Flight Mechanism Based on the Quasi Steady Theory", ASIAGRAPH, pp.pp25-30, 2006.【査読有】

MasaruKanazawa,KazuoEnami,YoichiroKawaguchi: "Application of the Super-Hi-Vision Images to technology and art", ASIAGRAPH, pp.pp109-114, 2006.【査読有】

Takahiro Harada, Masayuki Tanaka, Seiichi Koshizuka, Yoichiro Kawaguchi: "Parallelized Real-Time Particle-Based Simulation", ACM SIGGRAPH, 2006.【査読有】

作品等

YoichiroKawaguchi: 「Gemon Dance」, ACM SIGGRAPH, 2006.

YoichiroKawaguchi,RyumaNiiyama,MarikoHujita,AkihikoMiyadera: 「Gemotional Bumpy Screen」, ACM SIGGRAPH, 2006.

河口洋一郎、新山龍馬、藤田真理子、米倉将吾、宮寺明彦: 「ジェモーションスクリーン」, 山本寛齋スーパーショー「太陽の船」, 2006.

河口洋一郎、新山龍馬、藤田真理子、米倉将吾、宮寺明彦: 「反応する凹凸ジェモーションスクリーン」, 文化庁メディア芸術祭 10 周年企画展, 2006.

河口洋一郎、鶴岡修平: 「立体造形オブジェ「エギーボーイ」」, 文化庁メディア芸術祭 10 周年企画展, 2006.

口頭発表等

YoichiroKawaguchi: "Artstic Gemotional Screen Responds as Living Entity", ISDC, 2006.

河口洋一郎: 「アニメーションシティの可能性」, 広島国際アニメフェスティバル, 2006.【招待講演】

河口洋一郎: 「デジタル文化」, 長崎県美術館, 2006.【招待講演】

河口洋一郎: 「ジェモーション空間」, 長崎県美術館, 2006.【招待講演】

河口洋一郎: 「海と生命と宇宙」, 種子島文化シンポジウム, 2006.【招待講演】

河口洋一郎: 「3次元CG映像による芸術表現」, 東大駒場, 2006.【招待講演】

河口洋一郎: "作品展", 杭州動画博覧会, 2006.【招待講演】

YoichiroKawaguchi: "Gemotion Dance , 3D Lenticular Byobu", 清華大学 芸術と科学国際展 Academy of Arts & Design , Tsinghua University, The 2nd Art & Science International Exhibition & Symposium, 2006.【招待講演】

河口洋一郎、原田隆弘、赤川智洋、八木真一郎、鶴岡修平: 「生物をモチーフにした人工生物の高精細ハイビジョンCG研究」, 文化庁メディア芸術祭 10 周年企画展, 2006.【招待講演】

河口洋一郎、真木準、佃一可、大村絵美:「種子島を大いに語る+ジェモーションパフォーマンス」, みなみの島の文化会議, 2006.【招待講演】

河口洋一郎、萩野正昭、奄美大島踊り子:「反応するジェモーションダンス」, DRINK '06「かごしまデジタルコンテツフォーラム」, 2006.【招待講演】

河口洋一郎:「河口洋一郎のCG世界」, 開館25周年記念特別企画展 南九州の現代作家たち「message 2007」, 2006.【招待講演】

河口洋一郎、團紀彦、三枝成彰、竹山聖:「遊び心天水」, 第28回日本文化デザイン会議, 2006.【招待講演】

一般向け講演等

YoichiroKawaguchi: "Gemotion opening performance, 3D Lenticular images", ASIAGRAPH YOKOHAMA, 2006.【招待講演】

河口洋一郎:「拡がるメディアアート展」, 女子美術大学, 2006.【招待講演】

河口洋一郎:「デジ展」, 東京都写真美術館, 2006.【招待講演】

河口洋一郎、原田隆弘、赤川智洋、八木真一郎、鶴岡修平:「山本寛斎スーパーショー「太陽の船」のCG映像の炎シーン、流体シーン、宝石蝶シーンの高精細CG表現技術の開発研究」, 山本寛斎スーパーショー「太陽の船」, 2006.【招待講演】

一般向け記事・報道等

河口洋一郎:「国立新美術館にて展示発表中のジェモーションスクリーン」, 日本テレビ「ザ・ワイド」, 2006.

河口洋一郎:「ジェモーションスクリーン」, 朝日新聞, 2006.

姜尚中・教授

研究テーマ(主たるもの)

東北アジアにおけるコリアンネットワークの形成

東北アジアにはこの地域を覆った植民地支配と戦争、さらに内戦と冷戦構造のために、数百万人に及ぶコリアン系マイノリティが散在し、言語、文化、社会、経済、アイデンティティなどの違いがありながらも、コリアンネットワークとも言える越境的(トランスナショナル)な移動、連鎖、交流の歴史が続いてきた。本研究は、このようなコリアンネットワークの形成とその歴史を辿りつつ、それが分断された朝鮮半島の平和的な共存と統一にどのような影響を与えることになるのか、その展望を明らかにすることにある。

東北アジア共同体形成の可能性とその展望

グローバル化の進展とともに、世界の多極化が進み、地域統合や地域主義の動きが顕著になりつつあるが、本研究では、このようなリージョナリズムの可能性と展望を、東北アジア地域に即して明らかにしようとするものである。具体的には、地政学的に東北アジア地域の中心に位置する朝鮮半島の共存と統一の問題を視野

に、この地域の冷戦構造の終結と冷戦以後の地域秩序の構築がどのようにしたら可能になるのか、その条件と展望を地域主義の構想を通じて明らかにすることにある。

近代日本の国民意識の形成とアジア認識

東アジアにおいて早熟的に国民国家の形成に成功し、日清戦争、日露戦争を通じて近隣アジア諸国との支配・従属関係を築いていくことになる近代日本は、その過程を通じて「日本型オリエンタリズム」ともいべき特異なアジア認識、アジア・イメージを形成していくことになった。本研究は、そのような近代日本のアジア認識の理念型的な構造とその歴史を、学問的な言説や論説、ジャーナリズムなどを素材に浮き彫りしようとするものである。

研究業績(2006年度)

著書等

姜尚中:「愛国の作法」, 朝日新聞社, 2006年.

姜尚中, 高橋哲哉, 村井吉敬, 辛淑玉, 内海愛子, 李省展:「ちょっとヤバイんじゃない? ナショナリズム: 平和をつくる」, 恵泉余が千金大学大学院国際シンポジウム実行委員会 編, 解放出版社, 2006年.

一般向け記事・報道等

姜尚中:「反骨対談 佐藤優×姜尚中 愛国心とカラオケボックス」, 週刊朝日, 2006年.

姜尚中; 水嶋一憲; 毛利嘉孝:「座談会 マルチチユードが〈帝国〉を変える -- 「グローバルな民主的主体」の希望と可能性 -- 姜尚中 東京大学教授×水嶋一憲 大阪産業大学教授×毛利嘉孝 東京芸術大学助教授」, 論座, 2006年.

姜尚中:「「反日」かどうかを尺度とする自家中毒--歴史認識をめぐる(検証 保守論壇(第2弾)特集 諸君! それでも正論か) -- (『諸君!』『正論』を読んで)」, 論座, 2006年.

姜尚中, 保阪正康, 吉田司:「白熱討論 ナショナリズムの「今」を問う 保守化するニッポン 原点としての満州(前編)」, 現代(講談社), 2006年.

姜尚中, 保阪正康, 吉田司:「白熱討論 ナショナリズムの「今」を問う(後編)免罪符としての「平和憲法」、アメリカ印の天皇制」, 現代(講談社), 2006年.

姜尚中, 寺島実郎:「スペシャルトーク 東京大学教授 姜尚中 VS 日本総合研究所会長 寺島実郎 次期リーダーに問われる東アジア外交の視点」, Forbes, 2006年.

姜尚中:「講演 二一世紀をどう切り拓くか--格差社会と全体主義にとりこまれないために(歴史教育者協議会第58回埼玉大会報告集)--(全体会)」, 歴史地理教育(歴史教育者協議会), 2006年.

姜尚中:「多国間の枠組みをつくる試金石。(特別企画 北朝鮮“核”問題と日本)」, 潮, No.574, pp.102~107, 2006年.

坂村健・教授

研究テーマ(主たるもの)

TRON(The Real-time Operating system Nucleus)

リアルタイムオペレーティングシステム(RTOS)はコンピュータ組込システム構築の際に最も中核となる基本ソフトウェアである。本研究では、RTOSの基礎研究であるリアルタイムスケジューラのアルゴリズムやアーキテクチャ設計など、基礎分野の研究から、RTOSの開発環境、応用システムまで幅広く研究をすすめている。1980年から20年以上にわたり進めているライフワーク的な研究となっており、TRONは現在、携帯電話や車のエンジン制御、デジタルカメラ、電子辞書、レーザープリンタなど多くの機器で使われており、組込システムの分野で世界でもっとも大きな実績をあげている。また、漢字のような大規模文字セットを使用する国において技術的な限界による文化制限を行わないですむ多言語コンピュータの研究も進め、その成果をふまえて構築されたBTRONでは17万字以上の文字を扱えるシステムの構築に成功している。

Ubiquitous Computing

コンピュータを身の回りのあらゆるものに埋め込み、それらをネットワークで結び、互いに協調動作させることで、人間生活をあらゆる面から支援するコンピュータシステム、ユビキタスコンピューティングの考え方や手法を、世界に先駆けて提唱した。これは、2000年以後の情報分野の学界・産業界をリードするコンセプトとして受け入れられ、このユビキタスコンピューティングに関する研究開発が世界的に盛んに行なわれるようになった。研究室では、Context-aware Computingや超小型チップのアーキテクチャ、ネットワークプロトコル、セキュリティシステム等の基礎的研究から応用システムまで幅広い研究を行い、世界的な成果を達成している。

Digital Museum

高度なデジタル技術を博物館や美術館に活用することで、新しいミュージアムの確立を提唱し「デジタルミュージアム」と名づけた。デジタル技術を駆使した、資料の収集、保存、修復、展示などの研究を行い、その成果をいかして構築した情報システムや展示システムは、東京国立博物館、国立歴史民族博物館、国立民俗学博物館、国立科学博物館、日本科学未来館といった、国内の主要な博物館での展示に採用された。この研究では複数のユーザが同時に共有できる三次元仮想空間システム:MMUD(Multi-Media Multi-User Dungeon)の研究開発を行い実用システムレベルにまで完成させた。

研究業績(2006年度)

著書等

坂村健:「ユビキタスでつくる情報社会基盤」, 東京大学出版会, 2006年.

坂村健 他:「Artificial Heart: 川崎和男展」, 川崎和男ほか 編, アスキー出版, 2006年.

坂村健:「変われる国・日本へ イノベート・ニッポン」, アスキー出版, 2007年.

論文等

中川樹生、小野豪一、乗松崇泰、藤原亮介、水垣健一、寺田崇秀、宮崎祐行、鈴木敬、矢野和男、前木陽、緒方祐次、小林真輔、越塚登、坂村健:「1cc超小型ノードを用いた22cm高精度測位システムの開発(1): 超低電力UWBセンサノードの開発」, 電子情報通信学会ソサイエティ大会, AS-4-4, 2006年.

水垣健一、藤原亮介、小野豪一、中川樹生、乗松崇泰、寺田崇秀、宮崎祐行、鈴木敬、矢野和男、前木陽、緒方祐次、小林真輔、越塚登、坂村健:「1cc超小型ノードを用いた22cm高精度測位システムの開発(2): UWB測位システムの実証実験」, 電子情報通信学会ソサイエティ大会, AS-4-5, 2006年.

小野豪一、乗松崇泰、藤原亮介、中川樹生、寺田崇秀、水垣健一、宮崎祐行、前木陽、緒方祐次、小林真輔、越塚登、坂村健:「超低電力 UWB 無線 LSI の検討(1):送信 LSI の開発」, 電子情報通信学会ソサイエティ大会, A-5-9, 2006 年.

乗松崇泰、小野豪一、藤原亮介、中川樹生、寺田崇秀、水垣健一、宮崎祐行、前木陽、緒方祐次、小林真輔、越塚登、坂村健:「超低電力 UWB 無線 LSI の検討(2):デジタル制御 UWB 送信機 RF 部の開発」, 電子情報通信学会ソサイエティ大会, A-5-10, 2006 年.

藤原亮介、小野豪一、水垣健一、乗松崇泰、中川樹生、寺田崇秀、宮崎祐行、前木陽、緒方祐次、小林真輔、越塚登、坂村健:「超低電力 UWB 無線 LSI の検討(3):同期捕捉方式の検討」, 電子情報通信学会ソサイエティ大会, A-5-11, 2006 年.

寺田崇秀、藤原亮介、乗松崇泰、小野豪一、中川樹生、水垣健一、宮崎祐行、前木陽、緒方祐次、小林真輔、越塚登、坂村健:「超低電力 UWB 無線 LSI の検討(4):CMOS 受信フロントエンドの設計」, 電子情報通信学会ソサイエティ大会, A-5-12, 2006 年.

前木陽、小林真輔、越塚登、坂村健、水垣健一、藤原亮介、小野豪一、宮崎祐行、鈴木敬、矢野和男:「UWB を用いた高精度測位応用に向けて」, 電子情報通信学会ソサイエティ大会, A-5-13, 2006 年.

小林真輔、諸隈立志、坂村健:「様々な通信プロトコルに動的対応可能な RFID リーダライタの試作」, 組込みシステムシンポジウム 2006 論文集, IPSJ シンポジウムシリーズ, Vol.2006, No.9, pp. 16-24, 2006 年.【査読有】

中川樹生、小野豪一、乗松崇泰、藤原亮介、水垣健一、寺田崇秀、宮崎祐行、鈴木敬、矢野和男、前木陽、緒方祐次、小林真輔、越塚登、坂村健:「1cc 超小型 UWB センサノードの開発」, 電子情報通信学会 SIS(スマートインフォメディアシステム)研究会, 2006 年.【査読有】

国際会議等

K. Mizugaki, R. Fujiwara, T. Nakagawa, G. Ono, T. Norimatsu, T. Terada, M. Miyazaki, Y. Ogata, A. Maeki, S. Kobayashi, N. Koshizuka, K. Sakamura: "Accurate Wireless Location/Communication System With 22-cm Error Using UWB-IR", IEEE Radio & Wireless Symposium 2007, 2007.【査読有】

口頭発表等

坂村健:「ユビキタスコンピューティング(T-Engine の動向も踏まえて)」, Embedded Technology 関西 2006【基調講演】, 2006.

坂村健:「ユビキタスコンピューティングについて」, (株)ジェイテック主催, 2006.

坂村健: "TRON for Embedded Application", 2006 International Symposium on Embedded Technology, 2006.

坂村健:「イノベーション基盤としてのユビキタス・ネットワーク」, 第 9 回 COE「ユビキタス・ネットワークとイノベーション」【基調講演】, 2006.

坂村健:「ユビキタス・コンピューティング時代のガバナンス」, 第 1 回社会技術「情報と社会」研究開発領域ワークショップ【基調講演】, 2006.

坂村健:「ICTが描く社会の未来像」, 「日経 130 周年記念シンポジウム」パネル討論, 2006.

坂村健:「イノベーション基盤としてのユビキタス・ネットワーク」, 第 21 回 研究・技術計画学会シンポジウム【基調講演】, 2006.

坂村健:「イノベーション基盤としてのユビキタス・ネットワーク」, 香港サイエンスパーク, 2006.【招待講演】

坂村健:「イノベーション基盤としてのユビキタスネットワーク」, u-Japan ベストプラクティス シンポジウム【基調講演】, 2006.

坂村健:「どこでもコンピュータの時代」, 第 6 回信州岩波講座, 2006.【招待講演】

坂村健:「ユニバーサル社会の基盤としてのユビキタス技術」, 熊本県 & 熊本経済同友会, 2006.【招待講演】

坂村健:「イノベーション基盤としてのユビキタス・ネットワーク」, 日本学会議中国・四国地区公開学術講演会, 2006.【招待講演】

坂村健:「ユビキタス技術の現状と展望」, 「安全・安心のユビキタストレーサビリティシステムの将来」【基調講演】, 2006.

坂村健: “Future House for Versatile and Converged Living – The House for Sustainability”, International Conference on Changing Places of Digi-log Future【基調講演 & プレゼンテーション】, 2006.

坂村健:「超小型チップネットワーク技術の研究開発」, GEATEC ユビキタスネットワークシンポジウム (UNS 2006), 2006.

坂村健:「ユビキタス・コンピューティングのプラットフォームとしての T-Engine」, Embedded Technology 2006, 2006.

坂村健:「ユビキタス場所情報システムとユニバーサルデザイン」, 日経デザイン主催 ユニバーサルデザインビジネス・シンポジウム 2006【特別講演】, 2006.

坂村健:「実空間と仮想空間の融合」, 第 10 回 COE「実空間と仮想空間の融合」【基調講演】, 2006.

坂村健:「ユビキタス コンピューティング」, 3 次元映像シンポジウム, 2006.

佐倉統・教授

研究テーマ(主たるもの)

科学技術コミュニケーション

科学技術の専門家と非専門家間のコミュニケーションを、円滑化、活性化するための方法論や制度策定および科学史的・文明論的な理論枠組みの構築。

脳神経倫理(ニューロエシックス)

脳神経科学の倫理的、社会的、哲学的諸問題を考察し、教育現場や社会とのコミュニケーションなどにおける実際の問題の解決をめざす。

進化生物学史、動物行動学史

とくに日本における進化生物学、動物行動学の歴史を、諸外国の事例と比較しつつ、特徴を抽出する。

研究業績(2006 年度)

著書等

中島尚正・原島博・佐倉統:「総合情報学'06」, 放送大学教育振興会, 2006 年.

ロバート・ウィンストン:「人類大図鑑 HUMAN(分担訳)」, 石井米雄(監訳) 編, ネコ・パブリッシング, 2006 年.

佐倉統・古田ゆかり:「おはようからおやすみまでの科学」, 筑摩書房, 2006 年.

論文等

佐倉統:「科学技術コミュニケーターの社会的役割と文化論的展望」, 科学, Vol.76, No.1, pp.42-47, 2006 年. 【査読有】

福士珠美・佐倉統:「脳をめぐる倫理——脳神経倫理学を構成する事象」, 科学, Vol.76, No.8, pp.778-782, 2006 年. 【査読有】

Fukushi T., Sakura O., Koizumi H.: "Ethical considerations of neuroscience research: the perspectives on neuroethics in Japan.", Neuroscience Research, Vol.57, No.1, pp.10-16, 2007 年. 【査読有】

佐倉統:「科学者が考える 2050 年の世界」, 科学技術と社会(丸善プラネット), 2006 年.

入来篤史・北澤茂・佐倉統・本田学:「“神経神話”が問いかけるもの-科学と社会の関係を考える」, 科学, 座談会司会・主催, 2007 年.

国際会議等

Yoshiko Uematsu, Harumi Kusumi, Akira Wakita, Masahiko Furukata, Takuji Tokiwa, Yuko Hashimoto, Kei Takeuchi, Masahiro Kato, Osamu Sakura: "How to design science communication via WWW?: Interaction between virtual and real communities.[Poster Presentation]", The 9th International Conference on Public Communication of Science and Technology(PCST-9), 2006. 【査読有】

Nozomi Mizushima, Kohta Juraku, Osamu Sakura: "The gap between sexworkers' needs and information provided by medical specialists on HIV/STD prevention in Japan.", The 9th International Conference on Public Communication of Science and Technology(PCST-9), 2006. 【査読有】

Mari Futaki, Osamu Sakura: "Do you trust wikipedia? ----Reliability and acceptance of web resources on science and technology in Japan.", The 9th International Conference on Public Communication of Science and Technology(PCST-9), 2006. 【査読有】

Kohta Juraku, Yuichiro Okawa, Tatsujiro Suzuki, Osamu Sakura: "Social decision making process for siting of nuclear power plants in Japan - Case studies on Maki-machi and Hokkaido -", The 9th International Conference on Public Communication of Science and Technology(PCST-9), 2006. 【査読有】

Tamami Fukushima, Osamu Sakura: "Ethical consideration of neuroscience: Neuroethics and its perspective.", The 9th International Conference on Public Communication of Science and Technology(PCST-9), 2006. 【査読有】

Sakura O.: "Bridging Neuroscience and Public: Neuroethics in Cultural Contexts", Neuroscience 2006 in Kyoto, JAPAN, 2006. 【査読有】

Fukushi T., Sakura O.: "Current Status of Neuroethics in Japan.", International Conference European Association of Centres of Medical Ethics. New Pathways for European Bioethics. EACME, 2006. 【査読有】

Osamu Sakura, Emi Sonoda, Mari Futaki, Kohta Juraku: "From contents to context: Current status, classification, and perspective of science communication in Japan.", The 9th International Conference on Public Communication of Science and Technology(PCST-9), 2006. 【査読有】

Fukushi T., Sakura O.: "Current Status of Neuroethics: International frontier and Asian perspectives.", 8th Asian Bioethics Conference, 2007. 【査読有】

口頭発表等

Fukushi T., Sakura O.: "Ethical consideration of Neuroscience: Neuroethics and its perspective in Japan.", UNESCO Asia-Pacific Conference on Bioethics Education, 2006. 【招待講演】

Fukushi T., Sakura O.: 「Towards a good future of science and technology: necessity of ethics education in neuroscience community in Japan.」, UNESCO-UNU Bioethics Roundtable, 2006. 【招待講演】

Judy Illes, Sakura O., Fukushi T.: "At the Ethical Frontier of Higher Brain Function Research [Symposium]", Neuroscience 2006 in Kyoto JAPAN, 2006.

福士珠美・佐倉統:「脳をめぐる倫理-脳神経倫理を構成する事象-」, 岩波『科学』編集会議勉強会, 2006. 【招待講演】

Fukushi T., Sakura O.: "Current Status of Neuroethics in Japan.", Dipartimento di Fisiologia Umana e Farmacologia, Universita di Roma "la Sapienza", Rome Italy, 2006.

Fukushi T., Sakura O.: "Current Status of Neuroethics: International frontier and Japanese perspective.", Seminar at Center for Biomedical Ethics, Stanford University, Palo Alto, CA, USA., 2006. 【招待講演】

Fukushi T., Sakura O.: "Current Status of Neuroethics: International frontier and Japanese perspective.", Seminar at Center for Biomedical Ethics, UCLA, Los Angeles, CA, USA., 2006. 【招待講演】

JST-RISTEX(主催), 佐倉統(コーディネーター): ""Dialog on Brain, Society, and Ethics"(邦題:脳と社会と倫理の対話)", 第1回「脳神経科学と倫理」国際ワークショップ, 2006.

福士珠美, 本田 学, 香川知晶, オーガナイザー: 佐倉統, 玉井真理子:「脳神経倫理学(ニューロエシックス)への招待」, 第18回日本生命倫理学会ワークショップ V, 岡山大学, 2006.

Sakura O., Fukushi T., Azariah J. (organizers): "Can and Will Neuroscience Contribute Peace and Health of Human Being? [workshop]", 8th Asian Bioethics Conference. Panel Session, Bangkok, Thailand, 2006. 【招待講演】

佐倉統:「科学技術は誰のために? ~生活者主体の科学技術の評価と適正化をめぐる~」, 「社会技術開発センター」研究助成シンポジウム, 2006. 【招待講演】

佐倉統:「科学技術と社会の関係は、なぜうまくいかないのか?」, 知的財産マネジメント研究会, 政策研究大学院大学, 2007. 【招待講演】

Sakura O., Fukushi T., Azariah J., Chen D.: "Can and Will Neuroscience Contribute Peace and Health of Human Being?", 8th Asian Bioethics Conference. Panel Session, Bangkok, Thailand, 2007.

一般向け講演等

佐倉統(モデレーター)・大隅典子(講師):「大人の脳でも神経細胞が作られる!」, サイエンスカフェ, 三省堂書店本店神田本店, 2006.

佐倉統(ファシリテーター)・土井美和子(講師):「どうなる? Web2.0 と、その先」, サイエンスカフェ, カフェ古炉奈, 2006.

佐倉統:「未来の遺伝子～生命のはるかなる旅～」, 福井ライフ・アカデミー現代的課題講座「先端科学」『最新の現代科学を学ぶ』, 2006.【招待講演】

佐倉統(講演およびパネリスト):「ロボットは人間にとって何なのか? -敵か味方か、鏡か窓か-」, 東京大学公開講座「ロボット新世紀」「ロボットと社会」, 2006.

佐倉統:「サイエンスで広がる子どもの世界」, NPO 法人子ども文化コミュニティ主催コミュニティ・カフェ, 2006.【招待講演】

佐倉統:「知識の進化-智慧と創造性は社会がはぐくむ」, ヒューマンエデュケーション主催講演, 2006.【招待講演】

佐倉統:「脳科学と神経神話～科学と社会の健全な関係を探る～」, サイエンスアゴラ 2006 セミナー, 2006.

佐倉統:「ニューロエシックスとは何か」, 東京大学先端科学技術研究センター・オープンスクール・ジャーナリスト養成コース, 2006.【招待講演】

佐倉統:「社会の中のゲノム科学」, 文部科学省科学研究費特定領域研究「応用ゲノム」主催市民講座「次世代と考えるゲノム科学の未来」, 2006.【招待講演】

JST-RISTEX(主催), 佐倉統(モデレーター):「ゲームの脳科学 -子どもも大人もみんな大好き!?-」, 第3回「脳神経科学と倫理」ワークショップ関連行事サイエンスカフェ, 2006.

JST-RISTEX(主催), 佐倉統(モデレーター):「赤ちゃんの脳、子どもの脳 -科学と学びと育ちの倫理-」, 第3回「脳神経科学と倫理」ワークショップ, 2006.

一般向け記事・報道等

佐倉統:「科学のタネは、どこにでもころがっている」, 楽しい理科授業, Vol.479, No.6, 2006 年.

佐倉統:「佐倉統のサイエンスつれづれぐさ(連載)」, 言語, 2006 年.

佐倉統:「佐倉統のサイエンスサラダ」, 読売新聞夕刊, 2006.

佐倉統:「タイトル不明」, 日本経済新聞, 2006.

佐倉統:「視点・論点《社会の中の脳神経科学》」, NHK 教育テレビ, 2006.

佐倉統:「テレビゲーム うまく付き合うには」, 北海道新聞, 2006.

佐倉統:「「あるある」外部調査委報告」, 朝日新聞, 2006.

佐倉統:「サイエンス ZERO」, NHK テレビ, 2006.

佐倉統:「脳知る技使う心 2 “進化”する機能 膨大な情報巧みに適応」, 日本経済新聞, 2006.

佐倉統・香川知晶・福士珠美:「特集「生命倫理は今」」, 読売新聞, 2006.

佐倉統:「OH! 脳」, 朝日新聞, 2007.

佐倉統:「マスメディアと科学—相互不信からの脱却めざせ—」, 朝日新聞夕刊, 2007.

佐々木正人・教授

研究テーマ(主たるもの)

身体と環境を複合する情報の研究

文部省科学研究費特定(「情報学」)からの援助を得て、(1)リハビリテーション病院に於ける重度運動障害者の運動の再学習過程の解析(頸椎損傷者、高次脳機能障害者等を対象とした)、(2)乳児を対象としてアフォーダンス(行為—環境単位)データベースの構築の研究を行った(継続中)。

生態心理学・アフォーダンス理論とその応用についての研究

また生態心理学についての研究を行った。その内容は海外の生態心理学者を招いての集中講義の実施や国際生態心理学会への参加、生態心理学についての研究結果を書籍として刊行する等の活動である。

研究業績(2006 年度)

著書等

佐々木正人:「アート/表現する身体—アフォーダンスの現場」, 東京大学出版会, 2006 年.

佐々木正人, 瀬名 秀明, 大澤 真幸, 國吉 康夫:「季刊デザイン 13」, 太田出版, 2006 年.

Edward S. Reed:「伝記 ジェームズ・ギブソン—知覚理論の革命」, 佐々木 正人(翻訳) 他 編, 勁草書房, 2006 年.

佐々木正人:「包まれるヒト—〈環境〉の存在論」, 岩波書店, 2007 年.

澤田康文・教授

研究テーマ(主たるもの)

理理融合・文理融合による、国民の安心安全を確保するための「投薬ミス予測システム」プロジェクト

情報分野の理理融合と文理融合という情報学環の特色を活かし、薬物治療に関するヒヤリハット・ミス事例を収集し、学際的に解析することで、投薬ミスを事前予測し、予防することを目指す。さらに、予測不能であった新規の要因による事例も含めて「薬物治療ヒヤリハット・ミスライブラリー」を構築し、「リスクマネジメント文化」の糧とする。

臨床事例を活用した実践的薬学教育研修システムの確立とその評価

臨床事例(教育的事例素材)の効果的な収集、その評価・体系化・加工、ならびに教育用事例を用いた薬学教育、薬剤師研修のための方法論を確立するとともに、その方法論を実行・評価する。

薬物の胎児移行性及び胎児毒性の予測と、薬物動態・動力学理論に基づくテーラーメイド・処方設計システムへの応用

ヒト胎盤を活用し、さまざまな実験系における薬物の輸送実験を行うことで、薬物の胎児移行性を *in vitro* において効率的かつ定量的に推測するための方法論を構築する。さらにそれらに薬物動態・動力学理論を適用し、処方設計や処方チェックの場面に最適な形で適用するための「テーラーメイド処方設計支援システム」のモジュールを開発する。

研究業績(2006 年度)

著書等

澤田康文, 大谷壽一 他:「ミクス薬学実践シリーズ 薬剤師の臨床業務に役立つ情報活用法 [改訂版]」, 折井孝男(監修) 編, エルゼビア・ジャパン, 2006 年.

澤田康文 他:「食中毒検査・診療のコツと落とし穴」, 渡辺治雄 編, 中山書店, 2006 年.

澤田康文:「処方せん鑑査・疑義照会 実践トレーニング3」, 南山堂, 2006 年.

澤田康文 他:「日経DIクイズ 服薬指導・実践篇8」, 日経ドラッグインフォメーション 編, 日経BP社, 2006 年.

澤田康文 他:「説明力UP! 臨床で役立つ薬の知識」, 折井孝男(監修) 編, 学習研究社, 2006 年.

論文等

H. Fuchikami, H. Satoh, M. Tsujimoto, S. Ohdo, H. Ohtani and Y. Sawada: "Effects of herbal extracts on the function of human organic anion-transporting polypeptide OATP-B", *Drug Metab. Dispos.* 34(4), 2006 年. 【査読有】

D. Tenmizu, K. Noguchi, H. Kamimura, H. Ohtani and Y. Sawada: "The canine CYP1A2 deficiency polymorphism dramatically affects the pharmacokinetics of 4-cyclohexyl-1-ethyl-7-methylpyrido[2,3-D]-pyrimidine-2-(1H)-one (YM-64227), a phosphodiesterase type 4 inhibitor", *Drug Metab. Dispos.* 34(5), 2006 年. 【査読有】

Y. Murakami, T. Tanaka, H. Murakami, M. Tsujimoto, H. Ohtani and Y. Sawada: "Pharmacokinetic modelling of the interaction between St Johns wort and cyclosporin A", *Br. J. Clin. Pharmacol.* 61(6), 2006 年. 【査読有】

A. Ohnishi, H. Ohtani and Y. Sawada: "Major determinant factors of the extent of interaction between grapefruit juice and calcium channel antagonists", *Br. J. Clin. Pharmacol.* 62(2), 2006 年. 【査読有】

H. Ohtani, Y. Kinoshita, Y. Nagasaki, H. Sata, A. Miki, M. Tsujimoto and Y. Sawada: "Dosage adjustment of quinolone antibiotics and angiotensin-converting enzyme inhibitors in patients with renal dysfunction", *Int. J. Clin. Pharmacol. Ther.* 44(9), 2006 年. 【査読有】

F. Yamashita, H. Ohtani, N. Koyabu, F. Ushigome, H. Satoh, H. Murakami, T. Uchiyama, T. Nakamura, M. Kuwano, M. Tsujimoto and Y. Sawada: "Inhibitory effects of angiotensin II receptor antagonists and leukotrien receptor antagonists on the transport of human organic anion transporter 4", *J. Pharm. Pharmacol.* 58(11), 2006 年. 【査読有】

M. Tsujimoto, S. Hirata, Y. Dan, H. Ohtani and Y. Sawada: "Polymorphisms and linkage disequilibrium of the OATP8 (OATP1B3) gene in Japanese subjects", *Drug Metab. Pharmacokinet.* 21(2), 2006 年. 【査読有】

T. Hino, T. Yokota, S. Ito, K. Nishina, Y.S. Kang, S. Mori, S. Hori, T. Kanda, T. Terasaki and H. Mizusawa: "In vivo delivery of small interfering RNA targeting brain capillary endothelial cells", *Biochem. Biophys. Res. Commun.* 340(1), 2006 年. 【査読有】

T. Asashima, S. Hori, S. Ohtsuki, M. Tachikawa, M. Watanabe, C. Mukai, S. Kitagaki, N. Miyakoshi and T. Terasaki: "ATP-binding cassette transporter G2 mediates the efflux of phototoxins on the luminal membrane of retinal capillary endothelial cells", *Pharm. Res.* 23(6), 2006 年. 【査読有】

S. Ohtsuki, T. Kikkawa, S. Hori and T. Terasaki: "Modulation and compensation of the mRNA expression of energy related transporters in the brain of glucose transporter 1-deficient mice", *Biol. Pharm.* 29(8), 2006 年. 【査読有】

大谷壽一, 竹田正幸, 今田結城, 澤田康文: 「医薬品の取り違えミスを防止するための薬名類似度の定量的指標の構築」, *薬学雑誌* 126(5), 2006 年. 【査読有】

佐田宏子, 大谷壽一, 折井孝男, 澤田康文: 「処方オーダーリングシステムの入力方法と操作性における問題点－医師に対するアンケート調査－」, *医療薬学* 32(7), 2006 年. 【査読有】

佐田宏子, 大谷壽一, 澤田康文: 「適正な処方設計・調剤支援システムのための医薬品製剤情報の規格化」, *医療情報学* 26(3), 2006 年. 【査読有】

辻野靖彦, 佐田宏子, 杉山清子, 友永雄二, 三木晶子, 堀里子, 大谷壽一, 澤田康文: 「テガフル, ギメラシル, オテラシルカリウム 3 剤配合抗癌剤(ティーエスワン)の適正使用の実態調査と Web e-learning システムの構築」, *医薬品情報学* 7(4), 2006 年. 【査読有】

佐田宏子, 大谷壽一, 矢崎泰三, 坂本浩己, 堀里子, 澤田康文: 「WEB ページを用いた薬剤師向け実践的知識修得型 e-Learning システムの開発」, *医薬品情報学* 8(1), 2006 年. 【査読有】

久澄礼子, 大谷壽一, 三木晶子, 堀里子, 澤田康文: 「服薬ノンコンプライアンス時の薬剤師の対応に関する実状と問題点」, *医薬品情報学* 8(2), 2006 年. 【査読有】

久澄礼子, 大谷壽一, 堀里子, 澤田康文: 「モルヒネ製剤の剤形変更時の薬剤師の対応に関する研究」, *医薬品情報学* 8(3), 2006 年. 【査読有】

口頭発表等

澤田康文: 医療薬学フォーラム 2006 第 14 回クリニカルファーマシーシンポジウム、大阪(7 月 15 日), 2006. 【招待講演】

澤田康文: 第 61 回医薬品相互作用研究会シンポジウム、新潟(7 月 22 日), 2006. 【招待講演】

江頭あゆ子, 大谷壽一, 堀里子, 三木晶子, 澤田康文:「医薬品・食品などの併用による脂溶性ビタミン摂取評価 ASP システムの構築」, 第 9 回日本医薬品情報学会総会・学術大会 (京都, 2006 年 7 月), 2006.

住広匡謙, 堀里子, 三木晶子, 大谷壽一, 澤田康文:「一般用医薬品が関係した薬物相互作用回避データベースの構築」, 第 9 回日本医薬品情報学会総会・学術大会 (京都, 2006 年 7 月), 2006.

澤田康文, 新宅恭平, 辻本雅之, 永田秀昭, 佐藤昌司, 月森清巳, 中野仁雄, 堀里子, 大谷壽一:「NSAIDs による胎児毒性予測のための医薬品情報の構築—非臨床試験データの PK/PD に基づく解析—」, 第 9 回日本医薬品情報学会総会・学術大会 (京都, 2006 年 7 月), 2006.

永井麻理枝, 大谷壽一, 堀里子, 澤田康文:「腎障害患者に対する抗不整脈薬の投与設計支援システムの構築」, 第 9 回日本医薬品情報学会総会・学術大会 (京都, 2006 年 7 月), 2006.

本間秀彰, 後藤輝明, 河野弘之, 大谷壽一, 三木晶子, 堀里子, 澤田康文:「青汁の使用実態調査」, 第 9 回日本医薬品情報学会総会・学術大会 (京都, 2006 年 7 月), 2006.

石河利恒, 寺門千佳子, 大和田邦明, 天野武城, 堀里子, 三木晶子, 大谷壽一, 澤田康文:「医薬品の包装・製剤変更に関する情報の規格化・標準化」, 第 9 回日本医薬品情報学会総会・学術大会 (京都, 2006 年 7 月), 2006.

大谷壽一, 竹田正幸, 今田結城, 澤田康文:「医薬品の薬名類似度を評価するための定量的指標の構築と評価」, 第 9 回日本医薬品情報学会総会・学術大会 (京都, 2006 年 7 月), 2006.

佐田宏子, 大谷壽一, 堀里子, 澤田康文:「処方オーダーリングシステムにおける標準ヒューマン・マシンインターフェースの提案—医師に対するアンケート調査—」, 第 9 回日本医薬品情報学会総会・学術大会 (京都, 2006 年 7 月), 2006.

三木晶子, 堀里子, 大谷壽一, 澤田康文:「ジェネリック医薬品—現場では何が起きているか?—」, 第 9 回日本医薬品情報学会総会・学術大会 (京都, 2006 年 7 月), 2006.

久澄礼子, 大谷壽一, 堀里子, 澤田康文:「モルヒネ製剤の剤形変更時における処方設計支援システムの構築とその評価」, 第 9 回日本医薬品情報学会総会・学術大会 (京都, 2006 年 7 月), 2006.

堀里子, 永井麻理枝, 辻野靖彦, 佐々木豊明, 三木晶子, 大谷壽一, 澤田康文:「ティーエスワンと患者宅に残置されたフツ化ピリミジン系薬剤との併用症例とその PK 解析」, 第 9 回日本医薬品情報学会総会・学術大会 (京都, 2006 年 7 月), 2006.

辻野靖彦, 杉山清子, 友永雄二, 大谷壽一, 堀里子, 三木晶子, 澤田康文:「患者宅残置薬の実態調査と医薬品適正使用」, 第 9 回日本医薬品情報学会総会・学術大会 (京都, 2006 年 7 月), 2006.

澤田康文: 日本病院薬剤師会関東ブロック第 36 回学術大会ランチョンセミナー 3、群馬 (8 月 27 日), 2006. 【招待講演】

宇野幹子, 三木晶子, 堀里子, 大谷壽一, 澤田康文:「医薬品情報学に基づくジェネリック医薬品の評価基準の確立とプラバスタチン製剤への適用」, 第 16 回日本医療薬学会年会 (金沢 2006 年 9 月), 2006.

住廣匡謙, 堀里子, 大谷壽一, 澤田康文:「一般用医薬品が関係した薬物相互作用チェックシステムの構築」, 第 16 回日本医療薬学会年会 (金沢 2006 年 9 月), 2006.

澤田康文: 第 39 回日本薬剤師会学術大会、福井 (10 月 8 日), 2006. 【招待講演】

齊田翌美, 井上綾子, 石橋久, 富永宏治, 勢島充, 高木淳一, 堀里子, 三木晶子, 小野信昭, 大谷壽一, 澤田康文:「ケトプロフェン貼付剤の先発医薬品と後発医薬品の使用感実態調査」, 第 39 回日本薬剤師会学術大会(福井, 2006 年 10 月), 2006.

堀里子, 三木晶子, 高木淳一, 小野信昭, 田中祥子, 一瀬信介, 大谷壽一, 澤田康文:「ヒヤリハット事例に学ぶ薬剤業務のリスクマネジメント研究会の展開と評価」, 第 39 回日本薬剤師会学術大会(福井, 2006 年 10 月), 2006.

澤田康文: 第 2 回栃木県肺塞栓症研究会、栃木(12 月 5 日), 2006.【招待講演】

一般向け講演等

澤田康文: 川崎市薬剤師会川崎・幸支部生涯教育研修会、川崎(1 月 26 日), 2006.【招待講演】

澤田康文: 薬剤師生涯教育研修会、佐賀(1 月 28 日), 2006.【招待講演】

澤田康文: 長野市薬剤師会特別生涯教育講座、長野(2 月 10 日), 2006.【招待講演】

澤田康文: 平成 17 年度薬事情報冬期研修会、大分(2 月 26 日), 2006.【招待講演】

澤田康文: 先端創薬科学講座セミナーコース、東京(2 月 27 日), 2006.【招待講演】

澤田康文: (社)足立区薬剤師会学術研修会、東京(3 月 4 日), 2006.【招待講演】

澤田康文: 平成 17 年度 第 2 回薬局薬剤師スキルアップ研修会、千葉(3 月 5 日), 2006.【招待講演】

澤田康文: 周南地区病院診療所薬剤師会講演会、山口(3 月 15 日), 2006.【招待講演】

澤田康文:「病態整理と薬効薬理から処方せんを見る」研修会、福岡(4 月 23 日), 2006.【招待講演】

澤田康文: ラミシール錠発売 8 周年記念学術講演会、和歌山(5 月 13 日), 2006.【招待講演】

澤田康文:「病態整理と薬効薬理から処方せんを見る」研修会、東京(5 月 14 日), 2006.【招待講演】

澤田康文: 平成 18 年度国公立大学病院薬剤部職員研修、東京(5 月 26 日), 2006.【招待講演】

澤田康文: 桔梗会セミナー、東京(6 月 4 日), 2006.【招待講演】

澤田康文:「病態整理と薬効薬理から処方せんを見る」研修会、大阪(6 月 11 日), 2006.【招待講演】

澤田康文: 東京薬科大学東薬会神奈川支部公開卒後教育講座、神奈川(6 月 25 日), 2006.【招待講演】

澤田康文: 平成 18 年度山形県薬・県病薬合同研修会、山形(7 月 2 日), 2006.【招待講演】

澤田康文:「病態整理と薬効薬理から処方せんを見る」研修会、札幌(7 月 9 日), 2006.【招待講演】

澤田康文: 日経ドラッグインフォメーション Update SEMINAR「患者、薬局に求められる薬剤師像 2006:大阪」、大阪(7 月 15 日), 2006.【招待講演】

澤田康文: 平成 18 年度北里大学卒後教育セミナー、東京(9 月 16 日), 2006.【招待講演】

澤田康文: 広島県製薬協会講演会、広島(9月21日), 2006.【招待講演】

澤田康文: 平成18年度新潟薬科大学薬学部薬剤師生涯教育講座、新潟(9月23日), 2006.【招待講演】

澤田康文: 「病態整理と薬効薬理から処方せんを見る」研修会、名古屋(9月24日), 2006.【招待講演】

澤田康文: ワーファリンを使いこなすための勉強会、茨城(9月25日), 2006.【招待講演】

澤田康文: 第10回ノバセミナー、横浜(9月29日), 2006.【招待講演】

澤田康文: 薬学集談会、栃木(10月12日), 2006.【招待講演】

澤田康文: 健康食品管理士認定協会・関東支部研修会、東京(10月29日), 2006.【招待講演】

澤田康文: 平成18年度第56回学校薬剤師大会、島根(11月10日), 2006.【招待講演】

澤田康文: 平成18年度福島県薬剤師医療安全対策研修会、福島(11月23日), 2006.【招待講演】

澤田康文: 第44回大阪薬科大学公開教育講座、大阪(11月25日), 2006.【招待講演】

澤田康文: 第40回星薬科大学卒業後教育講座、東京(11月26日), 2006.【招待講演】

澤田康文: 医薬品・医療機器国民フォーラム、東京(12月2日), 2006.【招待講演】

一般向け記事・報道等

澤田康文: 「医薬品ライフタイムマネジメント正しく使って上手に育てる(16) 大学薬学部・薬科大学が行うこと(II)」, 月刊薬事 48(1), 2006年.

澤田康文: 「医薬品ライフタイムマネジメント正しく使って上手に育てる(17) 大学薬学部・薬科大学が行うこと(III)」, 月刊薬事 48(2), 2006年.

澤田康文: 「医薬品ライフタイムマネジメント正しく使って上手に育てる(18) 患者・医療消費者とともに行う育薬」, 月刊薬事 48(3), 2006年.

澤田康文: 「安全対策における医薬品情報の果たすべき役割と未来」, 医薬ジャーナル 42(5), 2006年.

澤田康文, 三木晶子, 大谷壽一: 「薬と食の相互作用(76) III.薬と食事の相性 16.ペニシラミンと食事」, 医薬ジャーナル 42(1), 2006年.

澤田康文, 三木晶子, 大谷壽一: 「薬と食の相互作用(77) III.薬と食事の相性 17.リルゾールと食事」, 医薬ジャーナル 42(2), 2006年.

澤田康文, 三木晶子, 堀里子, 大谷壽一: 「薬と食の相互作用(78) III.薬と食事の相性 18.シロスタゾールと食事」, 医薬ジャーナル 42(3), 2006年.

澤田康文, 三木晶子, 堀里子, 大谷壽一: 「薬と食の相互作用(79) III.薬と食事の相性 19.エトレチナートと食事」, 医薬ジャーナル 42(4), 2006年.

澤田康文, 三木晶子, 堀里子, 大谷壽一: 「薬と食の相互作用(80) III.薬と食事の相性 20.麻黄湯(エフェドリンなど)と食事」, 医薬ジャーナル 42(5), 2006年.

澤田康文, 三木晶子, 堀里子, 大谷壽一:「薬と食の相互作用(81) III.薬と食事の相性 21.ミチグリニドと食事」, 医薬ジャーナル 42(6), 2006 年.

澤田康文, 堀里子, 佐藤宏樹, 大谷壽一:「薬と食の相互作用(82) III.薬と食事の相性 22.リバビリンと食事」, 医薬ジャーナル 42(7), 2006 年.

澤田康文, 堀里子, 大谷壽一:「薬と食の相互作用(83) III.薬と食事の相性 23.レボドパと食事」, 医薬ジャーナル 42(8), 2006 年.

澤田康文, 堀里子, 大谷壽一:「薬と食の相互作用(84) III.薬と食事の相性 24.イソニアジドと食事」, 医薬ジャーナル 42(9), 2006 年.

澤田康文, 堀里子, 大谷壽一:「薬と食の相互作用(85) III.薬と食事の相性 25.アルベンダゾールと食事」, 医薬ジャーナル 42(10), 2006 年.

澤田康文, 堀里子, 大谷壽一:「薬と食の相互作用(86) III.薬と食事の相性 26.ホリナート・テガフル・ウラシル療法と食事」, 医薬ジャーナル 42(11), 2006 年.

澤田康文, 堀里子, 三木晶子, 大谷壽一:「薬と食の相互作用(87) III.薬と食事の相性 27.イトラコナゾールと食事(2)」, 医薬ジャーナル 42(12), 2006 年.

澤田康文:「ヒヤリハット事例に学ぶ(14) 剤形変更が招く過量服用」, 日経ドラッグインフォメーション 99, 2006 年.

澤田康文:「ヒヤリハット事例に学ぶ(15)「代理人への服薬指導」は要注意」, 日経ドラッグインフォメーション 101, 2006 年.

澤田康文:「ヒヤリハット事例に学ぶ(16) 処方時の患者取り違えに注意」, 日経ドラッグインフォメーション 103, 2006 年.

澤田康文:「ヒヤリハット事例に学ぶ(17) 残薬を自己判断で継続使用」, 日経ドラッグインフォメーション 105, 2006 年.

澤田康文:「ヒヤリハット事例に学ぶ(18) 患者の連絡先変更に要注意」, 日経ドラッグインフォメーション 107, 2006 年.

澤田康文:「ヒヤリハット事例に学ぶ(19) 錠剤の形状が変わり不安に」, 日経ドラッグインフォメーション 109, 2006 年.

澤田康文:「「ヒヤリ・ハット」と「処方チェック」の実際 (53)」, ふくおか県薬会報 19(1), 2006 年.

澤田康文:「「ヒヤリ・ハット」と「処方チェック」の実際 (54)」, ふくおか県薬会報 19(2), 2006 年.

澤田康文:「「ヒヤリ・ハット」と「処方チェック」の実際 (55)」, ふくおか県薬会報 19(3), 2006 年.

澤田康文:「「ヒヤリ・ハット」と「処方チェック」の実際 (56)」, ふくおか県薬会報 19(4), 2006 年.

澤田康文:「「ヒヤリ・ハット」と「処方チェック」の実際 (57)」, ふくおか県薬会報 19(5), 2006 年.

澤田康文:「「ヒヤリ・ハット」と「処方チェック」の実際 (58)」, ふくおか県薬会報 19(6), 2006 年.

澤田康文:「「ヒヤリ・ハット」と「処方チェック」の実際 (59)」, ふくおか県薬会報 19(7), 2006 年.

澤田康文:「「ヒヤリ・ハット」と「処方チェック」の実際(60)」、ふくおか県薬会報 19(8), 2006 年.

澤田康文:「「ヒヤリ・ハット」と「処方チェック」の実際(61)」、ふくおか県薬会報 19(9), 2006 年.

澤田康文:「「ヒヤリ・ハット」と「処方チェック」の実際(62)」、ふくおか県薬会報 19(10), 2006 年.

澤田康文:「「ヒヤリ・ハット」と「処方チェック」の実際(63)」、ふくおか県薬会報 19(11), 2006 年.

澤田康文:「「ヒヤリ・ハット」と「処方チェック」の実際(64)」、ふくおか県薬会報 19(12), 2006 年.

澤田康文監修:「東大・薬剤師会「育薬セミナー」」、市薬ジャーナル(福岡市薬剤師会会報) 125, 2006 年.

澤田康文監修:「東大・薬剤師会「育薬セミナー」」、市薬ジャーナル(福岡市薬剤師会会報) 126, 2006 年.

澤田康文監修:「東大・薬剤師会「育薬セミナー」」、市薬ジャーナル(福岡市薬剤師会会報) 127, 2006 年.

澤田康文監修:「東大・薬剤師会「育薬セミナー」」、市薬ジャーナル(福岡市薬剤師会会報) 128, 2006 年.

澤田康文監修:「東大・薬剤師会「育薬セミナー」」、市薬ジャーナル(福岡市薬剤師会会報) 129, 2006 年.

澤田康文監修:「東大・薬剤師会「育薬セミナー」」、市薬ジャーナル(福岡市薬剤師会会報) 130, 2006 年.

澤田康文, 大谷壽一:「医薬品と飲食物の有害相互作用」, 臨床薬理 37(2), 2006 年.

澤田康文:「いまいちど, 医薬品のための薬学, 育薬を考える」, 都薬雑誌 28(4), 2006 年.

澤田康文:「薬物相互作用回避のための処方設計支援～代謝阻害に関する時間依存性相互作用～」, 医薬品相互作用研究 30, 2006 年.

澤田康文:「Ph.D. Sawada の Rp.チェック! 前兆のない突発的睡眠などに注意が必要」, Rp.[レシピ] 5(1), 2006 年.

澤田康文:「Ph.D. Sawada の Rp.チェック! ビタミン D とカルシウムの過剰摂取に注意する必要がある」, Rp.[レシピ] 5(2), 2006 年.

澤田康文:「Ph.D. Sawada の Rp.チェック! ラミシールとほかの併用薬剤との相互作用をチェックする」, Rp.[レシピ] 5(3), 2006 年.

澤田康文:「Ph.D. Sawada の Rp.チェック! ジプレキサはどのような患者に投与禁忌となっているかをチェックする」, Rp.[レシピ] 5(4), 2006 年.

澤田康文:「薬物相互作用ワンポイント 第 10 回 薬と果物ジュースの相互作用」, INTERET 10, 2006 年.

澤田康文:「薬物相互作用ワンポイント 第 11 回 薬と健康食品との相互作用」, INTERET 11, 2006 年.

澤田康文:「薬物相互作用ワンポイント 第 12 回 薬とタバコとの相互作用」, INTERET 12, 2006 年.

澤田康文:「薬剤師のためのリスクマネジメント(1) ヒヤリハットの事例に学ぶ「処方せん鑑査・疑義照会」リスクマネジメント」, Farma Chugai 3(1), 2006 年.

澤田康文:「薬剤師のためのリスクマネジメント(2) ヒヤリハットの事例に学ぶ「薬剤の調製など」リスクマネジメント(上)」, Farma Chugai 3(2), 2006 年.

澤田康文:「薬剤師のためのリスクマネジメント(3) ヒヤリハットの事例に学ぶ「薬剤の調製など」リスクマネジメント(下)」, Farma Chugai 3(3), 2006 年.

澤田康文:「薬剤師のためのリスクマネジメント(4) ヒヤリハットの事例に学ぶ「服薬指導」リスクマネジメント」, Farma Chugai 3(4), 2006 年.

澤田康文:「医師への情報提供のための医薬品情報」, Medical Pharmacy 40(5), 2006 年.

澤田康文:「高齢者の確実な服薬をサポートするには?」, MediCafe 1(2), 2006 年.

高橋久仁子, 芝池伸彰, 澤田康文, 大濱宏文, 司会 長村洋一:「<座談会>健康食品, その医療における可能性と問題点」, 臨床検査 50(6), 2006 年.

大谷壽一:「薬物の胎盤透過機構の解析」, 薬剤学 66(5), 2006 年.

大谷壽一, 澤田康文:「大学・研究所と個人情報保護」, 医薬品情報学 7(4), 2006 年.

三木晶子, 澤田康文:「シメチジンの適応外使用」, 日本医事新報 4285, 2006 年.

須藤修・教授

研究テーマ(主たるもの)

ICTの発展とそれに伴う経済システムの変容に関する研究

北アメリカ、EU、中国、日本という 21 世グローバルシステムに大きな影響力を行使する地域経済システム (Regional Economic System) の動向を比較検討しながら、ICTの発展とそれぞれの経済構造との相互作用的な関係について、またICTの発展と経済活動のグローバル化との相互作用的な関係に関して研究を行い、ネットワークを基盤にした知識創造型社会経済システムを構想する。

電子商取引及び電子決済とグローバル・ネットワークの形成に関する研究

電子商取引と電子決済の動向について技術(主としてPKIなどのセキュリティ技術)、取引形態(マーケティングなど)、制度環境(金融システムなど)について実証的に考察し、克服すべき課題の抽出と Global e-Marketplace 形成に関する展望を行う。

ネットワークと社会進化に関する研究

国民国家という既存の枠組みに動揺を与えているグローバル・ネットワーク化およびローカル・ネットワーク化の動向(NGOやNPOの動向)について検討し、特に行政システムと政治システムに焦点を当てて社会発展(進化)のあり方について研究を行う。

研究業績(2006 年度)

著書等

須藤修:「平成13年度—平成17年度文部科学省科学研究費補助金特定領域研究成果最終報告書・ITの深化の基盤を拓く情報学研究成果最終報告書」, 安西祐一郎・安達淳 編, 国立情報学研究所, 2006年.

道傳愛子、飯塚久夫、鬼頭達男、須藤修、寺崎明、坂村健:「『ユビキタスでつくる情報社会基盤』 担当箇所:「討論・ユビキタスネットワーク社会の実現に向けて」(257-282 ページ)」, 坂村健 編, 東京大学出版会, 2006年.

須藤修・田中秀幸・後藤玲子:「『情報爆発時代に向けた新しいIT基盤技術の研究』1-86 ページ担当箇所:「知識社会経済システムの共創的発展とそのガバナンスに関する研究」80 ページ分担執筆」, 喜連川優・安達淳 編, 国立情報学研究所, 2006年.

須藤修:「『Innovation for the Future』 担当箇所:「情報爆発と予防医療イノベーション」」, 日立総合計画研究所 編, 日立総合研究所, 2006年.

須藤修:「『文部科学省科学研究費補助金特定領域研究平成18年度成果報告書・情報爆発時代に向けた新しいIT基盤技術の研究』 担当箇所:「情報爆発時代の知識社会形成ガバナンス」(B01、1-7 ページ)」, 喜連川優・安達淳 編, 国立情報研究所, 2006年.

須藤修・田中秀幸・後藤玲子:「『文部科学省科学研究費補助金特定領域研究平成18年度成果報告書・情報爆発時代に向けた新しいIT基盤技術の研究』 担当箇所:「知識社会経済システムの共創的発展とそのガバナンスに関する研究」(B01-00-01、1-12 ページ)」, 喜連川優・安達淳 編, 国立情報研究所, 2006年.

須藤修・田中秀幸・後藤玲子:「『情報爆発時代に向けた新しいIT基盤技術の研究』 担当箇所:「知識社会経済システムの共創的発展とそのガバナンスに関する研究」(1-86 ページ)」, 喜連川優・安達淳 編, 国立情報学研究所, 2006年.

須藤修:「サービスイノベーション研究 SWG1 平成18年度報告書」, 東京大学産学連携本部サービスイノベーション研究会 SWG1 編, 東京大学産学連携本部, 2006年.

須藤修:「『デジタル経済の社会進化—光と影の検証』(1-113 ページ所載) 執筆担当箇所:第1章「デジタル経済の進展と地域社会」(1-19 ページ)」, 須藤修 編, 社団法人日本経済研究センターおよび日本経済新聞社, 2007年.

論文等

喜連川優・松岡聡・松山隆司・須藤修・安達淳:「情報爆発時代に向けた新しいIT基盤技術の研究【招待学会論文】」, 『人工知能学会誌』(人工知能学会), Vol.17, No.2, pp.209-214, 2006年.

須藤修:「情報爆発時代の知識社会形成ガバナンス【招待学会論文】」, 『人工知能学会誌』(人工知能学会), Vol.17, No.2, pp.235-240, 2006年.【査読有】

後藤玲子、須藤修:「分権化時代の電子自治体と公共ガバナンス—自治体IT投資の実証分析に基づく制度構想」, 『国際CIO学会ジャーナル』(国際CIO学会), No.1, pp.25-33, 2006年.【査読有】

須藤修:「IT産業における技術基盤の重要性について」, 『情報化研究』, 295号(2006年7月)14-19 ページ, 2006年.

国際会議等

後藤玲子、須藤修:「電子自治体と公共ガバナンスー自治体 IT 投資の実証分析に基づく制度構想ー」, 国際会議 e-Governance・国際 CIO 学会, pp.1ー12, 2006.【査読有】

口頭発表等

須藤修:「情報爆発」, 日本経済研究センター主催『デジタル経済と社会進化研究会』(日本経済研究センター、2006年4月13日), 2006.

須藤修:「新しい IT 基盤技術の重要性」, 情報産業振興議員連盟主催『情報産業振興議員連盟講演会』(自民党本部、2006年5月16日), 2006.【招待講演】

須藤修:「情報爆発とクリティカル・イノベーション」, 東京大学大学院情報学環・学際情報学府主催『21世紀 COE 次世代ユビキタス情報社会基盤の形成ーユビキタス・ネットワークとイノベーション』(東京大学安田講堂、2006年5月30日)【基調講演】, 2006.

須藤修:「情報爆発と情報社会の新たな展開」, 日本電子計算機株式会社主催『平成 18 年度優秀保守技術者表彰式典』(東京會館、2006年10月5日), 2006.【招待講演】

篠塚勝正、関口和一、坂村健、須藤修:「パネル討論・ユビキタス・ネットワークとネクスト・イノベーション」, 東京大学大学院情報学環・学際情報学府主催『21世紀 COE 次世代ユビキタス情報社会基盤の形成ーユビキタス・ネットワークとイノベーション』(東京大学安田講堂、2006年5月30日), 2006.

須藤修:「情報爆発時代における知識社会形成ガバナンス」, 『文部科学省科学研究費補助金特定領域研究平成 18 年度情報爆発 IT 基盤キックオフシンポジウム』(東京大学医学部鉄門講堂、2006年6月7日), 2006.

須藤修:「知識社会経済システムの共創的発展とそのガバナンスに関する研究」, 『文部科学省科学研究費補助金特定領域研究平成 18 年度情報爆発 IT 基盤キックオフシンポジウム』(東京大学医学部鉄門講堂、2006年6月8日), 2006.

須藤修:「電子自治体の現状と展望ーデジタル社会のこれから」, 電子自治体戦略会議実行委員会主催『電子自治体戦略会議開催者会議』(九段會館、2006年6月9日)【基調講演】, 2006.

須藤修、後藤玲子:「電子自治体と公共ガバナンスー自治体 IT 投資の実証分析に基づく制度構想ー」, 早稲田大学主催、国際 CIO 学会共催『国際会議・e-Governance』(早稲田大学井深国際会議場、2006年6月29日)【査読発表】, 2006.

須藤修:「自己組織センサーネットワークと ASP を用いた共創的地域生活圏の構築」, 東京大学産学連携本部、財団法人科学技術振興機構共催『シーズイノベーション化事業 (IT 編) 報告会』(東京大学弥生講堂一条ホール、2006年7月3日), 2006.

須藤修:「電子自治体と新たな社会発展ー合併後の電子自治体」, 総務省自治大学校主催『合併後市町村地域経営』(総務省自治大学校、2006年7月19日), 2006.

須藤修:「Sensor Network and Service Science」, 三井業際研究所主催『センサーネットワーク応用・技術調査研究委員会研究報告会』(三井業際研究所、2006年7月24日), 2006.

須藤修:「新たな IT 基盤技術の重要性」, 社団法人電子情報技術産業協会主催『次世代情報システム産業創造へのチャレンジ』(富国生命ビル、2006年7月28日)【基調講演】, 2006.

須藤修:「電子自治体と地方行政の展開2」, 総務省自治大学校講演(総務省自治大学校、2006年7月26日), 2006.

須藤修:「電子自治体と地方行政の展開1」, 総務省自治大学校講演(総務省自治大学校、2006年7月25日), 2006.

須藤修:「進化する電子自治体—新たな地域発展に向けて」, 第21回日本社会情報学会(JASI)全国大会『ワークショップ・進化する電子自治体:産・官・学・民の連携を通じた社会変革の実践』(学習院大学、2006年9月13日), 2006.

南谷崇・新井民夫・古田一雄・杉原厚吉・須藤修・笠原裕・赤津雅晴・丸山文弘:「討論・サービスはサイエンスになれるか」, 東京大学産学連携本部主催『第7回科学技術交流フォーラム・価値を共創するサービスモデリング』(東京大学弥生講堂、2006年10月13日), 2006.

須藤修:「電子自治体と地域発展—電子自治体から地域プラットフォームへ」, 総務省自治大学校講演(総務省自治大学校、2006年11月2日), 2006.

須藤修:「電子政府の現状と課題」, 東京大学産学連携本部『サービス・イノベーション研究会』(東京大学産学連携本部、2006年12月25日), 2006.

Steve Johnson、岡部一明、福田豊、須藤修:「討論・コミュニティ資源の形成とICT—意思としてのコミュニティ形成」, 日本社会情報学会(JASI)主催『コミュニティ資源の形成とICT—意思としてのコミュニティ形成』(東京国際フォーラム、2006年12月23日), 2006.

須藤修:「情報爆発時代の知識社会形成ガバナンス支援班活動」, 文部科学省科学研究費補助金特定領域研究・情報爆発時代に向けた新しいIT基盤技術の研究平成18年度成果報告会(秋葉原ダイビル、2007年1月24日), 2007.

須藤修・田中秀幸・後藤玲子:「知識社会経済システムの共創的発展とそのガバナンスに関する研究」, 文部科学省科学研究費補助金特定領域研究・情報爆発時代に向けた新しいIT基盤技術の研究平成18年度成果報告会・B01 情報爆発時代の知識社会形成ガバナンス平成18年度成果発表会(秋葉原ダイビル、2007年1月25日), 2007.

須藤修:「電子自治体と地方行政の展開—新たな地域発展に向けて」, 総務省自治大学校講演(総務省自治大学校、2007年1月30日-31日), 2007.

須藤修:「情報爆発とイノベーション」, 国際CIO学会主催『第2回国際CIO学会全国大会』(早稲田大学、2007年3月23日), 2007.

池上徹彦・須藤修・大山永昭・鈴木義伯・村上憲郎・小尾敏夫:「パネル討論・イノベーションと内部統制」, 国際CIO学会主催『第2回国際CIO学会全国大会』(早稲田大学、2007年3月23日), 2007.

須藤修:「情報爆発時代の知識社会形成ガバナンス」, 文部科学省科学研究費補助金特定領域研究・情報爆発時代に向けた新しいIT基盤技術の研究平成18年度成果報告会(秋葉原ダイビル、2007年1月24日), 2007.

一般向け講演等

須藤修・仙波大輔・齋藤聡明・島田宏・大野実・牟田学:「パネル討論・利便性が実感できる官民連携申請手続きへの展望」, 財団法人ニューメディア開発協会主催『平成18年度地域情報化フォーラム』(機械振興会館、2007年3月26日), 2006.

須藤修:「情報爆発とセキュリティ—新たな社会発展に向けて」, 東京都主催『情報セキュリティシンポジウム』(東京都庁、2006年9月15日)【基調講演】、2006.

須藤修:「電子自治体と情報システム最適化」, 東海電子自治体戦略会議実行委員会主催『東海電子自治体戦略会議 2006』(しずぎんホール、2006 年 12 月 6 日)【基調講演】、2006.

須藤修:「電子政府・電子自治体分野におけるタイムスタンプへの期待」, 財団法人日本データ通信協会・タイムビジネス協議会主催『電子情報の信頼性・安心を支えるタイムビジネス』(明治記念館、2006 年 12 月 7 日)、2006. 【招待講演】

野田聖子、須藤修、日比野純一、永島芳晃、太田差恵子、緒方麻弓子:「NPO の支援活動」, マイクロソフト主催『NPO Day 2006』(第一生命ホール、2006 年 4 月 21 日)、2006.

松原明、須藤修、中村淳、江崎礼子、横田能洋、長井伸明:「IT で変わる NPO 活動」, マイクロソフト主催『NPO Day 2006』(第一生命ホール、2006 年 4 月 21 日)、2006.

須藤修:「ユビキタスネット社会の未来図」, e 自治体コンソーシアム主催『U-Japan 戦略セミナー』(財団法人 都道府県会館、2006 年 12 月 4 日)【基調講演】、2006.

須藤修:「センサーネットと ASP を用いた e-Service の構築」, 東京電力株式会社主催『東京電力情報通信事業部定期講演会』(東京電力本社、2006 年 6 月 14 日)、2006. 【招待講演】

須藤修、夏野剛、吉本清志、澤村和男、為定明雄:「パネル討論・広がる携帯クレジット市場」, 日本経済新聞社主催『携帯とクレジットの融合が日本のライフスタイルを変える』(2006 年 6 月 15 日、日経ホール)、2006.

上原仁、Jason Healey、坂明、佐竹基、伊那久喜、須藤修:「パネル討論・Japanese Strategy to guard Critical Infrastructure」, NPO セキュアなデジタル社会を推進する会主催『デジタル社会推進シンポジウム 2006』(国連大学ウ・タント国際会議場、2006 年 6 月 27 日)、2006.

須藤修:「2006 年日本の流通動向と小額決済市場の可能性」, 日本経済新聞社主催『携帯とクレジットの融合が日本のライフスタイルを変える』(2006 年 6 月 15 日、日経ホール)【基調講演】、2006.

須藤修:「情報社会のこれからと情報管理」, 有限責任中間法人日本メーリングサービス協会講演(簡保ヘルスプラザ東京、2006 年 8 月 18 日)、2006.

須藤修:「自己組織センサーネットと ASP を用いた Service Science の構想」, 東京電力株式会社主催『東京電力情報通信事業部定期講演会』(東京電力本社、2006 年 8 月 25 日)、2006.

須藤修:「情報爆発とクリティカル・イノベーション」, LCDM フォーラム主催『LCDM フォーラム・オープンセミナー』(都市センターホテル、2006 年 9 月 28 日)【基調講演】、2006.

須藤修:「Web サービスが拓く電子自治体の今後」, Web Service イニシアティブ主催『電子自治体セミナー』(仙台国際センター、2006 年 9 月 26 日)【基調講演】、2006.

須藤修・青山憲明・町田誠・秋山実・得丸昌則・磯部猛也:「討論・LCDM 流通基盤の今後の展開に期待するもの」, 「討論・LCDM 流通基盤の今後の展開に期待するもの」LCDM フォーラム主催『LCDM フォーラム・オープンセミナー』(都市センターホテル、2006 年 9 月 28 日)、2006.

須藤修:「安心・便利で効率的な電子自治体の実現」, 財団法人地方自治情報センター主催『地方自治情報化推進フェア 2006』(サンシャインシティ、2006 年 10 月 5 日)【基調講演】、2006.

須藤修:「ユビキタスネットと社会発展の方向」, 社団法人日本経済調査協議会主催『ユビキタスネットワーク社会の到来と日本の課題』(社団法人日本経済調査協議会、2006 年 10 月 25 日)、2006.

須藤修:「ネット社会の最新動向と電子自治体の今後」, 福島県高度情報化推進協議会主催『電子自治体推進セミナー』(ホテルハマツ郡山、2006年11月13日)【基調講演】、2006.

須藤修:「医療・健康管理ネットワークの構築」, 千葉県庁主催『医療とITについての講演会』(千葉県庁多目的ホール、2006年11月16日)【基調講演】、2006.

須藤修・境勉・吉良玲二・平野芳弘・小笠原徹朗・斉藤哲:「電子地域通貨と地域活性化」九州電子自治体戦略会議 in 阿蘇, 実行委員会主催『九州電子自治体戦略会議 in 阿蘇』(阿蘇プリンスホテル、2006年11月22日)、2006.

須藤修:「ヨーロッパにおけるユビキタス実験と日本のセンサーネット健康管理実験」, 東京電力株式会社主催『東京電力情報通信事業部定期講演会』(東京電力本社、2006年11月29日)、2006.

須藤修:「情報爆発と新たなサイエンスの創造」, 情報社会のデザインシンポジウム実行委員会(情報処理学会、電子情報通信学会、人工知能学会)主催『情報社会のデザインシンポジウム 2006』(松下電器工業東京本社ビル、2006年12月1日)、2006.【招待講演】

須藤修・満塩尚史・葛西重雄:「討論・電子自治体の課題とこれからの地方自治体のあり方」, 東海電子自治体戦略会議実行委員会主催『東海電子自治体戦略会議 2006』(しずぎんホール、2006年12月6日)、2006.

須藤修・宮田佳代子:「討論・地域通貨と地域おこし」, 大分県日出町・総務省主催『地域通貨フォーラム in 日出町』(大分県日出町中央公民館、2006年12月8日)、2006.

吉田寛・小野町子・須藤修・岡本成男・後藤英樹・森哲也:「討論・カレイで元気なまちおこし」, 大分県日出町・総務省主催『地域通貨フォーラム in 日出町』(大分県日出町中央公民館、2006年12月8日)、2006.

須藤修:「電子自治体と地域発展」, Web サービスイニシアティブ主催『電子自治体セミナー』(霞ヶ関ビル東京會館、2007年2月8日)【基調講演】、2007.

須藤修:「情報爆発と予防医療イノベーション」, 日立総合研究所主催『第2回 Knowledge Sparks Forum : Innovation for Future』(六本木ヒルズ、2007年2月27日)、2007.【招待講演】

須藤修:「電子政府・電子自治体の現状と課題—電子申請の拡大に向けて」, 財団法人ニューメディア開発協会主催『平成18年度地域情報化フォーラム』(機械振興会館、2007年3月26日)【基調講演】、2007.

一般向け記事・報道等

須藤修:「電子自治体の行方」, 『月刊自治フォーラム』(第一法規), No.263, pp.2-3, 2006年.

須藤修:「情報爆発と電子自治体の発展方向」, 『住民行政の窓』(日本加除出版), No.297(2006年9月号), pp.1—16, 2006年.

須藤修:「電子自治体からe地域コミュニティへ—地域民主主義の基盤形成への期待」, 『地域づくり』(財団法人地域活性化センター), No.210(2006年12月号), pp.4—7, 2006年.【査読有】

萩原俊夫・斉藤健・椎橋章夫・須藤修:「首都圏におけるICカードの展開」, 『運輸と経済』(財団法人運輸調査局), (2007年1月)、2006年.

須藤修・境勉:「対談・変化する自治体・進化する共同アウトソーシング」, 『ISM-G』(マイクロソフト), 2号(2006年8月)2-5ページ, 2006年.

須藤修:「山積するデジタル社会の課題解決に向けて」, 『都政新報』, (2006年10月6日付け)、2006年.

須藤修・田中秀幸ほか:「IT 社会」,『現代用語の基礎知識』(自由国民社), (2006 年 11 月)740-745 ページ, 2006 年.

須藤修:「情報爆発と情報社会の新たな展開」,『JECCNEWS』, 442 号(2006 年 11 月号)10-15 ページ, 2006 年.

須藤修:「本当の豊かな社会とは」,『三菱総研倶楽部』(三菱総研), (2007 年 1 月), 2007 年.

須藤修:「情報爆発への対応急げ」,『日本経済新聞』2006 年 7 月 27 日付け朝刊, 2006.

Osamu SUDOH:「Coping with Information Explosion: Need to Build a New Social Infrastructure」, GLOCOM PLATFORM, August 14, 2006 (<http://www. www.glocom.org/opinions/essays>), 2006.

須藤修・大井川和彦:「対談・新しい日本を創るシステム電子政府—市民の参加でより活力のある社会へ」,『読売新聞』2006 年 11 月 20 日付け朝刊, 2006.

立花隆・石田衣良・竹花豊・紀藤正樹・坂村健・須藤修:「ネット社会の安全、どう守りますか」, NHK 総合テレビ『日本のこれから』2006 年 12 月 9 日放送, 2006.

須藤修:「東大・九電が福岡で大規模センサーネット実験」,『日経メディアラボ』2006 年 12 月 1 日, 2006.

須藤修:「町の活力を試す尺度—感謝の心つながって日出町地域通貨フォーラム」,『大分合同新聞』2006 年 12 月 9 日付け朝刊, 2006.

須藤修・宮田佳代子:「対談・地域通貨と地域おこし」,『大分合同新聞』2007 年 1 月 14 日付け朝刊, 2007.

吉田寛・小野町子・須藤修・岡本成男・後藤英樹・森哲也:「討論・日出の元気はにこにこ通貨カレイから」,『大分合同新聞』2007 年 1 月 14 日付け朝刊, 2007.

須藤修:「インタビュー・電子政府・巨額初期投資に問題」,『毎日新聞』2007 年 3 月 29 日付け朝刊, 2007.

須藤修:「CIO には技術だけでなく経営の知識も必要」,『日経 BP ネット』(日経 BP)2007 年 3 月 26 日付け, 2007.

須藤修:「早稲田大学で国際 CIO 講演会開催」,『CIO 情報交差点』(日経ストラテジー)2007 年 3 月 28 日付け, 2007.

須藤修:「政府の IT 戦略を斬る」,『CIO マガジン』(IDG ジャパン)第 83 巻(2007 年 3 月 13 日), 2007.

田中明彦・教授

研究テーマ(主たるもの)

研究業績(2006 年度)

著書等

Akihiko Tanaka, Takashi Inoguchi, Shigeto Sonoda, Timur Dadabaev: "Human Beliefs and Values in Striding Asia", Akihiko Tanaka, Takashi Inoguchi, Shigeto Sonoda, Timur Dadabaev 編, Akashi Shoten, 2006 年.

田中明彦:「中国総覧 2005～2006 年版」, 中国総覧編集委員会 編, ぎょうせい, 2006 年.

論文等

Akihiko Tanaka: "Global and Regional Geo-strategic Implications of China's Emergence", Asian Economic Policy Review, Vol.1, No.1, pp.180-196, 2006 年.

Akihiko Tanaka: "Prospects for East Asia Community", Challenges to Trilateral Cooperation, 2006 年.

口頭発表等

Akihiko Tanaka: "Major Trends in international politics in East Asia", Halmstad University, 2006. 【招待講演】

Akihiko Tanaka: "Major trends in international politics in East Asia", Swedish Institute of International Relations, 2006. 【招待講演】

Akihiko Tanaka: "Recent developments of Japan's security policy towards East Asia", Forum Asia, 2006. 【招待講演】

Akihiko Tanaka: "Japan's policy toward and East Asian Community", Centre for East and South-East Asian Studies, Lund University, 2006.

Akihiko Tanaka: "Perceived International Influence in Asia", Research Seminar, 2006.

Akihiko Tanaka: "Major trends in international politics in East Asia", Centre for Asian Studies, Goteborg University, 2006. 【招待講演】

田中明彦:「中国の台頭と世界の対応」, 変容する世界システムと東アジア, 2006. 【招待講演】

田中明彦:「日本外交と国内政治・総合調整」, 日本外交と国内政治・総合調整, 2006. 【招待講演】

Akihiko Tanaka: "Japan's relationship with neighbouring countries?", Swedish-Japanese Parliamentarians Association, 2006. 【招待講演】

Akihiko Tanaka: "Japan's policy toward and East Asian Community", European Institute of Japanese Studies, Stockholm School of Economics, 2006. 【招待講演】

田中明彦:「東アジア経済圏の構築に向けて」, 第26回 ESRI-経済政策フォーラム, 2006.

田中明彦:「小泉期外交の評価と展望」, 現代日本学会国際学術大会, 2006.

Akihiko Tanaka: "Nationalism and Democratic Politics in Asia and Implications for Regional Security", Asia Pacific Security: A Strategic Outlook, 10th Annual Asia Pacific Security Forum, 2006.

田中明彦:「東アジアの将来秩序-東アジア共同体構想を巡って」, 第33回国際学生セミナー, 2006.

Akihiko Tanaka: 「International Relations in a New Era: From Regional and Global Perspectives」, 日本国際政治学会2006年度研究大会, 2006.

田中明彦: 「中国人の対外認識」, アジア・バロメーター, 2006.

Akihiko Tanaka: “U.S.-Japan Security Relations”, The U.S.-Japan Alliance in a New Era: Will Strategic Convergence Continue?, 2006.

Akihiko Tanaka: “Japan, China, South Korea, Taiwan, Hong Kong, Vietnam, Singapore -- A Survey of Mutual Perceptions”, Brown Bag Lecture Series, 2006.

田中明彦: 「今後の国際事情と日本外交」, 第186回行政研修(課長級), 2006.

田中明彦: 「東アジア地域協力の政治過程と日本の東アジア政策」, 「東アジア地域統合の進展及び地域協力」国際学術シンポジウム, 2006.

Akihiko Tanaka: “The Political Economy of China-Japan-U.S. Relations”, Japan’s Economic Future: Policy, Politics, and Producers, 2006.

Akihiko Tanaka: “Japan’s New Energy Security Strategy”, Energy Security and Energy Cooperation Regime in East Asia, 2006. 【招待講演】

田中明彦: 「東アジアの安全保障と世界の中の日米関係」, 第58回日米学生会議報告会, 2006.

田中明彦: 「アジアの安全保障と日本の役割: 時間・空間軸と比較軸から」, 第11回アジア・太平洋学術フォーラム, 2006.

田中明彦: 「「イスラーム世界の創造と新しい世界史」へのコメ」, 第18回アジア・太平洋賞記念講演会, 2006.

Akihiko Tanaka: “International Alignments”, The AsiaBarometer Open Symposium, 2006.

Akihiko Tanaka: “Japanese Policy in Asia under the Abe Administration”, Japan Foundation Kuala Lumpur and Malaysian Association of Japanese Studies Kuching / Wisma Bapa Malaysia , 2007.

田中明彦: 「データベース「世界と日本」を公開して」, シンポジウム 地域研究と情報学: 新たな地平を拓く, 2007.

田中明彦: 「データベース「世界と日本」を公開して」, 日本学術会議地域研究委員会地域情報分科会(第20期・第4回), 2007.

田中明彦: 「21世紀の世界システムをどう見るか?」, 第29回小宮山研究会, 2007.

Akihiko Tanaka: “Human Security in Japan’s Foreign Policy”, International Seminar on Human Security in South Asia, 2007.

一般向け講演等

田中明彦: 「'07年の国際情勢と日本の役割」, 新春時局講演会(新座市商工会), 2007.

一般向け記事・報道等

田中明彦:「第 27 回サントリー学芸賞 選評」, 第 27 回サントリー学芸賞 選評, 2006 年.

田中明彦:「安全保障を脅かす新型インフルエンザ」, FORESIGHT, 5 月号, 2006 年.

田中明彦:「『アジア諸国における各国に対する影響力の認知について』共通世論調査分析」, アジア時報, 5 月号, 2006 年.

田中明彦:「世界で注目される”大統領選的”自民党総裁選」, FORESIGHT, 7 月号, 2006 年.

田中明彦:「小泉外交の「功罪」を超えて ”反射神経”から戦略思考へ」, 公研, 7 月号, pp.38-51, 2006 年.

田中明彦:「北朝鮮「抑止」のための論点を整理する」, FORESIGHT, 9 月号, 2006 年.

田中明彦:「潮流 06 総裁選の後は、総選挙だ」, 論座, 2006 年.

田中明彦:「リレー対談 時期リーダーにかかる日本のかたちづくり 世界中から敬意を表される外交努力を」, 月刊 公論, pp.20-26, 2006 年.

田中明彦:「「核保有した北朝鮮」への現実的対応」, FORESIGHT, 11 月号, 2006 年.

田中明彦:「北朝鮮と核 期待できない北朝鮮の核廃絶 核実験が東アジアに生んだ”新しい現実”」, 論座, pp.39-43, 2006 年.

田中明彦:「リレー対談 欧米のネットワークをアジアに繋ぐ大役 国際文化会館をアジアのニューリーダー交流の場に」, 月刊 公論, pp.22-28, 2006 年.

田中明彦:「『第 18 回アジア・太平洋賞』受賞作の講評 特別賞 『栄家の血脈—激動の大陸を疾走する赤い資本家の誓い』」, アジア時報, pp.12-13, 2006 年.

田中明彦:「第 28 回サントリー学芸賞 思想・歴史部門 選評」, 第 28 回サントリー学芸賞, pp.23-24, 2006 年.

Akihiko Tanaka:「Comment on “The Race to Connect East Asia : An Unending Steeplechase”」, Asian Economic Policy Review (2006), pp.257-258, 2006 年.

田中明彦:「ブッシュは”イラク破綻”の責任をどう取るのか」, FORESIGHT, 1 月号, 2006 年.

田中明彦:「外交」, imidas 2007, 2007 年.

田中明彦:「潮流 07 中間選挙での大敗はブッシュにとって不幸中の幸い」, 論座, 1 月号, pp.22-23, 2007 年.

田中明彦:「書評『平和政策』」, 書齋の窓, 2007 年 1,2 月号, pp.60-64, 2007 年.

田中明彦:「潮流 07 北朝鮮、中国、ASEAN・・・日本外交の焦点は何か」, 論座, 2 月号, pp.20-21, 2007 年.

田中明彦:「Poor Prospects for a Nonnuclear North Korea」, JAPAN ECHO, 2007 年 2 月号, pp.12-15, 2007 年.

田中明彦:「第 18 回アジア・太平洋賞記念講演会 『イスラーム世界の創造と新しい世界史』第二部コメント」, アジア時報, pp.4-33, 2007 年.

田中明彦:「中国にとっても不快な出来事」, 毎日新聞, 2006.

- 田中明彦:「東アジア外交 日本をどう進む 4」, 公明新聞, 2006.
- 田中明彦:「終わらない戦後象徴」, 毎日新聞, 2006.
- 田中明彦:「緊急談論 小泉首相靖国参拝 ”外交ゲーム”不毛な結末」, 読売新聞, 2006.
- 田中明彦:「対論 日本の針路 アジアの心とらえよう」, 山陽新聞, 2006.
- 田中明彦:「スキャナー アジア7か国世論調査 スピード感ある外交を」, 読売新聞, 2006.
- 田中明彦:「総裁選 私の注文 1 安保アジア外交 大胆に決断なら、訪中」, 日本経済新聞, 2006.
- 田中明彦:「経済教室・新政権への視点3 東アジア外交立て直せ 中韓と心の関係 国内政治改革、後退は禁物」, 日本経済新聞, 2006.
- 田中明彦:「安倍新政権を問う 下 外交 「理」と「利」調整が肝要」, 朝日新聞, 2006.
- 田中明彦:「実利優先の和解劇 日中首脳会談 参拝すれば再び外交問題に」, 毎日新聞, 2006.
- 田中明彦:「北朝鮮、核保有へ強行 米の攻撃防ぐ目的か」, 日本経済新聞, 2006.
- 田中明彦:「北朝鮮核実験 識者座談会 国際包囲網より強固に」, 日本経済新聞, 2006.
- 田中明彦:「シンポ「安倍政権下の日米同盟」?戦略一体化は続くのか」 上 揺れる世界の中の日米」, 朝日新聞, 2006.
- 田中明彦:「中国、米朝の接点探る 専門家の見方 国際社会の態度硬化回避」, 日本経済新聞, 2006.
- 田中明彦:「時代の風北朝鮮核「対応急げ」 安保と日本の役割論議 静岡アジア・太平洋学術フォーラム」, 静岡新聞, 2006.

西垣通・教授

研究テーマ(主たるもの)

基礎情報学

生命情報から社会情報、機械情報にわたる情報学の基礎的な検討。マトゥラーナ／ヴァレラのオートポイエーシス論、ホフマイヤーの生命記号論、ルーマンの理論社会学、グレイザーズフェルドのラディカル構成主義などを批判的に摂取しつつ、情報メディア思想を理論的に検討する。

インターネット社会論

基礎情報学の応用として、21世紀インターネット社会における諸問題(企業組織、オンライン共同体、情報倫理、サイバースペース心理など)を理論的かつ実践的に検討する。

研究業績(2006 年度)

著書等

西垣通:「グローバル化と大学知の危機(『溶解する<大学>』)」、日本記号学会 編, 慶應義塾大学出版会, 2006 年.

西垣通:「パンゾフィとしてのユビキタス(『ユビキタスでつくる情報社会基盤』)」、坂村健 編, 東京大学出版会, 2006 年.

論文等

Toru Nishigaki: “The Ethics in Japanese Information Society”, Journal of Ethics and Information Technology, Vol.8, No.4, pp.237-242, 2006 年.【査読有】

西垣通:「個人とは何か」, 思想, 2006 年.【査読有】

国際会議等

Toru Nishigaki: “Post Modernism and Language (Science Wars)”, World Knowledge Dialogue 2006, 2006.

一般向け講演等

西垣通:「IT文明時代のハイパー多極分散国家」, 情報化推進懇話会, 2006.【招待講演】

西垣通:「情報学的転回: IT革命のゆくえ」, スマートITデザイン・フォーラム 2007, 2007.【招待講演】

一般向け記事・報道等

西垣通:「目指せ超多極分散国家(経済教室)」, 日本経済新聞, 2006.

西垣通:「ネット文明、参加の時代(今を読み解く)」, 日本経済新聞, 2006.

西垣通:「ネット新時代 何もたらず」, 朝日新聞, 2006.

橋元良明・教授

研究テーマ(主たるもの)

情報行動に関する社会心理学的分析

メディア利用やコミュニケーション行動などが、社会変化に伴ってどのような変容を遂げているのか、そうした情報行動のパターンを規定する要因は何か、等について社会心理学的観点から実証的に分析している

メディアの効果、とくに青少年に及ぼす影響の研究

テレビやインターネットなどが社会生活や世論形成過程、青少年の精神的発達に及ぼす影響、携帯電話などの新しいコミュニケーション・ツールが対人関係、家族関係に及ぼす影響などを調査等の実証的手法で分析している。

言語的コミュニケーションの了解・伝達過程、変容に関する研究

言語的コミュニケーションに関し、おもに語用論的視点から了解・伝達構造を研究している。また、日本人の言語行動が、社会システムの変化とどのようにかかわっているか、あるいはマスメディアや新しいメディア・ツールの普及によってどのような影響をこうむっているのかに関する研究をおこなっている。

研究業績(2006 年度)

著書等

橋元良明:「日本人の情報行動」, 東京大学大学院情報学環 編, 東京大学出版会, 2006 年.

論文等

橋元良明:「元禄文化と「ことば信仰」」, 西鶴と浮世草子研究, Vol.vol.1, No.no.1, pp.8-13, 2006 年.

橋元良明他:「新聞記事にみるインターネット・イメージの日韓中比較」, 東京大学大学院情報学環紀要調査研究編, Vol.No.24, pp.49-77, 2007 年.

橋元良明他:「ネット利用とオンライン・コミュニティの日韓比較」, 東京大学大学院情報学環調査研究編, Vol.No.24, pp.1-48, 2007 年.

橋元良明他:「調査からみたネット利用、対人関係、社会心理の日韓比較」, (科学研究費助成研究報告書), 2006 年.【査読有】

一般向け記事・報道等

橋元良明:「日韓、家庭メディアの利用に差」, 日本経済新聞, 2006.

橋元良明:「中学生フォーラム 今、テレビに言いたいこと!」, NHK 教育, 2007.

橋元良明:「鈍感王」, AERA, 2007.

濱田純一・教授

研究テーマ(主たるもの)

情報法にかかわる研究

個別テーマとして近年取り組んできたのが、情報化ないしインターネットがもたらす法制度の変容に関する研究である。情報に関する法は、通常の物財に関する法と異なり、複製や移転の容易さなどの特質から法的にも固有の扱いを必要としている。また情報は、表現の自由や情報をめぐる自由・権利などの精神的 諸価値と密接に結びついており、特有の法体系を構成している。こうした諸特質に基礎を置く情報法の体系構成を目指して、個別テーマについての研究を蓄積してきている。

情報政策にかかわる研究

情報政策は、メディアや通信システムをはじめ、情報技術政策や文化政策にも及ぶ射程の広い政策領域である。実務上個別的にはさまざまな情報政策が、地方や国のレベルで策定されてきたが、必ずしも総合的な体系性をもって行われてきたわけではない。これらの諸政策に総合的な展望を与え、またこうした政策に固有の政策形成過程や政策手法を分析することを研究の目標としており、「情報政策論」の授業と連動させながら、個別事例の検討を通じて、情報政策に関する研究の体系化に取り組んでいる。

社会情報学ないし情報学にかかわる研究

社会情報学あるいは情報学は、いま発展途上にある学問領域であり、学際性を共通の特質とする。これまで、基本的に社会科学の領域に足場を置く社会情報学の研究を主にすすめ、とりわけ情報を社会的文脈の中に置くことの意義を分析しつつ成果を積み重ねてきた。情報学は、より広く自然科学分野にも及ぶ学問領域であるが、たとえば生命や遺伝の仕組みなどは社会システムの構造とアナロジー可能な側面を有しており、情報という視点からそうした共通の枠組みを引き出すことにより、諸学問分野の連携を生み出す研究をすすめている。

研究業績(2006年度)

原島博・教授

研究テーマ(主たるもの)

ヒューマンコミュニケーションメディア

コンピュータと映像・音響技術を結び付けたメディア技術が広く普及し、人とコンピュータの関係は大きく変わりつつある。これに伴い、感性情報の処理、現実世界と仮想世界の境界に挑む複合現実感技術、空間を対象とした情報処理・アート・デザイン・インタフェース、人に優しいメディア環境などの話題が注目されるようになってきた。この研究では、その目指す方向、技術課題、メディア社会に与える光と影の問題を論ずるとともに、人間主体の「ヒューマンコミュニケーションメディア」へ至る道を総合的に検討している。

次世代インタラクティブメディアと感性空間の創出

ヒューマンコミュニケーションメディアにおいて、人とコンピュータをより密接な関係として構造化することは重要である。また、そのための技術課題も多く存在する。本研究では、より人間に近い関係にあるインタラクティブメディア環境の実現に向けて、インタフェースやコンテンツといったハードおよびソフト技術の融合と新たな感性空間の創出を目指している。

顔画像処理と感性コミュニケーション

人の顔・表情や身振り・手振りは、感性的な対人コミュニケーションの基本であり、その研究は将来の情報システムや通信システムにおけるヒューマンインタフェースの設計に大きなインパクトを与えるものと予想される。本研究では、画像処理並びにコンピュータグラフィックスの手法を駆使して、顔・表情画像や身振り・手振り画像の動的な分析と合成を行い、併せて、各種の心理学実験を通じて、顔・表情や身振り・手振りによる感性コミュニケーションモデルを構築することを目的としている。また、心理学者などとの共同研究を通じて「顔学」なる学際的な新分野の開拓を目指している。

研究業績(2006年度)

論文等

原島 博:「高木 幹雄先生を偲んで」, 映像情報メディア学会誌, Vol.60, No.4, pp.479 -- 480, 2006 年.

土井 美和子, 原島 博:「工学と芸術を融合する若い息吹」, 情報処理, Vol.47, No.4, pp.338 - 339, 2006 年.

原島 博:「想像から創造へ, そして…」, 日本バーチャルリアリティ学会, Vol.11, No.2, pp.50 -- 52, 2006 年.

原島 博:「情報メディアの進化ーコンテンツの時代に向けてー」, 画像の認識・理解シンポジウム(MIRU2006)ダイジェスト冊子, pp.25, 2006 年.

原島 博:「進化する映像情報メディア」, 映像情報メディア学会, Vol.60, No.10, pp.1523 -- 1529, 2006 年.【査読有】

国際会議等

Kumiko Morimura, Makoto Iida, Takeshi Naemura and Hiroshi Harashima: "A Proposal on a Learning System to Realize Maestro", 9th Intern. Conf. Music Perception and Cognition (ICMPC2006), 2006.【査読有】

Kumiko Morimura, Makoto Iida, Takeshi Naemura and Hiroshi Harashima: "A Multi-channel Recording and Presentation System to Realize a Good SPL Balance in a Chorus", The 9th Western Pacific Acoustics Conference (WESPAC IX), 2006.【査読有】

Naiwala P. Chandrasiri, Ryuta Suzuki, Nobuyuki Watanabe, Hiroyuki, Yoshida, Hiroshi Yamada, Hiroshi Harashima: "Is Average Face Recognized as the Average?", Proc.(CD-ROM) IEEE Int, 2007.【査読有】

口頭発表等

中洲 俊信, チャンドラシリ N.P., 苗村 健, 原島 博:「対話型似顔絵作成システム NIGAO における印象反映インタフェースの評価」, 第 2 回デジタルコンテンツシンポジウム, 2006.

一般向け記事・報道等

原島 博, 中島 信也, 枅野 浩一, 蛭川 有紀:「日本文化デザイン会議控えー女優ら神山を視察」, 徳島新聞, 2006.

原島 博:「情報系の講義を全学に開放ーコンテンツ産業率いる人材育成へ」, 東京大学新聞, 2006.

馬場章・教授

研究テーマ(主たるもの)

日本近世経済史

日本近世の度量衡をはじめとする計量制度、三貨を中心とする貨幣制度を文献資料と現物資料の連関に注目して実証的に解明する。

デジタルアーカイブズ科学

文化資源のデジタル化の理論と方法について研究する。

コンテンツ創造科学

デジタルコンテンツ、とりわけ電子的なゲームの面白さの解明とそれを構造化した制作理論の構築、およびシリアスゲームについて研究する。

研究業績(2006 年度)

著書等

馬場章、上野一郎、研谷紀夫、倉持基、添野勉:「上野彦馬歴史写真集成」, 馬場章 編, 渡辺出版, 2006 年.

論文等

研谷紀夫・馬場章:「デジタルアーカイブの構築における基本計画と評価モデル」, 情報文化学会誌, Vol.13, No.2, pp.20-26, 2006 年.【査読有】

倉持基・研谷紀夫・馬場章:「歴史写真の情報学的研究－歴史写真デジタルアーカイブの構築と活用に関する基礎検討－」, 日本写真芸術学会誌, Vol.15, No.2, pp.20-26, 2006 年.【査読有】

研谷紀夫・馬場章:「建築資料を対象としたリアル・デジタルアーカイブの構築」, アーカイブズ学研究, No.4, pp.50-70, 2006 年.【査読有】

研谷紀夫・馬場章:「文化資源オントロジーの構築とその活用」, 情報知識学会誌, Vol.17, No.2, pp.129-134, 2006 年.【査読有】

倉持基・研谷紀夫・馬場章:「歴史写真の情報学的研究～歴史写真デジタルアーカイブの構築研究」, 日本写真芸術学会平成 18 年度年次大会研究報告, pp.45-52, 2006 年.【査読有】

研谷紀夫・津田光弘・倉持基・大島十二愛・山下大輔・松田好史・添野勉・馬場章:「オントロジーとコミュニティを用いた統合型デジタルアーカイブの構築」, 情報処理学会・人文科学とコンピュータ研究会シンポジウム 2006 論文集, pp.57-62, 2006 年.【査読有】

倉持基・研谷紀夫・添野勉・馬場章:「『歴史写真デジタルアーカイブ』の歴史写真研究への活用に関する検討」, 情報処理学会・人文科学とコンピュータ研究会シンポジウム 2006 論文集, pp.263-270, 2006 年.【査読有】

和田洋一・馬場章:「日本のゲーム業界の現状と展望」, デジタルゲーム学研究, No.1, pp.23-33, 2007 年.【査読有】

馬場章(編):「後藤家計量関係資料の構造分析と文物相関の研究」, 科学研究費補助金 特定領域研究 A 研究成果報告書, 2006 年.

馬場章・藤原正仁:「コンテンツ分野における人材育成に関する調査研究報告書」, 特定非営利活動法人映像産業振興機構委託「コンテンツ人材育成総合プログラム」に関する調査・研究, 2006 年.

馬場章:「会長挨拶」, デジタルゲーム学研究, 2006 年.

研谷紀夫・馬場章:「赤水図デジタルアーカイブプロジェクトの概要」, 東京大学史料編纂所画像解析センター通信, 2006 年.

国際会議等

Togiya Norio, Akira Baba: "Constructing a Real/Virtual Archive of Architectural Material Using Ubiquitous Computing", Progress in Informatics, No.3, pp.51-58, 2006. 【査読有】

口頭発表等

倉持基・研谷紀夫・馬場章:「歴史写真の情報学的研究～『歴史写真デジタルアーカイブ』の構築研究」, 日本写真芸術学会年次大会研究発表, 2006.

藤原正仁・馬場章:「コンテンツ分野におけるインターンシップの現状と課題」, 特定非営利活動法人産学連携学会第4回大会, 2006.

松原仁・馬場章・星野准一・柳田康幸:「『オンラインゲームの制作支援と評価』プロジェクト」, 第2回デジタルコンテンツシンポジウムプログラム, 2006.

元住充利・三宝宣尚・寺島克明・イアンフランク・松原仁, 馬場章:「オンラインゲームの社会的効果の予備的実験—信長の野望オンラインを例として」, 第2回デジタルコンテンツシンポジウムプログラム, 2006.

馬場章:「ゲームの処方箋～人とゲームの新しい関係～」, ゲームの処方箋研究成果発表シン, 2006. 【招待講演】

馬場章・藤原正仁:「大学のゲーム教育・世界編—カリキュラム・テキスト・メソッド・エデュケーター—」, 社団法人コンピュータエンターテインメント協会 CEDEC2006 (CESA デベロッパーズカンファレンス 2006), 2006.

馬場章・七邊信重・内田由理子・高畑秀行・松原健二:「CREST『オンラインゲームの教育目的利用のための研究プロジェクト』中間成果記者発表」, CREST『オンラインゲームの教育目的利用のための研究プロジェクト』中間成果記者発表会, 2006. 【招待講演】

七邊信重・馬場章:「オンラインゲームの教育効果—歴史授業における『大航海時代 Online』を用いた実証実験」, エンタテインメントコンピューティング 2006, 2006.

七邊信重・馬場章:「オンラインゲームの教育効果——歴史授業における『大航海時代 Online』を用いた実証実験」, エンタテインメントコンピューティング 2006, 2006.

藤原正仁・馬場章:「コンテンツプロデューサー養成を目的としたインターンシッププログラムの開発と実践」, 日本キャリアデザイン学会第3回研究大会, 2006.

馬場章:「ゲーム開発シンポジウム」, ゲーム開発シンポジウム(台湾龍華科技大学), 2006. 【招待講演】

馬場章: "Utilizing Online Games for Educational Purpose in Japan: Effectiveness and ", Games for Education(韓国延世大学校), 2006. 【招待講演】

馬場章:「デジタルアーカイブの残された課題」, 情報保存研究会第7回 JHK オープンセミナー, 2006. 【招待講演】

馬場章:「Utilizing Online Games for Educational Purposes」, ゲームと教育 ICT 時代の子どもの未来を考えるフォーラム, 2006. 【招待講演】

馬場章:「コンテンツ分野における産学連携教育—日台比較とインターンシップ—」, アジアのメディア産業における「産学協同教育」の現状と未来, 2007. 【招待講演】

馬場章:「文化資源統合デジタルアーカイブの試み」, 知の構造化と図書館・博物館・文書館～連携に果たす大学の役割, 2007.【招待講演】

馬場章:「日本におけるコンテンツ教育と研究ーゲーム教育と研究を中心にー」, デジタル・コンテンツは大学を変えるのか?ーGame, Digital Culture and New University Educationーデジタル時代の教育研究を考える日米会議 y, 2007.【招待講演】

馬場章:「オンラインゲーム研究の社会的意義」, CREST Online Game シンポジウム 2007, 2007.

一般向け講演等

馬場章:「幕末維新期の写真にみる歴史群像」, 第 18 回全国龍馬ファンのつどい, 2006.【招待講演】

一般向け記事・報道等

馬場章:「ゲームで学ぶ」, CS デジタル放送『日テレ G+ (ジータス)おとな館, 2006.

馬場章:「揺らぐゲーム王国 お家芸ソフトの危機」, 読売新聞 朝刊, 2006.

馬場章:「産学官の連携でゲームの未来はどう変わるのか——「ゲーム産業戦略」記者説明会」, ITmedia , 2006.

馬場章:「東京大学、経済産業省、ゲーム業界「ゲーム産業戦略～ゲーム産業の発展と未来像～」を発表」, Impress GAME Watch, 2006.

馬場章:「“国策”としてのゲーム産業 政府が初の報告書」, ITmedia , 2006.

馬場章:「「ゲーム産業は課題山積」経産省が報告書・産学官でゲーム振興」, NIKKEI NET, 2006.

馬場章:「経済産業省の「ゲーム産業戦略」、産官学の新たな連携を形作るか」, RBB TODAY Slash , 2006.

馬場章:「日本のゲーム産業はどこへ向かう? 経産省「ゲーム産業戦略研究会」記者発表会」, Dengeki Online.com, 2006.

馬場章:「“ゲーム産業戦略”記者発表が開催 東京ゲームショウは国際コンテンツカーニバルの期間」, ファミ通.com, 2006.

馬場章:「ゲーム産業戦略:「世界をリード」「社会の支持」目標に」, まんたんウェブ, 2006.

馬場章:「<歴史授業>オンラインゲームで理解度向上 東大など研究」, 毎日新聞 (ウェブ), 2006.

馬場章:「東京大:オンラインゲームの教育研究で中間報告」, 毎日インタラクティブ, 2006.

馬場章:「東大、コーエー、詫間電波工業高専が「オンラインゲームの教育目的利用のための研究」を共同発表」, Slash Games, 2006.

馬場章:「「オンラインゲームが教育に与える影響は?」研究成果が中間発表」, ファミ通.com, 2006.

馬場章:「東大、「オンラインゲームの教育目的利用のための研究」報告会を開催 歴史授業に「大航海時代 Online」を採用した実証実験がスタート」, Game Watch, 2006.

馬場 章:「産学官が連携する「オンラインゲームの教育目的利用のための研究」の中間報告会」, 4Gamer.net, 2006.

馬場 章:「オンラインゲームが教育に役立つことを実証する、東大馬場章研究室など」, @IT, 2006.

馬場 章:「「大航海時代 Online」で歴史学習 効果と課題は」, ITmedia News, 2006.

馬場 章:「オンラインゲームの教育利用は着実に進んでいる——共同研究説明会」, ITmedia+D Games, 2006.

馬場 章:「学問不在に危機感」, 毎日新聞 夕刊, 2006.

馬場 章:「ゲーム産業戦略 人材育成を推進 経産省など 情報発信も強化」, 日経産業新聞 朝刊, 2006.

馬場 章:「ゲームは教育にも効果? 東大など実験 高専の歴史授業で」, 毎日新聞 夕刊, 2006.

馬場 章:「東大・詫間電波高専『オンラインゲームの教育目的利用の研究』で記者発表」, 文教ニュース, 2006.

馬場 章:「ゲームを教育に 高校と連携して検証」, 東大新報, 2006.

馬場 章:「転換期迎えた国内ゲーム産業 使いこなす能力の引き上げを 馬場章東大教授(ゲーム産業戦略研究会委員長)に聞く」, 公明新聞, 2006.

馬場 章:「3つの戦略 産学官一体で」, フジサンケイビジネスアイ, 2006.

馬場 章:「ゲームへの偏見なくせ 産学官連携で産業底上げ 教育や福祉に大きな可能性」, 科学新聞, 2006.

馬場 章:「特集・ゲーム産業の発展と未来像」, 経済産業ジャーナル, 2006.

馬場 章:「ゲーム学科続々誕生 今春2ケタに『実践』で人材育成」, 朝日新聞 夕刊, 2007.

馬場 章:「テレビゲームと上手に付き合う オンラインゲームが開く子どもの可能性」, 灯台, 2007.

馬場 章:「オンラインゲームの効果を探る 知的活動の新境地とは?」, deep_science, 2007.

廣井脩・教授

研究テーマ(主たるもの)

災害情報の研究

地震・噴火・台風など自然災害における、警報や避難命令などの災害情報の伝達実態と、地域住民の生命の安全を確保するための災害情報のあり方を研究している。また、避難など災害時の人間行動、災害報道の実態と問題点、住民の間で広がる流言などの分析も同時並行的に行ってきた。現在は、IT社会の急速な進展にともなう防災情報システムの発達の実態と問題点、および阪神・淡路大震災後に急速に変わりつつある災害情報の内容検討とその伝達方法、たとえば、余震情報や活断層の長期評価などの地震関連情報、および東海地震が切迫したときに出される観測情報、注意情報、地震予知情報などを、市民にどのように伝え、防災対策にどう活用すべきかについて多角的に調査研究している。

高度情報社会における社会問題の研究

上記の研究と平行して、高度情報社会の進展につれて顕在化してきた情報システムの脆弱性や、電磁波障害、紙ゴミ問題など新たな環境問題の出現といった、いわば情報化社会の負の側面についての分析と、それを克服するための方策について研究を行っている。

事故に関するデータベースの作成とホームページによる一般公開

自然災害や大規模事故に関する写真を中心としたデータベースを作成し、ホームページによって一般公開している。このデータベースは、<http://www.iii.u-tokyo.ac.jp/~hiroii/>に掲載してある。その詳細は後述する。

研究業績(2006 年度)

山口泰・教授

研究テーマ(主たるもの)

画像・映像補完

デジタルカメラやデジタルビデオなどによって、画像・映像情報が容易に得られるようになっている。これらの情報の欠損部分を修復したり、一部を除去して自然に加工するなどの画像・映像情報の補完処理が必要とされている。ここでは主に GPGPU や異種混合マルチコアプロセッサの利用を前提とした、高速かつ効率のよい画像・映像補完アルゴリズムの開発を目指している。

絵画風描画手法

これまでのコンピュータグラフィックスは仮想世界を現実的(写實的)に描く手法をして利用されてきた。しかし、エンターテインメントの分野では現実世界や仮想世界の風景を絵画風の画像して描くことが求められている。この絵画風の画像生成手法について研究している。これまでに、鉛筆画風の静止画像生成法、油彩画風の静止画ならびに動画生成法を提案している。

視覚復号型暗号

視覚復号型暗号は、計算機を用いることなく、人間の視覚によって復元可能な暗号である。具体的には、2枚の透明シートを重ねると、それまで見えなかった画像や文字が現れるようなものが相当する。これまでに提案された視覚復号型暗号は、主に文字情報などの2値画像を対象としており、現実世界の自然画像を暗号化するには適さなかった。そこで、グレースケールやカラーの自然画像を暗号化する手法について研究している。

研究業績(2006 年度)

論文等

R. Yano and Y. Yamaguchi: "Texture Screening Method for Fast Pencil Rendering", Journal for Geometry and Graphics, Vol.9, No.2, pp.191-200, 2006 年。【査読有】

国際会議等

Ayumi Miyai, Tagiru Nakamura, Koji Mikami, Motonobu Kawashima, Yasushi Yamaguchi: "A Proposal of Evaluation Test for 3D CG Content Production Capability", NICOGRAPH International 2006, pp.S6-5-1 - S6-5-6, 2006. 【査読有】

Ayumi Miyai, Tagiru Nakamura, Koji Mikami, Motonobu Kawashima, Yasushi Yamaguchi: "A Report of Experiments on Evaluation Test for 3D CG Contents Creation Capability Based on Simulation Methodology", 12th Intl. Conf. on Geometry and Graphics, pp.E23-1 - E23-10, 2006. 【査読有】

Kenjiro SUZUKI, Akio FUKANO, Yurika YOKOYAMA, Michio KATO, Kenji KASHIWABARA, Emiko TSUTSUMI, Yasushi Yamaguchi, Hiroaki ADACHI: "Development of Graphics Literacy Education - Implementation of Commercial 3D-CAD/CG Software into Graphic Science Course -", 12th Intl. Conf. on Geometry and Graphics, pp.G04-1 - G04-10, 2006. 【査読有】

Ayumi Miyai, Tagiru Nakamura, Koji Mikami, Motonobu Kawashima, Yasushi Yamaguchi: "Evaluation Test for 3D Computer Graphics Content Production Capability Based on Simulation Methodology", Eurographics 2006 Education, pp.69-78, 2006. 【査読有】

口頭発表等

鈴木裕一, 山口 泰: 「GPU による畳み込み型顔検出器の高速化」, 画像の認識・理解シンポジウム(MIRU 2006), 2006.

宮井あゆみ, 中村太戯留, 三上浩司, 川島基展, 山口 泰: 「デジタル映像制作シミュレーションテストの試行」, 日本テスト学会 第 4 回大会, 2006.

吉見俊哉・教授

研究テーマ(主たるもの)

戦争とメディア: 両世界大戦期におけるプロパガンダと情報流通に関する歴史社会学的研究

本研究は、20 世紀における戦争とメディアの緊密な関係を視野に収めつつ、情報学環が社会情報研究所の時代から受け継いできた重要な2つの戦時プロパガンダ関係の資料のコレクションについてのデジタル・アーカイブの構築を大きな目的としている。これらの2つのコレクションとは、①第一次大戦宣伝ポスター約 660 枚、及び、②内閣情報部の満州・フィリピンにおける宣伝資料の2つであり、いずれも日本国内では例を見ない貴重なものである。吉見研究室において組織された研究チームは、社会情報研究所時代から、これらの資料の修復と保存状態の改善に努め、上記資料を広く公開すべくデジタル・アーカイブの構築を進めてきた。このような基礎作業の上に立って、本研究では、これらの資料を関連諸資料と結びつけ、それらについて総合的に分析する学際的研究を、アーカイブそのものに組み込む仕方で展開している。

20世紀後半の東アジアの都市大衆文化における「アメリカ」の受容と反発

本研究は、冷戦期を通じた東アジアでのアメリカ的価値の受容や反発について、文化的な次元から比較歴史研究を進めるものである。その際、とりわけ米国の軍事的・経済的・文化的影響が大きな意味を持った日本本土、沖縄、韓国、台湾、フィリピンなどに焦点を当て、映画、テレビ、マンガ、音楽などから都市空間や基地文化までの大衆文化のレベルでの変化を、一方では政治的な次元と文化・メディアの次元の関係を精密に見据えながら、他方では東アジア全域を射程に収めて明らかにする。とりわけ本研究では、戦後日本及び東アジアの大衆意識のなかでの「アメリカ」の存在、アメリカ的文化商品の受容の過程を、韓国、台湾、フィリピン

などを中心に東南アジアまでの横断的な広がりの中で、また文化と軍事・経済的な覇権の構造を結びつけて明らかにしようとしている。

多言語対話型のデジタル百科全書の構築を通じた情報知の構造化

本研究は、デジタル・アーカイブの諸技術を基盤にしつつ、情報知を中核にした新しい多言語対話型の百科全書の構築とその大学教育のなかでの応用的展開を目指している。すなわちまず、情報学環教員が中核的に関与してきた『情報学事典』(弘文堂)、『社会情報学ハンドブック』(東京大学出版会)などの出版物のデジタルデータを、百科全書構築の実験素材として利用し、これらのデータを基礎にユビキタス社会における大学教育のモデルを示す知識形成実験を進めている。同時に、英国の Theory, Culture and Society 誌を中心とした New Encyclopedia Project、及び National Singapore 大学、Seoul National 大学などと協力しつつ、情報・言語の基礎理論、知覚情報、ジャーナリズム、メディア文化、情報行動、情報経済、情報法・政策などの中核的な諸領域についての知の対話的形成とその構造化を可能にするプラットフォーム作りを進めている。

研究業績(2006 年度)

著書等

吉見俊哉:「戦争の表象:東京大学情報学環所蔵第一次世界大戦期プロパガンダ・ポスターコレクション」, 東京大学出版会, 2006 年.

吉見俊哉・佐藤健二:「文化の社会学」, 有斐閣, 2006 年.

吉見俊哉・若林幹夫:“東京スタディーズ(韓国語版)”, 서울: 커뮤니케이션북스, 2006 年.

吉見俊哉:「知のデジタルシフト」, 石田英敬 編, 弘文堂, 2006 年.

吉見俊哉:「モード・オブ・ザ・ウォー:東京大学大学院情報学環所蔵第一次世界大戦期プロパガンダ・ポスターコレクションより」, 吉見俊哉、樺山紘一、柏木博他 編, 印刷博物館, 2006 年.

吉見俊哉:「ユビキタスでつくる情報社会基盤」, 坂村健 編, 東京大学出版会, 2006 年.

Shunya Yoshimi: “The Ambivalent Consumer: Questioning Consumption in East Asia and the West”, Sheldon Garon, Patricia L. Maclachlan 編, Cornell University Press, 2006 年.

Shuna Yoshimi: “Japan After Japan: Social and Cultural Life from the Recessionary 1990s to the Present”, Tomiko Yoda and Harry Harootunian 編, Duke University Press, 2006 年.

Shunya Yoshimi: “The Inter-Asia Cultural Studies Reader”, Kuan Hsing Chen, Chua Beng Huat 編, Routledge, 2006 年.

論文等

吉見俊哉:「新百学連環論序説-エンサイクロペディアと CMS のあいだで-」, 東京大学大学院情報学環紀要 情報学研究, No.No.70 (2006 年 12 月), pp.65-87, 2006 年.

吉見俊哉・山本拓司・小泉智佐子:「情報学環所蔵大戦期プロパガンダ資料のデジタル・アーカイブ化」, 東京大学大学院情報学環紀要 情報学研究, No.No.71 (2007 年 5 月), pp.143-150, 2006 年.

吉見俊哉、松田浩:「戦後史と放送の公共性」, 現代思想, Vol.34, No.4, pp.46-71, 2006 年.

梅林宏道、新城郁夫、吉見俊哉:「日米軍事同盟に抗して」, 現代思想, Vol.34, No.10, 2006 年.

Shunya Yoshimi: "Rethinking the Politics of Exposition: An Overview", Art & Culture in East Asia(韓国版), No.No.3, pp.161-177, 2006 年.

口頭発表等

Shunya Yoshimi: "Theorizing Tokyo: Culture, Image and Consumption", Theory, Culture & Society New Encyclopaedia Project Colloquium, Beijing Language and Culture University, 2006. 【招待講演】

Shunya Yoshimi: "AMERICA in Postwar Japan: On the reconstruction of the "Japanese", the "American" and the "Global"", Negotiating the 'boundaries' of the postwar Japanese state, Sheffield University, 2006. 【招待講演】

Shunya Yoshimi: "Industrial Expositions in Modern Japan: An Overview", Annual Conference of Association of East Asian Art and Culture, Seoul, 2006. 【招待講演】

Shunya Yoshimi: "The Concept of "Encyclopedia" and New Knowledge Production in the Digital Age", Rewriting Japanese Intellectual History, Leipzig University, 2006. 【招待講演】

Shunya Yoshimi: "Memorizing/Consuming Tokyo in Postwar Japan", Urban Peresantations, International Conference in North Western University, 2006. 【招待講演】

石川徹・助教授

研究テーマ(主たるもの)

空間の認知, 環境の心理

空間とは, その中で生活・行動する人間にとって, 身近でありかつ欠くことのできない存在ですが, われわれはいったいどのように周りの空間をとらえているのでしょうか。私たちが周辺についての知識を獲得し, 頭の中に記憶し, その知識を利用する一連のプロセスと, 得られた知識("頭の中の地図")の構造について, とくに興味をもって研究をおこなっています。また, 私たちはどのような景観・景色を好ましいと思うのかなどといった, 空間における人間の心理的・感情的側面も, 重要な研究課題のひとつです。

情報技術と空間情報の表現・視覚化

視覚化という方法は, 空間的(および非空間的)現象を表現するのに適した方法ですが, その一方で, 地図やグラフの理解はそう単純ではないこともわかっています。また, 認知や学習のスタイル・好みにも個人差があり, たとえば, 視覚的な方法を好む人と, 言語的な方法を好む人がいます。このような利用者の属性や目的に応じて効果的に空間の情報を提示する方法はあるのでしょうか。とくに, ユビキタスネットワークを代表とする新しい情報技術とそれを利用する人間の認知・行動の問題(ユビキタス都市における空間行動)に関心もっています。

空間的思考とビジュアライゼーション

空間的思考は多くの科学の分野に共通するテーマですが, なかでも地球科学においては, さまざまなスケールに渡る高度で複雑な空間的思考を必要とする問題や作業が多くあります。その一方で, そのような高い空

間能力を必要とする問題や作業を苦手とする学生が多いこともわかっており、最近では、学生の理解を助けることを目的に、3D やアニメーションなどを用いた教育方法が試みられています。このような空間的思考と各種ビジュアライゼーション手法の有効性の問題について研究を進めたいと考えています。

研究業績(2006 年度)

論文等

Kim A. Kastens, Toru Ishikawa: "Spatial thinking in the geosciences and cognitive sciences : A cross-disciplinary look at the intersection of the two fields", *Earth and mind : How geologists think and learn about the Earth*, Special Paper 413, 2006 年。【査読有】

石川徹, 石井秀彦, 奥山賢太郎, 沢崎拓史, 長谷川智彦, パンノイナッタポン, 平田翠, 牧周佑, 山崎貴彦: 「スケッチマップを用いた渋谷のイメージマップ作成の試み」, *地理情報システム学会講演論文集 v15*, 2006 年。

国際会議等

Kim A. Kastens, Toru Ishikawa, Lynn S. Liben: "Visualizing a 3-d geological structure from outcrop observations : Strategies used by geoscience experts, students and novices", annual meeting of the Geological Society of America, 2006.

口頭発表等

石川徹: 「スケッチマップを用いた渋谷のイメージマップ作成の試み」, *地理情報システム学会研究発表大会*, 2006.

石川徹: 「空間の情報と空間的思考」, *CSISDAYS 2006* , 2006.

石崎雅人・助教授

研究テーマ(主たるもの)

コミュニケーションにおける同調現象に関する研究

社会の基礎である共同行為の解明に向けて、共同注視・模倣・同調などの現象について研究がすすめられている。本テーマでは、共同行為の中でもコミュニケーションの同調現象に焦点をあてて、行為主体が、言語・音声・身体動作により、どのように行為の調整を行っているかについて検討し、新しいコミュニケーションのモデルを構築することを目指す。

多人数インタラクションにおける話題構造に関する研究

社会において立場の異なる複数の人々の間で合意を作っていくためにパブリックアセスメントなどさまざまな試みがなされている。しかし、多くの人たちが合意を作っていく過程について、実証的に明らかにした研究は少ないのが現状である。本テーマでは、この過程の解明の第一歩として、多くの人たちがかわるインタラクションにおいて、参加者が話題がどのように遷移させていくかについて明らかにすることを目的とする。

専門家－非専門家コミュニケーション技術に関する研究

専門家が非専門家にどのようにして知識を伝えるかが大きな問題になっている。この問題を解決するためには、知識をわかりやすく伝えるだけでなく、問題をかかえる非専門家が納得するためのコミュニケーション技術が必要である。本テーマでは、具体的に医師と患者とのコミュニケーションに焦点を絞り、その技術の解明を行う。

研究業績(2006 年度)

論文等

片桐恭弘、石崎雅人、伝康晴、高梨克也、坊農真弓、松坂要佐、榎本美香:「合意形成型の多人数インタラクションにおける会話構造について」, 電子情報通信学会技術研究報告, Vol.106, No.219, pp.1~6, 2006 年。【査読有】

伊東乾・助教授

研究テーマ(主たるもの)

研究業績(2006 年度)

岡崎毅・助教授

研究テーマ(主たるもの)

情報通信政策論(特に競争政策及び国際情報通信政策)

情報通信分野における競争政策の目的・役割とその具体的手法について、特に業法規制との関係に留意しつつ、あるべき姿を探る研究。及び、経済のグローバル化とインターネットによって、情報通信政策が国際的なものとならざる得ないことから不可避免的に生ずる問題を考察し、解決策を探る研究。

情報に関わる法

情報通信分野を規制するいわゆる事業法。及び、情報に関する規制(例:個人情報保護規制、有害情報規制、著作権保護)と、情報公開、情報の自由な流通、表現の自由等に関わる法についての研究。

情報に関わる法と経済

情報通信政策・情報法の基礎となる経済理論と実際の政策・法の関係の研究。

研究業績(2006 年度)

北田暁大・助教授

研究テーマ(主たるもの)

日本メディア史の実証的研究

広告、映画、新聞など近代のコミュニケーション文化において重要な役割を果たしてきたメディアを、歴史社会的な手法で分析している。その成果を公刊したものとして、『広告の誕生』(2000年、岩波書店)、『＜意味＞への抗い』(2004年、せりか書房)などがある。

若者のコミュニケーション研究

現代若者たちのコミュニケーションの変容を、「保守化」傾向や「バックラッシュ」などの現象とあわせ、メディアの果たす役割に着目しつつ分析している。その成果を公刊したものとして、『広告都市・東京』(2002年、廣済堂出版)、『嗤う日本の「ナショナリズム」』(2005年、NHK出版)などがある。

理論社会学、コミュニケーション理論についての基礎的研究

「行為の同定問題」、「行為(者)責任の生成メカニズム」など社会学基礎論にかかわるテーマについて、政治哲学、倫理的行為論なども射程に入れつつ、考察を加えている。その成果を公刊したものとして『責任と正義』(2003年勁草書房)がある。

研究業績(2006年度)

著書等

藤本 一勇,清家 竜介,仲正 昌樹,北田 暁大,毛利 嘉孝:「現代思想入門 グローバル時代の「思想地図」はこうなっている」,PHP 研究所,2007年.

北田暁大、東浩紀:「東京から考える-格差・郊外・ナショナリズム」,NHK 出版,2007年.

越塚登・助教授

研究テーマ(主たるもの)

Ubiquitous Computing

Sensor Network

Operarting System

研究業績(2006年度)

著書等

坂村健、越塚登:「ユビキタスでつくる情報社会基盤」, 坂村健 編, 東京大学出版会, 2006 年.

論文等

中川樹生、小野豪一、乗松崇泰、藤原亮介、水垣健一、寺田崇秀、宮崎祐行、鈴木敬、矢野和男、前木陽、緒方祐次、小林真輔、越塚登、坂村健:「1cc 超小型ノードを用いた 22cm 高精度測位システムの開発(1): 超低電力 UWB センサノードの開発」, 2006 年電子情報通信学会ソサイエティ大会、AS-4-4, 2006 年.

水垣健一、藤原亮介、小野豪一、中川樹生、乗松崇泰、寺田崇秀、宮崎祐行、鈴木敬、矢野和男、前木陽、緒方祐次、小林真輔、越塚登、坂村健:「1cc 超小型ノードを用いた 22cm 高精度測位システムの開発(2): UWB 測位システムの実証実験」, 2006 年電子情報通信学会ソサイエティ大会、AS-4-5, 2006 年.

小野豪一、乗松崇泰、藤原亮介、中川樹生、寺田崇秀、水垣健一、宮崎祐行、前木陽、緒方祐次、小林真輔、越塚登、坂村健:「超低電力 UWB 無線 LSI の検討(1):送信 LSI の開発」, 2006 年電子情報通信学会ソサイエティ大会、A-5-9, 2006 年.

乗松崇泰、小野豪一、藤原亮介、中川樹生、寺田崇秀、水垣健一、宮崎祐行、前木陽、緒方祐次、小林真輔、越塚登、坂村健:「超低電力 UWB 無線 LSI の検討(2):デジタル制御 UWB 送信機 RF 部の開発」, 2006 年電子情報通信学会ソサイエティ大会、A-5-10, 2006 年.

藤原亮介、小野豪一、水垣健一、乗松崇泰、中川樹生、寺田崇秀、宮崎祐行、前木陽、緒方祐次、小林真輔、越塚登、坂村健:「超低電力 UWB 無線 LSI の検討(3):同期捕捉方式の検討」, 2006 年電子情報通信学会ソサイエティ大会、A-5-11, 2006 年.

寺田崇秀、藤原亮介、乗松崇泰、小野豪一、中川樹生、水垣健一、宮崎祐行、前木陽、緒方祐次、小林真輔、越塚登、坂村健:「超低電力 UWB 無線 LSI の検討(4):CMOS 受信フロントエンドの設計」, 2006 年電子情報通信学会ソサイエティ大会、A-5-12, 2006 年.

前木陽、小林真輔、越塚登、坂村健、水垣健一、藤原亮介、小野豪一、宮崎祐行、鈴木敬、矢野和男:「UWB を用いた高精度測位応用に向けて」, 2006 年電子情報通信学会ソサイエティ大会、A-5-13, 2006 年.

中川樹生、小野豪一、乗松崇泰、藤原亮介、水垣健一、寺田崇秀、宮崎祐行、鈴木敬、矢野和男、前木陽、緒方祐次、小林真輔、越塚登、坂村健:「1cc 超小型 UWB センサノードの開発」, 電子情報通信学会 SIS(スマートインフォメディアシステム)研究会, 2006 年.

国際会議等

K. Mizugaki, R. Fujiwara, T. Nakagawa, G. Ono, T. Norimatsu, T. Terada, M. Miyazaki, Y. Ogata, A. Maeki, S. Kobayashi, N. Koshizuka, K. Sakamura: "Accurate Wireless Location/Communication System With 22-cm Error Using UWB-IR", IEEE Radio & Wireless Symposium 2007, 2007. 【査読有】

口頭発表等

越塚登:「ユビキタスネットワーク社会基盤の構築にむけて」, ITU-T(電気通信標準化)研究会, 2006. 【招待講演】

越塚登:「状況情報処理を実現するユビキタス・プラットフォームの研究開発～アジア・ユビキタス・プラットフォーム技術に関する研究開発～」, Ubiquitous Network Symposium 2006, 2006. 【招待講演】

越塚登:「食の安心安全をサポートするユビキタスコンピューティング技術—ucode を使った食品トレーサビリティの取組み」, アグリバイオインフォマティクス第3回シンポジウム～バイオインフォマティクスを利用したアグリバイオの新たな展開～(東京大学 130 周年記念事業), 2007.【招待講演】

一般向け講演等

越塚登:「パソコンからキーボードが消える日:ユビキタス情報社会基盤のユニバーサルデザイン」, 視覚障害者 PC サポートフォーラム 2006『未来へつなげ!虹のかけ橋』基調講演, 2006.【招待講演】

越塚登:「ユビキタスプラットフォーム T-Engine, T-Kernel の動向、ユービキタス時代のインターネットアプライアンスプラットフォーム」, Interop 2006, 2006.【招待講演】

越塚登:「ユビキタス ID 技術—ユビキタス情報社会を支える基盤技術—」, 日立 Value コンベンション, 2006.【招待講演】

越塚登:「T-Kernel と ITRON の最新動向」, ITRON/T-Kernel セミナー, 2006.【招待講演】

越塚登:「ユビキタス ID 技術が創るユビキタス社会」, 日経デジタルコア 第7回「トレーサビリティ研究会」, 2006.【招待講演】

一般向け記事・報道等

越塚登:「「各分野の第一人者が緻密に予測する、技術の未来図 20XX 年のユビキタス ロボット Web」」, Tech 総研, http://rikunabi-next.yahoo.co.jp/tech/docs/ct_s03600.jsp?p=000951, 2006.

越塚登:「連載:RFID の基礎と最新動向(6): 第 6 回 YRP ユビキタス・ネットワーキング研究所訪問レポート」, Impress R&D, <http://wbb.forum.impressrd.jp/feature/20061211/352>, 2006.

佐藤洋一・助教授

研究テーマ(主たるもの)

時系列フィルタと識別器の統合による人物三次元追跡手法の提案

従来の画像を手掛かりとした時系列フィルタによる人物追跡では、色ヒストグラムや輪郭の類似性など、比較的単純な画像特徴を利用するものが多く、照明変動や複雑背景下における人物追跡では必ずしも十分ではなかった。本研究では、画像から人物の顔を検出する AdaBoost 学習に基づく識別器を、時系列フィルタの枠組みに統合し、頑健かつ高精度に人物頭部を追跡する手法を提案した。本手法では、複数の識別器を人物とカメラとの関係に基づいて適応的に用いることで、頭部の向きを変えつつ移動する人物を追跡できる点を特徴としている。視野を共有した複数のカメラを用い、人物頭部を三次元追跡する実験により、本手法の有効性を確認した。

拡散光源を用いた物体の見えの標本化

任意光源環境下における物体の見えは周波数領域で定義される部分空間を用いて精度良く表現できることが従来研究により示されている。この部分空間は、任意照明下での顔認識や画像合成の研究分野において有効に利用されてきた。しかしながら、複雑な形状や反射特性を持つ実物体を対象とした場合、部分空間を張る基底画像を準備することは容易ではない。本研究では、点光源ではなく面積を持った拡散光源を用いて物

体表面の見えを観察することにより、物体表面の反射特性の周波数帯域に制限をかけて不十分なサンプリングに起因するエイリアシングの問題を回避して基底画像を獲得する手法を提案する。拡散光源の利用により、複雑な反射特性を持つ物体表面に対しても、物体表面の持つ周波数帯域に左右されず、球面調和関数のサンプリング定理に基づき基底画像を獲得することが可能となる。

人間の視覚特性を考慮した投影画像の光学的補正

実世界内のさまざまな場所にプロジェクタで画像を投影するとき、不均一な反射特性を持つ被投影面や環境光などの影響により、正しい色で表示可能な画像のコントラストが制限されてしまうという問題がある。これに対して本研究では、観測者に知覚されにくいような色成分と輝度成分の変動を積極的に利用して、よりコントラストの高い画像を表示することを可能にする手法を提案する。提案手法では、画素ごとに、原画像の色成分を厳密に表示可能な輝度の範囲を求めたのち、人間の視覚特性に関するモデルに基づいて、色成分と輝度成分が許容しうる誤差を計算する。こうして得られた各画素の輝度範囲、および、色成分と輝度成分の許容誤差を考慮し、かつ、原画像から観測画像への変換が隣接画素間で過度に変化しないようにして、観測画像のコントラストを最大化するような光学的補正を行う。本稿では、提案手法のアルゴリズムを説明し、さまざまな被投影面を用いた実験により提案手法の有効性を示す。

研究業績(2006 年度)

論文等

岡兼司, 菅野裕介, 佐藤洋一:「頭部変形モデルの自動構築をともなう実時間頭部姿勢推定」, 情報処理学会論文誌コンピュータビジョンとイメージメディア, Vol.47, No.SIG10(CVIM15), pp.185-194, 2006 年.【査読有】

小野泰弘, 岡部孝弘, 佐藤洋一:「目領域の切り出しの不定性を考慮した低解像度画像からの視線方向推定」, 情報処理学会論文誌コンピュータビジョンとイメージメディア, Vol.47, No.SIG10(CVIM15), pp.173-184, 2006 年.【査読有】

島野美保子, 長尾健司, 岡部孝弘, 佐藤いまり, 佐藤洋一:「任意照明下顔認識のための顔表面の位置相関を考慮した MAP 推定」, 情報処理学会論文誌コンピュータビジョンとイメージメディア, Vol.47, No.SIG10(CVIM15), pp.162-172, 2006 年.【査読有】

岡部孝弘, 佐藤洋一:「近接光源下における物体の見えの近似のための画像分割」, 情報処理学会論文誌コンピュータビジョンとイメージメディア, Vol.47, No.SIG10(CVIM15), pp.120-130, 2006 年.【査読有】

佐藤いまり, 岡部孝弘, 佐藤洋一, 池内克史:「任意光源環境における画像生成のための物体の見えの標本化」, 情報処理学会論文誌コンピュータビジョンとイメージメディア, Vol.47, No.SIG10(CVIM15), pp.107-119, 2006 年.【査読有】

梶原 慎太郎, 小池 英樹, 福地 健太郎, 佐藤 洋一:「EnhancedLazySusan: 回転テーブルを用いた情報共有システム」, インタラクティブシステムとソフトウェアに関するワークショップ (WISS 2006) 予稿集, 2006 年.【査読有】

小林貴訓, 佐藤洋一, 杉本晃宏:「疎分散カメラ群を用いた人物行動軌跡の推定」, 画像の認識・理解シンポジウム (MIRU2006), 2006 年.【査読有】

マークアシュダウン, 佐藤いまり, 岡部孝弘, 佐藤洋一:「人間の視覚特性を考慮した投影画像の光学的補正」, 画像の認識・理解シンポジウム (MIRU2006), 2006 年.【査読有】

小林貴訓, 杉村大輔, 平澤宏祐, 鈴木直彦, 鹿毛裕史, 佐藤洋一, 杉本晃宏:「カスケード型識別器を用いたパーティクルフィルタによる人物三次元追跡」, 画像の認識・理解シンポジウム (MIRU2006), 2006 年。【査読有】

菅野裕介, 佐藤洋一:「表情変動を許容した実時間頭部姿勢推定のための個人間および個人内変動に対する顔形状推定」, 情報処理学会コンピュータビジョンとイメージメディア研究会,2006-CVIM-156-21, 2006 年。

杉村大輔, 小林貴訓, 佐藤洋一, 杉本晃宏:「行動履歴を反映させた適応的環境属性を伴う三次元人物追跡」, 情報処理学会コンピュータビジョンとイメージメディア研究会,2006-CVIM-156-21, 2006 年。

小野泰弘, 岡部孝弘, 佐藤洋一:「低解像度画像からの視線方向推定 -カーネル多重線形モデルによる個人差への対応-」, 画像の認識・理解シンポジウム (MIRU2006), 2006 年。

岡兼司, 佐藤洋一:「柔軟なインタフェースの実現に向けた人間行動の計測と理解」, 情報処理学会コンピュータビジョンとイメージメディア研究会、2006-CVIM-154-32, 2006 年。

国際会議等

Gabriel Pablo Nava, Yosuke Yasuda, Yoichi Sato, Shinichi Sakamoto: "An inverse method for in-situ estimation of acoustic surface impedance targeting inverse sound rendering in rooms.", International Congress and Exposition on Noise Control Engineering (INTER-NOISE 2006), pp.415, 2006. 【査読有】

Yasuhiro Ono, Takahiro Okabe, Yoichi Sato: "Gaze Estimation from Low Resolution Images", 2006 IEEE Pacific-Rim Symposium on Image and Video Technology (PSIVT), pp.178-188, 2006. 【査読有】

Yoshinori Kobayashi, Daisuke Sugimura, Yoichi Sato, Kousuke Hirasawa, Naohiko Suzuki, Hiroshi Kage, Akihiro Sugimoto: "3D Head Tracking using the Particle Filter with Cascaded Classifiers.", Proceedings of the British Machine Vision Conference (BMVC2006), pp.37-46, 2006. 【査読有】

Mark Ashdown, Takahiro Okabe, Imari Sato, Yoichi Sato: "Robust Content-Dependent Photometric Projector Compensation", IEEE International Workshop on Projector-Camera Systems, pp.60-67, 2006. 【査読有】

Gabriel Pablo Nava, Yosuke Yasuda, Yoichi Sato, Shinichi Sakamoto: "In-situ estimation of acoustic impedance on the surfaces of a room for inverse sound rendering.", International Conference on Noise & Vibration Engineering (ISMA2006), pp.460, 2006. 【査読有】

七丈直弘・助教授

研究テーマ(主たるもの)

知識形成プロセスの分析

企業等においては、組織を単位として知識生産がおこなわれていくが、現在では組織間でのコラボレーションによる知識生産の効率化が重要視されてきている。特にR&Dに焦点を当て、研究者が果たす知識生産における2つの側面(生産と媒介)を定量的に求め、知識生産に与える影響を解析する。

コンテンツ分野における能力形成プロセスの分析

コンテンツ分野においては、突出した才能をもった個人が生産物の品質を大きく規定すると考えられてきた。しかし、個人の能力形成のミクロ分析を進めることにより、個人が置かれた環境が持つ効果 (embeddedness) が定量的にわかりつつある。本テーマでは、才能をもつに至った個人の能力形成プロセスの分析を行い、制度面での含意を得ることを目標とする。

研究業績(2006 年度)

論文等

七丈直弘、馬場靖憲:「産学連携が大学の科学研究に与える影響の定量分析」, 研究・技術計画学会第21回 年次学術大会講演要旨集, 2006 年.

国際会議等

Naohiro Shichijo, Satoko Asai, Kazuhito Fukuchi, and Yasunori Baba: "The integrative study of co-inventor and co-author networks: an application of social network analysis into innovation", International Sunbelt Social Network Conference XXVI, 2006. 【査読有】

Naohiro Shichijo, Satoshi Shimizu, Kazuto Nakajima, Yasunori Baba: "Knowledge Procurement Strategy on Firms: Collaboration with Public R&D Institutes", IEEE International Conference on Service Operations and Logistics, and Informatics, pp.913-918, 2006. 【査読有】

Yasunori Baba, Naohiro Shichijo and Yuichi Nagahara: "The Role of Core Researchers for Increasing Firms", International J. A. Schumpeter Society 11th ISS Conference, 2006. 【査読有】

口頭発表等

馬場靖憲、七丈直弘:「社会共創モデルの開発」, 人工物工学研究センター連携研究・RA 第5回研究会, 2006.

一般向け講演等

馬場靖憲、七丈直弘:「光触媒分野における研究開発～特許・科学論文からみた産学公連携の興味ある動き」, 平成 18 年度 KAST フォーラム 3「光触媒の最新動向」, 2006. 【招待講演】

Naohiro Shichijo: "Content Producer Education Program in The University of Tokyo: Case Study", The Asia-Pacific International Anime Conference, 2006. 【招待講演】

鈴木高宏・助教授

研究テーマ(主たるもの)

超柔軟マニピュレータに関する研究

本研究では、従来の弾性の存在を前提とした柔軟系モデルでは扱えない、より柔軟な非弾性的柔軟系の運動を解析し、その特性を利用して新たなマニピュレーションの可能性を拓くことを目的としている。このような系を超柔軟系と呼んでいるが、例えばひもや糸、ワイヤー、テザー、ファイバー等のような要素はその例とし

て考えられ、これらを利用することで従来より格段に軽量かつコンパクトな機構が実現できる。こうした超柔軟系を用いた従来にはない新たなロボット マニピュレーションについて研究を行っている。

メカトロニック人工食道の開発

食道のただ一つの重要な機能は蠕動による咀嚼物の嚥下である。そのため、これは機械的機構で代替することが可能であると考えられ、それにより食道癌 手術等における多大な外科的侵襲を低減することができる。本研究では、スクリュウ搬送機構を利用したメカトロニック人工食道の開発を行っている。現在、試作実験機において、様々な粘度の対象物について搬送実験を行い、その有効性を確認している。

人間-自動車-交通流系の動的挙動と制御

CCR サステナブル ITS プロジェクト(sITS)に参加し、その 1 テーマとして研究を行っている。ITS 環境の普及段階においては、自動運転車と人間の運転する手動運転車の混在が予想される。本研究では、そうした混在交通流の動的挙動を解析し、安全性や効率を向上させる制御法を提案する。

研究業績(2006 年度)

国際会議等

T. Suzuki, Y. Ebihara, T. Suzuki, Y. Ando and M. Mizukawa: "Casting and Winding Manipulation with Hyper-Flexible Manipulator", IEEE/RSJ Int. Conf. on Intelligent Robots and Systems(IROS 2006), 2006. 【査読有】

口頭発表等

鈴木高宏:「超柔軟マニピュレータのダイナミック制御 ～ 投射・巻付きにおける計測・制御システム ～」, 第 11 回ロボティクス・シンポジウム, 2006.

近藤, 宮本, N. Webster, 大貫, 鈴木, 須田, 桑原:「総合ITSシミュレータのための人間運転行動モデル同定」, 日本機械学会 ロボティクス・メカトロニクス講演会, 2006.

鈴木崇, 蛭原, 鈴木高, 安藤, 水川:「超柔軟マニピュレータの運動制御のための動的状態推定」, 日本機械学会 ロボティクス・メカトロニクス講演会, 2006.

蛭原, 鈴木崇, 軍司, 鈴木高:「超柔軟マニピュレータの投射・巻き付き制御」, 日本機械学会 ロボティクス・メカトロニクス講演会, 2006.

鈴木高宏:「ロボット制御のための力学・数学」, SICE セミナーシリーズ「ロボティクス –ロボット制御の理論と実際–」第 1 回, 2006. 【招待講演】

宮本, 大貫, 鈴木, 須田:「速度調整操作モデルにおけるドライバ特性の解析」, 自動車技術会 2006 年秋季大会学術講演会, 2006.

軍司, 鈴木:「超柔軟要素を用いた3次元表面ディスプレイ」, 計測自動制御学会システムインテグレーション部門講演会(SI2006), 2006.

宮本, 大貫, 鈴木, 須田:「サグ部における速度調整操作モデルのドライバー特性解析」, 第 5 回 ITS シンポジウム 2006, 2006.

近藤, 鈴木, N. Webster, 桑原:「他車両との相互作用を取り入れた横方向運転行動モデルの同定」, 第 5 回 ITS シンポジウム 2006, 2006.

一般向け講演等

鈴木高宏:「統合 ITS プラットフォームのための人間運転行動モデルとそれによる次世代運転支援・交通制御」,平成 18 年度『社会人のための ITS 専門講座』,2006.【招待講演】

田中秀幸・助教授

研究テーマ(主たるもの)

産業技術のイノベーション・システムに関する研究

技術的限界に直面した産業においては、それを乗り越えるために不確実性の高い技術の方向性を明らかにするような焦点化が求められる。市場メカニズムは、そのような焦点化の機能が全般的に弱いために、従来は、国家のイニシアティブによって、企業の境界を越えたイノベーションの取り組みが進められてきた。しかしながら、近年、最先端の技術限界を突破するためには、必ずしもドメスティックな企業間協力だけでは対応が困難になってきており、それに伴い、国家でもなければ企業でもない非営利の中間組織がグローバルに展開することで、新たなイノベーション・モデル形成する例が生まれつつある。以上のような問題意識の下、産業技術のイノベーションにおける、市場、国家、企業、そして中間組織の機能などについての研究を進めている。

情報セキュリティ・マネジメントのインセンティブ設計に関する研究

情報システムのネットワーク化の進展によって、情報セキュリティは相互依存性が高まっている。相互依存的な環境下では、ある主体の情報セキュリティ水準は自らの管理努力だけではなく、ネットワークで接続された相手方のセキュリティ・マネジメントの影響も受けるようになる。こうした相互依存性は、外部効果を通じて市場の失敗をもたらすことになり、何らかの制度的な手当が必要となる。このような情報セキュリティを巡る組織の境界の変容に対して、いかなるインセンティブ設計があり得るのかなどについての研究を進めている。

地域情報化に関する研究

現在進められている電子自治体の取り組みは、行政内部の業務プロセスを抜本的に変えるのみならず、従来、行政の外側にあった主体との関係にも大きな変化をもたらす。具体的には、地域住民、地域企業やNPOとの相互関係を深めることで、新たな地域づくりが実現しつつある。電子自治体を契機として展開する地域情報化の中で、行政の境界がどのように変容し、いかなる制度が求められるかなどについての研究を行っている。

研究業績(2006 年度)

論文等

上野景真、田中秀幸:「情報セキュリティ投資と企業価値に関する実証分析」,日本経済政策学会第63回全国大会,2006年.

田中秀幸、松浦幹太:「情報セキュリティ投資の経済的動機付けに関する企業レベルの実証研究」,電気通信普及財団研究調査報告書』,21号,pp.17-24,2006年.

上野景真、田中秀幸:「企業のICT投資と企業価値に関する実証分析」,日本社会情報学会(JASI)第21回全国大会発表論文集,pp.31-34,2006年.

田中秀幸:「セキュリティという資産」,ユビキタスでつくる情報社会基盤,東京大学出版会,pp.186-196,2006年.

田中秀幸:「電子自治体投資が地域経済に及ぼす影響に関する実証研究」, 日本社会情報学会(JASI)第21回全国大会発表論文集, pp.133-136, 2006年.

田中秀幸、松浦幹太:「電子政府投資に関する社会経済的な評価に関する研究」, 社会・経済システム学会第25回大会報告, 2006年.

小山友介、樺島榮一郎、板倉陽一郎、田中秀幸、藤原正弘、出口弘:「『日本型コンテンツ産業システム』の特徴とその可能性」, 社会・経済システム学会第25回大会報告, 2006年.

国際会議等

Hideyuki Tanaka, Keima Ueno: "Information Security Investment and Firm Value as Measured by Tobin's q ", The 3rd Forum on Financial Information Systems and Cybersecurity: A Public Policy Perspective, 2006. 【査読有】

Wei Liu, Hideyuki Tanaka, Kanta Matsuura: "An Empirical Analysis of Security Investment in Countermeasures Based on an Enterprise Survey in Japan", Workshop on the Economics of Information Security 2006: WEIS2006, 2006. 【査読有】

Masaki Ishiguro, Hideyuki Tanaka, Kanta Matsuura, Ichiro Murase: "The Effect of Information Security Incidents on Corporate Values in the Japanese Stock Market", The Workshop on the Economics of Securing the Information Infrastructure, 2006. 【査読有】

口頭発表等

田中秀幸:「ICT住民参画と行政参加型地域 SNS の可能性」, 学習院大学大学院政治学研究所 e-Democracy 研究会, 2006. 【招待講演】

Hideyuki Tanaka: "Information Security Management in Japan", The third annual US-Japan Critical Infrastructure Protection (CIP) Forum, 2006. 【招待講演】

田中秀幸:「情報セキュリティ対策と企業価値」, 経済産業省ほか主催「リスク定量化ワークショップ」, 2007. 【招待講演】

田中秀幸:「情報セキュリティの経済的側面: 定量データに基づく分析を中心に」, 重要インフラ・相互依存性解析・分野横断的演習合同検討会第10回会合, 2007. 【招待講演】

一般向け講演等

田中秀幸:「インターネットで楽しく地域に参加」, 京都山城地域 SNS スタート記念講演会, 2006. 【招待講演】

田中秀幸:「情報通信技術と地域参画」, 総務省ほか主催「e-コミュニティフォーラム in 八戸」, 2007. 【招待講演】

田中秀幸:「情報通信技術と地域参画」, 総務省ほか主催「e-コミュニティフォーラム in 大垣」, 2007. 【招待講演】

田中秀幸:「地域情報化と SNS の可能性」, 青森県庁地域 SNS 講演会, 2007. 【招待講演】

田中秀幸:「ICTを活用した住民参加と地域 SNS の可能性」, 滋賀県地域 SNS 導入研修会, 2007. 【招待講演】

中尾彰宏・助教授

研究テーマ(主たるもの)

オーバーレイネットワーク基盤構築技術の研究

オーバーレイネットワークの研究分野では、現在そして新しい将来のインターネットを支える様々なネットワークサービスやネットワークの仕組みを、インターネット内に埋め込まれた実験基盤(オーバーレイネットワークテストベッド)を用いることで実証実験し、性能評価や問題発見などを行うことを目的とする。本研究テーマでは、このような実証実験を広域で可能にする実験基盤の構築やノードの高度化技術の研究を目的とする。

オーバーレイネットワークを用いた経路制御技術の研究

オーバーレイルーティング(Overlay Routing)と呼ばれる、インターネットの可用性を向上したり様々なデータ通信の特性(QoS)を最適化する技術の研究を進めている。

サステナブル・ネットワーク・サービス基盤技術の研究

インターネット上に実装されたネットワークサービスへの DoS アタックや DDoS アタックなどの脅威に対し、サーバの仮想化とプロセスのマイグレーションを利用してサステナブルなサービスを実現するための基盤技術の研究開発し可用性を向上する研究を進めている。

研究業績(2006 年度)

論文等

中尾彰宏, 中内清秀:「オーバーレイネットワークテストベッドの構築, Constructing A Network Embedded Test-Bed for Overlay Networks」, 電子情報通信学会技術研究報告, IN2006-212, 2007 年.【査読有】

中内清秀, 中尾彰宏:「オーバーレイネットワークテストベッドの構築, Constructing A Network Embedded Test-Bed for Overlay Networks」, 2007 年電子情報通信学会総合大会, B-7-59, 2007 年.【査読有】

口頭発表等

Akihiro Nakao: "PlanetLab Japan", PlanetLab Meeting at HP Laboratory, 2006.

Akihiro Nakao: "Network Embedded Test-beds for New Generation Network Research", 6th Würzburg Workshop on IP:Joint EuroNGI and ITG Workshop on "Visions of Future Generation Networks" (EuroView2006), 2006.【招待講演】

中尾彰宏:「PlanetLab と Private PlanetLab, システムソフトウェア最前線」, FIT2006 第 5 回情報科学技術フォーラム, 2006.

Akihiro Nakao: "Network Embedded Test-beds for New Generation Network Research", Symposium on Overlay Networks and New Generation Network Research, 2006.

Akihiro NAKAO: "Routing Overlay Networks", Symposium & Workshop on Overlay Networks and New Generation Network Research, 2006.

Akihiro Nakao et.al.: "Future Direction in Overlay Network Research", Symposium on Overlay Networks and New Generation Network Research, 2006.

Akihiro Nakao: 「Innovating Environment to Lay Groundwork for Future Network Research」, JGN シンポジウム, 2007.

林香里・助教授

研究テーマ(主たるもの)

システムとしてのマスメディアにおけるジャーナリズムという活動の諸相の検討

マスメディアは、近代、テクノロジーの発展とともに拡大し、近代のシステムとなった。他方で、ジャーナリズムも、権力を監視し、それと対峙する近代的営為である。この2つは 20 世紀には表裏一体となって発展してきた。21 世紀に入り、テクノロジーの一層の発達とともにこの2つの合致が自明ではなくなった。それによるジャーナリズム活動の変遷を見極めていく。

東アジアにおけるジャーナリズム

現在、中国をはじめ、台湾、韓国においても「ジャーナリズム」概念が転換期に来ている。東アジアにおけるジャーナリズムという活動を支える制度やシステムについても検討している。

東アジアの大衆文化交流について

現在、東アジアでは大衆文化交流がますます活発になり、オーディエンスの流動化、国際化が始まっている。そのような現象がもつ政治性を検討中である。

研究業績(2006 年度)

論文等

Kaori Hayashi: "The Public in Japan", Theory Culture Society. Problematizing Global Knowledge: Special Issue. , Vol.23, pp.615-616, 2006 年.

国際会議等

林香里: 「日本における「韓流ブーム」の限界 —マスメディア・システムにおける女性オーディエンスの問題」、史・国家・女性—韓・日比較女性史のための試み、梨花女子大 学校アジア女性学センター主催, 2006. 【査読有】

Kaori Hayashi: ""Hat die Ausstrahlung des koreanischen Fernsehdramas ?Winter Sonate" Spuren in der japanischen Gesellschaft hinterlassen?"" , 13. Deutschsprachiger Japanologentag, 2006. 【査読有】

林香里:「日本の公共圏における「韓流ブーム」の位置—マスメディア・システムにおける女性オーディエンスの問題」, 国際文化産業交流財団理事長・東京大学東洋文化研究所主催「日韓大衆文化交流セミナー」, 2006.

口頭発表等

林香里:「メディア論の現在」, 日本マス・コミュニケーション学会—身体・空間・権力, 2006.

林香里:「ニューメディア時代の個人、社会、国家と文化」, 2006年ソウル大学校—東京大学国際合同シンポジウム, 2006.

林香里:「日韓ジャーナリスト交流～日韓女性誌を中心に」, 国際交流基金 専門家ワークショップ, 2007.【招待講演】

一般向け記事・報道等

林香里:「論壇時評」, 朝日新聞, 2006年.

林香里:「紙面直言 別刷りをもっと面白く 知的な冒険 大胆に」, 神奈川新聞, 2006年.

林香里:「紙面直言 当事者傷つける事件報道 「必要な情報」考えよ」, 神奈川新聞, 2006年.

林香里:「論壇時評」, 朝日新聞, 2006年.

林香里:「紙面直言 言論の自由の狭隘化 鈍い反応に危機感」, 神奈川新聞, 2006年.

林香里:「紙面直言 記事通じて読み手に響く 声伝わる報道を」, 神奈川新聞, 2006年.

林香里:「紙面直言 国内外で相次ぐ死刑報道 体系的に考える場を」, 神奈川新聞, 2007年.

林香里:「紙面直言「失言」はなぜ生まれるか 歪んだ女性像 根絶を」, 神奈川新聞, 2007年.

林香里:「紙面直言 司法の判断へも批判の眼を」, 神奈川新聞, 2007年.

原田至郎・助教授

研究テーマ(主たるもの)

情報社会のガバナンスに関する研究

ICTに依存する情報社会のガバナンスについて、特に技術的側面とそれを支える制度および専門家に着目した研究

クメール文字やその他の文字のコンピュータ処理に関する技術的・制度的研究

クメール文字やその他の文字のコンピュータ上での利用に関する技術的研究開発、およびその標準化をめぐる制度的研究

アジアの人々の価値観・政治意識に関する研究

アジア・バロメーター・プロジェクトの調査結果などに基づいた分析

研究業績(2006 年度)

口頭発表等

HARADA Shiro: "The Enigma of Structure of WTO", 48th Annual ISA Convention (poster), 2007.

一般向け講演等

原田至郎:「国際標準化をめぐる論点」, ICT 国際競争力懇談会 次世代 IP ネットワーク WG, 2007.

開一夫・助教授

研究テーマ(主たるもの)

発達認知神経科学:乳幼児を対象とした脳機能計測

人間の認知活動の根源的部分を解明するため、近赤外分光法(NIRS)や高密度脳波計(HD-EEG)を用いて、安全かつ低拘束で、乳幼児の脳活動を計測している。これらの脳活動計測によって得られたデータを、視線計測や行動実験を重ね合わせることで生後間もない乳児の脳機能がどのように発達していくのかを分析する。

さらに、ヒト乳児で得られた脳活動計測の結果を、チンパンジー等大型霊長類での脳活動計測結果と比較する研究にも着手している。

人工物・メディアの発達の認識過程に関する研究

TVやゲームが若年齢の子どもにどういった影響を与えるのか(与えないのか)を明確にするため、行動実験・質問紙調査・脳活動計測実験を行っている。

アンドロイドロボットの認知科学

外見が人間と酷似したロボットを、人間がどのように認知するのかという疑問に答えるため、認知科学的手法を用いた実証的研究を行っている。なお、本研究は、大阪大学・ATRとの共同研究として実施している。

研究業績(2006 年度)

著書等

開一夫:「日曜ピアジェ 赤ちゃん学のすすめ」, 岩波書店, 2006 年.

Hirai, Hiraki: "Neural Dynamics for Biological Motion Perception. In: Trends in Brain Mapping Research ", Chen, F.J. 編, Nova Science Publisher, 2006 年.

論文等

Hirai, Hiraki: "The relative importance of spatial versus temporal structure in the perception of biological motion: An event-related potential study", *Cognition*, Vol.99, No.1, pp.B15-B29, 2006 年.【査読有】

Matsuda, Hiraki: "Sustained decrease in oxygenated hemoglobin during video games in the dorsal prefrontal cortex: A NIRS study of children", *NeuroImage*, Vol.29, pp.706-711, 2006 年.【査読有】

Hirai, Hiraki: "Visual search for biological motion perception: An event-related potential study", *Neuroscience Letters*, Vol.403, No.3, pp.299-304, 2006 年.【査読有】

Shimada, Hiraki: "Infant", *NeuroImage*, Vol.32, No.2, pp.930-939, 2006 年.【査読有】

Miyazaki, Hiraki: "Delayed intermodal contingency affects young children's recognition their current self", *Child Development*, Vol.77, No.3, pp.736-750, 2006 年.【査読有】

名部・神田・開・石黒・萩田:「対話型ロボットのための友達関係推定モデル」, *ヒューマンインタフェース学会論文誌*, Vol.8, No.1, pp.59-67, 2006 年.【査読有】

Hirai, Hiraki: "Inversion effect of human, robotic, and light-point walking animation: An ERP study", *Japanese Journal of Psychonomic Scienc*, Vol.25, No.1, pp.125-126, 2006 年.【査読有】

Fukushima, Hiraki: "Perceiving an opponent", *Social Cognitive and Affective Neuroscience*, Vol.1, pp.149-157, 2006 年.【査読有】

麦谷・小林・石塚・天野・開:「日本語学習乳児の音声口形マッチングの発達に関する母音/i/を用いた検討」, *音声研究*, Vol.10, No.1, pp.96-108, 2006 年.【査読有】

Hiraki: "A key to understanding development of self and social cognition", *Psychological Research*, Vol.48, No.3, pp.204-212, 2006 年.【査読有】

開・旦・松田:「子どもの発達とメディア」, *映像情報メディア学会誌*, Vol.60, No.11, pp.1745-1748, 2006 年.

開・旦・有田:「乳児の人工物認知と人認知」, *ベビーサイエンス*, Vol.6, pp.32-40, 2006 年.

開・旦・有田:「ロボットは社会的随伴性を獲得できるか」, *ベビーサイエンス*, Vol.6, pp.48-50, 2006 年.

国際会議等

Dan, Hiraki: "Infants", 19th Biennial Meeting of International Society for the Study of Behavioral Development, 2006.【査読有】

Hiraki, Csibra, Tucker, Volein, Fox, Johnson: "Neuroal correlates of adult-infant interaction", 19th Biennial Meeting of International Society for the Study of Behavioral Development, 2006.【査読有】

Dan, Hiraki, Shimada, Hirai: "Can 10-month-olds utilize information from TV in a real-world task?", *Proceedings of the XVth Biennial International Conference on Infant Studies*, 2006.【査読有】

Hirai, Hiraki: "Inversion effect of human, robot, point-light motion", *Cognitive Neuroscience Society Annual meeting 2006 Program*, pp.185, 2006.【査読有】

Hirai, Hiraki: "Disappearance of inversion effect for walking animation with robotic appearance", *Proceedings of the 5th international conference of the Cognitive Science*, 2006.【査読有】

Hirai, Hiraki: "Processing of biological motion perception in visual search: an ERP study", Society for Neuroscience, pp.14/641.18, 2006.【査読有】

Miyazaki, Hiraki: "Video self-recognition in 2-year-old", Biennial International Conference on Infant Studies, 2006.【査読有】

Nabe, Kanda, Hiraki, Ishiguro, Kogure, Hagita: "Analysis of Human Behavior to a Communication Robot in an Open Field", ACM 1st Annual Conference on Human-Robot Interaction (HRI2006), pp.234-241, 2006.【査読有】

Nabe, Cowley, Kanda, Hiraki, Ishiguro, Hagita: "Robots as social mediators: coding for engineers", IEEE International Workshop on Robot and Human Communication (ROMAN2006), 2006.【査読有】

Shimada, Hiraki, Miyazaki, Hondo: "How Does Infant", Proceedings of the 15th international conference on infant studie, 2006.【査読有】

口頭発表等

開一夫:「協創的な認知科学研究の未来をめざして」, 認知科学会, 2006.【招待講演】

開一夫:「コミュニケーションの起源—発達認知神経科学的研究」, 第6回Kフォーラム「ノンバーバル常識の構築へ向けて」, 2006.【招待講演】

開一夫:「赤ちゃんロボット」, 人工知能学会幼児のコモンセンス知識研究会第1回研究会, 2006.【招待講演】

開一夫:「自己・他者認知の発達」, 日本心理学会第70回大会シンポジウム(多種感覚の統合と運動), 2006.

平井・開:「ヒト姿勢知覚処理における倒立効果:事象関連電位計測による検討」, 日本基礎心理学会第25回大会, 2006.

平井・開:「ロボット身体における倒立効果の消失:事象関連電位計測による検討」, 日本認知科学会第23回大会, 2006.

福島・開・松田・松中:「他者の行為に対するフィードバック刺激の知覚:事象関連電位法による検討」, 第11回認知神経科学会学術集会, 2006.

福島・開:「他者のギャンブル課題遂行の観測にともなう事象関連電位:振幅と分布における個人差の検討」, 第36回日本臨床神経生理学会学術大会, 臨床神経生理学 34(5) 444, 2006.

松田・開:「前頭前野背側部の血流低下における視覚的注意の負荷の影響」, 第11回認知神経科学会学術集会, 認知神経科学 8(2) 135, 2006.

松中・福島・開:「ギャンブル課題におけるEEGの時間周波数解析」, 第36回日本臨床神経生理学会学術大会, 臨床神経生理学 34(5) 421., 2006.

一般向け講演等

開一夫:「赤ちゃんはロボットをどう認知するか?」, 東京大学公開講座:ロボット新世紀, 2006.【招待講演】

開一夫:「子どもの心はどうやって育つの? おうちでできる赤ちゃん研究」, 東京都品川区家庭教育講座(0, 1, 2歳), 2006.【招待講演】

一般向け記事・報道等

開一夫:「赤ちゃんはロボットをどう認知するか?」, 心理学ワールド, 特集:ロボットと心理学, 2006年.

開一夫:「赤ちゃん学のすすめ」, 月刊言語, 巻頭エッセイ, 2006年.

開一夫:「現場から(ボクに直接話かけてね)」, 読賣新聞夕刊(3月26日), 2007.

深代千之・助教授

研究テーマ(主たるもの)

スポーツにおける情報伝達

スポーツは、文学・音楽・絵画・彫刻などと並んで、人間が作りあげた文化の一つといえる。競技スポーツ中のダイナミックな身体運動は、芸術と呼ぶにふさわしいが、その「動作」は選手自らの努力とともに指導者からの巧みな情報伝達によって構築される。ダイナミックな身体運動を構築するには、動き自体のメカニズムが明らかになっていること、情報伝達が効率よく行われることが必要である。深代研では、次の2点に関して研究を行っている。

動作メカニズムの解明

遺伝的・環境的に最高のパフォーマンスが出力されている競技スポーツの動作を対象に、高速度ビデオ撮影を用いて2次元および3次元解析を行う。そのデータを基に、逆ダイナミクスを用いて動作構築のメカニズムを究明する。一方、コンピュータ・シミュレーションによって、身体運動の「力」発生源をコントロールし、その結果として運動を具現させる。このように、実験研究とシミュレーション研究を併用することによって、運動の本質を明らかにする。特に、運動を支える筋・腱複合体の粘弾性特性の役割に注目している。

非言語コミュニケーション

ダイナミックな身体運動の構築において、情報発信者である指導者から受信者である選手へ様々な情報が伝達される。この情報伝達は、科学知・言語知などの形式知に加えて、非言語コミュニケーションである身体知(あるいは暗黙知)が多く用いられる。この身体知について、他分野との比較研究(例えば音楽・文学では、情報発信者は指揮者・作家であり、受信者が楽器奏者あるいは歌手・読者になる)を行うとともに、身体知の情報伝達システムを可視化することを試みている。

研究業績(2006年度)

論文等

Fukashiro, S.: "Comparison of the Muscle-tendon Complex Behavior in the Gastrocnemius during 4 Types of Human Vertical Jumping in vivo", Int. J. Sport & Health Sci., Vol.4, pp.298-302, 2006年.【査読有】

Nagano, A., Yoshioka, S., Hay, D.C., Himeno, R., Fukashiro, S.: "Influence of vision and static stretch of the calf muscles on postural sway during quiet standing", Hum Mov Sci., Vol.25, pp.422-434, 2006 年。【査読有】

Takeshita, D., Shibayama, A., Muraoka, T., Muramatsu, T., Nagano, A., Fukunaga, T., Fukashiro, S.: "Resonance in the human medial gastrocnemius muscle during cyclic ankle bending exercise", J Appl Physiol., Vol.101, pp.111-118, 2006 年。【査読有】

Hay, D., de Souza, V.A., Fukashiro, S.: "Human bilateral deficit during a dynamic multi-joint leg press movement.", Hum Mov Sci., Vol.25, No.2, pp.81-91, 2006 年。【査読有】

Hara M, Shibayama A, Takeshita D, Fukashiro S: "The effect of arm swing on lower extremities in vertical jumping.", J. Biomech., Vol.39, No.13, pp.2503-2511, 2006 年。【査読有】

Nagano, A., Yoshioka, S., Hay, D.C., Fukashiro, S.: "Light Finger Touch on the Upper Legs Reduces Postural Sway During Quasi-Static Standing.", Motor Control., Vol.10, pp.348-358, 2006 年。【査読有】

Chino K, Oda T, Kurihara T, Nagayoshi T, Yoshikawa K, Kanehisa H, Fukunaga T, Fukashiro S, Kawakami Y.: "In vivo fascicle behavior of synergistic muscles in concentric and eccentric plantar flexions in humans.", J Electromyogr Kinesiol., Vol.Oct 27, 2006 年。【査読有】

Fukashiro, S., Hay, C. D., Nagano, A.: "Biomechanical behavior of muscle-tendon complex during dynamic human movements.", J. Appl. Biomech., Vol.22, pp.131-147, 2006 年。【査読有】

深代千之:「成長・発達とバイオメカニクス」, 学術の動向, Vol.10, pp.24-27, 2006 年.

深代千之:「【誌上討論「走り方」の論点を比較する】二軸グループのディベート拒否」, トレーニング科学, 18(2):171-174, 2006 年.

深代千之:「【誌上討論「走り方」の論点を比較する】誌上ディベートの企画意図」, トレーニング科学, 18(1):49-51, 2006 年.

深代千之:「【誌上討論「走り方」の論点を比較する】機関誌トレーニング科学を活性化させるために」, トレーニング科学, 18(4):413-415, 2006 年.

原 樹子、深代千之:「垂直跳びにおける下肢反動と腕振りの効果」, 体育の科学, 56 巻 3 号, 2006 年.

本郷和人・助教授

研究テーマ(主たるもの)

王権の成立と進展

日本の政治史といえば、天皇と将軍を中心とする叙述がなされるのが常である。だが両者の関係についてはいまだ検討課題が多く残る。そこで、王権という概念を用いて一度天皇や将軍といった日本独自の権力の具体的なあり方をニュートラルにして、新しい政治史の構築を目指してみたい。

研究業績(2006 年度)

著書等

本郷和人:「人物を読む 日本中世史」, 講談社, 2006 年.

論文等

本郷和人:「天皇嗣立の修辞学」, *RATIO* , No.02, pp.48~73 , 2006 年.【査読有】

前田幸男・助教授

研究テーマ(主たるもの)

内閣支持率の研究

新聞社等が報道している世論調査の集計結果の検討を中心に、マクロ・レベルにおける内閣支持率の変動およびマイクロ・レベルにおける個人の内閣支持について基礎的な研究を行っている。

性役割分業と政治参加・政治的態度の研究

社会科学研究所が大阪商業大学と共同で行っている日本版総合社会調査 JGSS のデータを利用して、性・性役割分業と政治行動との関係を検討している。

データ・アーカイブの研究

社会科学研究所附属日本社会研究情報センターに設置されている SSJDA の運営上の基礎的研究になるが、諸外国のデータ・アーカイブについて歴史および現状について研究している。最近では米国センサス個票の保存および公開用マイクロ標本データの提供方法について調査を行っている。

研究業績(2006 年度)

著書等

前田幸男:「大都市のあゆみ」, 東京市政調査会 編, 東京市政調査会, 2006 年.

前田幸男:「対等な夫婦は幸せか」, 永井暁子・松田茂樹 編, 勁草書房, 2007 年.

論文等

Yukio Maeda: “The 2005 General Election and Public Opinion”, *Social Science Japan*, No.35, pp.19–22, 2006 年.

前田幸男:「選挙制度の非一貫性と投票判断基準」, *社会科学研究*, Vol.58, No.5-6, pp.67–83, 2007 年.

国際会議等

Yukio Maeda: “The Continuity of Candidate-Oriented Voting Decision after the 1994 Electoral Reform : How Inconsistent Electoral Systems Affect Individual Judgment”, *International Political Science Association Meeting*, 2006.

水越伸・助教授

研究テーマ(主たるもの)

ソシオ・メディア論

メディアを情報技術の側からだけでなく、人間や社会の営みの側からもとらえるメディア論の構築。そのために「批判的メディア実践」という方法論を生み出しつつある。

メディア史

19世紀後半から20世紀半ばにかけての電氣的メディア、電子的メディアをめぐる技術と社会のダイナミズムについての歴史的研究。

メディア・リテラシー

メディア・リテラシーについての理論と実践に関する総合的な研究。

研究業績(2006年度)

著書等

水越伸: “新版デジタル・メディア社会(中国語での翻訳出版)”, 武漢大学出版社, 2006年.

水越伸: 「メディアの〈生態系〉を〈環〉をつなぐ(『くことば』の仕事』所収)」、仲俣暁生 編, 原書房, 2006年.

水越伸: 「万博を生きるということ(『私の愛した地球博』所収)」、加藤晴明・岡田朋之・小川明子 編, リベルタ出版, 2006年.

水越伸: 「隠喩と素養: メディアと人間の関わり方をめぐる覚書(『身体をめぐるレッスン 1』所収)」、鷺田清一 編, 岩波書店, 2006年.

水越伸: 「メディアと社会(『現代用語の基礎知識 2007』所収)」、自由国民社 編, 自由国民社, 2006年.

面谷信(監修)、水越伸、村田昭夫、佐藤和文、松澤雄一、仲俣暁生、宇喜多義敬、北林茂樹、河野徹、平井久志、湯川鶴章: 「新聞通信選書: 新聞の未来を展望する——電子ペーパーは救世主となれるか」、財団法人新聞通信調査会 編, 財団法人新聞通信調査会, 2006年.

水越伸: “メディア・リテラシーの工具箱(韓国語での翻訳出版)”, Communication Books, 2007年.

水越伸: 「コミユナルなケータイ——モバイル・メディア社会を編みかえる」、水越伸(編著) 編, 岩波書店, 2007年.

国際会議等

Takeshi Sunaga, Koichi Hori, Takuichi Nishimura, Shin Mizukoshi: "The "media exprimo" Project: New Horizons in Citizen Media Expression and Information Design", New Media: User Generated Challenges International Symposium, 2007.

口頭発表等

水越伸(コメント):「ユビキタス情報社会における都市デザインとコミュニティ」, 東京大学大学院情報学環・21世紀 COE 国際シンポジウム, 2006.

水越伸(司会):「デジタル時代のアナログ音文化:我々が喪失したかもしれぬ経験の諸相」, 日本マス・コミュニケーション学会研究会, 2006.

Shin Mizukoshi: "Communal Keitai : Reweaving the Mobile Media Society", Film & Media Studies Department of Media, Cognition and Communication, University of Copenhagen, 2006. 【招待講演】

水越伸(司会):「臨床の哲学・実践のデザイン:コミュニケーションデザインの冒険2」, 日本マス・コミュニケーション学会マルチメディア部会研究会, 2006.

Shin Mizukoshi: "A plan and formation of "media exprimo": explore a new dimension of information design for people", New Media: User Generated Challenges International Symposium, 2007. 【招待講演】

一般向け講演等

水越伸:「青少年のメディアリテラシー育成の現状と課題」, 独立行政法人国立青少年教育振興機構日独青少年指導者セミナー, 2006. 【招待講演】

水越伸:「モバイルメディアの文化とリテラシー」, ヤフー株式会社社員向けセミナー, 2006. 【招待講演】

水越伸:「メディア社会のあり方」, 人事院公務員研修・初任行政研修, 2006. 【招待講演】

水越伸、飯田豊:「メディア史と日常生活」, 市民科学研究室, 2006. 【招待講演】

水越伸:「楽しさのデザイン」, 市民とメディア研究会あくせす例会, 2006. 【招待講演】

インゴ・ギュンター、鳥海希世子、水越伸(司会):「創造の着火点:見知らぬ社会を発見するために」, NTT・ICC オープニング・シンポジウム第二回・第一部:ネットワーク時代の発想と実践——見知らぬ社会を発見するために, 2006. 【招待講演】

桂英史、水越伸:「メディアセブンのつかい方」, メディアセブン・オープニングトーク, 2006. 【招待講演】

金子隆、福井文雄、鳥海希世子、水越伸(司会):「メディアのつくり方(1)~コミュニティFM・インターネット放送局・電子会議室」, メディアセブン・トークイベント, 2006. 【招待講演】

中谷日出(司会)、水越伸、宮台眞司、碓井広義、箭内道彦:「映像ユビキタス時代のパラダイムシフト ~どう変わる? 産業、文化、社会~」, ヨコハマ EIZONE 映像文化都市フェスティバル, 2006. 【招待講演】

水越伸、林田真心子、伊藤昌亮、鳥海希世子:「ケータイってなんだろう:大切に、あやうくて、楽しいメディアをふり返るワークショップ」, 地域 ICT 未来フェスタ 2006, 2006.

水越伸:「民放連プロジェクトの意味と今後の展望——漢方的な、循環的な」, 社団法人 日本民間放送連盟メディアリテラシー実践プロジェクト報告会, 2007. 【招待講演】

一般向け記事・報道等

水越伸、茂木健一郎:「ケータイは“ボクラ”をネットワークできるか」, 広告批評, Vol.303, 2006年4月号, pp.78-86, 2006年.

水越伸:「ケータイによるコモンズ空間をもとめて」, グラフィケーション, No.144, pp.20-22, 2006年.

水越伸:「メディアリテラシーと新聞:メルプロジェクトからのメッセージ」, 新聞研究, Vol.659, 2006年6月号, pp.61-66, 2006年.

水越伸:「ナショナルなNHK、ビオトープなMBS」, AURA, No.178, pp.26-29, 2006年.

水越伸:「メディア社会を生きる」, 光村図書中学3年国語教科書, 2006年.

水越伸:「NHK「である」調」, 毎日新聞夕刊, 2006.

水越伸:「「情報」と付き合う14 ケータイ、公共メディアに」, 読売新聞, 2006.

Shin Mizukoshi and MoDe project:「Keitai – japanske erfaringer med mobile medier」, InDiMedia, Aalborg University of Denmark, 2006.

水越伸:「やらせ」か「演出」か:テレビの「映像」どこまで許される」, 朝日新聞, 2007.

水越伸:「やらせ?それとも演出?:「視聴者と対話必要」との指摘も」, 陸奥新報、長野日報、十勝毎日新聞、中国新聞、山形新聞など, 2007.

水越伸:「メディアリテラシー 中・高生が学習」, 読売新聞夕刊, 2007.

安富歩・助教授

研究テーマ(主たるもの)

黄土高原生態文化回復活動

黄土高原村落でのフィールドワークに基づき、最先端の科学技術を駆使して生態文化の回復を目指す。

近代「満洲」の成立

現在の中国東北地区に二十世紀初頭にどのような社会が出現したのかを、生態系・交通・政治・経済など多面的なアプローチにより明らかにする。

複雑系の歴史理論

歴史を理解するための数理的枠組みの構築を目指す。

研究業績(2006年度)

著書等

安富歩:「レヴィ=ストロース『神話論理』の森へ」, 渡辺公三・木村秀雄 編, みすず書房, 2006 年.

口頭発表等

安富歩:「魂の脱植民地化」, ソウル大学言論情報学科・言論情報研究所主催、東京大学情報学環・学際情報学府共催、日韓シンポジウム, 2006.

一般向け記事・報道等

岩井克人+安富歩+鈴木健+東浩紀:「貨幣・法人・バザール」, インターコミュニケーション, 座談会, 2006 年.

山内祐平・助教授

研究テーマ(主たるもの)

情報通信技術を利用した学習環境のデザイン

教育の情報化が急速な勢いで進んでいるが、学習は空間／活動／共同体／人工物の微妙なバランスの中で発生する複雑な事象である。インターネットなどの情報通信技術を学びの場に導入する際に、様々な要因をどうデザインすれば適切な学習環境を構成できるかを、実践研究の中で明らかにする。

研究業績(2006 年度)

論文等

山口 悦司 中原 淳 西森 年寿 望月 俊男 中野 真依 古田 豊 関根 聖二 大房 潤一 滝川 洋二 山内 祐平:「おやこ de サイエンス: 家庭における科学の学習環境の充実を支援する教育プログラム」, 科学教育研究, Vol.30, No.3, pp.145-158, 2006 年.【査読有】

酒井 俊典 八重樫 文 久松 慎一 山内 祐平:「教師のメディア・リテラシー学習を支援するオンライン学習プログラムの開発」, 日本教育工学会論文誌, Vol.30, No.2, pp.113-123, 2006 年.【査読有】

松河秀哉 北村智 永盛祐介 久松慎一 山内祐平 中野真衣 金森保智 宮下直子:「データマイニングを活用した学習方略フィードバックシステムの開発」, 日本教育工学会第 22 回大会講演論文集, 2006 年.

山内祐平 久松慎一 望月俊男 西森年寿 中原淳:「高等教育における NHK アーカイブス活用に関する研究 - 映像検索システム“ MEET Video Explorer ”の開発 -」, 日本教育工学会第 22 回大会講演論文集, 2006 年.

山口いつ子・助教授

研究テーマ(主たるもの)

表現の自由・メディアの自由に関する判例分析

ユビキタス時代におけるサイバー法の理論的体系化と具体的課題

知的財産権と自由な情報流通との調整のあり方

研究業績(2006 年度)

論文等

Itsuko Yamaguchi (Translated by David C. Buist): "Cyberlaw", Theory, Culture & Society, Vol.23, No.2-3, 2006 年.

Itsuko Yamaguchi: "Mass Media and Privacy in Japan: Current Issues, Recent Trends, and Future Challenges for the "Ubiquitous Network Society"", Journal of Korea Information Law, Vol.10, No.1, 2006 年.

山口いつ子:「取材フィルムの提出命令と取材の自由—博多駅事件(最高裁昭和 44 年 11 月 26 日大法廷決定)」, 高橋和之・長谷部恭男・石川健治編『憲法判例百選 I [第五版]』別冊ジュリスト, No.186, 2007 年.

口頭発表等

Itsuko Yamaguchi: "Mass Media and Privacy in Japan: Current Issues, Recent Trends, and Future Challenges for the "Ubiquitous Network Society"", International Symposium for Korean Association of Info-Media Law, 2006. 【招待講演】

山口いつ子:「アメリカにおける記者の「特権」と取材源秘匿—新聞記者の拘禁事例を手がかりにして」, 日本新聞協会「新聞法制研究会」, 2007.

山本隆一・助教授

研究テーマ(主たるもの)

医療情報の安全性確保とプライバシー保護に関する研究

医療情報の可用性、完全性、機密性の適切な確保と、情報主権者の権利としてのプライバシーと教育・研修・研究・公益目的の利用を調和させるための技術的課題および制度や運用を中心とする人的要素の課題についての研究。

広域分散診療情報データベースへの知識発見手法の応用

電子カルテが普及した際に構成されると予想される広域分散診療情報データベースをモデル化し、随時蓄積される診療情報に対して動的な知識発見手法の適応についての研究

医療における公開鍵基盤の応用に関する研究

公開鍵基盤を医療ドメインに応用するにあつての、資格属性の取り扱いなどの問題の解決と国際的な調和に関する研究

研究業績(2006 年度)

論文等

山本 隆一:「健診情報・診療情報から生涯利活用可能な健康情報へーわが国の EHRー」, 月刊基金, Vol.47, No.11, pp.3-5, 2006 年.

山本 隆一:「遠隔画像診断のセキュリティと個人情報保護」, Rad Fan, Vol.5, No.1, pp.18-19, 2006 年.

山本 隆一:「電子カルテとプライバシー保護」, 日本医師会雑誌, Vol.135, No.9, pp.1954-1954, 2006 年.【査読有】

口頭発表等

山本 隆一:「医療情報システムのセキュリティ」, 第 56 回日本病院学会, 2006.【招待講演】

山本 隆一:「医療の本質を踏まえた上でのセキュリティ対策」, 日本社会情報学会 第 104 回定例研究会, 2006.【招待講演】

山本 隆一:「遠隔画像診断におけるセキュリティ」, 第 42 回日本医学放射線学会秋季臨床大会, 2006.【招待講演】

山本 隆一:「診療情報のセキュリティと相互利用性～デジタル内視鏡画像の真正性確保を中心に～」, 第 72 回日本消化器内視鏡学会総会, 2006.【招待講演】

一般向け記事・報道等

山本 隆一:「患者さんと家族のための個人情報保護の基礎知識」, NHK きょうの健康, No.1221, pp.117-123, 2006 年.

荒木淳子・助手

研究テーマ(主たるもの)

知識労働者のキャリア開発

企業で働く個人、とりわけ、研究開発者や金融専門職、コンサルタントといった知識労働者のキャリア開発を促す学習環境に関する研究。こうした知識労働者のキャリア開発では、領域における専門性の確立が重要視される。これまでのキャリア開発研究では、キャリア開発がなされる学習環境については十分研究されてこなかった。そこで、ネットワークやコミュニティの観点から、知識労働者のキャリア開発が促される環境について研究を行う。

大学における新しいキャリア教育のデザインに関する研究

文部科学省を中心として、学校(初等中等教育、高等教育)におけるキャリア教育が推進されている。これらのキャリア教育は進路指導や就職支援といった性格が強いものである。しかし、社会人大学院の発達や産学連携の流れを踏まえれば、大学におけるキャリア教育には、こうした就職支援的なものに留まらず、社会人が働きながらキャリアを磨くことを支援するものであることが望まれる。そこで、大学における新しいキャリア教育のデザインについて研究を行う。

研究業績(2006 年度)

著書等

中原淳編著、荒木淳子・北村士朗・橋本諭・長岡健著:「企業内人材育成入門」, 中原淳 編, ダイヤモンド社, 2006 年.

論文等

中原淳・荒木淳子:「ワークプレイスラーニング研究序説:企業人材育成を対象とした教育工学研究のための理論レビュー」, 教育システム情報学会, Vol.23, No.2, pp.88-103, 2006 年.【査読有】

有賀清一・助手

研究テーマ(主たるもの)

風力発電のための景観評価

地球温暖化の問題が注目されるなか、風力発電は自然エネルギーの中でも有望なエネルギー源として期待されている。しかし大型化する風力発電タービンは周囲の景観を壊すものと受け取られる場合があり、建設のための合意形成の段階で問題化することが多くなっている。本研究では、この問題をシミュレーションによって解決するための手法を開発している。

流体力学を使ったメディアアート

透明であるため目で見ることができない、風や水の流れを、CG を使いリアルタイムに描画し、視覚によって流れを体験させる作品の制作および計算手法の開発。

東京湾における風況の調査

風に関するデータは風力発電開発の基礎になるものである。しかしながら、最近までの風況観測はおもに気象の把握を目的としたものであり、風車にとって有用なデータとなるものは少ない。本研究では、東京湾において風力発電に特化した観測を行い、気象予測シミュレーションの精度向上を目指している。

研究業績(2006 年度)

作品等

白谷栄梨子,有賀清一:「風、見。」, 東京大学大学院情報学環学際情報学府・コンテンツ創造科学産学連携教育プログラム”制作展 iii exhibition 7”, 2006.

口頭発表等

伊藤陽一・助手

研究テーマ(主たるもの)

遺伝子情報を利用した抗がん剤開発における実験計画および統計解析手法の開発

近年開発されてきた分子標的薬と呼ばれる抗がん剤は、がん細胞の増殖メカニズムに特異的に作用することで効果を発揮するよう設計されたものである。しかし、人間を対象とした臨床試験においては、基礎研究から予想された結果が必ずしも出るとは限らないため、薬剤の投与によって、遺伝子発現変化が起きているかをモニタする必要がある。そのための方法として、数万種類の遺伝子を同時に測定するマイクロアレイという技術が注目されている。マイクロアレイデータの解析では、数万種類の遺伝子を同時に解析するため、統計的多重性の問題など様々な問題が発生する。このような問題に対する有効な解析手法開発を行うことを目的とする。

HRQOL データに対する項目反応理論の応用

癌等の難治性疾患は、劇的な効果のある治療方法が存在しない。そのような状況下では、患者さんの生活の質(Quality of Life; QOL)を測定し、QOL が平均的に高い治療方法を選択することが望まれている。QOL の測定方法としては、自記式の質問票による測定が一般的であり、このようなデータは患者さんの健康関連のQOLを調査することから Health Related Quality of Life (HRQOL)データと呼ばれる。近年、この HRQOL データに対して、教育学の分野で発展した項目反応理論を応用することが試みられている。項目反応理論は学力などの対象者の潜在的な特性を、潜在変数としてモデル化し、テストに対する反応からこの特性を推定しようとする理論である。QOL 研究の分野では、対象者の潜在的な特性を HRQOL とし、QOL 質問票の質問項目に対する評価を行っているが、現時点では、教育学における項目反応理論を直接応用しただけであり、臨床的に有用な情報を得ることができていない。そこで本研究では、項目反応理論の枠組を発展させ、医学に特化したモデルを開発することを目的とする。

研究業績(2006 年度)

論文等

Takeuchi K, Tanaka-Taya K, Kazuyama Y, Ito YM, Hashimoto S, Fukayama M, Mori S.: "Prevalence of Epstein-Barr virus in Japan: Trends and future prediction.", *Pathology International*, Vol.56, pp.112-6, 2006 年.【査読有】

Nakamura S, Nouse K, Sakaguchi K, Ito YM, Ohashi Y, Kobayashi Y, Toshikuni N, Tanaka H, Miyake Y, Matsumoto E, Shiratori Y.: "Sensitivity and specificity of des-gamma-carboxy prothrombin for diagnosis of patients with hepatocellular carcinomas varies according to tumor size.", *American Journal of Gastroenterology*, Vol.101, No.9, pp.2038-43, 2006 年.【査読有】

大東誠・助手

研究テーマ(主たるもの)

研究業績(2006 年度)

論文等

Makoto Ohigashi, Yuzuru Tanaka: "3D Information Access Space Based on Multifacet Database Visualization", Systems and Computers in Japan, John Wiley & Sons Inc., Vol.37, No.8, pp.13-23, 2006 年. 【査読有】

国際会議等

Masahiko Itoh, Makoto Ohigashi, Yuzuru Tanaka: "WorldMirror and WorldBottle: Components for Interaction between Multiple Spaces in a 3D Virtual Environment", International Conference on Information Visualization(IV 2006), pp.53-61, 2006. 【査読有】

Makoto Ohigashi, Zhen-Sheng Guo, Yuzuru Tanaka: "Integration of a 2D legacy GIS, legacy simulations, and legacy databases into a 3D geographic simulation", ACM 24th annual conference on Design of communication(SIGDOC 06), pp.149-156, 2006. 【査読有】

口頭発表等

Zhen-Sheng Guo, Makoto Ohigashi, Yuzuru Tanaka: "Integrating Legacy Systems into 3D Geographic Simulation based on View Integration and Query Integration", 4th International Symposium on Ubiquitous Knowledge Network Environment, 2006.

Makoto Ohigashi, Donna M. Delparte, Yuzuru Tanaka, Nigel Waters: "Ad hoc Integration of Legacy Systems into a 3D Avalanche Simulation", International Workshop on Knowledge Media Science, 2006.

影澤政隆・助手

研究テーマ(主たるもの)

高度交通システムに関する研究

路側設備や車載設備を利用した道路交通に関する認識システム、および表示システム。具体的には、路側カメラによる車両認識システムや、車載レンジセンサによる街や駐車車両の認識システム、車載カメラを利用した仮想空間表示システム。

研究業績(2006 年度)

論文等

シャミラモホツタラ, 影沢政隆, 池内克史: 「確率的手法を用いた車両の検出とクラス確認」, 電子情報通信学会論文誌D, Vol.J89-D 4, pp.816-825, 2006 年. 【査読有】

国際会議等

Shintaro Ono, Koichi Ogawara, Masataka Kagesawa, Hiroshi Kawasaki, Kasaaki Onuki, Juichi Abeki, Ken Honda, Katsushi Ikeuchi: "A Photo-Realistic Driving Simulation with Free Viewpoint by Real-time Image Processing", Driving Simulation Conference-Asia/Pacific 2006, 2006. 【査読有】

Koichi Ogawara, Shintaro Ono, Masataka Kagesawa, Hiroshi Kawasaki, Katsushi Ikeuchi: "Real-image based driving view Synthesizing system for innovative traffic experiment Space", 2006 IEEE/RSJ International Conference on Intelligent Robots and Systems, 2006. 【査読有】

口頭発表等

岡本泰英, 高松淳, 影澤政隆, 岡田健, 池内克史: 「3次元モデルを利用した文化財に関する情報の編集・表示システム」, 日本文化財科学会 第23回大会, 2006.

小野晋太郎, 三上武史, 小川原光一, 影澤政隆, 川崎洋, 池内克史: 「動画像の時空間解析に基づく都市空間のモデル化とその応用」, 日本バーチャルリアリティ学会 第29回サイバースペースと仮想都市研究会, 2006.

高松淳, 小野晋太郎, 影澤政隆, 池内克史: 「ウェブレットテクスチャ: ドベシウェブレットと反射モデルと円偏光板 BRDF 圧縮」, 3次元映像シンポジウム, 2006.

Lihong Tong, Shintaro Ono, Masataka Kagesawa, Katsushi Ikeuchi: "3D Modeling and Refinement of Residential Maps Using Range Scanners", 第5回 ITS シンポジウム, 2006.

樺島榮一郎・助手

研究テーマ(主たるもの)

コンテンツ産業の経済学的分析

新聞、テレビなど既存の大メディアから、音楽や映画、ゲームなどの既存メディア、ネット上の掲示板やWikiまで、あらゆるコンテンツ産業に共通する経済特性に関する研究を行う。これを起点に、デジタルコンバージョン化やそのほか技術変化に伴う産業構造の変化の予測、それぞれのコンテンツ産業の特色や、コンテンツ制作時にかかる経済的圧力の違いなどについての知見を得る。

著作権および著作権関連制度の経済学的分析

コンテンツ産業をビジネスとして成り立たせているのは、コンテンツに権利を設定する著作権および著作権に関連した制度に他ならない。特に著作物の創造や、流通・マネジメントの技術革新に対応した変化を促進する観点から、適切な著作権および著作権関連制度の在り方についての研究を行う

創造の多様性と進化の速度を向上させる条件・環境についての研究

Wikipedia や掲示板の書き込みを収録した書籍、音楽のインディーズ、漫画・アニメ・ゲーム・フィギュアなどにおける大規模な見本市的空間に関連した創作などに見られるように、著作者と消費者の相互作用による著作物の形成の重要性が高まっている。こういったオープンな相互作用による創造環境に着目し、多様性と技術革新の速度を向上させる条件・環境・制度に関する研究を行う。

研究業績(2006年度)

口頭発表等

樺島 榮一郎:「放送に関連する著作権制度に関する考察 ―ポータビリティを高めるために―」, 情報文化学会第 14 回全国大会, 2006.

小山友介, 樺島榮一郎, 板倉陽一郎, 田中秀幸, 藤原正弘, 出口弘:「「日本型コンテンツ産業システム」の特徴とその可能性」, 社会・経済システム学会第 25 回大会, 2006.

金相美・助手

研究テーマ(主たるもの)

social and psychological impacts of communication

Sangmi Kim, specialize in social and psychological impacts of communication and information technologies (e.g. mobile devices, Internet, TV, etc), Information Behavior (IB), network communication, ubiquitous media, social and cultural impacts of digital technology, culture, and policy in Japan and S. Korea. I received a top paper awards from The Japan Society for Socio-information Studies (JSIS) in 2004. My current research is funded by the Hideo Yoshida Foundation and I am also currently working with Yoshiaki Hashimoto

New Media, Information technology and Communication (CMC)

Communication Effects and Processes

研究業績(2006 年度)

杉原周治・助手

研究テーマ(主たるもの)

基本権競合論

研究の目的は、これまで主として刑法学や民法学で論じられてきた競合の考え方を憲法学の領域に応用して、新たに「基本権競合論」という理論を織り成すことを主眼とする。基本権の領域では、しばしば、ある一個の事実関係に複数の基本権の構成要件が同時にかかわる状況が生じうるが、わが国の憲法学は、こうした問題に対してこれまでなんらの解決策も講じてこなかった。基本権競合論とは、まさにこのように、複数の基本権が重なり合う複雑な状況を解決するための理論である。本研究は、右理論の内実を、基本権における「真正な」または「不真正な」競合、「法条競合」、「規範的・規範論理的特別関係」、「補充関係」、「吸収関係」、「受け皿的機能」、「保護補完機能」、「補充機能」そして「観念的競合」といったタームを用いて、これを明らかにしていく。

研究業績(2006 年度)

論文等

杉原周治:「プレスと意見表明の自由の競合(1)」, 広島法学, Vol.30, No.1, pp.127-156, 2006 年。【査読有】

杉原周治:「プレスと意見表明の自由の競合(2・完)」, 広島法学, Vol.30, No.2, pp.71-100, 2006 年。【査読有】

口頭発表等

杉原周治:「基本権競合論」, 第 47 回中四国法政学会, 2006。

関谷直也・助手

研究テーマ(主たるもの)

「災害情報と社会心理」に関する研究

災害時のよりよい避難行動・防災行動、よりよい復興対策のために、さまざまな主体がメディア・報道を通じてどのような情報を伝え、どのような活動をとるべきかを明らかにするために、各種の共同研究プロジェクトに参画し、災害時の住民の心理・情報行動、情報伝達における問題点を調査・検討している。

水害、火山、地震時における住民の心理・情報行動・避難行動、行政・報道機関の実態、富士山噴火など想定災害の経済的・社会心理的影響などに関して、多くのインタビュー調査・量的調査・悉皆調査によって共同で研究している。個人としては、特に、富士山噴火という想定災害について社会経済的影響、気象災害における避難行動の心理を明らかにすることを試みている。

現実の「課題」の探索とは別に、最近は今後の「開発」として、とくに安否情報システムに関して、RFID チップ、モバイル携帯端末、画像通信、ワンセグ放送、Felica など IT ツールの災害時の利用可能性について実証的に検討を試みている。

「日本人の安全観」「風評被害」「センセーショナリズム」に関する研究

日本人が安全・安心をどのように考えているのかについて、原子力事故、狂牛病・鳥インフルエンザ・SARS などのバイオハザード、食品問題、環境問題、自然災害、また経済問題などを比較し、社会心理学的な共通点・相違点を流言の分析や質的・量的調査から研究している。また「原子力の安全神話」の形成過程の歴史的研究なども行ってきた。「感情的な安全認識」、「報道・社会現象に影響を受ける心理」「安全をめぐる心理の要素」「安全をめぐる根本的な観念」の存在と、それらと「具体的な対象に対する不安・安心の感情」との関係性について、徐々に実証的に明らかにしつつある。これは報道と感情の関係というマスコミュニケーション研究が見落としてきた課題でもある。

この延長線上には、情報過多社会の社会問題である「風評被害」がある。「風評被害」の社会心理学的メカニズムおよび解決策についても研究を重ね、報告してきた。

これは、人々の安全に関わる様々な報道の「センセーショナリズム」「報道における『科学』の扱い」、「報道や情報公開に伴う経済的影響」「公害報道、環境報道の抑止力としての風評被害」という現実的問題に社会心理学の観点から接近するものでもある。これら現実的課題に貢献できるよう取り組んでいる。

「環境問題におけるジャーナリズム／メディアと社会心理」についての研究

環境報道と環境広告に焦点をあて、社会心理史的・社会心理学的視点から研究を行っている。報道については、戦後の公害・原子力事故に焦点をあて、ジャーナリズムの変質過程とそれを支えた予防原則などの思想や世論潮流・社会心理との関係性について社会心理史的な接近を試みている。広告については、送り手と受け手についての量的調査、CF・新聞広告の内容分析、ヒアリング調査を行い、研究を深化、精緻化している。社会心理によって、企業の実際の環境対策や広報活動、広告の内容や表現手法が規定されていることを見出している。

これらの個々の研究を通じて「環境問題と社会心理」の関係性、そこにおけるメディア・情報の役割、メディア・情報様式の形成過程を総体的に浮かび上がらせようと試みている。そこから環境問題という具体的な事例を通して、社会問題をめぐる報道、ジャーナリズム、広告のあり方を考えている。

研究業績(2006 年度)

著書等

関谷直也:「自然と広告」『文化としてのテレビコマーシャル』, 山田奨治 編, 世界思想社, 2007 年.

論文等

辻禎之・関谷直也:「風評被害の経済的損失に関する研究」, 『安全工学—災害予防と環境保全の技術』安全工学会, Vol.45, No.6(通巻 235 号), pp.439-444, 2006 年. 【査読有】

中村功・中森広道・関谷直也・森康俊・田村和人・森岡千穂・地引泰人:「緊急地震速報の伝え方—メディア利用実験および映像視聴実験の結果から—」, 『災害情報』日本災害情報学会, No.5, pp.40-45, 2007 年.

三上俊治・田中淳・中村功・中森広道・関谷直也・田村和人・森康俊・森岡千穂・地引泰人:「住民への防災情報伝達システム—緊急地震速報の伝達と被害情報収集システム」, 『災害情報調査研究レポート』東京大学・東洋大学災害情報研究会, No.11, pp.1-150, 2007 年.

中村功・関谷直也・福田充・中森広道・仲田誠・海後宗男・森康俊・地引泰人・森岡千穂:「原子力安全基盤調査研究 原子力関係者からみた「原子力のリスク・コミュニケーション」」, 『災害情報調査研究レポート』東京大学・東洋大学災害情報研究会, No.10, pp.1-154, 2007 年.

口頭発表等

関谷直也・深澤亨・中村功:「災害時における安否確認等情報通信の利用実態」, 情報通信学会第 23 回学会大会, 2006.

中村功・福田充・中森広道・関谷直也:「2005 年 7 月千葉県北西部地震と災害通信の問題」, 日本災害情報学会第8回学会大会, 2006.

深澤亨・村木茂弘・木庭治夫・関谷直也・中村功・福田充・中森広道・森康俊・森岡千穂・地引泰人・廣井悠:「災害時の安否確認に関する情報通信の利用実態について」, 日本災害情報学会第8回学会大会, 2006.

関谷直也:「『環境広告と社会心理』に関する総合的研究—環境広告の変遷、表現手法、社会心理との関係性についての実証的研究—」, 2006 年度吉田秀雄記念賞記念講演会 (財)吉田秀雄記念事業財団, 2006. 【招待講演】

三上俊治・田中淳・中村功・中森広道・関谷直也・田村和人・森康俊・森岡千穂・地引泰人:「住民等への防災情報伝達システム」, 大都市大震災軽減化特別プロジェクト IV.2 地震防災対策への反映「災害情報」 研究成果報告, 2006.

一般向け講演等

関谷直也:「災害看護における情報活動 その価値と活動の実際」, 2006 年度全国看護セミナー 災害時における看護の役割と活動, 2006.【招待講演】

関谷直也:「首都激震—通信メディアが家族を救う—」, 平成 18 年度第 5 回 KDDI 総研セミナー, 2006.【招待講演】

一般向け記事・報道等

関谷直也:「好かれる企業の環境広告—環境広告とサステナブル」, 『環境会議』, 宣伝会議, 春号, 2006 年.

関谷直也:「好かれる企業の環境広告—『環境に悪そうな企業』でない企業の環境コミュニケーションをさぐる」, 『環境会議』, 宣伝会議, 秋号, 2006 年.

関谷直也:「新環境学 環境広告と社会心理」, 『日経エコロジー』, 日経 BP 社, 12 月号, 2006 年.

関谷直也:「好かれる企業のCSR広告—『安全・安心』を伝えるさまざまな取り組み」, 『人間会議』, 宣伝会議, 冬号, 2006 年.

辻本篤・助手

研究テーマ(主たるもの)

組織論

リスクマネジメント論

研究業績(2006 年度)

原田隆宏・助手

研究テーマ(主たるもの)

Computational Mechanics

Mainly fluid simulation.

Computer Graphics

Physically based simulation.

研究業績(2006 年度)

論文等

原田隆宏, 田中正幸, 越塚誠一, 河口洋一郎: 「GPU を用いたリアルタイム剛体シミュレーション」, 情報処理学会研究報告, 2006 年. 【査読有】

玄武岩・助手

研究テーマ(主たるもの)

研究業績(2006 年度)

著書等

玄武岩: 「過去清算のナショナリズム－民主化後の韓国のイデオロギー対立」, 同時代史学会 編, 日本経済評論社, 2006 年.

玄武岩: 「韓国は「反日」一色なのか」, 田中宏/板垣竜太 編, 岩波書店, 2007 年.

論文等

玄武岩: 「インターネットとメディアの公共性－黄禹錫現象から見る世論と政治」, 現代思想, Vol.34, No.4, pp.186-197, 2006 年.

玄武岩: 「匿名性にゆれる韓国のネット文化」, 生活経済政策, 2006 年.

口頭発表等

玄武岩: 「本名再考－韓流をめぐる在日の名前とアイデンティティ」, カルチュラル・タイフーン, 2006.

玄武岩: 「韓国のインターネット言論と市民社会－日韓ネット文化の比較から」, 国際大学 GLOCOM・IECP セミナー, 2006.

玄武岩: 「ネットワークとしての東アジアとコリアン・ディアスポラ」, 瑞南フォーラム・ネットワークとしての東アジア探索, 2006.

玄武岩: 「大阪・大村収容所・済州島－大阪と済州島をむすぶ「密航」のネットワーク」, 瑞南フォーラム・帝国の交差点から東アジアを考える, 2007.

一般向け講演等

玄武岩:「韓国のインターネット新聞－産業的視点から」, 日本新聞協会・販売流通講座, 2006.【招待講演】

玄武岩:「韓国のインターネット言論と市民社会」, 東久留米市民自治研究センター, 2006.

玄武岩:「現代韓国文化－デジタル・デモクラシー」, 世田谷市民サマーフォーラム「韓流」を読み解く, 2006.

一般向け記事・報道等

玄武岩:「市民メディア考」, 朝日新聞, 2006.

玄武岩:「ミサイル発射と韓国の太陽政策の行方」, NHK, 2006.

吉海智晃・助手

研究テーマ(主たるもの)

柔軟ヒューマノイドにおける対人・対環境適応インタラクションのための自律行動統合システムの開発

人や環境に対して、適応的なインタラクションを実現するためには、身体自身の柔軟性、そして、その行動生成システムの柔軟性のどちらも欠くことはできない。そこで、全身に3軸のカセンサを分布させ、それを柔軟ウレタン素材で覆うタイプのヒューマノイドを開発し、それをを用いて、人や環境とインタラクションを行う際に、そこで目的とする行動タスクと、自身の身体維持のために常に作用している自律反応機能を自動的に統合していくことのできる行動システムの開発を行っている。

研究業績(2006 年度)

論文等

水内 郁夫, 吉海 智晃, 袖山 慶直, 中西 雄飛, 並木 勇太, 西野 環, 浦田 順一, 宮寺 明彦, 稲葉 雅幸:「筋骨格ヒューマノイド研究の展望」, ロボティクス・メカトロニクス講演会, 2006 年.

水内 郁夫, 吉海 智晃, 西野 環, 袖山 慶直, 中西 雄飛, 並木 勇太, 稲葉 雅幸:「多自由度多センサロボットの自律反応系構成法に関する研究」, ロボティクス・メカトロニクス講演会, 2006 年.

並木 勇太, 袖山 慶直, 中西 雄飛, 吉海 智晃, 水内 郁夫, 稲葉 哲也, 稲葉 雅幸:「筋骨格ヒューマノイドの背骨を用いた投球動作の実現」, ロボティクス・メカトロニクス講演会, 2006 年.

西野 環, 袖山 慶直, 吉海 智晃, 水内 郁夫, 稲葉 哲也, 稲葉 雅幸:「筋骨格ヒューマノイドにおけるビジュアルフィードバックに基づいたリーチング動作の実現」, ロボティクス・メカトロニクス講演会, 2006 年.

中西 雄飛, 吉海 智晃, 水内 郁夫, 西野 環, 稲葉 哲也, 稲葉 雅幸:「筋配置可変な筋骨格ヒューマノイドのための関節発生トルク要件に基づく筋張力和最小の筋配置決定法」, ロボティクス・メカトロニクス講演会, 2006 年.

袖山 慶直, 西野 環, 吉海 智晃, 水内 郁夫, 稲葉 雅幸:「肩甲骨・鎖骨構造を有する筋骨格型ヒューマノイドの幾何制約を考慮した肩の運動生成法」, ロボティクス・メカトロニクス講演会, 2006 年.

吉海 智晃, 中西 雄飛, 水内 郁夫, 稲葉 雅幸:「筋骨格ヒューマノイドの自転車漕ぎにおける筋負荷の評価に基づいた馴染み反応学習機構」, ロボティクス・メカトロニクス講演会, 2006 年.

水内 郁夫, 西野 環, 岡田 慧, 吉海 智晃, 稲葉 雅幸:「NURBS による形状表現の EusLisp 幾何モデル環境への導入」, 第 24 回ロボット学会学術講演会予稿集, 2006 年.

水内 郁夫, 中西 雄飛, 吉海 智晃, 袖山 慶直, 並木 勇太, 西野 環, 浦田 順一, 稲葉 雅幸:「筋骨格ヒューマノイド小太郎の筋増強による立位の実現」, 第 24 回ロボット学会学術講演会予稿集, 2006 年.

村松 直矢, 吉海 智晃, 西野 環, 水内 郁夫, 稲葉 雅幸:「超多自由度筋骨格型ヒューマノイド小太郎による脊椎を用いたクランク行動の実現」, 第 24 回ロボット学会学術講演会予稿集, 2006 年.

中西 雄飛, 並木 勇太, 吉海 智晃, 水内 郁夫, 稲葉 雅幸:「装着型受動筋束ユニットによる多様な粘弾性関節特性をもつ筋骨格ヒューマノイドの実現」, 第 24 回ロボット学会学術講演会予稿集, 2006 年.

林摩梨花, 槇俊明, 石坂唯, 神崎秀, 吉海 智晃, 岡田 慧, 水内 郁夫, 稲葉 雅幸:「全身触覚と軟質ウレタンフォームによる肉質を有する小型人型ロボットの開発」, 第 24 回ロボット学会学術講演会予稿集, 2006 年.

浦田 順一, 吉海 智晃, 稲葉 雅幸:「超小型多自由度腱駆動ロボットのための形状記憶合金密集型抵抗値制御システム」, 第 24 回ロボット学会学術講演会予稿集, 2006 年.

並木 勇太, 中西 雄飛, 吉海 智晃, 水内 郁夫, 稲葉 雅幸:「弾性ゴム靱帯と筋増強による柔軟な背骨の開脚上体起こしの実現」, 第 24 回ロボット学会学術講演会予稿集, 2006 年.

袖山 慶直, 小倉 崇, 吉海 智晃, 岡田 慧, 水内 郁夫, 稲葉 雅幸:「被介助者支援の実現に向けた等身大ヒューマノイドによる対人背中部清拭行動への取り組み」, 第 24 回ロボット学会学術講演会予稿集, 2006 年.

吉海 智晃, 水内 郁夫, 林 摩梨花, 村松 直矢, 稲葉 雅幸:「時間文脈形成ニューラルネットを用いたヒューマノイドの身体内相互関係変化の解析システム」, 第 24 回ロボット学会学術講演会予稿集, 2006 年.

国際会議等

I.Mizuuchi, T.Yoshikai, Y.Sodeyama, Y.Nakanishi, A.Miyadera, T.Yamamoto, T.Niemelä, M.Hayashi, J.Urata, Y.Namiki, T.Nishino, and M.Inaba: "Development of Musculoskeletal Humanoid Kotaro", International Conference on Robotics and Automation (ICRA, pp.339-344, 2006. 【査読有】

T.Yoshikai, I.Mizuuchi, and M.Inaba: "Humanoid", International Conference on Robotics and Automation(ICRA, pp.4440-4442, 2006. 【査読有】

J.Urata, Y.Nakanish, A.Miyadera, I.Mizuuchi, T.Yoshikai, and M.Inaba: "A Three-Dimensional Angle Sensor for a Spherical Joint Using a Micro Camera", International Conference on Robotics and Automation(ICRA, pp.4428-4430, 2006. 【査読有】

I.Mizuuchi, Y.Nakanishi, Y.Namiki, T.Yoshikai, Y.Sodeyama, T.Nishino, and M.Inaba: "Realization of Standing of the Musculoskeletal Humanoid Kotaro by Reinforcing Muscles", IEEE International Conference on Humanoid Robots(Humanoids, pp.176-181, 2006. 【査読有】

山田和明・特任講師(科学技術振興)

研究テーマ(主たるもの)

オンラインコミュニティにおけるユーザ意思決定プロセスの解析

本研究では、オンラインコミュニティの活動履歴(アクセスログデータ)を解析することで、コミュニティメンバーの意思決定がメンバー間の相互作用によりどのように変化・発展しているか解明する。そして、マーケティングやオンライン教育サービスなどのコンテンツ開発支援への適用を目指す。

研究業績(2006 年度)

口頭発表等

山田和明:「オープンソースソフトウェア開発コミュニティの発展過程の分析」, 第7回 Web インテリジェンスとインタラクション研究会, 2006.

山田和明:「オープンソースソフトウェアにおける発展過程の可視化」, 知能ソフトウェア工学研究会 (KBSE), 2007.

吉田正高・特任講師(科学技術振興)

研究テーマ(主たるもの)

コミックのデジタル・アーカイブ

印刷状況が劣悪であった昭和20年代～30年代を中心とした児童向けコミックのデジタル・アーカイブ作製と、その歴史資料としての活用に関する研究

近世江戸における鎮守の研究

近世江戸の各所に設置されていた信仰施設である鎮守について、特に地域住民の意識を通して、都市文化史の視点から考察する研究

コンテンツ文化史

戦後国内におけるコンテンツの発展と歴史について、当該時期の政治・社会状況を考慮しながら、コンテンツ分野(コミック、アニメーション、ビデオゲームなど)の枠を超えた文化史的な視点から、統合的に考察をする研究

研究業績(2006 年度)

一般向け講演等

吉田正高、東浩紀、浦野重信、芝村裕吏:「わが国における PC ゲームの現状と今後の展望-恋愛 SLG 市場の成熟と家庭用ゲーム機への移植を中心に-」, CEDEC2006, 2006. 【招待講演】

大谷智子・特任助手(科学技術振興)

研究テーマ(主たるもの)

視覚的注意の周辺領域における色特徴の処理とその空間特性

我々は多くの情報を取捨選択し、それを基に知覚・認知および記憶をして、行動を決定している。この情報処理過程の中で、視覚的注意の役割は重要である。近年、意図的注意が向けられている対象と向けられていない対象が同時に存在するとき、それらが同じ特徴を持つ場合には、意図的注意が向けられていないはずの対象が検出されやすくなるという研究がいくつか報告されている。この現象が生起する要因について、色特徴処理の観点から検討する。

コンテンツ

コンテンツ創造における大学の果たす役割について、地域社会や産業と連携した仕組み作りを主に模索する。

研究業績(2006 年度)

論文等

大谷智子:「色誘導の空間的波及効果に関する一実験—視覚的注意の空間的波及効果を考慮して—」, 色彩学会誌, Vol.30, pp.135-145, 2006 年.【査読有】

口頭発表等

大谷智子・横澤一彦・永井淳一:「視覚的注意の周辺領域における色特徴の処理とその空間特性—二重課題を用いた検討—」, 第 70 回日本心理学会大会, 2006.

清原聖子・特任助手(科学技術振興)

研究テーマ(主たるもの)

「現代アメリカの通信政策をめぐる政治過程」

1990 年代のアメリカ通信政策は、インターネット革命と 1996 年電気通信法によって、劇的に変化を遂げた。アメリカ政治においては、利益集団が高度に発展しており、とりわけビジネス団体はきわめて大きな政治的影響力を有してきた。したがってアメリカの通信政策をめぐる政策過程を研究する上では、利益集団に焦点を当てた研究を行うことがきわめて重要である。本研究は、今日の技術的、制度的巨大な変化が、アメリカの通信政策の政治過程における利益集団政治にどのような影響を及ぼしているのか、という点を明らかにすることを目的とする。従来の研究では、通信政策の政治過程は大手電話会社や業界団体に独占され、非営利団体や公共利益団体の政治参加は極めて限定的、と考えられてきた。しかしこれまでに本研究では、いくつかの具体的な個別事例研究を行うことで、今日のアメリカ通信政策の政治過程において、ベントン財団のような非営利団体や教育団体、全米図書館協会など新たな団体の政治参加が際立ち、政策過程の幅が広がっている点を明らかにした。本研究は特に、アメリカ通信政策において伝統的に重要な 이슈とされるユニバーサル・サービス政策の展開を中心に事例研究を行っている。その結果第一に、1993 年以降情報スーパーハイウェイ構想の実現を目指す非営利団体の活動が活発化し、政治参加アクターの類型に変化が見られた点を指摘した。第二に、学校・図書館向けの新たなユニバーサル・サービス支援プログラム(E-rate プログラム)の政策実施過程では、それまで通信政策の 이슈にほとんど関心を持っていなかった教育団体並び

に全米図書館協会が政策の運営に直接携わるとともに、政策実施監視機能を果たし、政策の実施に関して極めて重要な役割を果たしている点を明らかにした。アメリカの利益集団政治について、環境保護政策や福祉政策などの領域では数多くの先行研究があるが、情報通信政策の分野ではこれまで十分な研究は行われていない。それゆえ本研究の完成は、情報通信政策ならびにアメリカ政治研究の発展に貢献できると考える。本研究は、2006年度に博士論文として完成した。

ブロードバンド時代の日米欧におけるユニバーサル・サービス制度に関する比較研究

科学研究費補助金による研究。2006年度は、日米欧のユニバーサル・サービス制度を比較検討し、なぜアメリカのユニバーサル・サービス制度が他国に比べて肥大化する傾向にあるのか、という問題を分析した。日欧では、不採算地域において従来の電話サービスを維持することにサービス範囲が限定され、ブロードバンド・アクセスまで補助を含めるべきかどうか議論は存在するが、実際にはその域にまで到達しない。しかし、アメリカでは、1996年電気通信法の制定により、従来の高コスト地域の通信事業者補助や低所得者向け低減措置だけでなく、教育機関や過疎地の医療サービス機関に対する電気通信サービスやインターネット・アクセスまでユニバーサル・サービスとして補助の対象となっており、日欧に比べその内容はかなり拡張型である。そうした政策はなぜアメリカで実現したのか、政策過程の分析から比較検討した。

日韓のブロードバンド普及政策及び競争状況の分析とその米国のブロードバンド政策への示唆

本研究は、情報通信政策研究プログラムの研究助成を受け、行った共同研究テーマである。清原は、日米韓のブロードバンド普及政策の展開の差異を法制度の特徴を分析することによって、明らかにすることであった。3カ国を比較すると、従来、日本や韓国で政府主導によってブロードバンドが急速に普及したのに対し、アメリカでは政府の介入が少なかったためにブロードバンドの普及が遅れた、という指摘がよく聞かれるが、そうともいえないことがわかってきた。アメリカでは小さな政府を望む共和党主導議会、共和党政権下にありながら、農村地域の医療サービス機関向けユニバーサル・サービス支援プログラムや農村地域を対象としたブロードバンド融資プログラムにより、連邦政府が農村地域へのセーフティーネットをかなり重視して提供していることが明らかになった。

研究業績(2006年度)

論文等

清原聖子:「現代アメリカにおけるテレコム政策と政策ネットワークの変容」, 2006年度慶應義塾大学大学院法学研究科博士論文, 博士(法学)取得 2007年7月, 2007年.

Shoko Kiyohara, et al.: "A Comparative Study of Telecommunications Policy in Japan, the U.S., and Korea :Diffusion of Broaband Services", Research Paper for Study Program of Information and Communications Policies, 情報通信政策研究プログラムの研究助成を受けた, 2007年.

口頭発表等

清原聖子:「インターネット時代のアメリカにおける情報通信をめぐる政治過程—IT革命とインターネット・アクセスの争点化が及ぼす影響」, 日本比較政治学会 2006年度研究大会, 2006.

清原聖子:「インターネット時代の米国におけるテレコム政策と政策ネットワークの変容」, 現代政治経済研究会, 2006.

清原聖子:「日米韓における電気通信分野のガバナンス・システムに関する比較研究—ブロードバンド・サービス普及を事例にして—」, 情報通信政策研究プログラム第3回全体研究会, 2007.

Shoko Kiyohara: "A Comparative Study on the Universal Service Policy in the U.S., Japan and European Countries: ", A Special Seminar in Comparative Politics for the Faculty and Graduate Students at Georgetown University, 2007. 【招待講演】

清原聖子:「ブロードバンド時代の日米欧におけるユニバーサル・サービス 制度に関する比較研究」, 第 17回メディア環境の変化とデジタル・コンテンツ研究会, 2007.

清原聖子:「ワシントンにおける情報通信政策ネットワーク:保守系シンクタンクの活動を中心に」, GLOCOM研究会情報社会学ミーティング, 2007.

一般向け講演等

清原聖子:「米国におけるメディア融合の進展とその諸課題」, 情報化白書創刊 40 周年記念講演会, 2006.

一般向け記事・報道等

清原聖子:「メディア融合時代のアメリカにおける通信法改革」, ICEP ニュース No.55, 2006 年.

清原聖子:「第 5 部 3 章 アメリカにおけるメディア融合」, 情報化白書創刊 40 年 情報化の未来を創る, 2006 年.

堀聖司・特任助手(科学技術振興)

研究テーマ(主たるもの)

作品制作を中心とした錯視的映像表現に関する研究

コンピュータ・グラフィクスを使用し制作した複数の異なった視点移動の映像を、ひとつの画面内に部分的に合成することによって生じる視覚の競合を利用した錯視的映像作品の制作。切り抜き合成用使用する動画素材にも視点移動する三次元形状のシルエットを用いることでさらに視覚の競合が助長される。

研究業績(2006 年度)

一般向け講演等

堀 聖司 / 河口洋一郎: "Example of approach on ", fmx/06 (11th International Conference on Animation, Effects, Realtime and Content), 2006. 【招待講演】

松野将宏・特任助手(科学技術振興)

研究テーマ(主たるもの)

スポーツを核とした地域活性化に関する研究

プロスポーツの存在は、その経済波及効果の観点から都市におけるビッグビジネスであるとされている。本研究では、地域における行政や財界、地域住民の連携を通じた組織間学習やソーシャルキャピタルの蓄積と応用といった視点から新たな「地域づくり・まちづくりの核」と位置づけて、地域活性化メカニズムを解明していく。

日本版 LLP 制度を活用した技術移転メカニズムに関する研究

平成 17 年 8 月より施行された有限責任事業組合 (LLP) 法により、人的資源を活用した共同事業化による創業促進が期待されている。本研究では、事例データを用いて、日本版 LLP 制度による技術移転メカニズムを分析し、新たな技術移転パースペクティブを提示する。技術系 LLP の技術移転モデルを分析枠組として、技術特性、不確実性、資源補完性、複雑性、LLP の組織・制度的要因を分析指標とし、技術移転を促進するメカニズムを分析する。

プロスポーツ産業におけるリーグ・ガバナンス構造とビジネスシステム

プロスポーツ産業のガバナンス構造およびビジネスシステムの解明である。その特徴は、リーグ内で各チームが「競争」しながら同時に「協調」行動をとることにより共同体を形成し、リーグ全体の利益拡大および市場拡大を意図して構築される社会的合意形成システムである。本研究では、「リーグを事例にプロスポーツ・リーグにおける社会的合意形成プロセスを考察していく。

研究業績(2006 年度)

口頭発表等

松野将宏・堀内晃:「LLP 制度が起業パターン及び起業プロセスに及ぼす影響」, 日本ベンチャー学会, 2006.

藤原正仁・特任研究員(科学技術振興)

研究テーマ(主たるもの)

コンテンツ分野におけるインターンシップ・コーオプ教育に関する実践的研究

インターンシップは、理論と実践を統合する産学連携教育であり、個人のキャリア発達のみならず、学術的な発展、さらには社会変革を促すものとして大きく期待されている。とりわけ、コンテンツ分野においては、国の施策に位置づけられ、インターンシップが重点的に推進されている。

インターンシップの有意性を明らかにするとともに、カリキュラム開発、評価制度の確立、運営体制の考察などに努め、望ましいインターンシップの普及・発展にも貢献を果たしていきたい。

コンテンツプロデューサーのキャリア・ディベロップメントに関する研究

プロデューサーの育成方法について、コンテンツ業界の方に伺うと、次のような回答が多い。「プロデューサーは育てるものではなく、育つものだ。学校教育よりもむしろ現場経験が大事だ。」と。プロデューサーの育成は、産学でどのような役割分担のもとに行っていけばよいのだろうか。

学校教育と職業とのレリバンスや一皮むける経験、キャリア発達理論などを再統合し、プロデューサーのキャリア発達と、キャリア開発プログラムについて考察を重ねている。

研究業績(2006 年度)

論文等

藤原正仁:「ゲームにおける産学官連携—福岡ゲーム産業振興機構の人材育成戦略—」, デジタルゲーム学研究, 創刊号, pp.94-97, 2007 年.

口頭発表等

藤原正仁・馬場章:「コンテンツ分野におけるインターンシップの現状と課題」, 特定非営利活動法人産学連携学会第 4 回大会, 2006.

藤原正仁・馬場章:「コンテンツプロデューサー養成を目的としたインターンシッププログラムの開発と実践」, 日本キャリアデザイン学会第 3 回研究大会, 2006.

馬場章・藤原正仁:「コンテンツ分野における産学連携教育—日台比較とインターンシップ—」, アジアのメディア産業における「産学協同教育」の現状と未来, 2007.

一般向け講演等

馬場章・藤原正仁:「ゲーム産業における人材育成の現状と提言」, 経済産業省ゲーム産業戦略研究会(第 3 回), 2006.

馬場章・藤原正仁:「大学のゲーム教育・世界編—カリキュラム・テキスト・メソッド・エドューケーター—」, CEDEC2006 (CESA デベロッパーズカンファレンス 2006), 2006.

馬場章・藤原正仁:「コンテンツ分野におけるキャリアデザイン」, 特定非営利映像産業振興機構主催三方得インターンシップ事後研修会, 2007.

一般向け記事・報道等

藤原正仁:「我が国のゲーム開発会社の人材マネジメント」, ゲーム産業における開発者人材育成事業報告書(平成 18 年度経済産業省サービス産業人材育成事業), 社団法人コンピュータエンターテインメント協会編, 2007 年.

藤原正仁:「ゲーム産業における経営戦略と人材マネジメントに関する総合調査(単純集計)」, ゲーム産業における開発者人材育成事業報告書(平成 18 年度経済産業省サービス産業人材育成事業), 社団法人コンピュータエンターテインメント協会編, 2007 年.

藤原正仁:「インターンシップ実施に関するアンケート調査報告」, 平成 18 年度サービス産業人材育成事業(コンテンツ人材育成総合プログラム)に関する報告書, 特定非営利活動法人映像産業振興機構編, 2007 年.

馬場章・藤原正仁:「【CEDEC2006】「大学のゲーム教育・世界編」」, Slash Games(現・INSIDE), 2007.

伊藤憲二・特任講師(特別教育研究)

研究テーマ(主たるもの)

研究業績(2006 年度)

小林真輔・特任助教授(研究拠点形成)

研究テーマ(主たるもの)

センサーネットワーク

小型で無線通信可能なセンサーネットワークの研究。ハードウェアからソフトウェアまでのトータルアーキテクチャの研究を行っている。

研究業績(2006 年度)

論文等

中川樹生, 小野豪一, 乗松崇泰, 藤原亮介, 水垣健一, 寺田崇秀, 宮崎祐行, 鈴木敬, 矢野和男, 前木陽, 緒方祐次, 小林真輔, 越塚登, 坂村健:「1cc 超小型ノードを用いた 22cm 高精度測位システムの開発 (1): 超低電力 UWB センサノードの開発」, 2006 年電子情報通信学会ソサイエティ大会, AS-4-4, 2006 年.

水垣健一, 藤原亮介, 小野豪一, 中川樹生, 乗松崇泰, 寺田崇秀, 宮崎祐行, 鈴木敬, 矢野和男, 前木陽, 緒方祐次, 小林真輔, 越塚登, 坂村健:「1cc 超小型ノードを用いた 22cm 高精度測位システムの開発 (2): UWB 測位システムの実証実験」, 006 年電子情報通信学会ソサイエティ大会, AS-4-5, 2006 年.

小野豪一, 乗松崇泰, 藤原亮介, 中川樹生, 寺田崇秀, 水垣健一, 宮崎祐行, 前木陽, 緒方祐次, 小林真輔, 越塚登, 坂村健:「超低電力 UWB 無線 LSI の検討(1):送信 LSI の開発」, 2006 年電子情報通信学会ソサイエティ大会, A-5-9, 2006 年.

乗松崇泰, 小野豪一, 藤原亮介, 中川樹生, 寺田崇秀, 水垣健一, 宮崎祐行, 前木陽, 緒方祐次, 小林真輔, 越塚登, 坂村健:「超低電力 UWB 無線 LSI の検討(2):デジタル制御 UWB 送信機 RF 部の開発」, 2006 年電子情報通信学会ソサイエティ大会, A-5-10, 2006 年.

藤原亮介, 小野豪一, 水垣健一, 乗松崇泰, 中川樹生, 寺田崇秀, 宮崎祐行, 前木陽, 緒方祐次, 小林真輔, 越塚登, 坂村健:「超低電力 UWB 無線 LSI の検討(3):同期捕捉方式の検討」, 2006 年電子情報通信学会ソサイエティ大会, A-5-11, 2006 年.

寺田崇秀, 藤原亮介, 乗松崇泰, 小野豪一, 中川樹生, 水垣健一, 宮崎祐行, 前木陽, 緒方祐次, 小林真輔, 越塚登, 坂村健:「超低電力 UWB 無線 LSI の検討(4):CMOS 受信フロントエンドの設計」, 2006 年電子情報通信学会ソサイエティ大会, A-5-12, 2006 年.

前木陽, 小林真輔, 越塚登, 坂村健, 水垣健一, 藤原亮介, 小野豪一, 宮崎祐行, 鈴木敬, 矢野和男:「UWB を用いた高精度測位応用に向けて」, 2006 年電子情報通信学会ソサイエティ大会, A-5-13, 2006 年.

中川樹生, 小野豪一, 乗松崇泰, 藤原亮介, 水垣健一, 寺田崇秀, 宮崎祐行, 鈴木敬, 矢野和男, 前木陽, 緒方祐次, 小林真輔, 越塚登, 坂村健:「1cc 超小型 UWB センサノードの開発」, 電子情報通信学会 SIS(スマートインフォメディアシステム)研究会, 2006 年.

小林真輔, 諸隈立志, 坂村健:「様々な通信プロトコルに動的対応可能な RFID リーダライタの試作」, 組込みシステムシンポジウム 2006 論文集, IPSJ シンポジウムシリーズ, 2006 年.【査読有】

国際会議等

K. Mizugaki, R. Fujiwara, T. Nakagawa, G. Ono, T. Norimatsu, T. Terada, M. Miyazaki, Y. Ogata, A. Maeki, S. Kobayashi, N. Koshizuka, K. Sakamura: "Accurate Wireless Location/Communication System With 22-cm Error Using UWB-IR", IEEE Radio & Wireless Symposium 2007, 2007. 【査読有】

口頭発表等

Shinsuke Kobayashi: "pT-Engine Project: The Design Challenge of Ultrasmall and Ultralow Power Node for Sensor Network", ITRC Forum 2006 International Symposium on Radio Communications, 2006. 【招待講演】

竹之内禎・特任講師(研究拠点形成)

研究テーマ(主たるもの)

情報倫理学への基礎情報学的・解釈学的アプローチ

「情報」を客観的な「物」としてではなく、生きた「意味」として捉える基礎情報学的・解釈学的アプローチから、情報と人間との諸関係を理論化し、情報社会の倫理的諸問題の分析に応用する。解釈学的アプローチの一環として、ラファエル・カプーロ、チャールズ・エスらの議論を手がかりに、東西の比較思想的アプローチに重点を置く。

ユビキタス情報社会における情報環境のユニバーサルデザイン: ウェブアクセシビリティを中心に

「いつでも、どこでも、誰でも」情報技術に支援された環境を利用できるユビキタス情報社会基盤の構築に向けて、特にウェブアクセシビリティを中心として、情報環境のユニバーサルデザインのあり方と現状、認知度、制度、教育手法を批判的に検討する。

研究業績(2006 年度)

論文等

Tadashi Takenouchi: "Information Ethics as Information Ecology: Connecting between Frankl's thought and fundamental informatics", Ethics and Information Technology, Vol.8, No.4, 2006 年. 【査読有】

添野勉・特任助手(研究拠点形成)

研究テーマ(主たるもの)

メディア史

メディア論

アーカイブ研究

研究業績(2006 年度)

著書等

馬場章、上野一郎、研谷紀夫、倉持基、添野勉:「上野彦馬歴史写真集成」, 馬場章 編, 渡辺出版, 2006 年.

論文等

研谷紀夫・津田光弘・倉持基・大島十二愛・山下大輔・松田好史・添野勉・馬場章:「オントロジとコミュニティを用いた統合型デジタルアーカイブの構築」, 情報処理学会・人文科学とコンピュータ研究会シンポジウム 2006 論文集, pp.57-62, 2006 年.【査読有】

倉持基・研谷紀夫・添野勉・馬場章:「『歴史写真デジタルアーカイブ』の歴史写真研究への活用に関する検討」, 情報処理学会・人文科学とコンピュータ研究会シンポジウム 2006 論文集, pp.263-270, 2006 年.【査読有】

D.ビュースト・特任助手(研究拠点形成)

研究テーマ(主たるもの)

近代性、グローバル化とナショナリズムの諸問題(日本・東アジアを中心に)

文化とアイデンティティの政治学(文化政策を含めて)

近代思想とその人文・社会科学への影響(解釈学を中心に)

研究業績(2006 年度)

論文等

David C. Buist: ““文化－Culture””, Theory, Culture and Society, Vol.23, No.2-3, Special Issue: Problematizing Global Knowledge, pp.366-368, 2006 年.【査読有】

山本拓司・特任助手(研究拠点形成)

研究テーマ(主たるもの)

近代日本における身体文化の形成

概要説明 主に日本をフィールドとしながら、社会の近代化と、体操やスポーツ、ダンス等の身体文化の変容の問題について研究を行っている。

東京大学情報学環所蔵 戦時宣伝資料のデジタル・アーカイブの作成について

概要説明 情報学環が所蔵する戦時宣伝資料(第一次世界大戦期の欧米プロパガンダポスターおよび日中戦争～第二次世界大戦にかけての日本側プロパガンダ・パンフレット)の整理とデジタル・アーカイブの作成を行い、それら戦時宣伝資料のメディア史においてもつ意義について研究を行っている。

研究業績(2006 年度)

論文等

研谷紀夫・小泉智佐子・山本拓司:「東京大学大学院情報学環のアーカイブズ」, アーカイブを学ぶ 東京大学大学院講義録「アーカイブの世界」, 2006 年.

米倉将吾・特任助手(受託研究)

研究テーマ(主たるもの)

情動ロボティクス

ロボットが人間のように感情・情動を持つようになるためには、何が必要なのか。
また、そもそもロボットが感情や情動を持っているとはどういう事なのか。
現象論、進化論、脳科学を出発点として、エモーショナルなロボットの構成を試みている。

思いやり共感システム

誰かの悲しみを敏感に感じ取りそっと寄り添ったり、
自然や芸術の美しさを感じたり、その感動を誰かと共有したり、
このような夢のようなシステムをつくり出すために必要な
脳型情報処理システムを構築する事を試みている。

身体性知能

非限定的状況においても適応創発的に対応する事の出来るシステムを構築するために、
アフォーダンス・ゲシュタルト・価値システム・身体性を軸として知能の創発、
行動の創発のための構成論に取り組んでいる。

研究業績(2006 年度)

七邊信重・研究員(受託研究)

研究テーマ(主たるもの)

オンラインゲームの教育目的利用のための研究——教室談話の分析・考察から

近年、デジタルゲームの教育利用の可能性に注目が集まり、学校での利用もおこなわれるようになってきたが、ゲームを使った授業で、生徒たちの学習がどのようにおこなわれるのかについて検討した研究はあまり多くない。そこで筆者は、歴史オンラインゲーム「大航海時代 Online」(株式会社コーエー)を使用した授業における教師と生徒との教室談話に着目して、オンラインゲームを使った授業と生徒の学習との結びつきについて探究をおこなっている。

サブカルチャーの文化産業論的研究——オタク現象の構造連関分析を中心に

ポスト高度成長期に出現した「オタク」と呼ばれるアニメやマンガのコアなファンは、メディア文化を媒介として、独自のシーンや文化を形成している。そして、このサブカルチャーシーンは、日本のポピュラー文化産業の通底部で、優れた人材を育成し革新的な文化的表現物(コンテンツ)を産業界に供給している。筆者の関心は、従来の社会科学で十分に探究されてこなかった、オタク・サブカルチャーシーンと産業界との複雑で潜在的な相互連関を解明する点に向けられている。

現在は、文化社会学や組織論、社会心理学における集団・組織・文化・制度についての理論枠組とそれらに基づいて蓄積されてきた先行研究を参照しながら、デジタルゲームを事例とした分析をおこなっている。具体的には、1980年代以降の日本の家庭用ゲーム産業の興隆・停滞・縮小・再生と、PCゲーム企業やアマチュア制作のデジタルゲーム(Key「CLANNAD」や07th Expansion「ひぐらしのなく頃に」等)の活況の社会的・歴史的な背景、両者の構造連関等を、定性的データの分析・考察から探究している。

研究業績(2006年度)

論文等

七邊信重:「オタク・カテゴリーとアイデンティティ戦略——カテゴリーからの「距離化」と「同一化」」, 民衆史研究会会報, Vol.71, pp.8-19, 2006年.

井上明人・七邊信重:「シリアスゲーム——手段としてのゲーム」, 智場, Vol.108, pp.81-6, 2006年.

口頭発表等

七邊信重:「オンラインゲームの教育効果——歴史授業における「大航海時代 Online」を用いた実証実験」, エンタテインメントコンピューティング 2006, 2006.

七邊信重:「メディア・学習・コミュニティ——同人/オンラインゲームユーザーの相互実践のエスノグラフィー」, 関東社会学会研究例会, 2007.【招待講演】

七邊信重:「オンラインゲームの教育効果」, Crest Online Game Project Symposium 2007, 2007.

一般向け講演等

馬場章・七邊信重・内田由理子・高畑秀行・松原健二:「オンラインゲームの教育目的利用のための研究」, CREST「オンラインゲームの教育目的利用のための研究」中間成果記者発表会, 2006.

一般向け記事・報道等

馬場章・七邊信重:「ゲームは教育にも効果? 東大など実験 高専の歴史授業で」, 毎日新聞, 2006.

馬場章・七邊信重:「東大・詫間電波高専「オンラインゲームの教育目的利用の研究」で記者発表」, 文教ニュース, 2006.

ヘイ ウェスリー ディーン・特任講師

研究テーマ(主たるもの)

ユビキタス・トータルウェルネスシステム

高齢化社会が問題となっているが、人間の QOL という観点からは、自力で移動できるということが最低限保障されていなければならない。それは、脳の高次機能を中心とした呼吸循環系能力と筋・骨格系能力の維持と活性化であるが、これらの機能は、通常の社会生活を過ごすだけでは維持できない社会となっているのである。そこで、本研究では、行ってきた基礎研究を基に、通常の運動を気楽に行うことだけで、データを自動的に収集して、トータルに身体健康状態を維持・管理するシステムの構築をめざす。

反動動作を用いた跳躍における左右不均衡の影響

身体運動における左右不均衡は、パフォーマンスに大きく影響すると考えられている。本研究の目的は、1. 反動動作でのパフォーマンス、仕事量および運動能率に対する左右不均衡の影響を評価すること、2. バイオフィードバックトレーニングが、左右不均衡を減少させることやパフォーマンスおよび運動能率を改善することに及ぼす影響を調べることの 2 つである。

研究業績(2006 年度)

論文等

Fukashiro, S., Hay, D.C., and Nagano, A.: "Biomechanical behavior of muscle-tendon complex during dynamic human movements", *Journal of Applied Biomechanics*, Vol.22, No.2, pp.131-147, 2006 年.【査読有】

Nagano, A., Yoshioka, S., Hay, D.C., and Himeno, R.: "Influence of Vision and Static Stretch of the Calf Muscles on Postural Sway During Quiet Standing", *Human Movement Science*, Vol.25, No.3, pp.422-434, 2006 年.【査読有】

Nagano, A., Yoshioka, S., Hay, D.C., and Fukashiro, S.: "Light Finger Touch on the upper legs reduces postural sway during quasi-static standing", *Motor Control*, Vol.10, No.4, pp.348-358, 2006 年.【査読有】

Hay, D.C., de Souza, V.A., and Fukashiro, S.: "Human bilateral deficit during a dynamic multi-joint leg press movement", *Human Movement Science*, Vol.25, No.2, pp.181-191, 2006 年.【査読有】

口頭発表等

Hay, D.C.: "反動動作を用いた跳躍における左右不均衡の影響 - パフォーマンス、仕事量および運動能率の解析", 日本バイオメカニクス学会大会, 2006.

IV. 外部資金獲得状況

平成19(2007)年3月31日時点で情報学環に在籍していた教員各人が関係する外部資金の状況を、情報学環研究協力係のデータをもとに、収録しています。

1. 平成18年度奨学寄附金受入一覧
2. 寄附講座
3. 21世紀COEプログラム
4. 平成18年度科学研究費補助金交付一覧
5. 平成18年度厚生労働科学研究費補助金交付一覧
6. 平成18年度受託研究受入一覧
7. 平成18年度共同研究受入一覧
8. 平成18年度外部資金受入総計

4. 平成18年度科学研究費補助金交付一覧

研究種目	課題番号	研究課題	研究代表者等・職名	直接経費	間接経費	計	備考
特定領域	18018010	科学コミュニケーションにおけるメディアの影響と役割――実態調査とモデルの提言――	佐倉 統 教授	2,200,000	0	2,200,000	
特定領域	18049023	知識社会経済システムの共創的発展とそのガバナンスに関する研究	須藤 修 教授	13,100,000	0	13,100,000	
特定領域	18049024	電子化診療情報の患者への提供のあり方に関する調査研究	山本 隆一 助教授	5,500,000	0	5,500,000	
特定領域	16089203	わが国における火山罹災地の複合的資料による歴史的・文化・自然景観の復元研究	馬場 章 教授	8,000,000	0	8,000,000	
基盤 A	17200005	生き物のように凹凸反応する情感的な屏風画像装置システムの創出	河口 洋一郎 教授	9,000,000	2,700,000	11,700,000	
基盤 A	18200018	ヒトとロボットの原初的コミュニケーションに関する発達認知神経科学的研究	開 一夫 助教授	22,800,000	6,840,000	29,640,000	
基盤 B	16300205	身体運動中の筋張力筋線維動態推定システムの開発によるトレーニング処方への作成と効果判定	深代 千之 助教授	2,200,000	0	2,200,000	
基盤 B	16330097	20 世紀後半の東アジアの都市大衆文化における「アメリカ」の受容と反発	吉見 俊哉 教授	5,700,000	0	5,700,000	
基盤 B	17300080	テレビ・コンテンツ分析の情報記号論的研究とハイパーメディア型事典の作成	石田 英敬 教授	4,200,000	0	4,200,000	
基盤 B	17330111	ネット社会の展開と社会的信頼性の関係に関する日韓比較研究	橋元 良明 教授	1,600,000	0	1,600,000	
基盤 B	18300277	把持状態を利用したウェアラブル展示教材の開発	山内 祐平 助教授	8,100,000	2,430,000	10,530,000	
基盤 B	18320103	歴史史料と中世都市の情報学的研究	本郷 和人 助教授	4,500,000	1,350,000	5,850,000	
基盤 B	16390043	薬物動態・動力学理論に基づくテーラード・処方設計システムの開発	澤田 康文 教授	2,400,000	0	2,400,000	
基盤 B	17360076	血流と血管壁の達成を考慮した脳動脈瘤動態シミュレータの開発とモデル実験による評価	大島 まり 教授	4,800,000	0	4,800,000	
基盤 C	16530069	マスメディアによる人権侵害の救済システムのソフトロ一的展開に関する比較制度研究	濱田 純一 教授	1,400,000	0	1,400,000	
基盤 C	16530223	中国東北・華北・黄土高原の農村市場構造の地域差と、その歴史的含意	安富 歩 助教授	900,000	0	900,000	
基盤 C	17500157	電子自治体投資の地域経済への波及効果に関する研究	田中 秀幸 助教授	1,000,000	0	1,000,000	
基盤 C	18530077	ユビキタス時代におけるサイバー法の理論的体系化と先端的課題をめぐる比較制度研究	山口 いつ子 助教授	700,000	0	700,000	
萌芽	17650023	テキスト連続なセルデータの修復	山口 泰 教授	1,500,000	0	1,500,000	
萌芽	18650058	Webコミュニティに関する調査研究と基礎情報学的分析	西垣 通 教授	700,000	0	700,000	
萌芽	18650169	日本古来の身体技法を西洋自然科学によって究明する	深代 千之 助教授	1,300,000	0	1,300,000	
萌芽	17659148	医薬品情報学及び薬剤学に基づいたジェネリック医薬品の評価・格付け法の開発と評価	澤田 康文 教授	1,900,000	0	1,900,000	
萌芽	17656064	in vitro 血管壁損傷評価システム開発と動脈瘤発症メカニズムの生体力学的検討	大島 まり 教授	1,100,000	0	1,100,000	
若手 B	16760192	ハイパー・フレキシブルメカニズムによる安全・安心化技術の実現	鈴木 高宏 助教授	1,000,000	0	1,000,000	
若手 B	17720150	コミックのデジタル・アーカイブを地域文化資料として活用するための実践的研究	吉田正高 特任教員	1,900,000	0	1,900,000	
若手 B	17730302	戦後日本社会における「バックラッシュ」的言説の社会学的研究	北田 暁大 助教授	1,200,000	0	1,200,000	
若手 B	18700247	ブロードバンド時代の日米欧におけるユニバーサル・サービス制度に関する比較研究	清原聖子 特任教員	1,100,000	0	1,100,000	

若手B	18730520	ゲーム分野における人材育成に関する研究	藤原正仁特任研究員	2,000,000	0	2,000,000	
若手B	18700077	2次元レガシーGISのビュー統合による3次元地理シミュレーション・システム	大東 誠 助手	1,800,000	0	1,800,000	
若手スタートアップ	18800012	ユビキタス・アクセス・ネットワーク・アーキテクチャの研究	中尾 彰宏 助教授	1,350,000	0	1,350,000	
研究成果データベース	188049	データベース 20世紀・21世紀年表(研究成果公開促進費)	田中 明彦 教授	6,400,000	0	6,400,000	
特定領域	18049073	情報爆発に対応する新IT基盤研究支援プラットフォームの構築	須藤 修 教授	5,000,000	0	5,000,000	国立情報学研究所安達淳代表の分担
基盤A	17200015	鶏の形態嗜好に関する日本とタイの多面的比較感性モデル	池内 克史 教授	450,000	0	450,000	札幌市立大学 原田昭代表の分担
基盤B	17330112	ジャーナリズム構築力の周縁からの形成をめざすジャーナリスト教育の研究開発	林 香里 助教授	1,800,000	0	1,800,000	早稲田大学 花田達朗代表の分担
基盤B	18360286	「聴く建築」、音の景相に基づいた新たな空間設計手法の立案に向けた研究	河口 洋一郎 教授	325,000	0	325,000	東京芸術大学 北川原温代表の分担
基盤C	18630003	「グラフィクスの新地平へのブレークスルー」に関する企画調査	山口 泰 教授	280,000	0	280,000	東京工業大学 中嶋正之代表の分担
		小計	36 件	129,205,000	13,320,000	142,525,000	
特別研究奨励費			14 件	13,300,000	0	13,300,000	
		計	50 件	142,505,000	13,320,000	155,825,000	

8. 平成18年度外部資金受入総計

943,422,957 円

(本部・他部局分の間接費も含めた受入額総計)

東京大学 大学院情報学環・学際情報学府 年報

平成20年3月 発行

編集兼発行者 東京大学大学院情報学環・学際情報学府

東京都文京区本郷7丁目3番1号

郵便番号 113-0033

電話：03-5841-5905 Fax：03-5841-5916

Email: tosyo@iii.u-tokyo.ac.jp

印刷・製本

森重印刷株式会社

東京都新宿区市谷本村町3-20 新盛堂ビル 6F 別館

郵便番号 162-0845

電話：03-5261-1541 Fax：03-5261-1543

東京大学 大学院情報学環・学際情報学府 年報

平成20年3月 発行

編集兼発行者 東京大学大学院情報学環・学際情報学府

東京都文京区本郷7丁目3番1号

郵便番号 113-0033

電話：03-5841-5905 Fax：03-5841-5916

Email: tosyo@iii.u-tokyo.ac.jp

印刷・製本

森重印刷株式会社

東京都新宿区市谷本村町3-20 新盛堂ビル 6F 別館

郵便番号 162-0845

電話：03-5261-1541 Fax：03-5261-1543
